

ダンボール戦記ウォーズ

ロシウスのライトニング・カウント
(本編終了)

砂岩改 (一時休止)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

セカンドワールドの大国、ロシウスの最強バイオレットデビルと肩を並べる第5小隊長、閃光の伯爵（ライトニング・カウント）の異名を持つ神風トオル

大国の威信を懸けて彼は戦場を駆ける。

―追記―

皆様のご声援のおかげでなんとランキング19位という快挙を成し遂げました。

心から感謝を申し上げます！

目次

本編

登場人物、機体説明	1
プロローグ	4
第一戦「動き出すジェノック」	7
第二戦「フェンレス雪原奇襲作戦」	11
第三戦「遅刻」	14
第四戦「ライバル」	17
第五戦「迷いと目的」	23
第六戦「山賊」	27
第七戦「ゼロと言われる機体」	32
第八戦「過去」	35
第九戦「タンデムの港防衛戦 前半」	43
第十戦「タンデムの港防衛戦 後半」	47
第十一戦「リーブラ」	52
第十二戦「決着」	59
第十三戦「トールギス」	65
第十四戦「嫌な予感」	71
第十五戦「覚醒の予兆」	76
第十六戦「乱入者」	81
第十七戦「怒り」	86
第十八戦「共闘」	92
第十九戦「発現」	97
第二十戦「新任教師」	103
第二十一戦「嫉妬と感謝」	107

第二十二戦 「世界とは」	111
第二十三戦 「絶望の予兆」	115
第二十四戦 「扉」	119
第二十五戦 「かわいい後輩」	123
第二十六戦 「ロシウスの誇り」	129
第二十七戦 「新生、第5小隊」	135
第二十八戦 「歓迎会」	140
第二十九戦 「過去」	146
第三十戦 「蘇りし閃光の騎士」	153
第三十一戦 「裏切り者」	158
第三十二戦 「真実と心からの叫び」	162
第三十三戦 「世界連合結成」	167
第三十四戦 「ドルガルータ攻防戦」	172
第三十五戦 「小さな出会い」	178
第三十六戦 「赤き傀儡の騎士」	182
第三十七戦 「壊れゆく騎士」	190
第三十八戦 「誓い」	195
第三十九戦 「散りゆく者たちの咆哮」	203
第四十戦 「理解できない」	208
第四十一戦 「救出」	213
最終戦 「静かな海に騎士は佇む」	220
番外編	
番外編 「聖なる夜の安らかな一時」	224
アフターエピソード編	
第1戦 「感情を殺した少女の物語り」	231

第2戦「新しき日の出」	236
第3戦「プリペンダー」	241
第4戦「同居人」	245
第5戦「初任務」	249
第6戦「胎動」	255
第7戦「傭兵の帰還」	258
第8戦「幕上げ」	263
第9戦「再会」	268
第10戦「強化」	271
機体詳細紹介	274
第11戦「上陸」	276
第12戦「過去の因縁」	281
第14戦「決戦の予感」	285
第15戦「反撃の狼煙」	290
第16戦「それぞれの覚悟」	296
最終戦「貴方に感謝を」	307
宣伝	312

本編

登場人物、機体説明

神風トオル

髪……黒色、短め

瞳……藍色

性別……男

気さくな性格ながら戦場では複数の小隊の指揮を執るなど冷静な一面を持つ。

過去に慕っていた後輩と同じ小隊のメンバーをロストさせロシウスの一部の者からは『部下殺しの神風』と言われている。

ごくたまにムラクとバトルをするなどムラクに負けず劣らずの操縦技術を持っている。

九条ノイン

髪……紺色

瞳……青色

性別……女

第5小隊のプレイヤーで冷静な性格だが時たま熱い部分を見せる時がある。

右目が隠れる前髪が特徴的、バネッサとは良き友でありライバルでもある。

搭乗LBXは黄緑色のガウンタ

ワーカー・シクト

髪……茶色

瞳……茶色

真面目な性格で負けず嫌い神風の事は尊敬していて敬語で話す。

第5小隊のメカニック兼プレイヤーで神風トオルの愛機であるトールギスを開発した有能なメカニックであり常に第6小隊の木場カゲトと競っている。

プレイヤーとしての腕は中々でそこらの小隊長位の腕はある。

搭乗LBXグレイリオ

第5小隊はこの三人で運用されている。

オットー

元第5小隊の隊員でトオルの事を心から尊敬していたがロストして退学となった、トオルはこれがトラウマに近いものになっている

ドロシー

トオルの後輩でトールギスの熱烈的ファンでプレイヤーとしても中々の腕を誇っていた。ワーカー、ノインとも仲が良かったがロストし退学した。

トールギス

中世の騎士をイメージしたデザインは神風の異名である閃光の伯爵（ライトニング・カウント）の元となっている。

背部のスーパーバーニアによる圧倒的機動力と付属のバズーカ型カートリッジ式エネルギー砲（ドーバーガン）は通常兵器とは比べ物にならない威力を誇り発射時は右肩と右腕で保持して撃つ。

左腕は円形のシールドとヒートランス（テンペスト）が固定装備しているがヒートランスはグリップがあるため単体で保持することが出来る。

なお高機動の中で安定した飛行が出来るのはカゲトと合同で開発したダブルトルネードシステムが取り入れられているからである。

ガウンタ（ノイン機）

ロシウス連合の指揮官機ガウンタをワーカーがカスタマイズして

通常のカウンタ以上の性能を出せるようになっていて、白の部分が黄緑色になっているのが特徴。

基本装備はロシウスの基本装備である大型のシールドとソルジャーソード

グレイリオ（ワーカー機）

外見は特に通常のグレイリオと変わらないが性能はカウンタ並の性能を確立している。

基本装備はステインガーランチャー

プロローグ

とある闘技場のジオラマで二体のLBXが向かい合って立っていた。

片方はバイオレットデビルの異名を持つガウンターイゼルファー、もう片方はライトニング・カウントの異名を持つツールギス。

両者はどちらもビームサーベルとベリアルソードを構えてお互いに突っ込む。

両者が交錯し武器を振るった状態で止まると両者が青白く光りそれが散る…ブレイクオーバーの証だ。

「ああ！またかよー！」

すると黒髪の少年が頭を抱えて叫ぶ。

「また引き分けか…だがよい試合だったな…」

バトルを見ていた九条ノインは前髪を弄りながら素直に誉める。

「ああ！私も同感だ！久しぶりにわくわくしたぜ！」

その横に立っていた黒肌に紺色の髪を団子状のポニーテールにしているバネツサ・ガラがその言葉通り楽しそうに笑いながら誉める。

「ムラクが苦戦するなんて滅多に見られないからな…勉強になるよ」

と白髪が特徴であるミハイルが優等生発言をする。（実際優等生なのだが）

（やはりツールギスの姿勢制御は改良の余地があるな…）

（この調子だとイゼルファーの反応速度をあげなきゃ…）

二人のメカニックはそれぞれ作り上げた機体の改良を必死に探しだし黙って黙々と自分の端末に書き残すのだった。

「トオル…いいバトルだった…ありがとう…」

「気にすんなよ…俺も楽しかった…」

そう言ってムラクとトオルは笑顔で握手を交す。

「よし！まだ時間があるからスワローに寄って行かないか？」

バネツサの提案に全員が頷き全員荷物を持ちスワローに行くこと

にした。

そしてスワローで大きめの机を確保し全員が座りそれぞれ好きなものを頼む。

「おいおい…ノインお前いくらシルバークレジット持ってんだ？」

「詳しくは言わんがたくさんだと言っておく」

ノインの前に運ばれて来たのはスワロー名物のチョコレートパフェだった。(ちなみに今週連続五回目)

「まあ…俺らが贅沢したら整備できなくなりますから」

「そうだよな…メカニックのつらい所だ…」

第5小隊のメカニックのワーカーと第6小隊のメカニックのカゲトがため息をつきながらメロンソーダを飲む。

「なるほど…そういう手もあるか…」

「ああ…ムラクみたいに目立つ機体があるとおのずとそこに攻撃が集中する…それを逆に利用してミハイルたちが裏で動けばいい…」

「確かに…今までは俺が先陣を崩しミハイルとバネッサが後方支援だった…今度から考えてみるとしよう」

ミハイル、トオル、ムラクはコーヒを飲みながら効率的な部隊の運用について話し合っていた。

すると時間が経つのは早いようで夕方になっていた。

「よし！もうすぐ飯だから帰るか！」

トオルの一言でそうだな、とみんなが会計を済ませてスワン荘の帰路につく、すると帰る途中バネッサがトオルに肩組をして。

「なあ、トオル」

「ムリ…」

「ええ！まだ何も言っていないだろ！」

「どうせ次ウオータイムが無い日にチョコレートパフェをおごって欲しいって言うんだろ？」

「う…」

トオルの言うことが凶星だったようで言葉に詰まるバネッサ。

「まったく…あの二人は本当に仲がいいな…」

「まあ席が前後だし…似た者同士だからな」

そんな二人を見ながらノインとミハイルは話す。

「確かに…」

「そうすつか？ただバネツサがたかってるだけに見えますけど」

「でた！かしこまりモード」

「てめえ……一回ぶつとばすぞ！」

ムラクの同意にカゲトが疑問に思うがワーカーがからかいカゲトはカバンをワーカーに向けて振り回す。

そんな光景が続くと思っていた全員……また明日もウオータイムを着実にこなしてまた仲良く帰る……だが誰が想像しただろう……こんな事になるなんて…。

第一戦「動き出すジェノック」

「え!?!オアシス3が落ちた?」

トオルは先日のウォータイムでジェノックとロシウスの国境線の前線基地であるオアシス3が落ちたのを教室の朝にワーカーから聞かされた。

「なんだ?トオル?たかが前線基地が落ちただけだ…気にする事もなかろう」

ノインはトオルの驚きを見て大げさだとため息をつく、確かにロシウスは大国…前線基地の一つや二つ手放そうが痛くも痒くも無い。

「そうだよなくそれにオアシス3が落ちてもまだ建造中だがギガントの壁もある」

それにトオルの後ろの席であるバネツサが賛同する。

そんな中トオルの表情は冴えない…小国とはいえジェノックはロシウスの内部に一番近い位地にあるため常に目を光らせていた所だったからである。

「大丈夫だ…ギガントの壁には俺たちの小隊が建造中配属される…」

「そうか…」

その中ムラクがトオルに言うのとトオルはとりあえず安心する。

(確かに…ムラクなら大丈夫だろ…)

トオルはそう思い自分の小隊が配属されるロシウスとグレンシユタイムの国境線の事を考え始めるのだった。

—————

そしてウォータイム

グレンシユタイムとロシウスの国境線の基地にトオルの第5小隊が配属され短期守備隊長に任命されたトオルはロシウスの機体に遠距離系のランチャーとライフルを持たせ基地の警戒に当たらせていた。

「隊長!敵グレンシユタイムの飛行部隊を補足!三十秒後に接敵しま

す！」

ワーカーの報告でトオルは守備隊を基地の物陰に潜ませると

「以後、別命あるまで待機……」

そう言つて敵のグレンシユテイムの編隊にトールギス単機で突っ込んでいく。

「落ち着け……いつでも撃てるようにしておけよ……」

それを見た守備隊が戸惑うがノインはそれらを落ち着かせ待機を命じる。

そしてトオルのトールギスは技術大国であるグレンシユテイムのオーディンタイプに対しても圧倒的な機動力を見せつけ次々と落として行く。

「……」

「うわあ！」

「第7小隊！やられました！」

「ええい！数はこちらが多いのだ！包囲殲滅せよ！」

「了解！」

グレンシユテイムの部隊長はトールギスに押されながらも的確に指示を出す。

「……」

グレンシユテイムは落とされながらも着実にトールギスを包囲する。

「フツ……」

しかしこれはトオルの思い通りだった。

トオルはトールギスのスーパーパーニアを一気に加速させて包囲網を抜けると叫ぶ。

「各機撃て！」

「撃て！」

トオルの合図と同時にノインは命令を復唱すると守備隊は密集したグレンシユテイムの部隊を撃ち落とす。

グレンシユテイムの部隊はトールギスに気を取られていたために下からの攻撃に反応できず銃弾とランチャー弾に直撃し撃ち落とさ

せれている。

「くそっ！」

なんとか難を逃れた部隊長は悪態をつきながらも撤退しようとする……しかし目の前にはドーバーガンの銃口。

「っ！」

「悪いな…チェックメイトだ……」

トオルはそう言うのとドーバーガンの引き金を躊躇いもなく引く…すると部隊長のオーデインタイプはブレイクオーバーしながら墜落していくのだった。

—————

ウォータイム終了後トオルはワーカーにツールギスを渡すとムラクの元へと向かう。

「おくいムラク〜」

すると少し元気がない第6小隊のメンバーがいた。

「どうしたんだ？お前たち？」

その様子にノインも疑問の声をあげる。

「いや……それが……」

ミハイルが話そうとするが歯切れが悪く中々先に進まない。

「それがこれを見てくださいッス」

カゲトがトオルにガウンタイゼルフアーを見せると左腕が損傷しているのがわかった…。

「えっ!?ムラクさんが……損傷!？」

ワーカーもあまりにも事態に驚きを隠せない。

「確か…ギガントの壁に配属だったよな…」

「ああ…そうだ……ジェノックだ……朝お前の言う事を少しでも考えていればこうはならなかっただろう…ジェノック第1小隊の瀬名アラタ……」

トオルの問いにムラクは少し悔しそうに言う

「そいつが…お前のイゼルファーを……」

トオルはジェノックの評価を改めて考え直す事にするのだった。

「ついて来てくれ……」

「会いに行くのか？」

「ああ…」

「わかったよ…みんなは先に帰らせるぜ…」

「すまない……………」

—————

他のみんなを先に帰らせた後にムラクとトオルはその瀬名アラタと言う人物を待つて校門の所で立っていた。

するとジェノツクの制服を着た生徒が出てくるのを確認すると

「あ！お前は朝、屋上にいた！」

その中の赤髪の少年がムラクを見て反応する。

「俺のガウンタイゼルフアーに一撃を浴びせたのはお前が初めてだ…

瀬名アラタ…………その名前覚えて置こう…」

そう言つてムラクはスワン荘に去つていきトオルも

「ジェノツクの評価を改めて考えておく…………次は負けない…」

そう言つて去つていった。

—————

「ライトニング・カウント……………」

ジェノツク華の第4小隊所属の鹿島ユノはトオルが去つていくのを見てそう呟いた…。

「ライトニング・カウント？」

ジェノツク第1小隊の瀬名アラタと星原ヒカルは聞き覚えの無い言葉に疑問を口にする。

「あの二人はロシウスの二強だ…………バイオレットデビルと肩を並べるもう一人の最強のプレイヤー…………通称ライトニング・カウント…………神風トオル…」

ジェノツク第1小隊の隊長の出雲ハルキが説明するとアラタは楽しそうに

「へえくやつぱり強いんだろうな…」

「……………」

アラタが興奮する中、ヒカルはトオルの背中を睨み付けるのだつた。

第二戦 「フェンレス雪原奇襲作戦」

ロシウス連合司令部

「はっ？自分がアラビスタ領に奇襲作戦ですか？」

ロシウス連合司令官イワン・クロスキーは神風トオルを呼び出しトオルにアラビスタ領、フェンレス雪原の奇襲作戦を指揮するように指示する。

「そうだ…最近ジェノックだけでなくハーネスもアラビスタに対して攻勢に出ているらしい…今まではアラビスタに任せていたがついにアラビスタとロシウスの国境線近くまで出てきているらしい…」

「なるほど…つまり牽制ですか？」

「そうだ…アラビスタはあてにならない…フェンレス雪原を制圧しハーネスにも出来るだけ打撃を与えるのだ！」

「ハッ！神風トオル、拝命いたします！」

トオルは敬礼をすると司令部から出ていくのだった。

「……………」

「トオル…一体なんだった？」

教室に戻るとノインはトオルに呼ばれた理由を聞く。

「アラビスタ領の奇襲作戦を命令された…」

「アラビスタ領に？」

「ああ…最近ハーネスがジェノックと同じく勢いに乗っているから牽制の意味もこめてハーネスとアラビスタの戦闘区域の奇襲作戦を行うんだ」

ノインは前髪を弄りながら考える。

「突然の小国のジェノックとハーネスの攻勢、偶然ではなさそうだな…」

「ああ…しかしジェノックはともかくハーネスの指揮官は不明だ…調べようが無いさ…」

そこに話を聞いていたワーカーが

「しかしハーネスは戦術と用兵の天才の名将ドルドキンスと天才メカニックの古城タケルがいますしジェノックはムラクさんに傷をつけ

たジェノック第1小隊の転校生……小国が勢いづくには充分な要素ですね」

「とにかく俺たちは与えられた任務をこなすだけだ……」

「了解！」

トオルの言葉にノインとワーカーは声を揃えてうなずくのだった。

—————

ウォータイム『フェンレス雪原』

第5小隊を中心に全4個小隊のクラフトキャリアがフェンレス雪原の上空にてハーネスとアラビスタの戦闘を観戦していた。

「トオル隊長！ハーネスがフラッグに接近しています」

他の小隊の隊員がトオルに報告する。

「わかった……全機降下開始！ロシウスの恐ろしさを見せつけよ！」

「了解！」

トオルの号令のもとロシウスの部隊がフェンレス雪原に降下するのだった。

トオルはトールギスのドーバーガンでアラビスタのジランドとヴァルネルをブレイクオーバーさせると第1小隊のマーキングがされたDCエアリアルの前に降り立つ。

「なんなんや！一体!？」

「ロシウスか！」

ハーネスの第1小隊が戸惑う声をトオルはしっかりと聞いていた。

他のハーネスの小隊はトールギスを見るに退却やエスケープスタンスを取るが目の前のDCエアリアルはパニックに陥っているのか動かない……。

「スズネ！早く退避しろスズネ！」

「悪いな……」

ハーネスの通信を聞きながらトオルはドーバーガンをDCエアリアルに向けてと遠距離からの狙撃がトオルを襲う。

「狙撃か！」

その際にハーネスのDCエアリアルはエスケープスタンスを完了させる。

「クツ……」

(フェンレス雪原の所有権はアラビスタ同盟軍よりロシウス連合に移ります…アラビスタ同盟軍の機体は直ちに退去してください…)

トオルは久しぶりにしっくりしない勝ち方をしたのだった…。

—————

「珍しいな…お前が取り逃がすなんてな…」

「ああ…」

トオルはウォータイムのレポートを提出すると校門でバネツサが待っていた、二人は夕暮れの中スワン荘の帰路についていた。

「油断していた…俺もムラクを笑えないな……」

「仕方ないさ…誰があんな有利な戦い、油断しない方がおかしいさ…」

「見ていたのか？自分の小隊の任務が無いのに？」

「ああ…ま、まあな…」

トオルの問いにバネツサは顔を少し赤くしながら顔をそらす。

「…明日…暇だったら、チョコレートパフェおごってやる…」

「マジか！」

バネツサが喜んでいると、トオルはやさしく微笑むのだった…。

第三戦「遅刻」

「はあはあはあ……」

この日ロシウス連合のライトニング・カウントこと神風トオルは人生初の大寝坊をやらかしてしまったのだ…。

「ノインもワーカーも！なんで起こしてくれないんだ！」

トオルは起こしてくれなかった同僚を恨めしく思いながら神威大門に向けて全速力で走る…すると校門の前の曲がり角で同じく寝坊したのであろう人物とぶつかる。

「うわあ！」

「あだっ！」

「いたたたた……大丈夫か？」

トオルはぶつかった人物を見ると紺色の制服はハーネスの生徒だとわかる…何より特徴的なのは緑の髪を束ねている鈴の髪飾りである。

「うん……うちは大丈夫や…そっちこそホンマにごめんな」

「気にすんな…」

ガシャン……

「あっ！」

二人の苦労は水の泡になり無情にも神の門が閉じられたのであった…しかもその校門の前に立っていたのは…

「お前ら……ワシの当番の日に遅効とはいい度胸だな……」

泣く子も黙る猿田教官であった。

—————

「ハツハツハツ！ドンマイトオル！」

バネツサはトオルの話を聞くと肩を叩きながら大笑いする。

「すまない……つい先に行ってるかと…」

「俺も……すみません…」

ノインとワーカーはまさか寝坊しているとは知らず置いてきたのをトオルに謝る。

「珍しいな…本当に…」

「そうツスよねくまさか寝坊しているとは」

ムラクとカゲトは物珍しそうに言うともミハイルが。

「バネツサと違ってちゃんとしてるのに……」

「なんだよ！ミハイル！私が遅刻の常連者みたいなこと言いやがって！」

「実際そうだろ……」

「どの口が言うか……」

トオルとノインの猛攻にバネツサ轟沈……。

「それで？トオルは放課後、猿田教官の所に行くのか？」

「ああ……今日は厄日だ……」

ムラクの問いに自らの不幸を呪うトオルだった……。

—————

そして放課後、トオルは職員室に向かう途中で朝会ったハーネスの人物と再開するのだった。

「ああ……お前は朝の」

「おっ！仲間がおったで！」

ハーネスの生徒は嬉しそうにトオルを見つけるとトオルの隣を歩く

「ウチは金箱スズネや！よろしゅうな！」

「ああ……俺は神風トオルだ……」

「えっ！あの『ライトニング・カウント』かいな！フェンレス雪原の時はどないしよと思ったで！」

「ああ……あの時のDCエリアルか……」

トオルはスズネの言葉であるの時、取り逃がしたハーネス機のプレイヤーだとわかった。

「あん時はやられたけど……次は負けないでな！覚悟しとき！」

「フツ……望む所だ……」

すると二人は笑い会った。

—————

そして職員室で猿田教官の所へ行き一通り怒られた後で与えられた罰は道具磨きである

体育倉庫で次の日の授業で使う野球の球磨きをしていた。

「はあくなんでウチらが球磨きなんか……」

「まあ…仕方ないさ…遅刻したんだから…」

「せやけどな」

スズネは嫌々やる中トオルは黙々と球磨きをする。

「なんか、意外やったな」

「なにがだ？」

「ロシウスのやつらって嫌みな奴やとばかり思ってたで」

スズネの言葉にトオルは少なからず賛同する、確かにロシウス連合は強大な大国だ……しかしそれに甘えて偉そうにしているやつらはたくさんいる、トオルはそのような人種は嫌いだ……。

「そこは謝るよ…」

「謝らんでエエってトオルが偉そうにしたらんちやうんやから」

スズネのいきなりの名前呼びにビックリしたトオルだがすぐに

「お前は…面白い奴だな…スズネ」

「あ！バカにしとるんちやうか？」

「違うって」

「ホンマか？」

トオルはスズネにジト目で見られて居心地がさすがに悪いのでいつもバネツサが機嫌が悪いときに使う伝家の宝刀を抜いた。

「わかったよ俺に勝ったらチョコレートパフェおごってやるから」

「ホンマか！約束やでな！」

「ああ…ただし…勝ったらだからな…」

「覚えときよ！」

ーこの日交わした約束が実現するとはその時、トオルとスズネは思ってもみなかっただろう…この二人が法条ムラクと瀬名アラタのようにセカンドワールドを揺るがすコンビになるとは……ー

第四戦「ライバル」

フエンレス雪原攻略作戦から数日後

みんな分かるか？ウチや！金箱スズネや！前回の作戦でウチらは作戦失敗、最近勢い良かったからきついわくでもな今回からウチらに新型が配備される事になったんや！

えつと……ウチはドットフェイサーでウチの隊長の乾カゲトラはバル・スパロスや！これでトオルと戦えるで！覚悟しとき！

—————

「ハックション！」

「うわあ！どうしたんだトオル！」

トオルはバネツサと話していたら急にくしゃみをしたのでバネツサが驚く

「最近変だぞ？あの遅刻から」

ノインはトオルの異変を感じていた、ノインの言うとおりトオルはあの日から授業でボーとしていたりしている事が多くなっていて、それほどトオルにとって金箱スズネとの出会いが刺激的だったのだ……パフェの話の後もスズネとトオルは話し続けたのだが、スズネは純粹にLBXを楽しむ姿を見てしまったからである、トオルの今の目的はムラクと同じくこのセカンドワールドを変える事であるがスズネとの出会いが『セカンドワールドで楽しく戦いたい……』と言う感情に揺さぶりをかけていた。

(はあく)

しかしムラク同様後には戻れない……ムラク程ではないがトオルもロストさせた数は数知れず、無念の中でこの島を去った者たちの為にも止めるわけにはいかない。

「そう言えば例のジエノック第1小隊、新型を使い始めたらしいな……」

「瀬名アラタ……」

ノインは思い出したかのように呟くとムラクも呟く。

「大丈夫ツスよムラクさんとイゼルファアなら」

「俺が見たところ、かなりのスペックを持っているぞ…」

カゲトの言葉に昨日戦況観覧室でイーストエンドブリッジの戦闘を見ていたのかワーカーが答える。

「なら僕の考えが正しければ次のジェノックの目的はブラックウインドキャンプかな」

「だろうな…あそこは戦略上重要拠点だ…私たちが配備されるかもな！トオル！…トオル？」

ミハイルの言葉にバネツサが賛同しトオルに話し掛けるがトオルはまたボーとしていた。

「あ、ああ…でも配備はされないだろう…あそこには第13小隊がいる…」

「デスワルズブラザーズですか…」

「まつ…アイツらなら大丈夫だろうな…」

トオルの言葉にワーカーとノインは頷くのだった。

「……………」

そしてウォータイムにてトオル率いる第5小隊の任務はまだ防衛線が完成していないフェンレス雪原の防衛任務だった…。

「最近話題のハーネスは来るのだろうか…」

「そんなく隊長が防衛しているのは知ってるはずだし来ても大丈夫だろう」

ノインはそう呟くがワーカーが笑い飛ばす。

「油断するな…我々の任務はフェンレス雪原の防衛だ」

「了解！」

トオルの張りつめた声に思わず背筋を伸ばす二人するとフェンレス雪原の出入り口に配備された寒冷地型グレイリオがいきなりブレイクオーバーする。

「えっ!?隊長!ハーネスの奇襲です!」

ワーカーの報告で戦闘体制に入るトオルとノイン、前線のガウンタが砲弾に直撃しブレイクオーバーするとその爆煙から白いオーヴェインが出てきた。

「あ、あれは…ジェノックの新型…しかしハーネスの奇襲のはず

「……もしかして！」

「ハーネスも新型機がいるとは……」

ノインとトオルはあまりの事態に驚きが隠せない。

「ノイン！横だ！」

ワーカーの警告でノインはソルジャーサーベルで横から襲つて来た黒と赤のバル・スパロスを迎撃する、ノインのソルジャーサーベルとバル・スパロスの風魔小太刀が激しく激突する。

「ノイン！」

トオルがノインの援護にも向かおうとすると目の前に青いゼットソードを構えたドットフェイサーが立ち塞がる……。

「あれも新型か！」

トオルはビームサーベルをシールドから抜くと構えると秘匿回線でスズネの声がきこえる。

「さあ！約束を果たして貰うで！トオル！」

「フツ……スズネ、甘いな……それは俺が負けたらだ！」

トールギスのビームサーベルとドットフェイサーのゼットソードが激しくつばぜり合いがおきるとトオルはトールギスのスーパーバーニアで加速しスズネのドットフェイサーを強引に押し出す。

「行くで！」

「甘い！」

トオルはスズネの攻撃を避けると左腕に固定されているヒートランス『テンペスト』でドットフェイサーを突き飛ばすのだった。

「……」

その頃ノインもバル・スパロスと戦闘をしていた、風魔小太刀の攻撃をシールドで受けるとソルジャーサーベルで斬りかかるが機動力重視のバル・スパロスはそれを軽々と避けるとノインを蹴り飛ばす、しかしそれで大人しく飛ばされるノインではない、飛ばされる勢いでノインはバル・スパロスを投げ飛ばす。

「ええい！やるな！」

ノインは体勢をすぐになおすとソルジャーサーベルでバル・スパロスを斬るがクナイをクロスさせて受ける。

「このガウンタ……あのロシウスの緑炎か……」

ハーネス第1小隊の隊長の乾カゲトラは自身の新しい愛機バル・スパロスを駆りながらノインの異名を呟くのだった。

――

その他の防衛に当たっていた第5小隊を除くロシウスの五個小隊はハーネスのDCシリーズの小隊と新型オーヴェインの圧倒的なパワーと砲撃力に次々とブレイクオーバーされていくのだった。

「第27小隊の通信が途絶!」

「第32小隊!隊長を残して全滅!」

次々と悪くなる戦況を戦いながらトオルは通信で聞くと叫ぶ。

「全機!俺の指揮下に入れ!第11小隊と第32小隊は敵の新型を足止め!その他の小隊は他のハーネスを迎撃し残りの新型を俺とノインで足止めする!」

「了解!」

劣勢の中ロシウスの小隊たちは希望の光を見つけたかのようにトオルの指示に従うと戦況が均衡する。

するとトオルと戦っていたスズネは

「行くで!」

《セットアップ!ゼットランス!》

マルチギミックサクサクでソードからランスに変更するとゼットランスでトオルのツールギスに斬りかかる。

「武器が変形した!」

トオルは驚き素早く後退するがランスに変更された事によって拡大した攻撃範囲に後退が間にあわず胸部を損傷する。

「くそっ!」

トオルは悪態をつくが同時に（面白い!）と思っていた。

「よっしゃー!まだまだ行くで!」

「フツ…来い!」

お互いが構えて攻撃を仕掛けようとした時サイレンが鳴り響く……するとフラッグには第3小隊のマーキングがされたセイレーンがいた。

(拠点制圧完了……フェンレス雪原の所有権はロシウスからハーネスに移ります…ロシウス登録機体は直ちにフェンレス雪原の敷地内から退去してください…)

「なっ……」

「バカな…我々が…占領を許すなんて…」

トオルとノインは自身の失態にただ啞然とするのだった。

—————

「失態だな…神風トオル……ハーネスのような小国に敷地を明け渡すとは…」

ウォータイム終了後、ロシウス連合の司令官イワン・クロスキーはフェンレス雪原の防衛に参加した全六個小隊の前に立っていたトオルを睨み付ける。

「すべては自分の責任です…処分は何なりと…」

「トオル！」

「隊長！」

トオルの発言でノインとワーカーが叫ぶがイワンは無視して話を続ける

「ふんっ……これでハーネスは我ロシウスへのルートを築いた訳だ……」

すると床下のモニターがつくとセカンドワールドの勢力地図が映し出される。

「奴らは戦力を拡充しつつ我々の勢力圏に向かうだろう…だが……まだ我々ロシウスとアラビスタの国境防衛線がある……シヤクだがここは静観しかあるまい…処分は追って伝える…」

「「ハッ！」」

—————

司令室を後にしたトオルは黙って帰路につく(ノインとワーカーには先に帰ってもらった…)トオルは校門の前で待っていたスズネに会った。

「やられたよ…まさかお前たち新型が囷だったとはな……」

「まあ…ウチが考えたんじゃないけどな」

二人はハーネスのダック荘とロシウスのスワン荘の分かれ道の壁にもたれて話していた。

「まあ！次は最後までやろうや！ウチは負けへんけどな！」

「ん？何を言っている？勝つのは俺だ…」

「……プツ」

「クククツ」

「ハハハハハツ！」

スズネとトオルは誰もいない通りで笑いあうのだった…。

第五戦「迷いと目的」

フエンレス雪原の失態から次の日トオルが教室に着くと教室にいる他のロシウス生徒からギリギリ聞こえるような音量でトオルの事が話されていた。

「おいおい……あの”ライトニング・カウントがお出まじだぜ……」

「昨日だろ？ハーネス相手に手も足も出なかつたんだっけ？」

「まったく……ロシウスの威厳もアイツのせいで落ちるな……」

「さすが部下を見殺しにして生き残っただけはある……」

「ああ……部下殺しの神風”か……」

周りからの声を無視してトオルは自分の席に座ると後ろのバネツサが励ます。

「おい……気にすんなよ……あんな奴らの言うこと……」

「ありがとう……でもハーネスに負けたのは事実だ……仕方がないさ……」

するとノインとワーカーがトオルの前に出てトオルに謝る。

「すまない……トオル……」

「俺もすいません……俺がちゃんと見ていたらこんな事には……」

「何を言っている？仕方がないさ……これから頑張れば良いさ……」

謝る二人にトオルは優しく笑い二人の肩を叩く、するとムラクも教室にやって来てトオルに話しかける。

「トオル……昼休み、少しいいか？」

「ん？ああ……いいが？どうした？」

「昼休みに話す……」

「わかった……昼休みだな」

—————
そして昼休み、ムラクとトオルは屋上のフェンスにもたれながら話していた。

「トオル………昨日の戦いを見さしてもらった……」

「無様だろ？笑ってくれていいよ……」

「いや……あの青い新型と戦っている時、楽しかっただろ？」

「ッ！よくわかったな……」

「ああ…そんな気がした…」

ムラクがそう言うのとトオルはため息をつきながら話す。

「あの機体のプレイヤー…スズネって言うんだけどな…面白い奴だな…戦いばかりのこの学園でバトルを楽しんでるんだよ」

ムラクはトオルが話すのを黙って聞いている。

「思い出すんだ…純粋にLBXバトルをしていたあの時を…」

「そうか…だからこそ俺たちは無情に上を目指してきた…」

「そうだ…こんな馬鹿げた物を終わらすために…」

「そいつとは楽しめばいい…」

「え!？」

ムラクの意外な言葉にトオルは目を見開く。

「俺たちは変えるんだ…だからこそ楽しむのは忘れてはならない…」

「フツ…お前…変わったな…」

「そうか?…だが俺は瀬名アラタは面白いと思っている…」

「なるほど…」

すると二人は黙ってニヤリと笑いあうのだった。

—————

その頃食堂ではノイン、ワーカー、バネツサ、ミハイル、カゲトの五人でご飯を食べていた

「いかなな…どうしても引きずってしまふな…」

「どの口が言ってるんだよ…」

「相変わらずノインは食べるな…」

食事が終わったノインの前の席に座っていたバネツサとミハイルは三人分はあるであろうお盆の空を見てあきれれる。

「まあ…元気出せよ…ワーカー」

そう言っただけカゲトはオレンジジュースをワーカーに渡すと

「すまない…」

ワーカーは元気なくジュースを受けとる。

「あの新型…隊長のツールギスに傷をつけやがった…向こうの方が優れているとも言えるのか…」

ワーカーは悔しそうに持っているジュースビンを震わせる。

カゲトはその気持ちに痛いほどわかった…自身のすべてを懸けて作り、自身が知る最強のプレイヤーに使われるLBX…それが例え軽い損傷と言えど傷つけられたのは悔しいのだ…（ムラクとの戦闘は別）

「でも俺たちメカニックはプレイヤーを信じて…完璧に整備するしかないんだ…」

「分かっている…」

カゲトの言葉を聞くとワーカーは顔を上げとオレンジジュースを一気に飲み干すと

「隊長が全力を出せるようにやってやるさー！」

決意を固めたようにジュースのビンを机に勢いよくおくのだった。

—————

そしてウオータイム、ムラクとトオルは司令室でブラックウインド峡谷キャンプの戦闘を観戦していた…そこには第13小隊のグラスタールがジェノツクの新型を追い詰めている所だった。

「さすがはデスワルズブラザーズ…新型相手に引けを取らないな…」

トオルが感心しているとムラクが腕を組ながら呟く。

「だが向こうも何か考えているようだ…」

二人の前の床のモニターには三角形を作ろうとしていたジェノツクの第1小隊だがオーヴェインが第5小隊のDCブレイバーをかばってブレイクオーバー寸前になるのを見るとトオルは疑問に思う。

「何をしているんだ？」

「おそらく…フォーメーションアタックだろう…」

「フォーメーションアタック!? そんな一日やそこらで出来るもんじゃ…」

トオルが驚いているとモニターの中でDCエアリアルとドットフェイサー、バル・スパロスが三角形を形成しデスワルズブラザーズのフォーメーションアタック”デスグリフォン”を突っ込んで行き先頭のグラスタールがはね上げられ空中にいた二機のグラスタールにぶつかるのとドットフェイサー、バル・スパロスが三機を切り刻むと三機は

爆発する…。

「ツ！ロストした……」

「……やはり面白い奴だ…瀬名アラタ……」

「おい！待てよ！」

トオルが驚く中、ムラクは細く微笑むと司令室を後にすると慌ててトオルも追いかけて廊下で並んで歩く。

「トオル…：そういえばワーカーを昼から見かけなかったが……」

「ああ…：確か拠点防衛用兵器の…：エル…：ドバンドだったっけ？それのシステムの最終調整をするらしい」

「エルドバンド？」

「ああ…：システムに関してはワーカーに右に出る奴は居ないからな…：」

「なるほど…」

そして二人は静かに薄暗い廊下を歩いて行くのだった…

第六戦 「山賊」

「ハーネスの動きは？」

トオルの問いにワーカーはコンソールを操作しながら質問に答える。

「はい……しばらく動いていませんが……ゴールドバレー基地で何かしているようですね……」

「ゴールドバレー基地か……ならケアン基地に襲撃をかける気か……」

トオルは勢力圏地図を見ながら冷静に分析するとノインとワーカーが感心する。

「しかしせっかくフェンレス雪原を奪還したハーネスだ……てつきりロシウスとアラビスタの国境防衛線を突破してくると思っただが……さすが名将ドルドキンス……」

「それを見抜いた隊長も凄いですけどね！」

「昼休み、司令に掛け合っただろう……」

—————

「なに？ケアン基地にハーネスが襲撃するだど？」

「はい……ハーネスがアラビスタから奪ったゴールドバレー基地に何やら動きがあるようです……その付近の基地は我がロシウスのケアン基地も含まれています……」

トオルは司令室でロシウスの司令官であるイワン・クロスキーに進言していた。

「わかった……貴様らの小隊を配備させよう……神風トオル……これは汚名返上のチャンスだ……」

「了解！神風トオル任務を遂行します！」

—————

イワンとの会話を済ませた後、教室に戻るとバネツサが待っていた。

「よっー！」

「バネツサ？なぜここに？」

この神威大門は全寮制のため昼食は食道で取るので昼休みは教室は基本空なのであるがバネツサはノインからトオルが昼休み司令官の所に行くと聞かされ二人分の昼を持ってトオルを待っていたのである。

トオルとバネツサは自分の席に座るとバネツサが持っていた二人分のパンを食べ始めるとトオルはバネツサに札を言う。

「いつもすまないな…」

「気にするな…私が勝手にやってることだ…」

トオルは基本ウオータイム中心に生活しているので今回のようにたまに昼食を抜く事があるがその度にバネツサが教室に待っているのである。

「トオルは私が見ていないとダメだな!」

「ごめん…:バネツサに言われたく無いわ…」

「おい!それは無いだろ!」

バネツサはトオルに詰め寄るとトオルは両手を上げて笑う。

「ごめんごめん」

「あつ!そう言えばパフエ!パフエおこれ!」

「すまん、今日はウオータイムがあるから…」

「じゃあ!終わったらだ!二人で!」

「二人で?」

「ああ!」

最初はノインたちと行こうと思っていたトオルだがバネツサのなにか期待する顔に断りきれずにただ頷くのだった。

—————

そしてウオータイム

ケアン基地に配備されたトオルとノイン、そして今回はまた新型三機が来ても良いようにワーカーもグレイリオで出撃していた更に今度こそハーネスを潰すために基地守備隊含む合計七個小隊、22機の大部隊である。

「敵襲!」

守備隊の機体がハーネスの襲来を報告するとハーネスの四個小隊

が降下してくるとワーカーが言う

「隊長の読みが当たりましたね…」

「ああ……問題はこれからだ…」

トオルは静かに答える。

そして降下してきたのは第1小隊、第2小隊、第3小隊、第5小隊のマーキングがされているDCシリーズ、セイレーンと新型が三機だった。

「ノイン！ワーカー！俺は青い新型をやる！」

「了解！」

ノインとワーカーに素早く指示を飛ばすとトオルは一気に加速しスズネのドットファイサーに向かう。

「フェンレス雪原の借りを返させてもらおうぞ！スズネ！」

「そうはいかへんで！」

トオルはトールギスのドーバーガンを撃つがスズネのドットファイサーが高速で移動し避けるとゼットソードで斬りかかる、トオルはテンペストで受け止めるとドットファイサーを殴り飛ばす。

「……………」

その頃ワーカーも白いオーヴェインと戦闘を繰り広げていた、ワーカーはオーヴェインのオーハンマーを飛んで避けるとほぼゼロ距離でランチャーを発射しオーヴェインを吹き飛ばす。

「隊長のために！」

「ハハッ！やるじゃねえか！」

ハーネスの第2小隊の隊長、無敵ギンジロウはワーカーの腕を見て素直に喜ぶ。

「……………」

「今日こそ倒す…新型」

そう呟くとノインはガウンタを加速させると向こうのバル・スパロスも加速し激しく斬りあう

「やるな……さすがは緑炎…でも負けるわけにはいかない…」

ハーネス第1小隊の隊長、乾カゲトラは激しくなる戦闘の中レバーを握りしめるとリーダーに突然ノイズが走る。

「これは!?あの時の!」

「おい!カゲトラ!アイツらだぜ!」

ギンジロウの言葉でカゲトラが感づくと同時にスズネや他のハーネスは緊張した顔になる。

「なんだ?ノイズが?」

「わからない!」

「ツ!守備隊がロスト……!」

トオルとノインがワーカーの報告でロストしたグレイリオの方を見るとその先には黒いストライダーフレームのLBX”キャリパー”がいた。

「なんでこんな時にバンデットが来るんや……!」

スズネの言葉にトオルは

「チツ:最近有名な山賊か……!」

呟くと上空に巨大なエネルギー反応が起きる、そこにいたトオルたちは退避するがガウンター機が逃げ遅れ文字通り消滅する。

「なんて出力だ……!」

メカニックであるワーカーが啞然とし戦場にいたほとんどの人が上空を見るとそこには一機のLBX……赤、白、青のトリコロール、背中には羽のような二基のスラスタ……そして何より目を引くのは右手に保持している大型のエネルギーライフルである……

「トオル!危ない!」

すると上空の敵に気をとられていたトオルのツールギスのコアボックスを貫こうとしたキャリパーをスズネが吹き飛ばすと今度はトオルがテンペストでキャリパーを貫き破壊する。

「すまない……スズネ……!」

「ええって事やゝまだ勝負がついてないからな」

スズネの返答にトオルは微笑みながらロシウスに指示を飛ばす。

「ロシウス各機に告ぐ……最優先攻撃目標をバンデットに変更!セカンドワールドを乱す悪を排除せよ!」

「了解!」

味方の返事を聞くとトオルはツールギスを上空の敵に向けて飛ば

すとノインが通信を寄越すが

「何をしている?」

「ノインとワーカーは地上の敵を頼む…あれは普通じゃない…」

トオルの言葉にノインは黙りこむと

「ロストなんかするなよ……バネツサが悲しむ…」

「?…ああ……」

ノインの言葉に疑問を持つもトオルは返事をして敵、バンデットの親玉であろう機体に向かうトオルであった。

第七戦 「ゼロと言われる機体」

ハーネスの襲撃を受けたトオルたちは突如バンデットに襲われ状況はロシウス、ハーネス、バンデットの三つ巴の戦いになっていた、その中トオルはバンデットと思われる謎のLBXにトールギスを向かわせていたのである。

すると謎のLBXは大型のエネルギーライフルを向けて迷いなく発射するがトオルは左のシールドで受け更に加速する……当然トオルは先ほどの攻撃を避けられたのだが……避けると地上でハーネスとバンデットを同時に相手をしている味方に当たるためシールドで受けたのだった、しかしシールドは融解しパージするしかなかった……
「なんて威力なんだ……しかしまだまだ！」

トオルその威力に冷や汗をかくがトールギスを横にバレルロールしながらドーバーガンを撃つが避けられ大型のライフルを背中に収納すると肩からビームサーベルを引き抜くとトールギスに驚くべきスピードで接近してくる。

「ツ・ビームサーベル!？」

トオルは左腕のテンペストでビームサーベルを受けながら驚く、ビームサーベルは元々ワーカーが開発したものでトールギスにしかない装備のはずである。

ーーーー

その頃地上ではキャリパー三機相手に苦戦を強いられていた……ロシウスはフラッグを中心に集結し、ハーネスはその周りで戦闘を繰り広げていた。

「各機陣形を維持！バンデット、ハーネスの両方に目を離すな！……どうした？………ツ！」

ノインが指示を出していると隣のガウンタが妙に静かなのを見て話しかけるが……そのガウンタのコアボックスから手が出てきたのである……一瞬の間を置いて爆発するガウンタ……その爆煙からキャ

リパーがノインに襲いかかるがノインのソルジャーサーベルでキャリパーの左腕を斬る。

「なめるな！」

—————

ハーネスも襲いかかるバンデットの対応に追われていた。

「カゲトラ！どうすんねん！」

「どうって…」

カゲトラが戸惑っているとギンジロウが

「何をしている！カゲトラ！やるだけだろ！」

《セットアップ！オーキャノン！》

キャリパーに向けてオーキャノンを撃つがキャリパーは軽々と避けるが他の第2小隊のマーキングをしたDCオフエンサーがコンバットナイフでキャリパーの背中を斬るとハーネスから歓喜の声が挙がるがそれもつかの間第5小隊のマーキングをしたDCブレイバーが違うキャリパーにコアボックスを貫かれ爆発すると動揺した隣のDCオフエンサーがまた貫かれる。

「嘘やろ…：トラント！ヒルデ！」

スズネが叫びも虚しく第5小隊の最後の機もやられロストする。

「そんな…」

「スズネ！来るぞ！」

—————

そして上空の2機はビームサーベル同士で斬り合う。

「なんてスピードとパワーだよ…：トールギス以上じゃないか…：だからといって負けるわけにはいかない！」

「…：無駄…：ゼロには勝てない…」

トオルの呟きに相手のプレイヤーらしき人物の声が聞こえた。

「ゼロ？」

トオルが疑問に思うとゼロが何かに呼ばれるようにどこかを見るとどこかに飛び立って行ったのであった…

「逃げられた…いや…：見逃してもらったのか…」

ウウ—————

(終了時間となりました…これよりウオータイムを終了します…)
ウオータイム終了のサイレンが鳴り響くとハーネスロシウスはお互い被害が大きく退くしかないのだった。

「……………」

その後トオルは約束通りスワローでバネツサといた。

「ん〜うまい!」

バネツサがチョコレートパフェを食べて喜んでいるとトオルはコーヒーを飲みながらワーカーに頼んで先程ウオータイムで現れたLBXの映像を見ていた。

(あの機体…確かゼロとか言ったな…あの威力、機動力は脅威だ……)

「おい…トオル…」

「なんだ?ングツ!」

バネツサに呼ばれ顔を上げると口にパフェをねじ込まれる。

「……………甘い…」

「暗い顔したら幸せが逃げるぞ!」

「まったく…お前といると考えるのがバカらしくなってくるな…」

するとトオルは笑うと予備のスプーンでバネツサのパフェを食べる。

「あ!おい!なに食べてんだ!」

「いや〜最近甘い物ご無沙汰だったから〜」

この時トオルはバネツサの心遣いに心から感謝したのである。

第八戦「過去」

「失礼します…隊長？また寝坊ですか？」

ロシウス第5小隊のメカニックワーカー・シクトは中々起きてこない隊長、神風トオルの部屋に来ていた。

「お…おう……すまんワーカー、体がだるくてな……」

「隊長!?おもいつきり病気じゃないですか!?!」

ワーカーの叫びがスワン荘に響きわたるのだった…。

「すぐ寮長呼んできます!」

「おう……すまん……」

ワーカーが慌てて寮長室に向かう途中でノインが慌てるワーカーを見て話しかける。

「どうしたワーカー?そんなに慌てて?」

「隊長が!病気に…それでえらそうで……」

「ほう……」

それを聞いたノインは怪しく微笑み急いで女子寮に向かうとバネツサの部屋を開けてまだまどろみにいるバネツサにかかと落としを喰らわせるとバネツサが跳ね起きる。

「なんだ!?!一瞬のお迎えが!」

「起きたかバネツサ……」

「なんだ!ノイン!朝からハードだな!おい!」

当然ながらバネツサが半ギレで起きるとノインが

「バネツサ!今日は休め!」

「ハア!?!」

意味の分からない事を言い出すのでバネツサはスツキョトンな声を上げる。

「私がリリーナ寮長に言って置くから!」

「だから何なんだよ!いきなり!理由を説明しろ!」

「今日、トオルが病気で休む!」

「ハア……」

「これはチャンスだ！トオルの事好きなんだろう？」

「ホワアアアアオ！」

ノインのドストレート発言にバネッサは再び叫ぶとノインがバネッサの耳元で囁く。

「最近、トオルはハーネスの女子と仲良くしているらしい…」

「え？」

「この前の遅刻の時の罰則も」二人つきりで”受けたらしい！”

「ハッ！」

バネッサは遅刻からトオルの様子がおかしい事を思い出す。

「これでいいのか？だが今日休めばトオルと二人つきりで看病…：…これほど良い状況はない！」

いつものクール系キャラはどこへやらノインはバネッサに熱く語りかける。

「そのまま勢いで告ってしまえ！」

「ホワアア！」

もはやパニックで自分のせかいに飛び立ってしまった親友を見てノインは楽しそうに寮長室に向かうのだった。

—————

「そうですか…：…バネッサちゃんまで…」

「はい…：…ではよろしくお願いいたします…：…」

ノインはスワン荘の寮長であるリリーナ・ドーリアン寮長に報告すると学校の支度を持って学校に向かうのだった。

—————

その頃、取り残されたバネッサはとりあえずベットに潜り込むと（うまくやれと言ってもどうすれば…）

寝ることもせずに普段使わない頭を必死に動かすのだった。

—————

しばらくしていつの間にか寝ていたバネッサが目を覚ますと

「あ…：…寝ちまったか…」

「大丈夫？」

そう言ってリリーナが体温計を持ってバネッサの部屋にやって来

るとバネツサに計るように促し、話しかける。

「昨日あんなに食べてたのに…病気って分からない物ね？」

「ギクツ」　　そ、そうですね…ハハハ」

バネツサが作り笑いをすると体温計のアラームが鳴り響き一応体温を確認するバネツサ…すると37、5度……意外とあつた……。

「37、5度か…まあ大丈夫そうね？」

「あの…トオルは？」

「ん？けっこう高かったわよ…」

「そうですか……」

「じゃあ…お粥作ってくるから…」

「あの…リリーナさん…少しお願いが…」

「ん？」

—————

その頃トオルは高熱の中でうなされていた。

（ロシウスの為ではなく…あなたの為に働きたいのです！）

「ん……」

そしてゆっくりと目が覚めるトオルは一人でため息を着くと

「どうした？ため息なんて着いて…？」

「ああ…ちよつと昔の事を……へ？」

横からバネツサの声がしたので横を向くとそこには声通りバネツサがいた…。

「なんで要るんだ？」

「私も病気だったんだ…治ったけど…」

「そうか……」

「ほれ…お粥だ…」

そしてバネツサは持っていたお粥をトオルに差し出すとトオルは上体を起こして食べる…要するにアーンである、それに気づいたバネツサは顔を赤くするも当然ながらトオルは病気のためそんなに気づかない。

「それにしてもバネツサが看病か……」

「なんだよ…不満か？」

「いや……出会って一秒で人の食べ物に平気で食う奴が……」
「悪かったな……」

半年前

当時トオルは当然ながら無名のプレイヤーだった、彼が神威大門に入学した時に彼はいきなり隊長に任命された……それが当時ノイン、オットー、ワーカーしか居なかった隊長不在のロシウス第5小隊だった……

「貴様が新しい隊長か？」

「え？ま、まあ……そうなるけど……」

一番最初に話しかけて来たのはノインだった

「言っておくが貴様のような新入りの指示に従わん……私は私のやり方でやらせてもらう……」

そうハッキリ宣言してきたノインに驚くトオル、その時現れたのがオットーだった

「おい！ノイン！いきなり何言ってるんだ！」

「何って？私のやり方を言わせてもらっただけだが？」

オットーがノインを注意するがノインは聞く耳を持たずに去ってしまった。

「すいません……本当はいい奴なんですけど……」

「いや……気にしないでくれ……君は？」

「ロシウス第5小隊のプレイヤー、オットーです」

「今日からお世話なる神風トオルだ……よろしく……」

これが神風トオルとオットーの初めての出会いである……

そして初めてのウォータムもさんざんな物だった……ノインは宣言通り独断専行、ワーカーもトオルへの報告もせずにオペレーションをしだす……唯一 オットーがトオルをカバーするがその間トオルは黙って全員の動きを見ていたのだった。

「ノイン！ワーカーも！せっかく隊長が要るんだから！」

「新入りでしょう？」

「だから言っただけ……」

オットーの注意もワーカーとノインは聞かずにさっさと帰ってしまおう。

「すいません…隊長……」

「いやいや、気にしないでくれ…確かに新人なのは本当なんだし…」

オットーはトオルに謝るがトオルは明るく振る舞い気にするなど言ったのであった……。

それから一ヶ月近くの間この小隊内の壁は崩れる事無くトオルは蚊帳の外に追いやられていた、しかし普通の人ならば指令に小隊の移動申請など出そうもののだがトオルはその気配すら出さなかった、そんなトオルにノインとワーカーは興味を抱き始めた……。

そして今回のウオータイムはタンデムの港の防衛任務だった、アラビスタの襲撃されなんとか守る防衛隊だがアラビスタ特有の大量戦術により防衛隊が次々とブレイクオーバーまたはロストさせられる。

「クッ…このままでは…」

トオルはノイン達が苦戦しているのを見ると

「オットー」

「はい？なんでしよう？」

「ここにいるロシウスの全小隊に通信を送れるか？」

「送れます！でもなんで？」

「繋いでくれ…」

「了解！」

オットーはトオルの指示に疑問を持ちつつも通信を繋げる。

「各小隊！残存報告！」

「第11小隊、全機健在」

「第32小隊、残存一機」

「第21小隊、残存二機」

「第17小隊、残存一機」

トオルの命令に他の小隊が残存数と小隊番号を報告するとトオルの元にノインが通信を飛ばす。

「貴様！何をやっている！」

「勝ちたければ俺に従え！」

トオルの気迫にノインは言葉を失い通信を切るとトオルは全ての部隊に指示を飛ばす。

「全機！フラッグに集結！」

トオルの指示でフラッグに集結するとトオルがモニターを使いながら作戦を伝える。

「現在、アラビスタは部隊を大きく三つに分けてフラッグに向かっている、それで全ての部隊で中央の部隊を殲滅その後迅速に左右の部隊を殲滅する。」

「バカな！フラッグを空きにするのか！」

「その前に全ての部隊を叩く……」

「もうそこまで迫っているのだぞ！」

「敵の中央の部隊は指揮官機があった……指揮官を叩けば少なからず混乱する……それを突くしかない……」

トオルの賭けの作戦にノインが反対するが現在のロシウスの戦力を考えるとそうするしかなかった。

そしてトオル指揮のもと、ロシウス残存部隊は敵、アラビスタの中央部隊を殲滅し迅速に全ての部隊を殲滅したのであった

—————

そして登下校の時いつも通りトオルはオットーと帰っていたが校門でノインとワーカーが待っていた

「貴様をまだ認めただけではない……だが……今回の指揮は見事だった……それからも頼むぞ……」隊長……

「すいませんでした……隊長」

そう言つて二人はさつきとスワン荘に戻つて行つたのである……。

「よかったですね？隊長」

「ああ……ありがとうな……オットー」

「いえいえ」

それからは徐々にだが小隊内の隙間が埋まっていき今に至るのである。

当時からノインと仲がよかったバネッサはトオルと言う人物に興味を持ち始めていた……ある日ワーカーがニヤニヤしながら話しか

けて来た。

「隊長！」

「ん？なんだよ？」

「隊長の戦闘データが取れたので専用機を作りたんですが…」

「専用機を？」

「はい……これ見てください」

するとノートにはLBXの設計図があった、『ツールギス』見るからにトオルがセカンドワールドで見してきたLBXを凌駕するLBXがそのノートには記されていた。

「凄いな…これは…」

「でしょう？装備のドーバーガンの強力な火力とスーパーバーニアによる高機動力と近接戦闘も収納しやすいエネルギー系の武器で対応できます…つまりどんな状況でも柔軟に対応できるLBXだと言う事です」

「いいのか？俺が使つて？」

「はい……あなたに…」

「ありがとう…」

トオルはワーカーに静かに礼を言うのだった…。

—————

その後トオルはウォータイムが無いため肉屋さんでコロツケを買いカモメ公園でコロツケを食べていると後ろから話しかけられた。

「おい………」

「ん？」

トオルが振り返るとそこには黒肌で紺色の髪を団子状のポニーテールにした少女が仁王立ちで立っていた。

「お前が…神風トオルだな？」

「ああ…そうだけど？」

黒肌の少女が確認を取るとトオルの横に座り手元の袋にあったコロツケの一つを取って美味しそうに食べる。

「ノインから話しは聞いている…なんたっていい隊長が来たってな…」

「ノインがそんなことを…」

「ああ…ノインが楽しそうにしてるのは久しぶり見たからな…興味を持っただ…そう言えば紹介がまだだったな…私はバネツサ、バネツサ・ガラだ」

「神風トオルだ…よろしく…」

二人は笑いながら握手を交わす、これがバネツサとトオルの最初の出会いであるがこの時、実はバネツサはコロツケ三枚目に突入していたのだった…。

—————

お粥を全てのもらったトオルは満足そうになると布団をバネツサにかけてもらい一息つく…そしてバネツサは部屋を出ようとするとトオルがひき止める。

「もう少しいいか？」

「ん？ああ…いいがなんだ？」

「一人は寂しくてな…」

目をそらしながらブツブツ言うトオルに苦笑しながらもバネツサはベットの横に椅子を持ってきて話し始めるのだった…。

第九戦 「タンデムの港防衛戦 前半」

「大丈夫でしたか？隊長……」

「ああ……すまない……大丈夫だ」

トオルが寝込んだ次の日の朝、ワーカーはトオルを心配するが大丈夫のようでいつものように落ち着いて話しているとノインとバネツサが食堂の端でこそそそとしていた。

「で？どうだった？」

「いや……特に……」

「まったく……バトルではガツガツ行く癖に……なんでこういうので奥手なんだ……」

チャンス物をにしないバネツサにノインは思わず頭を痛めるのだった。

「……………」

「そうか……エルダーシテイが……」

「ああ……あのワーカーが作ったエルドバンドがやられたのが大きかったな……」

「エルドバンドがな〜」

トオルはムラクに昨日の事を聞きながら改めてジェノックはロシウスの驚異になると確認した。

「ジェノックを潰したいのは山々だが……こっちもこっちでハーネスがあるからな……」

「ああ……だが……トオル……一つを手伝って欲しい事がある」

「なんだ？」

「敵は恐らく我々ロシウス本土に来るだろう……」

「と言うことは……もう一度ギガントの壁か……タンデムの港か……」

「ああ……お前ならどうする？」

「そうだな……タンデムの港は岸まで深い海が続いている……潜入は楽だろう……俺ならこっちな？」

「わかった……そうしよう」

「付き合うぜ……相棒」

「ああ…頼む…」

最強の二人は不適に笑い合うのだった…。

ウオータイム

ムラクの進言でトオル率いる第5小隊とムラク率いる第6小隊がタンデムの港に配備されタンデムの港の戦力は全17小隊、51機のLBXが配備され過剰とも言える戦力が投入されていた。

「さすがに多すぎないか？」

「それだけ司令は重く考えているのだろう…」

トオルが少々あきれているとムラクが静かに答える…：すると北側を守備していた小隊から通信が入る。

「緊急事態発生！至急増援を送ってくれ！」

「こちら第5小隊の神風トオル…なんだ？状況を報告しろ！」

「バンデットと思われる機体と遭遇！現在応戦中ですがこちらの部隊はほぼ殲滅！至急増援を…：う、うわああああ！」

「クソツ！付近の部隊は直ちに北側に向かえ！各防衛地点は最低限の戦力を置いて行けよ！俺も行く！」

「待て…：俺も行く…」

「わかった…：ノイン達はフラッグを頼む」

「了解した…：バネツサ、ミハエル行くぞ！」

「わかったぜ！」

「行くのか！」

トオルが素早く指示を飛ばすとムラクと共に北側に向かうとロスとしたロシウスの機体で溢れていた。

「クソツ！状況は最悪だ！」

「トオル…行くぞ！」

「わかってるよ！」

バンデットと思われる機体は前回トオルが出くわしたストライダーフレームのキャリパーとブラウラーのゴールドがそれぞれ三機ずついた。

チエーンソー腕のゴールドがトオルのツールギスに襲いかかるが

トオルは紙一重で避けると左のテンペストでコアボックスを貫く

「なめんじゃねえ！」

するとゴルドーの爆煙からキャリパーが襲いかかり不意を突かれたトオルは避けようとするがその前にムラクのガウンタ・イゼルファアが蹴り飛ばす。

「トオル！大丈夫か！」

「すまないムラク！」

「行くぞ…合わせる！」

ムラクの言葉にトオルはニヤリと笑うと返事をする。

「おうよ！」

トオルはトールギスを上昇させるとドーバーガンで地面を撃ち周囲に煙を発生させムラクは煙に紛れる…そしてムラクは煙を使つてゴルドーに接近するがゴルドーもバカではない…すぐに応戦しようとするがムラクは攻撃せず煙の中に隠れその煙の中からドーバーガンの強力なビームがゴルドーを襲い爆発する

その様子を近くの最後のゴルドーが見ているといつの間にか後ろにいたムラクのガウンタ・イゼルファアに両断される。

「腕がなまっていなくて幸いだ…トオル」

「お前もな…ムラク」

ロシウスに絶望を与えていたバンデットが一瞬で三機も落とした最強の二人はその場にいた者にとってまさに希望だった…しかし残ったキャリパーはその場からいつの間にか居なくなっていた。

「逃げられたか…各残存小隊は臨時小隊を作つてフラッグに向かえ！ムラク、追撃するぞ！」

「わかった…行くぞ！」

ムラクはトールギスの背中のガウンタ・イゼルファアを乗せるとトオルは全速力で反応がある所に向かうとジェノックとバンデットが戦闘していた。

「瀬名アラタ……」

「ムラク因縁の相手か…」

トオルが瀬名アラタと思われる機体を見ているとムラクが背中か

ら飛び降りキャリパーをブレイクオーバーさせ近くにいたりリーダーらしき大鎌のLBXに斬りかかるところでサイレンが鳴り響く。

(終了時間となりました…本日のウォータイム…終了します…)

—————

ウォータイムが終了しトオル達は下校していた。

「またバンデットかよ……」

「ですが…前回いたLBXは居ませんでした…しかしその代わりに大鎌のLBXがいました…完全にワンオフ機ですね…」

トオルの眩きにワーカーが詳しくバンデットの戦力を分析する

「51機中残存がたったの20機か……」

「だいぶやられたな…ホントに嫌気がさすぜ……」

ノインとバネツサもバンデットの行為に憤りを感じていた。

「しかし一体何が目的なんすかね？ムラクさん」

「わからない……だが倒すべき壁だと言うことは変わらない…」

ムラクの言葉に全員がうなずくのだった。

第十戦 「タンデムの港防衛戦 後半」

「雨か…」

トオルは教室の窓から大量に降り始める雨を見ながら呟くと

「だああああー！」

バネツサが雨に濡れたのかびしょ濡れで教室に滑り込んできた。

「急に雨が降ってくるから慌てたぜ」

「寝坊さえしなければ良かったのにね…」

バネツサが自分の席に倒れこむとミハエルが突っ込むとバネツサが言い返す。

「仕方ないだろ、ノインが起こしてくれないんだから」

「ほう……いい度胸だな…バネツサ」

バネツサの後ろに腕を組んだノインが仁王立ちで立っていた。

「え……」

「一体いつまで私が起こしても起きない癖にどう思えばそんな事が言えるんだ…そもそもいつも寝坊ばかり、3ヶ月前だって私が一緒に遅刻しそうになったのを忘れたのか…しばらくほっとけば直ると思つたらこのようなザマだ……そもそも」

「ノインそろそろ止めてやれ……」

「バネツサ死んでるよ」

ノインの言葉にバネツサのヒットポイントがマイナスに突入していくのを見てムラクとトオルが苦笑いしながらノインを止めたのだった。

—————

ウオータイム直前

「では現在の状況を説明します…カゲト」

「わかったよ…現在はムラクさんとトオルさんはジェノックの小隊とバンデットと遭遇していたんですけど現在バンデット確認できてないっす…そしてもう一つのジェノックの小隊はフラッグに接近して

ますがここはうちの部隊が食い止めてます」

ワーカーとカゲトの説明にトオルが質問をなげる。

「つまりバンデットはいつでもどこで出現してもおかしくないんだな…」

「そうです…つまりフラッグの所にも出現する可能性も十分高いのでノイン達はバンデットの事も頭に入れといってくれ」

「わかった…これ以上ロストが増えると困るからな…」

ワーカーの注意にノイン、ミハエル、バネツサは真剣な表情でうなずく…

「カゲト、ワーカーありがとう…トオル…行くぞ…」

「了解」

ムラクはそう言うのとコントロールポットルームに向かいトオルたちもそれに続くのだった。

—————

(5……4……3……2……1……ウォータイム開始)

ウォータイム開始と同時にジェノツクの新型三機は物影に身を潜めトオルはムラクの所に降りると背中を合わせて周囲を警戒する。

「ワーカー、反応は？」

「わかりません…ステルス性が良いのか…本当にレーダー圏外に脱出したのか…」

「恐らくは前者だろう…」

「同感だ…ムラク…ツ！」

トオルは突然ジェノツクのバル・スパロスが襲いかかるのを見て咄嗟にテンペストで受け弾くとムラクが後ろから蹴り飛ばす。

「こいつ正気か!？」

トオルはバル・スパロスの行動に驚いた…ムラクとトオル…つまり学園の二強が揃っている時に襲ってくるのはこれまで先程のバンデット以外は居なかったからである、それにこのバル・スパロスは攻撃がメチャクチャだった。

バル・スパロスが吹き飛ばすと他の新型二機も支援のために出てきて攻撃体制に入る。

「おー来るか!」

「すまないトオル……」

「わかってるさ……白のやつ以外は俺に任せろ……」

「すまない……」

トオルはバル・スパロスにスーパーバーニアを使って距離を一瞬で0にし蹴り飛ばし壁に叩きつけるとドバーガンでバル・スパロスを撃ちまくる……すると横から緑色のオーヴェインがガウンタから奪ったのであろうライフルで攻撃してくる、予定通り二機がトオルに引き寄せられたのを見てムラクは

「ギガントの壁の借りを帰させてもらおうぞ……」

そう呟くと自身の愛機であるガウンタ・イゼルファアを瀬名アラタが乗っているであろうドットトファイサーに突撃させるのだった。

—————

その頃フラッグ付近はバンデットに痛手を受けた小隊が合流しジェノツクの小隊を包囲しているのをフラッグのあるコンテナの上でノインとバネツサが見ているとトオルが通信を送ってきた。

「すまん、一機そっちに行つた」

「気にするな……実際ムラクの決闘の邪魔にならなかつたから見逃したろ……」

「アハハ……」

ノインの指摘にトオルは苦笑いしながら通信を切る。

「まったく……仕方がないやつだな……」

「いいじゃないかノイン……誰が来ようとここは守って見せる……」

「そっだよ……」

バネツサとミハエルの答えにノインは小さく笑っていると突然襲いかかったバル・スパロスによってガウンタが一機ブレイクオーバーする。

「来たか……バネツサ！ミハエル！」

「おう！」

「了解！」

ノインはバネツサとミハエルを呼びバル・スパロスに斬りかかるとバル・スパロスが風魔小太刀で受けるが横からバネツサが蹴り飛ばし

ミハエルのランチャーで追撃する。

「フツ…大したことない…」

バネツサが呟く通り三人の攻撃に防戦一方のバル・スパロスそしてミハエルがランチャーを向けて

「止めだ！」

発射するとバル・スパロスが紙一重で避けるとノイン達はあまりの変わりように驚いているとミハエルが吹き飛ばされるのを見てバネツサも迎撃するが圧倒される。

「クソッ！」

「バネツサ！ミハエル！合わせろ！」

ノインはバネツサを影にして急接近すると切り結び激しく斬り合い大きく後退し再度突撃する、バル・スパロスが迎撃しようと攻撃するがノインはバル・スパロスを大きく飛び越えるとノインの後ろからいつの間にかいたバネツサがバル・スパロスを斬るとさらに後ろにいたミハエルがランチャーをほぼゼロ距離で撃ち込む。

「よしー！」

ノインが喜ぶとフラッグを守っていたガウンタがバンデットのキャリパーにコアボックスを貫かれる。

「バンデット！」

ミハエルはバンデットの突然の出現に驚いた。

「……………」

その頃トオルはオーヴェインと戦闘をしながらもムラクとアラタの戦闘を観戦していると大鎌のLBXがムラクの後ろから接近していたのを見て

「ムラク！危ない！」

ムラクのガウンタイゼルファアを突き飛ばすとシールドで受け止めるがそのまま肩の装甲が持つていかれた。

「クソッ！」

「トオル！大丈夫か！」

「なんとかな…」

損傷したトオルに駆け寄るムラク、その間にバンデットはいつの間

にか居なくなっていた…。

「トオル……」

「わかってるよ……」

トオルは現在の残った戦力とこの後もバンデットの出現が高いこの状況でトオルは苦渋の決断を下した。

「総員……撤退しろ……」

「何故だ！ 私たちは！」

すぐにノインが反論の通信をするがトオルの顔を見て黙る…。

「屈辱は…二度も口にしない！」

トオルの言葉に残存のロシウス機が撤退して行くのを見届けると自身もジエノックの新型を見て撤退するのだった。

「……………」

「なぜタンデムの港を明け渡した！」

司令室でタンデムの港の防衛戦に参加していた小隊の前にムラクとトオルが立っており司令のクロスキーが二人を問い詰めていた。

「これ以上の戦力ダウンはロシウス全土の損害だと考えたからです…」

「ムラクと同じくこれ以上は無駄だと判断しました…」

「戦力などいくらでも補充できる！だが拠点を失うことで…戦況に大きな影響を与えるのだぞ！」

クロスキーの生徒を駒としか考えない言い方に二人は顔を歪めるのだった。

第十一戦「リーブラ」

「すまない……トオル……」

「気にするなよ……ムラク……」

司令室で怒られた後ムラクとトオル達はスワン荘の帰路についていた。

「しかしあの大鎌のLBXといいあの大型ライフルを持ったLBXといい……バンデットはどれだけ持っているんだ……」

「分からない……例えばラボでこつそり作っても記録が残るし……なあ……カゲト?」

「そうだな……それにあのコアボックスを貫くやり方……なにか意味があるのかもしれない……」

ノインの呟きに二人のメカニックはただ疑問を増やすだけだった。

「しかし凄かったよ……あのクナイを持ったLBXは……」

「ああ……確か星原ヒカルってやつだったな……」

「へえ……なんで知ってんの?」

ミハエルの感想にバネツサが答えるとトオルが珍しそうな顔でバネツサを見る、それはみんなも同じだったようでムラクさえも顔を向けていた。

「ああ……ムラクに傷を負わせたんだ……気になるさ……それで調べたんだよ……気になったらすぐ調べるのが基本だろ?」

「それはトオルの言葉だろ……」

バネツサがあまりにもどや顔で言うのでムラクが珍しく突っ込んだ。

「……明日は竜巻が来るな……」

「ああ……私も同感だ……」

二人の珍しい光景にトオルとノインが呟きそれにムラクとバネツサ以外の全員が心でうなずくのだった……

次の日いつも通り早くにスワン荘を出ようとすると後ろから怒鳴り声のような大きな声がトオルを呼び止める。

「おう！トオルか！久しぶりだな!!」

「うげっ…グレゴリー先輩……」

後ろから首を締め上げるように腕を肩に乗せたグレゴリーはトオルが苦しむのに気づかず話を続ける。

「最近調子が悪いと聞いて気になっていたんだがな」

「先輩……トオルが死にかけてます……」

「おお！すまん！」

ノインがグレゴリーに警告するとグレゴリーは気づいたように腕を離す。

「ゴホッ！ゴホッ！…オウエエエエ……」

「たいちよよよよ！」

トオルが倒れて朝ごはんを戻す勢いで空気を胃から吐き出すのを見てワーカーが急いでバケツを用意する。

「それで……なんのご用でしょうか…先輩」

「ああ！さっき言った事もあるが昨日俺にジェノック進行作戦の指揮を執れと言われたからな」

「ではエンジェルピースに？」

「ああ……しかし知っていると思うが俺は建設中の移動型メガフロート要塞“リーブラ”の防衛も兼任している……それでトオルにリーブラの防衛をしてもらいたい……」

「リーブラの防衛ですか？」

「ああ……どうだろう？」

「わかりました…がんばります……」

「おう！頼むぞ！トオル！」

「グハッ！」

トオルの答えに満足したグレゴリーは背中を叩いてスワン荘から出ていく…トオルに甚大なダメージを与えて。

昼休みにムラクとトオル達は司令官のクロススキーに小言を言われていた。

「まったく…バンデットののような連中に翻弄されタンデムの港をジェノックに明け渡すとは…バイオレットデビル、ライトニング・カウントの名にあるまじき失態だな…覚悟は出来ておろうな…ムラク、トオル」

「はい……」

ムラクとトオルの返事を聞くとクロススキーはスクリーンに勢力図を写し出し話し始める。

「タンデムの港を制圧したジェノックはここを拠点に海洋輸送路を構築勢力を拡充させつつ進行し領土拡大を狙うだろう…しかし小国であるジェノックは相対的に守りが薄くなる…そこでジェノックの本土を叩く…第6小隊…貴様らは沿岸要塞エンジェルピースに赴き守備隊長アンドレアス・グレゴリーの指揮下に入れ……」

「了解しました…しかし第5小隊は？」

ムラクの問いにクロススキーは勢力図を太平洋オーストラリア付近に移動させその海上にある要塞を写し出し説明を始める。

「我々が現在建設中の移動型メガフロート要塞だ…これが完成すればアラビスタや最近調子に乗っているハーネスすら叩き潰せるだろう…これもグレゴリーが守備していたがジェノック進行作戦によりしばらくエンジェルピースにいることになる…グレゴリーの推薦により第5小隊が守備の指揮を執れ……」

「第5小隊神風トオル……拝命します……」

「よし……では頼むぞ…以上だ…では行け……」

「了解」

クロススキーの言葉で司令室を後にしたムラク達は廊下を歩きながら話す。

「グレゴリー先輩の指名とは…知り合いなのか？」

「まあな…俺が入学したばかりの時先輩に鍛えてもらったからな」

「そうなのか…」

「ああ…少しでも強くならんと認めて貰えなかったから…」

ムラクとトオルの会話を聞いてノインとワーカーが少しだけ申し訳なさそうな顔をするのだった。

――
そしてウオータイム

今回トオル率いる第5小隊が守備を担当する移動型メガフロート要塞”リーブラ”は文字通り移動できる海上要塞である周りには多数の対空砲が設置されクラフトキャリアの発着場も完備ブリッジはまるで城塞のような造りでもし上陸されても対応できるようになっているのである、そして最大の特徴は主砲の超大型試作ビーム砲である。

「しかしでかいですね〜」

今回はクラフトキャリアがいらないのでワーカーも自身のグレイリオで出撃してリーブラの巨大さにしたを巻いていた。

「まあロシウスの攻撃の要になる要塞だからな…」

「だがアラビスタが何度も来ているようだぞ…」

「だからこそ俺達なんだろう…」

「しかしハーネスはまだ一度も来ていませんが…」

トオルとノインが話しているとワーカーが疑問を浮かべるとトオルは少し楽しそうに、ノインは少し顔をしかめる。

「ハーネスか…」

「なかなか因縁のある国だな…ハーネスは」

「まあな…だが面白い国でもある…」

三人が話しているとオペレーターから通信が入る

「トオル隊長…巨大な魚雷のような物がこちらに接近中です…」

「対海砲撃は出来ないのか？」

「はい…まだ調整が整っておりません…」

「なら付近の小隊に対応させる…それと第一種戦闘配置より第二種戦闘態勢に移行、対空砲及び主砲を起動させる…」

「了解しました…」

トオルが指示を飛ばすと付近にいた小隊がランチャーをその魚雷に向けて撃つのを確認してクラフトキャリアが来ないかと空を見上

げた瞬間迎撃にあたっていた小隊から悲鳴が聞こえた。

「な！なんだ！ウワァ！」

迎撃にあたっていたグレイリオが見たのは海中から出てきたクラフトキャリアだったそのグレイリオはクラフトキャリアに体当たりされブレイクオーバーする他の小隊のガウンタとグレイリオも続々出てくるクラフトキャリアに体当たりされブレイクオーバーしていくのだった。

「ハーネスの襲撃だ！」

「迎撃だ！迎撃するんだ！」

ロシウスの小隊が襲撃してきたハーネスに向かい迎撃するが三機の新型、ドットフェイサー、バル・スパロス、オーヴェインとハーネスの手慣れた攻撃により次々とブレイクオーバーされる：しかしロシウスの生徒もバカではない建造用の資材をバリケードに使い撃ちまくり一進一退の状況になっていた。

「ノイン、ワーカー……頼む……」

「了解！」

「二個小隊！私に続け！」

「支援します！」

ノインは護衛の二個小隊を連れてハーネスのセイレーンの小隊に突っ込み分断すると一個小隊が二機を相手にし残り一機をノインともう片方の一個小隊で囲む。

「卑怯だろうがなんだろうがやらせてもらおうぞ！」

「行かせていただく！」

ノインとワーカーの加勢で状況が均衡するかと思われたがノインとワーカーの前には黒いバル・スパロスと白いオーヴェインを駆る乾カゲトラ、無敵ギンジロウが立ちふさがる。

「行くぞ！」

「ハッハッハッ！ブレイクオーバーしたい奴から俺の前に並びやがれ！」

ギンジロウが放ったオーハンマーをワーカーはランチャーの持ち手で防ぐがかさず来た二撃目でランチャーを手放してしまう素手

になったワーカーにギンジロウはオーハンマーで吹き飛ばすとワーカーは壁に叩きつけられる。

「クソッ！後の兵士の為にも……ここで負けるわけにはいかない！」

「ハッハッ！やりがいがあるぜ！」

ワーカーはそう叫ぶと近くでブレイクオーバーしたガウンタのソルジャーサーベルを持ってギンジロウのオーヴェインに突撃する。

そしてノインとカゲトラも激しく斬りあっていった、ノインの絶妙な剣さばきで小太刀特有の手数の多さを防ぎつつ反撃するがカゲトラも高い機動力を最大限に利用して避け反撃する。

「ええい！」

ノインは大型シールドをカゲトラに投げつけると大きく後退して落ちていたソルジャーサーベルを取ると二刀流になるとバル・スパロスに突撃し攻撃速度をさらに上げる。

「これ以上トオルの顔に泥を塗るわけにはいかないのだ！」

「俺にも負けられない理由がある！」

カゲトラからもノインの気合いが伝わっていたが彼にも隊長として負けられない意地があった。

「……」

そしてその頃カゲトラに危機を救って貰った第3小隊のオトヒメ率いるセイレーンがリーブラのコントロールセンターの扉の鍵を解除し扉が開くのを待っていた。

「流石はジ……ではなくドルドキンス様、ハッキングも素晴らしいですわ〜」

第3小隊隊長の白小路オトヒメがややテンション高めで扉が開くの間を見ているがその姿には油断がなく部下のスイとシェリーもお互いの得物を構えている中、扉がLBX一機分開くとそこに影があるのを知覚したオトヒメは槍を構えるが遅かった……。

「な、なんですか!?!」

一瞬にして両腕が斬り飛ばされたのである。

「な、なんなの!?!」

「僕がガードするシェリーは……」

突然の事態に冷静に対処しようとするスイの目の前で高速で移動した敵に吹き飛ばされブレイクオーバーするシェリーのセイレーンがいた。

一瞬で二機を潰した機体を見てスイは恐怖に震える。

「ら……ライトニング・カウント………」

――

事務的にセイレーンを沈黙させたトオルは

「来い……俺はここにいて……スズネ」

そう呟くとトオルの耳に独特の走行音が聞こえたキヤタピラではなくホバーでもない車のようにタイヤで走行する音……間違いなくドットフェイサーの走行音だった……そして振り向いた先に居たのは青いドットフェイサー。

「首洗って待ってたかいな！トオル！」

「スズネ……」

そう呟いたトオルとスズネはお互い笑い武器を構える。

（終了時間となりました……ウォータイムを終了します……）

第十二戦「決着」

「時間切れか…」

トオルがモニターが緑色になったコントロールポットで大きくため息をつきながらバイザーを外すとコントロールポットを降りてノインとワーカーを迎えに行く。

「トオルか……」

「隊長……」

「どうだ？そつちは？」

トオルに気づいたノインとワーカーは疲れているのか元気なくトオルを呼ぶとトオルの質問に答える。

「少し疲れた…あのバル・スパロス……手強い」

「こちらも新型一機で精一杯です…」

「そうか……他の小隊は守備隊に任せるしかないか…」

「そちらにも来ていたのか…」

「ムラク……」

トオルが考えていると後ろからエンジェルピースに赴いたムラク達がいいた。

「そちら」にも」か……どうやらお互い因縁の決着がつきそうだな…」

「そうだな…」

トオルがニヤリと笑うとそれにつられてムラクを微かに笑うのだった…。

—————

そして次の日のウォータイム直前（飛ばしました）バネツサがトオルの頭を小突く。

「いたーなんだよ…バネツサ」

「勝つてこいよ…」

バネツサの真剣な表情にトオルは面を食らうがすぐに笑うとバ

ネツサの頭を撫でながら

「ありがとう…行ってくる…」

そう言うのとトオルは自分のコントロールポットに向かって軽く手を降りながら向かうのを見ているバネツサにノインが近づき

「トオルってたまにキザな事やるよな…あれが無意識だから余計にたちが悪い…」

「ノ、ノイン！」

顔を真っ赤にしているバネツサをからかうのだった…。

……

コントロールポットに乗り込んだトオルはノインとワーカーに通信を繋げると

「ノイン、ワーカー頼むわ…」

「わかっているさ…」

「了解です！お任せください！」

トオルは仲間の頼もしい言葉に思わず笑みをするのだった…。

(5……4……3……2……1……ウォータイム開始)

開始のアナウンスと共に目の前にドットファイサーが表現れてお互い構え合った状態でにらみ合う。

「フツ…そうだな…我々にはキャノンもライフも必要ない…お互いを認め合い戦う…それがLBXバトルだ……」

するとトオルはトールギスの肩につけていたドーバーガンを切り離しビームサーベルとヒートランス“テンペスト”を構える、スズネもゼットソードを構える。

「ウチは待つとつたで！こうやって戦うのを！」

「ああ……これほど心が踊るのは久しぶりだ！」

二人は楽しそうに叫ぶとどちらも機体を加速させて突っ込みお互いの得物を振るいすれ違うい体勢を立て直して再び突っ込むと今度は激しくつばぜり合いが起きる。

「エエで！エエで！楽しいでトオル！」

「そうだな……だが負けるわけにはいかない！」

「ウチも負けへんでな！」

二人の気持ちは昂るように戦闘がどんどん激しくなってきた。ギリギリの攻防ミリ単位の世界であった……しかし均衡と言うものは崩れるものである。トオルがスズネの一瞬の隙を突いて左腕をもぎ取ろうとするが避けられ肩のアーマーが斬り飛ばされる、しかしスズネも黙っていない。シールドでトオルを殴り蹴り飛ばすがトオルはスーパーバーニアで体勢を立て直すと正面を見るがスズネのドットフェイサーがいない。

「ッ！上か！」

「ていやあああ!!」《セットアップ！セットハンマー！》

いつの間にかゼットハンマーに切り替えていたスズネが上からハンマーを振り降ろすとトオルはシールドで受けるが重力も味方にしたハンマーの威力はバカにならずシールドにヒビが入る。

「クソッ！」

「まだまだ！これからやで！」《セットアップ！セットソード！》

スズネは着地と同時に足のタイヤを高速回転させ回りながらランスに切り替えるとシールドに止めを刺すとシールドは砕け散るがトオルは残ったテンペストでスズネのシールドを溶断するとそのまま突き刺そうとテンペストで仕掛けるがスズネは体に当たる前に空いた左腕を自らテンペストに突き刺しトオルの動きを止めるとそのまま左腕を斬り飛ばす。

「左腕を自ら犠牲にするなんて！」

トオルは驚くがそれも一瞬の事、スズネの右腕を蹴り飛ばすと今度はビームサーベルで突き刺すが今度は足の爪先で止められる。

「ッ！」

二度目に流石に驚きを隠せないトオル、スズネはその隙に近くに落ちていたテンペストを拾い上げ足でビームサーベルを蹴り飛ばす、トオルも後ろにあったゼットソードを拾い上げると距離を取り再び構え合う。

その頃ノインたちも最後の山場を向えていた、全身から火花を出しブレイクオーバー寸前だった……

「これで決める！」

ノインとカゲトラの声が重なりお互いが技を繰り出す。

《アタックファンクション！蒼拳乱撃！》

《アタックファンクション！コスモスラッシュ！》

前者がカゲトラ、後者がノインである青いエネルギーがぶつかり合い相殺するがノインの目の前にはカゲトラが投げたバル・スパロスの風魔手裏剣が…

「なにっ！だがただではやられん！」

ノインは避けれずに吹き飛ばされるノインはブレイクオーバー寸前に持っていた剣を投げつけ無理に手裏剣を投げたカゲトラも避けれずにお互いがほぼ同時にブレイクオーバーしたのだった…。

(トオル……後は頼む…)

ワーカーもブレイクオーバー寸前の機体で特攻していくがギンジロウの振るうオーハンマーに肩辺りに直撃させられる

「ハハッ！残念だったな！」

「まだまだああああ！」

ワーカーは持っていたランチャーを発射せずにそのままギンジロウにぶつけると自分ごと爆発しお互いがブレイクオーバーになる。

(隊長……頼みましたよ)

二人がトオルの事を心配する中、トオルは満身創痍の機体でスズネと睨み合っていた

トオルはこの時なんとも言えない満足感に満たされていた…セカンドワールドの真実を知ってからと言うものこれほど満ち足りたバトルは久しぶりだったからである……できれば終わらせたくない…と思ってしまうが同時に決着を着けたいとも思っていた。

「ふう〜」

トオルは息を吐き出し思考をクリアにする、お互い満身創痍の一撃で決まるのは目に見えている”負けたくない”久しぶりの感情に胸を高鳴らせ拾ったゼットソードを構えるとトオルはスーパーバーニアで一気に加速するとスズネも加速させる

「うおおおおお!!」

「でやああああ!!」

トオルはゼットソードで突くがスズネは地面にテンペストを突いてトオルを通り越しトオルが振り返ると腹部にテンペストが貫通する

「クツッ…まだまだ!」

トオルはゼットソードを逆手に持つとスズネの肩に深々と突き刺すと二機とも青白く光りブレイクオーバーするのだった。

「ふう〜」

トオルは疲れたように背もたれにもたれると満ち足りた顔で笑うのだった。

—————

その後のハーネス対ロシウスの戦いはお互いの主力を失いつつ戦いロシウスがなんとか撃退したのだった…しかしリーブラの損害は酷く完成はもつと先になりそうだった…。

—————

ウォータイムが終わり全員が帰路に着くなかトオルとスズネは屋上にいた。

「すまんな…呼び出して…」

「なんや?話して?」

「ありがとう…」

「ん?」

トオルの突然の言葉に首をかしげるがトオルは気にせず話を続ける。

「楽しかった…これほど満ち足りたバトルは久しぶりだった…」

「エエって〜ウチも楽しかったで」

「スズネは楽しいか?セカンドワールドの戦いは…」

「?…楽しいで、だってウチはLBXを上手くなるために来たんやから楽しまなあかんやろ?」

「そうか…忘れるなよ…その気持ち」

「え?」

「この学園に染まるなよ…」

そう言つてトオルは屋上を後にする、そんなトオルの姿にスズネは

ただ見送ることしかできなかつた…。

「……………」
スズネと話を終えたトオルは脇道に入ろうとするとムラクと会った

「よっ！お前も話してきたのか？」

「ああ………」

「どうだった？」

「何を言っていると言われたよ……」

「だろうな……」

二人が話ながら脇道に入るとサングラスの男が話しかけてきた、その男を見ると若干ムラクとトオルは目を細める。

「こんな事をしていたら本国の信頼を失うぞ……」

「戦いに絶対はない……」

「こちらが渡しているチップを使っているんだらうな……」

「相手の新兵器が予想外だったのだ……」

「言い訳はするな！これが新しいチップだ……次は結果を出せ……」

そう言つてサングラスの男が物陰に隠れて去つていくとムラクが渡されたチップを踏みつけて悔しそうに顔を歪めるのをトオルは黙って見ていたのだつた。

第十三戦 「トールギス」

「よっ！」

「トオルか……」

登校していたムラクの肩を後ろから叩くトオルを見てムラクは歩を少しゆっくりにする。

「今日は風当たりが強いだろうな」

「そうだな…カゲトたちには迷惑をかけるだろうな…」

「たくっ……無愛想の癖にお優しいんだから…」

「悪いか？」

明らかに口がへの字になっているムラクを見てトオルは笑っていると歩いている先に噂の瀬名アラタと第1小隊がいた。

「あの瀬名さん！サイン下さい！」

クルセイドと思われるオレンジ色の制服を着た女子生徒がアラタではなく星原ヒカルに色紙を向けていたのだった。

「クッ……」

その光景にトオルは思わず笑いそうになるがなんとか堪えると気づかれないように素通りして下駄箱まで行くと小さく笑いながらムラクに話しかける。

「まあ…確かにアイツはイケメンだから仕方ないっちゃ仕方ないが笑える！」

「全く…いつまでに笑っている行くぞ…」

ムラクはいつもの無表情でさっさと行くがトオルは見逃さないムラクの肩が小刻みに震えていることに。

そうして楽しく登校してきた二人だがロシウスの教室らへんで表情を固くしながら教室に入ると騒がしかった教室は一斉に静かになりトオルとムラクに視線が集中すると見ていた生徒の一人が大きな声で言う。

「あくあくどこかの誰かさんたちのせいでロシウスの面子は丸潰れ」

「どこに行ってもジェノック、ハーネス」

悪口の中バネツサたちが二人に駆け寄り話しかける。

「あんなの無視しとけばいいっす」

「カゲトの言う通りだ」

「惨めな思いをさせてすまない…」

カゲトとノインの言葉にムラクは謝罪の言葉を述べるがみんなは笑顔で

「なに言ってるんだよムラク」

「僕たちはどこまでもついていくさ…」

「そうですよ…ムラクさんと隊長は我々の誇りです！」

「バネツサ…ミハエル…ワーカー…すまないな…」

トオルもみんなの言葉に感謝し素直に礼を言うのだった。

—————

そして昼休みはムラク達と全員で昼食を食べていた。

「で？トールギスの修復はいつまでかかる？」

「ええつと…かなり酷かったですから…一週間くらいは…」

「そんなに酷かったのか？」

トオルの問いにワーカーが答えるとカゲトが驚きながらカレーを食べる。

「ああ…左腕は丸ごと持っていかれたしスパーバーニアもフル稼働を何回も繰り返したせいでオーバーホールしなきゃいけない…腹部は大破……間接は全てが悲鳴を挙げていた…」

「トールギスがトオルの操縦についていけなかったと言いう事か…」

「たぶんそうですよ…ムラクさん…」

うどんを食べながらムラクが冷静に分析するとバネツサが感慨深そうに言う

「最初は振り回されてたのにな…」

「それは否定しない…これ程じゃじゃ馬なLBXは無かったよ…」

「そうだったのか？」

「ああ…ムラクはまだ居なかったっけ？」

—————

遡ること数ヶ月前：

試作型トールギスが完成したとき全員が驚いていた中世の騎士を沸騰させるデザインとその驚異的な性能は魅力的だった。

「まだ本格的な試験はしていませんが：スペック上は機動力はガウンタの1.5倍、装甲は3倍が妥当でしょうね！」

誇らしげに言うワーカーを尻目にみんながトールギスに見惚れていた。

「格好いいですね！隊長！」

同時部下だったオットーが一番喜んでいた。

—————

そしてウォータイムにてエルダーシティで試験を行うことになった：トオルはワーカーの指示通りに複雑なビル郡を避けながら飛行テストをしていた。

「どうですか？調子は？」

ビルの上で観測していたオットーがトオルに聞くとトオルはトールギスのスピードに驚きつつも答える。

「ああ……いい感じだが慣れるのには少しかかりそうだな……」

「余り無理をするなよ……良い機体とは言え試験型だ……不調が必ずあるからな……」

「失礼だな！ノイン！理論上は問題ない！」

「机上の空想と言うのを知っているかワーカー？」

ノインとワーカーのやり取りを聞きながらトオルは

「最高速度を見させて貰うぞ……」

そう言つてスロットルを全開にすると世界が変わるかのよう景色が一瞬で移動するのを感じ取ったトオルはすぐに速度を緩めた。

「どうしました？」

オットーがその様子を見て疑問に思うがトオルが答える前にウォータイム終了のサイレンが鳴り響くのがあった。

—————

「どうしました？」

ウォータイム終了後オットーはトオルに先程の事を聞くとトオル

は

「いや……少し驚いたただけだ……余りにも早かったから……」

「そうですか……」

「だが……何かしらの違和感があったのも事実だ……」

そう呟きながら眉に紫波を寄せながら歩くトオルを見て三人は

「おい……ワーカー」

「わかってるよ……ちよつと調べてみる」

「だから言ったら……試作型だつて」

「ノイン……マジで黙って……」

試作型（製作者否定） トールギスの再テストが行われる事が決定したのだった。

――

ロシウスのスワン荘の娯楽室でトオル操縦しノインが相手取りテストをしていたが

「どうですか？違和感は？」

「無いな……やっぱりフル稼働の時か……」

オットーの問いにトオルが不思議に思っているらしく上手く言葉にしない

「うゝん何も無いなゝ」

トールギスにコードを繋げた端末を操作しながら検査するがどこにも以上が見つからなかった。

「ここで全速力で動けないからな……」

ノインもそれを見て前髪を弄りながら考えるが答えが出るはずもなくこの日は終わるのだった。

――

次の日ウオータイムの出撃許可も降りずに下校していたノインとワーカーは

「あれ？隊長は？」

「知らないな……オットーも居ない……」

そう話している頃トオルとオットーはトールギスを持って高等部の教室に行っていた。

「失礼します…トオルです」

「オットーです」

「おお！来たか！トオル！」

野太い声が二人の耳を襲うが二人は馴れているようで普通に返事を
をする。

「どうもです、グレゴリー先輩」

「どうも…」

「それは…新しい機体か！という事は打ち解けたか！」

トオルの境遇を何かと心配してくれた先輩にトオルは感謝しお願
いをする。

「先輩、また教えてもらいたいのですが」

その後トオルはグレゴリー指導の元ツールギスを扱っていったの
だった。

「って感じだ……」

「なるほど……その後に俺が来たと言うことか…」

トオルはすっかり冷めてしまった天ぷらうどんを食べようとす
ると

「んっ？」

乗ってるはずの無傷のかき揚げが半分消えていた……そしてトオ
ルは迷わず隣にいたバネツサを見ると背を向けて顔が地味に動いて
いる。

「……」

「……」

沈黙が続くとトオルはバネツサの肩を持ちこつちを向かせると
頬っぺたを引っ張る。

「いひゃい！いひゃい！（痛い！痛い！）」

「今日はキツネうどんの気分じゃなかったのか？」

「ひゃっっておひひほうひゃったから（だって美味しそうだったから）」

「人のを許可なく食べるな！」

「とひよるだひえだもん！（トオルだけだもん！）」

「ちよつとどや顔になるな！」

「いひやい！いひやい！」

(ちよつと可愛いかも)

そう頭の片隅で思ったトオルはしばらくバネツサで遊ぶのだった。

(端から見ればバカツプルにしか見えんな…)

(やつぱりバネツサはトオルといるとさらに生き生きしてるな…)

(いいなあ〜そういうの欲しいなあ〜)

(俺も…)

(バネツサの転属届けを出してみようか…)

ノイン、ミハエル、ワーカー、カゲト、ムラクの順である、その後本気で転属届けを出そうとしていたムラクを全力でバネツサが止めたのはまた別の話である。

第十四戦 「嫌な予感」

「ロシウス第5小隊隊長……神風トオル入ります……」

「同じく第6小隊隊長……法条ムラク入ります……」

トオルとムラクは学園長に呼ばれ学園長室の扉を叩く中のメタ沢に扉を開けられ室内に入ると学園長の大門ジョセフィーヌが椅子に座っており座るようにうながされる。

「かけてちょうだい……」

「こちらへどうぞだモン」

そして二人は座るとジョセフィーヌは顎を手に乗せ二人に訪ねる。

「どうしたの？ バイオレット・デビルとライトニング・カウントと恐れられている男、二人が……生彩を欠いているんじゃない？」

ジョセフィーヌの言葉に二人は黙って聞いているとジョセフィーヌは話を続ける。

「学園長としては特定の仮想国に肩入れは出来ないけれど……ムー君とトオルちゃんは学園きつての優秀な生徒だから悩みでもあれば特別に相談に乗るわよ……」

「いえ……特には……」

「ムラクに同じく特にはありません……」

二人の返事を聞くとジョセフィーヌは笑うと

「そう……最近ジェノックのアラさんとハーネスのスズネちゃんが勢いに乗って焦ってるのかと思ったから……二人とももうすぐ司令官への昇格権が貰えるから……今まで積み上げて来たシルバークレジットをムダにだけはしないようにね……」

「了解しました……失礼します……」

「失礼します……」

ジョセフィーヌの話が終わるとムラクとトオルは席を立ち学園長室を後にするのだった……

—————

そして教室ではノイン達がムラクとトオルの帰りを待っているとムラクとトオルが帰って来る。

「どうだった？」

ミハエルの問いにトオルは答える。

「最近戦績が落ちてるから悩みがあるなら聞くよってさ……」

「なんだよ！二人は頑張ってるってないって言いたいのか！」

「落ち着けバネツサ……」

ノインはバネツサを戒めるがノイン自身も納得していない様子だった。

するとミハエルが前に出て

「二人はアイツらの事……どう考えているんだ……」

「ん？」

「どうとは？」

ミハエルの突然の問いに首を傾げる二人にミハエルは話を続ける

「分かるような気がするから……」

「なに言ってるんだ？お前……」

ミハエルの突然の言葉にバネツサが思わず疑問を漏らす……隣のノインも興味深そうにミハエルを見ていた。

「僕が幼い頃の話だ……LBXバトルで僕に敵う奴なんて居なかった……ある日今まで会ったことも無い奴がいきなり挑戦してきた……そいつはとても強くて……そして……負けてしまったんだ……無敵だった僕が……だけどその後に凄くそいつと仲良くなったんだ……バトルを通じて……大切な友達を作れる……それがLBXバトルだと思う……だから……気持ち分かるけど」

ミハエルの言葉に驚きつつもムラクは窓辺に立ち静かに語りだす。

「セカンドワールドはただの巨大なジオラマじゃない……戦場だ……確かに瀬名アラタはおもしろい……だが……俺とアイツは敵どうしだ決着は着ける……」

「右に同じく……」

「そうか……それは良かった……」

トオルの答えにノインが笑いながら言うという意味が分からずにトオルは首を傾げる。

「私のはてつきりあのハーネスの女に惚れたのかと思ったのでな」

「なんだよ、それはあり」「トオル！それは本当か！」

トオルが否定しようとするバネツサがそれを遮りトオルの胸元を掴み激しく揺する。

「どうなんだ！トオル！」

「バネツサ止めろ！隊長があああ！」

その後、トオルは昼飯を吐き出さんかぎりにダメージを負い落ち着いたバネツサに看病されたのだった。

—————

次の日

ムラク達は指令室にて司令官のクロススキーにムラクが配置替えを希望していた。

「配置替え？」

「このような事を言える立場で無いことは重々承知してはおりますが……」

ムラクの言葉にクロススキーは考え込む

「デスフォレストにジェノツクの偵察部隊が飛来しこの先予想される攻撃に供え…我が軍はデスフォレストに戦力を集中させている状況ではあるが……」

「もしデスフォレストに敵が来たら我々が第6小隊が来るまで抑えませす」

トオルの言葉を聞いてクロススキーは

「良いだろう…希望の場所への転属を認めよう……」

「ありがとうございます……」

—————

転属申請を終えて帰路に着いたトオル達は純喫茶スワローに寄り話をしていた。

「まさかギガントの壁とはな……」

「ああ……一番可能性があるからな……」

トオルはコーヒーを飲みながらムラクと話していた。

「確かにギガントの壁は近いからジェノックが潰しに来るのは分かるが……」

「どうした?」

トオルが口を濁しながらコーヒーを飲むのをムラクは不思議そうに見るとトオルは

「いや……なんかイヤな予感がする……」

「イヤな予感?」

「ああ……自分でもよく分からんが……」

二人が話している時、他のみんなはそれぞれ頼んだものを飲みながら話していた。

「どうだ? トールギスは?」

「あと少しで直る……バーニアも強化したし大丈夫だと思うけど……」

「なあ……ワーカー」

「何だよ? カゲト……」

「実はムラクさんの為に新しい武器を作りたいんだが……」

「……分かった……手伝うよ……」

「ありがとうな……」

「気にするな……」

メカニック達が何とかこの状況を脱しようとしている時バネツサ、ミハエル、ノインはちよつと違うことで盛り上がっていた。

「まったくバネツサは……あんな事で取り乱すなんて」

「間違った愛情表現だね……」

「うるさいな!」

ノインとミハエルが言っているアレとは先日ノインが惚れたのかと聞いたときのバネツサの反応である。

「だって……なんか仲良くしてるし……相手可愛いし……よく笑うし……トオルカッコいいし……(省略)」

「おい……後半は惚れ気話になってるから止めろ!」

両手の人差し指をツンツンしながら若干イジケモードに突入していたバネツサをノインはバツサリ切り捨てると

「お前が素直に成らない限りトオルは絶対に落ちないぞ！言っておくがトオルは悪口言われてるけど、けっこう女子から人気なんだからな」

「まあ…成績はトップクラス、二つ名が着くほどLBX操作が上手く更に性格はよしだからな…」

一番目と最後はミハエルも当てはまっているのだが本人含め三人はまったく気づかずに話を進めるのだった。

第十五戦 「覚醒の予兆」

(5……4……3……2……1……ウオータイム開始)

ムラクが配置替をした為にトオルがデスフォレストの配置を整理、統合しているとノインが

「トオル、ギガントの壁にジエノックが奇襲したそうだ…」

「さすがムラクだな」

トオルが感心しているとワーカーが通信で

「隊長…クロスキー司令から援軍を送れとの事です」

「援軍？」

トオルはムラクの戦いを邪魔をしたくはなかったが司令からの命令でトオルは

「分かった…ノイン…少数の部隊を率いてギガントに向かえ…：俺は直接行く」

「分かった…行け…」

「すまないな…」

そう言うとトオルは一足先にワーカーによって直されたトールギスのスーパバーニアで飛びギガントの壁に向かったのだった。

—————

「もうすぐギガントの壁か…：ッ！」

トオルはトールギスでギガントの壁周辺まで来ていると突然のロックオンアラートが鳴り響きトオルは機体の進行方向を無理矢理違う方に向けると先程まで居た所に巨大なビームが通りすぎた。

「このエネルギー…奴か…」

トオルはそう呟くとその発射元を見ると予想通り以前ケアン基地で会敵したトリコロールの機体がいいたのである。

「目標を確認…：これより排除する…」

トリコロールの機体“ゼロ”は大型のライフル(ツインバスターライフル)をもう一度向けると躊躇い無く発射するがトオルもこれを避

けてドーバーガンで反撃する。

「クソッ！なんて精度だ！」

トオルは反撃して何とか近づこうと試みるがゼロの性格無慈悲な攻撃は近づく気さえ起きないほどであった。

「だが！そんな大きな得物では！」

トオルはバーニアをフル稼働させて背後にまわり込むとビームサーベルを抜き出し斬りかかる

「取り回しが悪いだろう！」

ゼロはそれを見てツインバスターライフルを捨て振り返る。

「無駄だ！サーベルが間に合う距離じゃない！」

トオルはサーベルをゼロに向けて振るうが当たる直前に肩辺りからバルカンの様なものが出てくるとトオルに向けて発射され吹き飛ばされる。

「クソッ！」

威力こそ弱いがほぼゼロ距離だったのでツールギスも多少損傷してしまう。

「やる……でも…排除する」

ゼロはビームサーベルを抜刀し斬りかかるとトオルはシールドで何とか受けるがパワーに押され地面に叩きつけられトオルはゼロを蹴り上げると腕をつかんでゼロも地面に叩きつけるとトオルは素早く起き上がりドーバーガンをゼロに撃ちまくるがゼロは背部スラスターを全開にして地面を削りながら回避するとツインバスターライフルを持って空中に上がると発射する。

「上手い！」

トオルは感嘆しながらもツールギスを上昇させるとドーバーガンを盾にして二撃目を避けるとドーバーガンは爆発しその爆煙を利用してテンペストを最大まで加熱させて突っ込むとそこにはトオルの行動を読んだゼロがツインバスターライフルの銃口を向けていた。

「ッ！殺られる！」

トオルが一瞬ロストを覚悟した時”世界が止まった”ゼロが引き金を引くのが良く見えトオルが避けようとするといつの間にかゼロ

の後ろを取っていた……しかしその謎の現象は終わり世界が動き出す……

「ッ！」

するとトオルの頭に激しい頭痛が起き思わず操縦レバーから手を離し頭を押さえる。

「……ぐう……うわああ」

ゼロは驚きつつも再度銃口をトオルに向けると背後から攻撃を受けた。

「なに……」

ゼロが振り返るとクラフトキャリアの上に乗ったロシウス勢がライフルやランチャーで攻撃をしていたのである。

「トオル！無事か！」

通信からノインの声を聞いたトオルは頭を押さえながら答える。

「ああ……何とかな……」

「次は殺す……」

ゼロはオーブン回線でそう告げると飛行形体に変形して戦闘区域から離れるのだった。

(終了時間となりました……ウォータイムを終了します)

—————

ウォータイムの終了のサイレンが鳴り響きノインとワーカーは急いでトオルの元へ向かうとコントロールドットから降りてきたトオルの顔色が悪く頭を押さえていた。

「隊長！」

「トオル！」

「……ワーカー……ノイン……か……」

その騒ぎを聞きつけムラク達も駆けつける。

「トオル！」

バネツサがトオルに駆け寄るとトオルはバネツサに倒れこむ

「バネツサ……」

「トオル！大丈夫か!？」

「バネツサ……すまないな……」

バネツサはトオルに肩を貸すとムラクが

「ノイン…何があつた？」

「分かんが…私たちが駆けつけた時にはこの状態だ…ウォータイム前は普通だったのだが…」

ノインに聞いたさすがノインもよく分からないようだった…ワーカーもまったく分からなそうなのでムラクはトオルを心配そうに見るしかなかった。

「隊長……」

「落ち着けてワーカー」

オロオロするワーカーをカゲトが落ち着かせミハエルもトオルに肩を貸すと保健室に連れて行くのだった。

「……………」

「うーん…ただの疲労だな…」

保健室の担当の日暮真尋はベットでグツタリするトオルを検査したが特に見当たらずムラク達に結果を伝える。

「なぜいきなり……疲労なんて…」

ノインは納得していないようで食い下がるが

「いい……知らない内に疲れが溜まるのは良くあることだ……」

ベットから起き上がったトオルに制される

「トオル！……大丈夫か？」

バネツサが駆け寄るがトオルは立ち上がり全員に向けて笑う。

「大丈夫だって！なんか変な感じだったか…」

「トオル……ウォータイムで何があつた？」

ムラクは突然の疲労はウォータイム中に何かあつたと見て質問した。

「……そう言えば……なんか敵のLBXが止まって見えてさ…良くわからんのだけれど…」

トオルが考えながら答えるのを聞いて日暮は目を僅かに見開く。

「止まった？」

ムラクはトオルの答えに首を傾げ考えているのか黙り始めるのを見てトオルは

「さっ！すまないな！俺なんかの為に…ウオータイムも終わったし帰るぞ！日暮先生、ありがとうございました」

「ああ……気を付けて帰れよ」

日暮の返事を聞くとトオルは全員を引き連れ帰って行った。

—————

その後、保健室には日暮を含め三人が集まっていた。

「以上が報告したかった事だ…お前達からオーバーロードの話聞いてな……言っておかねばと思った…しばらく席を外す…」

そう言つて日暮は残りの二人を残して保健室を去っていった。

「美都先生……まさかオーバーロードに目覚める生徒がいるとは…驚きましたね……」

「ええ……神風トオル…厄介ね…」

二人の人物は端末に写った生徒情報を見て考え込むのだった。

第十六戦「乱入者」

「あく何だったんだろ…昨日は……」

「むしろこちらが聞きたいわ」

ギガントの壁の二回目の防衛戦は結果だけで言えばロシウスサイドの惨敗である、しかもバイオレットデビルの法条ムラクが居たのと言うのがロシウスの精神面にも影響を与えていた……その時同時にトオルはバンデットと交戦その時トオルの身に起こった事を知っているのは指令のクロスキーとムラク達だけである。

トオルとノインが話している通り原因不明なので寮に帰った後が大変だったのである、ムラクとカゲトが氷枕持ってくるわ、ミハエルはバ○アリン持ってくるわ、ワーカーは枕持ってきて一緒に寝ると言い出すわ、一番大変だったのはバネツサであるいきなり抱きついてきて「温もりだ!」など言い出すわそのせいでバネツサの胸に顔を埋める事になり大変だった……ついでにノインはそれを離れて笑って見ているのだがノインのポケットにもノーシ○があつたのは秘密である。

「しかしバネツサはびっくりした……」

「なかなか熱い抱擁だったな……」

「うるさい!」

(バネツサ居るのにな……)

トオルとノインの話を聞いていたワーカーは視線を後ろに向けると顔を真っ赤にしたバネツサが自分の世界の片道切符を買って旅立っていた。

「しかし何だったんだ?」

「俺は医者じゃないから分からないっすけど……咄嗟に動くとき凄く疲れるみたいなのやっじゃないですか?」

「だけどあれは異常だろ……」

ムラク、カゲト、ミハエルが話すが答えは出ずに学校が始まるの

だった。

そして特に問題なくウォータイムに参加したトオルはデスフォレストの人員配置をムラクとしていた。

「これで全ての部隊の配置が完了だ……」

「そうだな……トオル……少しいいか？」

「どうした？ムラク」

するとムラクは昨日話せなかった事をトオルに話した。

「そっか……言ったか……」

「ああ……すまない……」

「謝る事じゃない……このウォータイムに参加している全ての人間が知る権利がある……」

「これ以上失点を増やすわけにはいかないな……」

「ああ……しかしお前が言った青いLBX……気になるな……」

「なぜだ？」

「バンデットのように見境無く攻撃をするわけでもなくムラクだけを狙うとは……それにムラクの反応を超えるプレイヤーか……生徒なのか？」

「まさか……教師はウォータイムの出勤は禁じられている……」

「だよな……」

二人がそんな話をしているとサイレンが鳴り響きウォータイムが終了するのだった。

—————

次の日いつも通りトオルの第5小隊が登校すると下駄箱に人だかりが出来ていた。

「なんだ？」

「さあ……」

「ちよつと見てきます……」

トオルとノインが疑問に思っているとワーカーが人だかりの中に入って行き帰ってくる少し慌てた様子で

「隊長！本日15・00よりジェノックとハーネスは無期限の同盟を結ぶだそうです！」

「へえ……ジエノックとハーネスねえ……」

「ずいぶんと厄介になるな……あの瀬名アラタとトオルの金箱スズネが手を組むと言う事だから……」

「面白くなってきたじゃん……」

そう言つてトオルは教室に向かうと教室では教室でミハエルが慌てているようだった。

「ジエノックとハーネスが手を結んだんだぞ！」

「それがどうしたと言うのだ……」

「だよな……ミハエルは気にしすぎだ……」

「だがな！」

「確かにこれでオーストラリアから南アメリカ大陸の基地は大変だろうな……ただでさえタンデムの港が落ちたせいで補給すらままならない状況だから……」

「トオル……」

ミハエルが話しているとトオルがその後ろからムラク達に声をかけるとムラクがいち早くトオルの名前を呼ぶ。

「どう思う？ムラク」

「ん？」

「俺的には今日来ると思うんだが……」

「ああ……同感だ……」

—————

そして向かえたウオータイム、トオル達はデスフォレストが動くのを感じ取りながらロシウスの部隊が次々と配置についていく。

「ムラク、そっちは頼むわ」

「分かっている……」

トオル達の配置は正面のメインゲートにムラクの第6小隊を含む前衛部隊、そしてトオルの第5小隊を含む後衛部隊の大きく二つに別れている……つまりムラク達は外でトオル達は中で防衛する形になっている。

「ムラク……五時の方向から来るぞ……」

バネツサの言葉を聞いてムラクとミハエルは五時の方向を見ると

ハーネス、ジェノックのクラフトキャリアの一団が来るのが目視でも確認できた。

「混成軍とは言え数の上ではこちらが有利だ…落ち着いていけ」

「了解…」

「誰が来たって負けないさ…」

ムラクの言葉にミハエルとバネツサが返事をする通信からトオルも声援を贈る

「そちらは任せている…頑張れよ…」

「ああ…すまないな…」

「ありがとう…」

「……………あつー…ああ……………」

ムラクとミハエルは普通に返事をするがバネツサはいつも以上に集中しているためか目が鋭く雰囲気が違うトオルに見とれて顔を赤くしながら答えるのだった。

すると次々とクラフトキャリアから降下してくるジェノック、ハーネス混成軍そこには当然瀬名アラタのドットフェイサー、金箱スズネの青いドットフェイサーの姿もあった。

「来るか…」

トオルがそう呟くとコントロールポットの画面が乱れ甲高いノイズ音が発生するのだった…その頃司令室ではオペレーターがレーダーに写る謎の機影を捉えていた。

「九時方向より…未確認物体接近！」

「なんだと!？」

司令のクロススキーが驚く中、戦場でもその機影を捉えていた。

「なんだこれは?それも一体だけで…」

「敵の別動隊では……………」

「……………」

バネツサとミハエルもその機影を見て疑問を漏らす。ムラクは黙ってレーダーを見ていた。

「まさか…………ジェノックのラージドロイドか!接近を阻止せよ!」

クロススキーの命令で謎の機影のいる所を射程に納めている砲台が

次々と砲撃していくが機影は怯むこと無くデスフォレストに進み続ける。

「効果ありません！」

「くっ！」

「デスフォレストに激突します！」

トオルは司令室の会話を聞いて素早く指示を飛ばす

「全員退避！急げ！」

トオルの命令にデスフォレスト内のロシウス部隊が急いでメイン通路から脇の小さな通路に移動するとトオルの目の前の装甲壁が赤く光り爆発するとそこにはダークグリーンの装甲を持った巨大なラージドロイドが居た。

「なんだ！コイツ！」

「トオル！逃げろ！」

「隊長！」

トオルがドーバーガンを構える前にラージドロイドの口が開き、まばゆい光が暗い通路を照らすのだった。

第十七戦「怒り」

「中で一体何が起こっている!」

ムラクの珍しい怒鳴り声にカゲトは慌てながらも探ってみるが基地内の有線回線がやられたのか一部がモニター出来なくなっていた。

「分からないっす! トオルさんは!？」

「ダメだ! どうしよう! トオルと通信が繋がらないんだ!」

「落ち着くんだ! バネツサ! トオルが簡単に殺られるもんか!」

「だがなあ!」

カゲトの報告と通信が繋がらない事で軽くパニックになっているバネツサをミハエルは何とか落ち着かせようとするがミハエルも内心かなり焦っていた。

――

その頃デスフォレスト内部ではラージドロイドとトオルを含むロシウスの部隊が激しい戦闘を行っていた。

「接近武器の者は武器庫に行つて遠距離武器に入れ換えろ! 急げ! ノインもだ!」

「すまない! 武器庫に行く者は続け!」

ノインの言葉に接近武器を持つものが戦線を離脱した後もトオルはトールギスの機動力を生かし狭い通路を縦横無尽に駆け巡りドーバーガン撃つが全くといいほど効いていないし、トオルのお陰でラージドロイドはトオルに気を取られ他のロシウスの部隊は殆ど無傷だった。

「何だよこのバケモンが……」

トオルはラージドロイドの戦闘に集中していて通信が来ている事を全く知らなかった。

――

そして外では状況を理解できないまま何とか内部の状況を知ろうとしてロシウスとジエノック、ハーネス混成軍の膠着状態になっ

た、すると地響きが鳴り響き思わず全員が身構えるとデスフォレスト
メインゲートが赤く融解し爆発するとその爆煙からトールギスが出
てくる。

「トオル！」

バネツサがトオルの無事を喜ぶのもつかの間その爆煙から巨大な
ビームがトールギスをかすがトオルは素早く体勢を立て直すと
ドーバーガンを撃つ先にはダークグリーンの装甲を持ったラージド
ロイドがおり出てきたメインゲートからは後衛の部隊がラージドロ
イドに全力攻撃を浴びせラージドロイドの各部に銃弾やランチャー
弾が着弾するが全く効いていなかった。

「トオル！直接指揮を執れ！」

「了解！」

ーーーー

ジエノツク、ハーネス混成軍サイドも謎のラージドロイドの強襲に
より混乱していた。

「なんなんやカゲトラ！ロシウス同士討ちしとんで！」

「わ……分からない……」

スズネの問いにカゲトラは困惑しているとラージドロイドの口が
開き逃げようとしていたロシウス前衛部隊の半分をビームで飲み込
んだと思うと今度はこちらに飛んできた。

「全部隊退避！」

「了解！」「了解！」

カゲトラの咄嗟の判断でハーネスは何とかラージドロイドの攻撃
を避けるがジエノツクの星原ヒカルのバル・スパロスの左腕を持つて
いかれた。

「何だよ！アレは！化け物じゃねえか！」

ギンジロウが驚いている間にラージドロイドは何故か動かない東
郷リクヤ機を踏み潰そうとしアラタはリクヤを守るためにライディ
ングアーマーで何とか足を止めるが支えきれずに潰される……その
光景を見て

「穏やかじゃありませんわね……」

巴シズカが呟くとラージドロイドがこちら側にも向き直りいきなり口からビームを出す。ハーネスは何とか脱落者を出さずに避けた。

「さっきからやってくれるやないか！」

「全く手がでない……」

——

ジェノツク、ハーネス混成軍とラージドロイドが戦っている間にロシウスの残存の前衛部隊と後衛部隊が合流して上にいたムラクも降りてきた。

「トオル！無事か！」

「ああ……何とかな……」

トオルはバネツサの問いにドーバーガンのカートリッジを入れ換えるとメインゲートから出てきているロシウスの部隊が慌てて出てくるのが見えた。

「まさか！ノイン！」

トオルが叫ぶと外に出ていたラージドロイドがメインゲートに向けてビームを発射するのが見ると逃げ遅れたロシウス勢が次々とやられていく……ロストしたのは武器庫に行ったノイン達の部隊だった。

「勝手に殺すな！」

「ノイン……それは……」

ノインの声を聞き全員が喜ぶがノインのガウンタは右腕が焼けただれて使い物にならなくなっていた。

「すまない……しくじった……」

「酷いな……ワーカー」

「はい！ノインをカゲトに收容するように頼みました……自分も間もなくそちらに着きます！」

「来るのか!?!」

ワーカーの言葉にバネツサは驚くが相変わらずの行動の早さにムラクとトオルは苦笑した。

「前線に出てくるメカニックはワーカーだけだろうな……」

「同感だ……」

そうしているとラージドロイドがデスフォレストのメインゲートに戻り中に入って行くのとウオータイム終了を知らせるサイレンが鳴り響きウオータイムが終わるのだった。

「……………」

ウオータイム終了後トオルたちはスワン荘で残ったロシウス全員が食堂で話し合っていた。

「全く……ジェノックとハーネスだけでも大変なのにバンデットのラージドロイドかよ……」

「大丈夫ですか？これをどうぞ……」

「すまないな……」

頭痛がする頭を押さえているとワーカーがコーヒを持ってトオルに渡すとムラクが話しかける。

「それで……実際戦ってみてどうだった？」

「ん……ああ……ドバーガンが全く効かなかったかなりの強度の装甲だ……それにあのビーム砲は砲口開放と発射は殆どタイムラグ無しで発射されるしな……」

「攻撃力、防御力……全てをLBXを……いや……通常のラージドロイドよりも凌駕するだろうな……」

「これ以上つまずくと俺たちの計画も立て直さなきゃならんな……」

「しかし……俺たちにはこれ以外の方法がない……」

「だよな……」

「邪魔すんな……」

ムラクとトオルが話していると怒鳴り声が聞こえて来る窓側を二人は見ると

「あらら……瀬名アラタかよ……」

「アラタ……」

瀬名アラタと何故か外にいたノインとバネツサとミハエルが言い争っていた。

「ムラクに話があるんだ……」

「ふざけるな！そもそも交戦中敵に会いに来るとはどういう見だ！」

「そんな事どうだっついていいだろう！」

「瀬名アラタ……もう少し立場をわきまえろ……」

「帰れ！」

「つまみだそう」

そしてムラクを呼びながら連れて行かれて行くのをムラクとトオルが見ていると

「はあ……ちよつと行ってくる」

「ん？ああ……」

ムラクが少し不思議に思ったが食堂を急いで出ていくのを黙って見ていた。

「……」

「なんでお前までいるんだ!？」

「いや〜ウチは聞きたいことがあるで」

トオルが窓から見たのはスズネだった……彼女はバネツサとミハエルにも見つからずに手招きしていたのだ。

「で……こんな時に何のようだ……」

トオルは近くの木にもたれるとスズネもすぐ横にもたれる。

「ウチは聞いたんや……セカンドワールドの事」

「ジェノックと同盟を結んだ時か……」

「せやで……あの時ウチに言った事……そういう事やったんやな……」

「飲まれるなだろ……」

「うん……ウチ……聞いたんや……セカンドワールドは世界の戦争を無くしているって……やから守らななって……みんな……」

「確かに先生の言うことは正しいかもしれない……だが……俺は許さない……」

「トオル……」

「戦争を無くしているって……ふざけるな! LBXは戦争の道具なんかじゃない! ここにいる奴だっただだLBXを上手くなりたいたいと思っっている奴等だ! それを踏みにじった挙げ句に知らない間に戦争に加担させてるなんて!」

怒りに震えるトオルを見てスズネは静かに話しかける。

「トオル……」

「ツ！……すまない……取り合えず明日は手を出すな……逃げた方がいい……」

「トオルはどうなるんや！」

「大丈夫だ……目的を果たすまで死ねないからな……」

そう言ってトオルはスズネの頭を撫でるとスワン荘に戻った。

第十八戦「共闘」

トオルとの会合を終えて次の日のウォータイムのブリーフィングで司令官であるドルドキンスこと海道ジンの命令を待っていた…。

「ジェノック、ハーネス混成軍…本日の作戦を発表する…」

そして画面に写るジェノック司令官の美都先生が

「全機退却よ…」

昨日は徹底抗戦を唱えていた美都先生の突然の言葉に聞いている者全員が疑問の声をあげる。

「分析の結果…あのラージドロイドの目的はLBXの掃討ではなく…デスフォレスト破壊と思われる…」

「私たちの目的はデスフォレストの制圧であり…バンデットとの戦闘ではない…よって…ラージドロイドがデスフォレストを破壊し尽くした後…その退却を確認…その後改めてデスフォレストを攻略するわ…」

ジンと美都先生の言葉は最も効率的で自軍の被害を最小限に止める作戦だった…しかしスズネは心では納得していなかった…もちろん今まで兵士としてセカンドワールドを駆けてきたスズネはこれが最適だと思っている…しかし頭によぎるのは昨日の出来事…あそこまでセカンドワールドを見続けて苦しんでいるトオルがロストしてしまうかと思うと心が痛かった。

美都先生とアラタの話し声も今のスズネには届かなかった。

—————

トオルサイド

(5…4…3…2…1…ウォータイム開始)

ウォータイム開始のサイレンが鳴り響き止まっていたLBXが一斉に動き出し一斉にジェノック、ハーネス混成軍はクラフトキャリアを降下させ退却していくのを見てミハエルが叫ぶとムラクも叫ぶ。

「構うな！我々は任務を全うするのみ…ラージドロイドを倒す！」

すると複数のクラフトキャリアが近くに降り立ち損傷したLBXを次々と収容していく

「トオル……すまない……」

「気にするな……生きているだけでそれでいい……」

「ああ……」

ノインも例外では無く名残惜しそうにクラフトキャリアに収容されて行くと今度はワーカーがこちらにやって来た。

「おいおい！何だよその装備！」

ワーカーのグレイリオを見るとバネツサは思わず驚きミハエルやムラク、トオルまで驚いていた。

「これは自分が作った重装型グレイリオです……」

ワーカーのグレイリオは二つのバズーカを無理矢理くっ付けたかのような二連バズーカ方を両手に持っておりスカート部分にはこれでもかと言うぐらいミサイルポットがつけて背中には武装コンテナを背負って足はかかとかからキヤタピラが増設されていた。

しかしそれにずっと驚いているほど時間は無くトオルが先頭に立つとテンペストを空に掲げ

「全機俺に続け!!」

デスフォレスト内部に突撃していくとムラク達もそれぞれ武器を構えて突撃していく……ラージドロイドが邪魔するなど言わんばかりに口からビームを撃つてくるとロシウス勢は被害を受けるが怯まらずに攻撃を開始する。

――

その頃ジェノック、ハーネス混成軍は自隊のクラフトキャリアに乗り込んでいると心配そうに二機のドットフェイサーがデスフォレストを見ているのだった。

――

そしてデスフォレストは文字どおり地獄絵図のようになっておりロストしたLBXが大量にあった。

「戦えなくなった者はロストする前に退却！もしくはエスケープスタンスを取れ！」

「エスケープスタンスの時間は無い！動ける奴が動けない奴を連れていけ！」

ムラクとトオルが指示を出すのが事態は酷くなる一方、踏まれ叩き潰され焼き払われ……ロシウス勢はほとんど数を減らしついにデスフォレスト中枢部まで進行された時にはトオル、ワーカー、ムラク、ミハエル、バネツサしか居なかった。

「ッ！避ける！」

トオルの言葉に全員が反応したが重装備のワーカーが避けきれずに武装を撒き散らしながら吹き飛ばされブレイクオーバーする。

「すいません！隊長！」

「ワーカー！」

トオルが気を取られていると巨大な剣がバネツサとミハエルを捉えブレイクオーバーさせた。

「ちきしょう！」

「すまない二人とも！」

「くそっ！バネツサ！ミハエル！」

残りはトオルとムラクの二人……しかし目の前のラージドロイドはあまりにも強大すぎた……ラージドロイドの猛攻にトオルのトールギスもムラクのガウンタ・イゼルファーも火花を散らしてボロボロだった。

「立て！ガウンタ・イゼルファー！まだやれる！」

「トールギス！俺に勝利を見せてくれ！」

奮闘する二人だがムラクのガウンタ・イゼルファーが限界なのかついにその場に倒れるとラージドロイドはビームを撃ち込む

「ムラク！」

トオルは僅かな希望を持ってシールドを構えてビームを待ち受ける。

「トオル！無理だ！よせ！」

ムラクの声が届く前に二人にビームが着弾し爆炎が起きる。

「む……ムラク……トオル……」

流石のクロスキーも動揺し画面を食い入るように見るとそこには新たに二機のLBXが加わりトオルとムラクを助けていた。

「バカが……手を出すなど言っただらうに……」

「せやな……せやからウチは手を貸したんやで！」

「たくつ……」

トオルスズネの言葉には呆れながらも笑っているとハーネスの古城タケルが画面に出てくると

「アラタ君！スズネ！聞こえるかい？」

「おお！タケル！」

「ラージドロイドの弱点を見つけた！データを転送する！」

するとトオルの所にもラージドロイドの解析結果が送られて来た。

「やるしか無いで！行くでトオル！」

「分かってる！」

そう言うのとラージドロイドはビームを放ち四人を焼き払おうとしたが四人は素早く避けると

「レーザーの発射口！閉じる前にそこを狙う！」

四人がそれぞれ銃で狙うが

「あかん！閉じる！」

上手くいく訳も無く素早く発射口が閉じようとした時、トオルがトールギスのバーニアを吹かし発射口に接近するとビームサーベルを抜き

「大人しく！」

開閉装甲の支柱にサーベルを突き刺し

「開けてろ！」

もう片方もサーベルで破壊し離れると。

「今だ！必殺ファンクション！」

《アタックファンクション！ホークアイドライブ！》

「必殺ファンクション！」

《アタックファンクション！ハイパーエネルギーボム！》

「行くで必殺！」

《アタックファンクション！フレイムレーザー！》

アラタ、ムラク、スズネがそれぞれ必殺ファンクションを決めてラージドロイドが沈黙する。

「やったで！トオル！」

「フツ…当然だな…」

するとラージドロイドから突如コアエネルギー反応が起き

「不味いぞー！全員退避だー！」

トオルは急いで伝えるとデスフォレストの出口に急ぐが後ろから光が襲いかかり四人を包むと一瞬閃光と爆発で見えなくなつた視界が段々と落ち着くと目の前には青いスズネのドットフェイサーがおり

「スズネ………」

「トオル………」

二人は呼び合い周りを見渡すと…。

「なっ！なんなんやー！」

「マジかよ………」

そこにはロシウスの領土を守る基地が無くなり…巨大なクレターができていた…すると上空から突如反応が起き見ると

「バンデットか………」

「ホンマ…堪忍して欲しいわ………」

バンデットの大鎌のLBXグルゼオンとバスターライフルを持つたウイングゼロガンダムがいた。

第十九戦 「発現」

「やりたいようだいやりやがって！」

「ウチがその根性叩き直したる！」

「今日こそコイツを」

「絶対に倒す」

トオル達がそれぞれ叫ぶとムラクとアラタがグルゼオンに、トオルとスズネはウイングゼロに攻撃を仕掛ける。

スズネがゼットライフルでゼロを狙い撃ちトオルがドーバーガンを撃ちつつテンペストで仕掛けるがゼロは軽々と避けてトオルを蹴り飛ばすとそのままビームサーベルを抜きスズネに斬りかかる。

「ツッ！しまった！」

スズネはとつきにゼットライフルで受けてしまいライフル、が真つ二つになるとスズネの武装が全て無してしまう。

マルチギミックサツクの最大の弱点が浮き彫りになった瞬間であった：武装を組み合わせ、変形させることでさまざまな武装に変わりどんな状況にも対応できるマルチギミックサツクは裏を返せば組み合わせるどちらかまたは両方に甚大な損傷を受けた場合、豊富な筈の武装が全て使えなくなるのだ：タンデムの港でのオーヴェインが
いい例である。

「スズネー！クッ！」

ゼロはスズネを無力化すると次はトオルを襲いトオルは防戦一方であった。

「トオル！……ん？あれは？」

スズネがトオルを助けようと素手で向かおうとすると視界の端にコンテナの様なものがあつた：それはワーカーが重装備型グレイリオの時装備していた武装コンテナだつた。

「あれやー！」

スズネはコンテナに駆け寄り開けると中にはドーバーガンが二丁とビームサーベルの予備が三本納められていた、スズネはドーバーガンを二丁両肩に担ぎ構えるとゼロに向けて撃つ：トオル用のドー

バーガンのようにビームが出ずに実弾が発射され着弾しゼロの体勢を崩す。

「トオル！」

そう言つてスズネは予備のビームサーベルをトオルに渡す。

「助かるー！」

トオルは受けとるとサーベルを構えてゼロと対峙する、実はトオルのサーベルはラージドロイドの発射口を開けるために使つてしまひ無かつたのだ。

「スズネ！無事か！」

「来てやったぜ！」

「あらあら……大変ですわね……」

「手伝いに来てやったぜ！」

すると上空からカゲトラとギンジロウ、シズカ、テツペイが降下しスズネのドットフェイスを囲むようにバル・スパロス、オーヴェイン、DCエリアル、DCオフエンサーが降り立ちそれぞれの武器を構えるとトオルは少し嬉しそうに呟く。

「共同作戦かよ……」

「……」

それをウイングゼロのプレイヤーの一ノ谷ユイは年頃の少女にしては無表情のまま見て

「増えた……任務に変更なし……排除する……」

そう呟くとゼロを加速させハーンネスとトオルの元に突撃する。

「来るぞー！」

トオルの言葉に全員が反応しそれぞれの射撃武器で迎撃するがいつも簡単に避けられ接近を許してしまう。

「なに!?」

「テツペイーぐわあー！」

ゼロにテツペイのDCエアリアルを頭部を捕まれて助けようとしたギンジロウが投げ飛ばされたエアリアルとぶつかり飛ばされる。

「よくもー！」

カゲトラが風魔小太刀で斬りかかるが避けられ背中をビームサー

ベルで深く傷つけられ動けなくなる。

「くそっ！」

「カゲトラー……シズカ！手貸しい！」

「はいはい……」

スズネとシズカはそれぞれの武器で応戦するがいつの間にか視界から消えてしまう。

「っ……どこに……」

シズカは周りを見渡すが見つからずにいると後ろから頭部をサーベルで刺されそのままブレイクオーバーしてしまうそれを見てスズネとギンジロウはドーバーガンを構え、オーハンマーで殴りかかろうとした時……ゼロは地面に落ちていたツインバスターを拾い上げ分離し二つに分けると発射……巨大なエネルギーの渦に二人は避けられずロスト寸前まで追い詰められた。

「くそっ！」

「なんて奴や！」

「くそっ！動け！ツールギス！」

トオルはラージドロイドの戦闘とその爆発に巻き込まれたダメージで上手く動かないツールギスを必死に動かそうとしているとゼロがツールギスを蹴飛ばしサーベルで叩き斬ろうとするが寸での所でサーベルで受け止める。

「くそっ！」

トオルは悪態をつきながらスーパーバーニアで無理矢理起き上がり応戦するがダメージのためか若干違和感が残る……しかし敵がそんなこと構う筈もなく次々と損傷するツールギス……。

「……………」

集中して目を細めていくトオル……そしてその中の瞳はゆつくりと赤く光だした……。

「……」

ゼロのプレイヤーであるユイは勝利を確信していた……散々足掻かれたがこれで終わり……後は火花を散らすツールギスをロストさせるだけ……。

「任務……完了……」

火花を散らししやがみこむトールギスにサーベルを突き刺す……しかしそこにはトールギスが居なかった。

「？……ッ！」

すると突然の背後からの衝撃振り返るがそこには何も居らずまた背後から辺りを見渡すと高速に移動するトールギスを捉えたが反応が出来ずに好きなように切り刻まれる。

「……バカにして……」

ユイはツインバスターを分離させバルカンでも撃ちまくりトールギスを狙うが全く当たらない更にいつの間にか接近していたトールギスにツインバスターライフルを二つとも両断され更に先が真っ赤になっていたテンペストでゼロが貫かれ爆発した。

「クッ！」

ユイは被害状況を見るとまともに戦闘できる物では無かった……それを見てユイは渋い顔をしながらも撤退していくのだった。

「……」

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

突然の事に驚きつつもぼやける視界の中撤退していくウイングゼロを見届けると機体から嫌な音がすると思えば突如背部のスーパーニアが爆発しトールギスの間接と言う間接が悲鳴を上げながら崩れていくとウォータイム終了のサイレンが鳴り響くのだった。

「……」

ウォータイム終了後ムラク達は急いでトオルのコントロールポットに向かうと以前の時とは比べとものにならないぐらいの表情と荒い呼吸をしているトオルがいた。

「隊長！」

「トオル！」

ワーカーやバネツサが心配そうに駆け寄るがトオルはそれを見て笑いかけコントロールポットから降りると

「大……丈夫だ……本当……に……お……前達……は心配しよ……」

「トオル！トオル！」

言葉を言い終わる前に倒れバネツサが泣きそうな顔で必死にトオルを呼ぶのだった。

「……………うつ……………」

「よかった…」

「ふう…」

保健室に運ばれたトオルはそのままベットに寝かされムラク達は目が覚めるまで待ち続けた…そしてその隣では同じく力を発言した瀬名アラタが寝ておりムラクはそつちも気になつていたようだが……………そしてトオルが目覚めるのを見ると全員が安堵の表情を浮かべていると一人だけ顔を下に向けて震えているバネツサがいた。

「しかしよかった…」

「ああ…無事で何よりだ…」

起きて早々ノインとムラクが安堵の声を漏らすのを見てトオルは自分が倒れたのときとり体をゆつくりと起こす…その際ワーカーとミハエルが手を貸し起き上がる。

「なんか…すまないな…」

「気にするな…無事で本当によかった…」

「すまないな…ムラク……………んっ?」

ムラクに返事をするとなぜか黙り込み体を震わせるバネツサが視界に入りトオルは嫌な予感がした…

「……………」

「ん?」

「よ……………た……………」

「あの……………バネツサさん……………」

「トオル!よかった!」

するとバネツサは飛びトオルを抱きしめる。

「……………!!」

「よかった!よかった!」

バネツサは今気づいていないが抱きつくとトオルの顔がその年のわりには成長しすぎている物に埋められ息ができずに悶える事に

なる……そして空気を讀んだムラクは目を覚ましたアラタと話しており他も知らんぷりを決め込んだ。

「……！！プハッ！死ぬ！」

「いいじゃないか……男としては最高の死に方だろうに……」

ゼーゼー言っているトオルにノインは微笑みながら言うトオルは

「イヤ……だからと言ってまだ死にたくない……」

まだ飛び込もうとするバネツサを押しえつつ答えるのだった。

第二十戦「新任教師」

「オーバーロードねえ……」

デスフォレスト戦から一夜明けてトオル達は学校に登校していた。昨日ジエノック司令官の美都先生から聞かされたトオルと瀬名アラタに眠る能力……。それがオーバーロードであるそれを聞かされた時は疑問しか浮かばなかったが実際起きてしまいいまだに頭痛と戦っているトオルは信じるしか無かった。

「脳に眠る力か……まるで夢物語だな……」

「しかしこれである時の異常な疲労の正体は解けた……」

ノインが信じられないように言う。トムラクは納得したようで頷いていた。

「おい……これ……」

「ああ……ありがとう……」

そんな時、バネツサはトオルにチョコバーを渡すとトオルは受けとり大人しく食べる……。心なしかいつもより二人の間が縮まり寄り添って歩いて見えるのを見て

((いいなあ))

なんて後ろから思われていたりする。

そんなこんなで学校に登校するとトオルとトムラクが呼び止められる。

「トオル先輩！・ムラク先輩！」

「ん？」

「？」

いきなり呼び止められ二人は振り返ると手を降りながら走ってくる後輩、剣菱ワタルがいた。

「ワタルか……」

「ムラク先輩……緊急の全校集会らしいです……体育館にみんな向かっています……」

「そうか……ありがとう……ワタル」

「はいー」

ムラクの言葉に嬉しそうに答えるワタルは思い出したかのようにトオルに駆け寄ると

「トオル先輩！昨日は凄かったです！是非やり方を教えて下さい！」

「ああ…俺も無意識で分からないから教えられんよ……全校集会だな……すぐ行くよ……」

そう言ってトオルは急いで自分の教室に向かうのだった。

「ムラク先輩……なんでトオル先輩は僕を避けてるんでしょうか……」

「気にしないであげてくれ……アイツは昔大切にしていた後輩を失ってどう接すればいいか分からないんだ……」

「はい……」

ムラクは落ち込んだワタルを励ますとトオルを追いかけて教室に向かうのだった……。

その頃一足先に教室に向かったトオルは

(トオル様……どうかそのツールギスで……)

「くそっ！」

一人廊下で悲しそうな顔をしていた。

—————

「みなさん〜ご機嫌麗しく〜本日はみなさんに緊急にお知らせしなければならぬ事が出来たので集まって貰ったのよ〜」

独特のしゃべり方をしているこの神威大門の学園長、大門ジョセフィーヌが話し始めると全員が注目する。

「お知らせは二つあるわ……まず一つ目……今日から神威大門統合学園に新しい先生が着任します……では……セレディー・クライスラー先生……どうぞ」

生徒が騒ぐ中ジョセフィーヌは気にせず先生の紹介をし舞台の脇からあまり生徒と年が離れていない容姿の青い髪をした生徒がジョセフィーヌの横に立ち止まる。

「なんだあの先生……私たちと大して変わらなそうだが……」

「その前に先生なのか？」

バネツサとノインが言うとおり、周りもその事で話し合っていた。「クライスラー先生は…その天才的な頭脳で飛び級を重ね今や世界から期待されている方です…L B Xに関する様々な功績が評価され本校の先生として選任されました…」

ジョセフィーヌの紹介中ロンドニアの伊丹キョウジが舐めていたアメをかみ砕き…一ノ谷ユイは僅かに目を細めるのだった。

「みなさん…セレディー・クライスラーです…よろしく…学園長…二つ目のお知らせは私からお伝えしたいのですが…よろしいですか?」

「…どうぞ」

「では…二つ目のお知らせです…この学校に新しいクラスが出来ることになりました…私はそのクラスの担任となります…仮想国の名前はエゼルダム…私が選んだ…特別クラスです…それではエゼルダムに入る生徒を発表します…ロンドニアの伊丹キョウジ君、一ノ谷ユイ君…アラビスタの有馬トオル君…」

生徒が騒ぐ中新しく着任したセレディー・クライスラーは次々と生徒を発表していくのだった…。

「……………」

「どうも違和感残るな…あの先生…」

「違和感ですか?」

「ああ…」

要領の得ないトオルの話しにワーカーは首を傾げるがトオルは自分の思考の中に入って行った。

「どうしたんだ…トオルは?」

「ムラクさん…いや…隊長がああ先生が気になるらしく…」

「先生か…確かに不思議な先生ではあったが…」

「どうやら先生達もしらないらしいぜ…」

「あと…メタ沢が倒れてた…」

「へえ…」

ムラクとワーカーが話しているとバネツサとノインが先生について報告するとトオルは少し笑いながら

「ワーカー…メタ沢は確か自立型の人工知能ロボットだよな…それが突然倒れることはあるのか？」

「いえ…長い間整備されて無いのでしたらあり得ますが…」

「まあ…この学園の設備じゃ考えられないっすよ…それ以外だったら外部からの干渉を受けるしかないっす…」

ワーカーが考えながら答えるとそれにカゲトが割り込み答えそれをトオルが聞くとなぜか外で歩いていたセレディーを見る…すると一瞬…目があった。

「ツ……やっぱあの人は普通じゃないな…」

そうトオルは冷や汗を流しながら呟くのだった。

第二十一戦 「嫉妬と感謝」

セレディー・クライスラーが教師として赴任してから色々と疑問の残る日々が続いた、セレディー率いるエゼルダムは全く動きを見せず完全に沈黙状態が続きロシウスはここ最近部隊の損傷が激しい為、各国の境界線とロシウス主要基地だけに警備を置き後は残っているロシウスラボを使い小隊が日替わりでLBXの修復に全力を尽くしていた……それは第5、第6小隊も同じで現在第5小隊はトールギスをメインに修復作業に取りかかっていた。

「こりゃ酷いな……」

「助かるよ……カゲト……手伝ってくれて……」

一つのメカニックルームにワーカーとカゲトが必死にトールギスの修復をしていた。

「初めて見た……こんなにコアスケルトンが損傷してるのは……新しい機体を作った方が早いぜ……これは……」

「分かってるけど……この機体は……俺の後悔と……隊長の悲劇そのものなんだ……」

「ああ……だがな……いつまでも止まったらオットーもいい顔しないだろ……」

「そうだな……」

カゲトは横で少し元気が無くなるのを見て（世話のかかるライバルだ……）と思いながらも黙って作業を続けるのだった。

――

その頃屋上ではムラク達が集まり涼んでいた……昨日のオーバーロードのせいか一向に頭痛が止まないトオルを見かねて保健室に連れて行ったのが昼過ぎ……放課後の現在もトオルは保健室で寝ている。

「あそこまで負荷が掛かるものとは……正直驚いている……」

「同感だ……一応甘いものは摂取しているんだがな……」

「頭痛薬も効かなかったってことか……」

「あの先生が言うなら脳に直接負荷が掛かるんだから効かなかったかもな……」

ムラク、ノイン、バネツサ、ミハエルが話し合う中全員があまりよい表情をしていなかった……元々トオルは無理をするタイプだ……このような状況が続けば必ずオーバーロードを使う……自分の体を無視して……

(強くなりたいな……)

バネツサはふとそう思った……勿論バネツサは強いか弱いかと言われれば強い部類に入るがバネツサの周りにはロシウスの二強のトオルとムラク、もはやジェノックのトップエースと読んでいい期待の新生瀬名アラタ、そしてハーネスのトップエースの金箱スズネ、セカンドワールドでもトップクラスのプレイヤーに囲まれておりどうしても弱く見えてしまう……だがそんな事はバネツサにとって重要ではない……彼女が望むのはムラクやスズネの位置……つまりトオルの横で戦い背中を預けられる事のできる存在でありたかった。

(私が強かったら……トオルは無理をしないだろうか……)

それまでずっと抱えていた思いがバンデット、ジェノック、ハーネスとの戦いを得て日に日に強くなっていた……いつもムラクと戦い……自分は置いてきぼり……ムラクだからいい……そう思っていた……だがあのデスフォレスト戦でトオルが背中を預けたのはムラクでもなく自分でもなく……スズネだった……まだ会ってそんなに経っていないのに……なぜあそこまで信用し合う……バネツサの胸の中に何か沸き上がるのが分かる、なんでこんなに……好きなのに……愛してるのに……隣にいるのはアイツなんだ……

バネツサは完全にスズネに嫉妬していた。

(力があれば……隣にいられるだろうか……)

—————

バネツサそんな事を考えながら空を見ている頃トオルが保健室で目を覚ます。

「う……」

「目が覚めたか……」

「日暮先生……」

「今日は大事をとって休むべきだったな……」

「そうですね…」

「どうだ？頭痛は？」

そう言いながら日暮は疲労回復用のチョコレートをトオルに手渡しトオルはそれを受けとり食べる。

「だいぶ良くなりました…昨日は眠れなかったので…」

「そうか…もう帰ればいい…今は放課後だ」

「え？もうそんな時間ですか！」

トオルは時計を見て急いで準備をして下駄箱に行くとバネツサが待っていた。

「バネツサ……」

「トオル……」

遅かったトオルを最後まで待っていたが時間が時間があつたが為に帰ったのだがバネツサが一人待っていたのだ……その後二人は黙って帰っていた。

「……」

「……」

「……どうした？」

「うん……」

トオルが聞いても曖昧な返事ばかりが返ってくるのを見たトオルは笑いながら

「バカだなあ〜」

「なにがだ？」

「そんなんで悩むなよ〜」

「え？まだ何も…」

「俺は…お前や…お前たちが要るから安心して戦えるんだ…だからそんな顔をするな…」

「なんか……トオルには敵わないな…」

「ふっ…」

バネツサが諦めたように笑うとトオルも笑う。

「さあ……行くぞ…」

「ああ！」

トオルが言うどバネツサは少し元氣を取り戻した声で返事をしト
オルの後に続くのだつた。

第二十二戦「世界とは」

トオルたちは今日、新任教師であるセレディー・クライスラーの授業を受けるために視聴覚室に集まり各自好きな席に座り授業を待っている間にトオルたちは話していた。

「そう言えば昨日のエゼルダームはなんだったんだ？」

「わからない……」

「守りに徹するのも分からないでもないが防衛装置すら動かさないなんて……」

「何を考えてるのでしょ……あの先生は……」

トオル、ムラク、バネツサ、ワーカーが話し終わるとちようど開始のチャイムがなりセレディー・クライスラーが視聴覚室に入ってくる。と授業を始める。

「今日から皆さんの公民の授業を担当する、セレディー・クライスラーです……よろしく……」

セレディーはまず挨拶をすると何かを探しているように周りを見渡ししばらくトオルを見ると再度話を始める。

「最初に言っておきます……私の授業はあなた達の日を現実に向ける為の物です……」

その言葉を聞きトオルは若干目を細める。

「皆さんはセカンドワールドで戦争のシミュレーションをしています……戦略を建て、いかにして被害を最小限に押さえる……効率よく敵に勝つ事を考えている筈です……しかし……ここだけの戦争にだけ目を向けていたら……私たちが生きている現実の世界を見ている事にはなりません……」

「どういうことだ？」

トオルの隣のバネツサが思わず疑問を呟くがトオルは目を細めながら静かにセレディーの授業を聞いていた。

「どういう事か……詳しくお話ししましょう……皆さんが戦場としているセカンドワールドは文字通りもう一つの世界……あらゆる物が精密に再現されています……実は……再現されていない物があるのです……それ

は…トオル君分かりますか？」

セレデイーの突然の指名にトオルは驚くが少し考えると静かに答える。

「セカンドワールドはコンピューターでは分からない兵士の感情を再現される為にある…：それでも足りないと言うのなら…：…：兵士以外の…：民間レベルの感情ですかね…：」

トオルの答えを聞くとセレデイーは気を良くしたようで笑うと話の続きを話す。

「素晴らしい…：その通りです…：トオル君の言う通り日常生活を生活している者の感情は反映されてすらない…：…：兵士たちが戦う後ろには…：常に普通の人々の生活があります…：銃声に怯え、経済は混乱し、貧困や犯罪にさらされる…：それが…：現実に巻き込まれた人々の現実です…：それに戦争状態による犯罪の多発、歴史認識による民族レベルによる軋轢など…：戦争シミュレーションをするならこれらを対象にしなければ意味がありません！」

セレデイーが演説する中、ムラクとトオルは静かに話していた。

「トオル…：これは…：」

「ああ…：問いかけてる…：セカンドワールドの矛盾を…：そして…：…：本当の意味を…：」

みんなが動揺する中セレデイーは気にせず話を続ける。

「そして…：これが最も重要な事ですが…：戦争は人々の支配者層によって産み出され…：操られているのです…：支配する者は権力と財力を独占し常に普通の人々に犠牲を強いている！当然この事もシミュレーションでは考慮されていません…：現実を直視しないのは罪です！皆さんはセカンドワールドを疑わなければなりません！」

聞いていたロシウス生徒全員がこの演説で騒ぎ出すがちょうど終了を告げるチャイムが鳴り生徒たちがセレデイーの授業内容を話しながら帰る中、セレデイーは前に通りかかったトオルを呼び止める。

「何でしょうか？セレデイー先生…：」

「さっきの授業…：…：よい答えだったね…：」

「そうですね…：ありがとうございます…：」

礼を言つてトオルは立ち去ろうとするとセレディーが質問する。

「君はどう思う？ 私の授業は？」

「そうですね…先生が言っているのは…管理戦争のことだと思われ
ます…確かに一部の者達の為に人々が恐怖に怯える日々は良いとは
言いません…しかし…何も知らない無知な者たちを使って平和だ
と叫んでいる者たちも私は許しませんよ…」

「君は私が考えている以上に素晴らしい人材だ…どうだろう？ 私の元
に来てこの世界を創造してみないか？」

「スカウトと受け取つてよろしいでしょうか？」

「ああ…その通りだ…」

「せっかくですが…お断りします…」

「へえ…なぜか…聞いていいかな？」

「自分はロシウスと言う国には少なからず愛着が沸いていますし…
それに」

「おい！ トオル！ なにしてんだ？」

するとトオルの元にバネツサが駆け寄つてくるとトオルはバネツ
サ肩を叩き

「自分には…守ると決めた奴等もいますから…」

「そう…それは残念だ…」

セレディーはそれを見ると笑いながら教材を片付けると

「気が向いたら…いつでも歓迎するよ…神風トオル君…」

そう言つて視聴覚室を後にするのだった。

「トオル？」

「ん？」

「なんの話だったんだ？」

「ん…大切な人たちの話だ…」

トオルはバネツサ問いをバネツサの頭を軽く叩きながら言うと教
室に向かつて歩き出すのだった…そのトオルの後ろで自分の世界
にバネツサが突入したのは言うまでも無いだろう…

――

その頃セレディーは

「守ると決めた奴等も……か……彼は頭はいいが……まだ分からないらしい……世界がどれだけ非情かを……」アレ”は使うつもりは無かったけど一応用意しておこうかな……」

廊下で一人怪しく笑うのだった。

第二十三戦 「絶望の予兆」

「セレディー様、これがご要望の資料です…」

「そう…助かるよ…ユイ君」

「では、こちらは失礼します…」

セレディーは一ノ谷ユイが持ってきた資料を読み上げると感心したように一人呟く。

「九条ノイン、ワーカー・シクト、法条ムラク、バネッサ・ガラ、ミハエル・ローク、木場カゲト、それに金箱スズネ…彼の周りには優秀な人材ばかりだ…全員が優秀な成績を持っている…」

セレディーが見ていたのは神風トオルに関する資料であった、そこには過去の経歴や戦果、身辺などが事細かに書かれていた。

「やはり惜しい存在だ…」

セレディーが資料を見ているとポケットの携帯から着信が鳴り出る。

「私だ…そうか…調整はこちらでやる…修理は任せたまよ…」

電話が終わるとセレディーは資料を机に置き

「”アレ”の準備は時間が掛かりそうだから、まずは瀬名アラタから行こうか…仲間を傷つけられるのは辛いだらうね…」

セレディーは怪しく笑うのだった。

—————

朝、いつものように登校しているとワーカーが修理が終わったトルギスをトオルに渡すと

「隊長…トルギスの修理は終わりました…それと…」

「ん？何だ？」

「いえ…放課後にお時間を頂けたらと…」

「分かった…」

—————

その後授業を終えてトオルはムラクに誘われて戦況観覧室に立ち寄りジエノツクの戦闘を見ながらワーカーと話していた。

「隊長……実はこの通りジェノックとハーネスも新型機で戦力アップをはかっています……自分はトールギスを作りましたので一番トールギスを知っています……」

「つまり……限界だと……トールギスの」

「はい……」

「だがあの機体は……」

「分かります……自分も悩みましたが……しかしあの二人はトールギスよりも、隊長……貴方の活躍を望んでいる筈です……」

「………少し考えさせてくれ……」

――――

数カ月前、トオルは二人もロストに追い込み退学させた者がいた。

「トオル様!!」

「うわっ!」

トオルの名を叫び後ろから抱きつく金髪の少女、トオルは当然バランスを崩し倒れ金髪の少女の下敷きになった。

「おい！ドロシー！トオルから離れろ！」

「いやですわ！」

下敷きになったトオルからバネツサが必死にドロシーを引き離そうとするがドロシーは頑として離れずにいる様子をムラクたちは楽しそうに見ていた。

「全く……毎度の如くドロシーは……」

「トオル大好きっ子だからね」

「バネツサも素直になればいいんだけどな」

「隊長も人気者ですね」

ノイン、ミハエル、ワーカー、オットーがそれぞれ笑いながら話し合っていると

「最近トオルの小隊への移動申請をしているようだ……」

「……え!」

ムラクの爆弾発言にトオルとドロシー以外がムラクを見ながら驚いていると

「誰か……助けてくれ……」

「ハッ！」「ハッ！」

トオルの声で我に帰り取り合えずトオルをドロシーの下から助けだすのだった。

「トオル様！」

「行かせない！」

また飛び付こうとするドロシーを羽交い締めにして押さえるバネツサが騒いでいるとノインがニヤケ顔でトオルと腕を組み行こうとすると

「さあ……二人は置いて行くぞ……」

「まてごらあ！」

予想通りバネツサとドロシーが叫びながら追いかけるのだった。

—————

「……、……」

「……、隊長！」

「ん？」

感慨にふけていたトオルはワーカーの言葉に意識を戻すとワーカーの方を向く。

「隊長……終わりましたよ……」

「そうか……」

いつの間にかウォータイムが終わり戦況観覧室のモニターが暗く なっていたのを見てトオルはムラクに状況を聞くと

「ああ……バンデットが表れてバル・スパロスがロスト寸前まで追い込まれたがまた新しい機体が投入されてピンチを脱した」

「新しい機体か……」

「ああ……多分アレはオーヴェインの後継機だと思うが……」

「後継機か……」

「ジェノック第1小隊……やはり侮れない……」

「だよな……」

その時ワーカーの言葉が頭をよぎる……

(トールギスよりも隊長の活躍を願っている筈です……)

「分かってるさ……多分俺がこの思い出から動きたくないだけだったこ

とは…」

「ん？何か言ったか？」

「……いや…」

珍しく余り喋らないトオルにムラクは首を傾げるのだった。

—————

次の日、トオルたちはいつも通りに登校し教室にしているとワ大声を挙げながら教室にどこかに行っていたワーカーが入ってきた。

「どうした？ワーカー？」

「それが…大変なんです…」

トオルの疑問にワーカーは息も絶え絶えに言うと言全員が驚く。

「二二」コントロールポットで事故お！」「二二」

「はい……ジェノックの星原ヒカルが町の診療所に運ばれて今も入院しているそうです…」

「昨日見ている裏側でそんなことがあったとは…原因は？」

「それが……分からないらしいらしく…公式な発表もありません」

ワーカーの言葉を聞くとムラクは顎に手を当てながら考える。

「イヤな予感がするな…激しく…」

トオルが真剣な表情で呟くと全員が息を飲むのだった。

第二十四戦「扉」

「どうだ？カゲト…」

「ああ…ダメだ…」

ワーカーとカゲトは週末のため夜遅くまで設計図と格闘していたが完全に手詰まりになり一旦休憩を取る。

「やっぱりダメだ…もつとデータが…いや…アイディアが必要だ…」

「アイディアって言ったって…あっ！」

カゲトに言葉にワーカーは首を傾げると急いで自分の資料の中から一つの図面を出すとカゲトに見せる。

「これは…まだ持ってたのか？」

「ああ…俺たちの原点…」プロトE”だ…」

「確かこれは高性能すぎて俺たちでは製造すら出来ない代物だったよな…」

「そうだ…今でもこんな化け物は作れない…だけどアイディアならここに全て詰まっている…」

「なるほど…これで行こうか…」

二人はこの資料を見て設計図を再び作り出すのだった。

—————

この出来事から2日後トオルたちはいつも通りに登校していると後ろから大きな隈を作ったワーカーとカゲトがやって来た。

「どうしたんだい？二人とも…」

余りにも悲惨な顔にミハエルは見かねて問いかけると二人は

「いや～頑張りすぎて～」

「……………」

ワーカーは明るく答えるがカゲトは眠すぎるのか殆ど意識が無い状態であった。

その状況に全員が疑問に思うがその更に後ろからトオルに襲いかる巨大な影…

「おう！トオル！」

「うえっ！ぐ……グレゴリー先輩！」

「お久しぶりです…エンジェルピース以来ですね…」

「おう！ムラクか…すまんがこいつを借りてくぞ！」

「どうぞ……」

「え？ちよつとまでごらあ！ムラク！あああああ！」

ムラクたちはグレゴリーに引きずられていくトオルを可愛そうな目で見送るのだった。

――

その後引きずられていったトオルは少し人気の無い所で解放されてグレゴリーの端末を見せられる。

「これを見てくれるか？」

「ん？なんですか？」

その端末にはこの前破壊されたデスフォレスト跡地の映像があった。

「デスフォレストが何か？」

「これを見てくれるか？」

「ん？」

グレゴリーが一部をズームしたのはセカンドワールドのむき出しの鉄の部分だった。

「実はこの前破壊されたデスフォレストの防衛任務を言い渡されたのだが…指令は装甲材と言っていたがこれは扉のように見えるのだ…」
「なるほど……そう言う事ですね…」

「話が早くて助かる…」

「了解しました…ワーカーに頼んで調べてみます…しかし数日はかかるかと…」

「構わん…頼むぞ…」

「はい……」

――

そして数日後のウォータイム

トオルたちは久しぶりに出撃しデスフォレスト跡地で調査作業が行われていた。

「どうだ？ワーカー？」

「ん〜なんとも言えませんが…電気が流れています…それに中は空洞のようですし…装甲材では無さそうです…」

「これがセカンドワールドの中枢…そんな旨い話があると思うか？トオル？」

トオルの問いにワーカーが答えるとノインが極秘回線でトオルに話しかける。

「さあな…だがこれ目的でバンデットだわざわざラージトロイドを使って掘り出したんだ…何かがあると見て当然だろうな…」

「どうだった？」

トオルが呟いているとグレゴリーが状況を聞くために回線を繋げた。

「詳しくは分かりませんが先輩の言う通り何かの扉のようですね…ワーカー…開けるか？」

「無理ですね…こんな強固なプロテクトは初めてです…こんなのを開けるはず無理ですね…」

「だそうですね…」

「すまないな…わざわざ来て貰って…」

「いえいえ…」

グレゴリーはワーカーとトオルに礼を言うところちょうどウォータイムの終了を告げるサイレンが鳴り響くのだった。

――

そしてグレゴリーと別れてトオルたちはムラクたちと合流すると面白い話が飛び込んでいた。

「へえ〜、また新機体が…」

「ああ！本当にビックリしたぜ！」

トオルは若干興奮気味のバネツサを軽くいなしながらムラクの話の聞くとどうやらハーネスの方でも新機体が製造とその前の機体の

委譲が行われていたようだ。

「スズネも新しい機体が…また面白くなりそうだな…」

――

その頃ロシウス司令室では司令官のクロスキー司令の命令で剣菱ワタルが重要任務を言い渡されていた…そしてワタルは喜ぶがこれがロシウス壊滅の予兆であったのは…誰も予想しないだろう。

第二十五戦 「かわいい後輩」

「みなさん……ご機嫌麗しく……毎日のウォータイム、本当にご苦勞様……ミーも皆さんの活動にはいつも注目しているわよ……世界平和はセカンドワールドの健全なる運営に掛かっています……その事を意識して……より一層励んで貰いたい所……」

現在トオルたちは全校集会で体育館に集められ学園長の演説を聞いていた……セカンドワールド辺りでトオルは苦い表情をしていたが当然の如く演説は続けられると思われたが学園長は急に大声を出す。

「しかし！いまだにバンデットの破壊活動が続いている！」

その言葉にエゼルダームの伊丹キョウジは笑い、一ノ谷ユイは静かに目を伏せ、そしてトオルは表情を鋭くする。

「今後バンデット出現の場合、いかなるミッション遂行中であってもこれを中断！やつらを殲滅して頂戴！……これは運営側の命令よ！遵守すること！」

—————

全校集会をが終わりトオルたちは教室に戻る途中で話していた。

「バンデット退治か……」

「やっとな……」

「今までコケにされた分は返さないとな！」

「調子に乗ってロストするなよ……」

「おい！どういう事だよ！」

トオルとムラクが話しているとカゲトがムラクに

「ムラクさん……少しお話したいことが……」

「ん？……分かった……すまないな……トオル」

「気にするな……」

トオルはカゲトに連れられたムラクと別れると今度はワーカーが来て

「隊長……」

「ああ…分かつてる……」

ワーカーはトオルに新型の事を余り聞きたく無かったが時間が必要なのでワーカーはカゲトに合わせて今日答えを貰うつもりだった。

「仕事を増やしてすまないな……」

「っ！…了解しました！」

トオルが笑って答えるとワーカーは嬉しそうに笑いどこかに走って行った。

「どうしたんだ？ワーカーは？」

その様子を見てバネツサは疑問に思いトオルに聞くと

「新型を作って貰う事にした……」

「新型!?よく決断したな！」

バネツサもトオルの過去を知る者の一人なのでトオルの決断がいかに重要なのかを理解していた。

「それで?一体何を？」

「分からない……ワーカーの事だ……いい機体になっているだろう……」

トオルは微かに笑うと静かに教室に向かうのだった。

—————

エゼルダーム司令室

「セレデュー様……」

「ん?ユイ君……」

「ラボによって製造中の機体が二機とも完成しました…現在生産体制に入りましたが」

「ん?何か問題でも?」

「はい……おうし座は問題ありませんがおとめ座の方はコスト面で少々予定より遅れています……」

「構わないよ……」

「了解しました……」

きびすを返して司令室から出ていくユイを見てセレデューは静かに笑うのだった。

—————

「ムラク先輩！トオル先輩！」

屋上でトオルたちがゆっくりしていると屋上のドアがいきなり開き剣菱ワタルが走りながらムラクとトオルを呼ぶとバネツサたちは半分、呆れ顔でいると

「先輩！僕、今日のウォータイムで重要拠点の制圧を命じられました！」

「君、それ大声で言うことじゃないだろ……」

「いいじゃないか……嬉しかったんだから……」

ミハエルが呆れながら注意するとどうしたんだノインが笑いながらワタルをフォローする。

「あ……すいません……でも！どうしても先輩たちに報告したくて！」

「ああ……分かった……分かった……いちいち声がでかいんだよ……」

「耳が痛い……」

ワタルの大声に最近寝不足のメカニック二人にはダメージになっているようだった……するとムラクが

「ワタル……」

「はい……」

「今のロシウスはかつての勢力を失いつつある……俺たちは……それを取り戻さなくてはならない……期待しているぞ……ミッシェンはしっかりとやり遂げろ……」

「わかりました……」

「それともう一つ……バンデットには警戒を怠るな……」

「はい！今朝学園長が言っていた通りにバンデットが来たら一気に口ストに追い込んでやります！」

ワタルが元気よく返事をするそのまま立ち去らずにトオルを見る、トオルはしばらく黙ると

「大丈夫だ……お前は強い……だがバンデットは並みではない……気を付けろ……期待している……」

「はい……」

ワタルは更に元気になると今度こそ屋上を出ていくのだった……それをを見てムラクは

「トオル……成長したな……」

「そうか？」

「ああ……あの時から後輩とは余り関わりを持たなかったと言うのに……」

「まあ……たまにはな……」

トオルが笑いながら言うと言語が静かに微笑むのだった。

—————

エゼルダム司令室ではエゼルダムの生徒全員が集まっていた……そして伊丹キョウジがセレディーに報告していた。

「見つけたぜ……パラサイトキー……」

「素晴らしい……」

すると一ノ谷ユイが説明を始める。

「セレディー様の指示で電磁ネットを強化した結果です……従来の電磁ネットは……ロストした機体から飛び出したパラサイトキーが他のLBX向かう時、広範囲に移動するのを防ぐものでした……しかし……今回使用した強化型電磁ネットは……移動したLBXはどれか……確認できる物でした……その機能を使い……パラサイトした機体を見つけてましたが……ウォータイム終了となり……残念ながらデータの回収には至りませんでした……」

「そのLBXとは？」

セレディーの質問にシャーロット・レインが答える。

「ロシウスのガウンタ、プレイヤーも確認済みです……ロシウス第27小隊……一年三組……剣菱ワタル……」

「こいつがどこに配備されようが……次は仕留めて見せる……」

—————

その頃、ロシウスのスワン荘の談話室ではワタルを囲むようにトオルたちがイスに座りワタルの話を聞いていた。

「まさか、本当にバンデットが現れるなんて……あんなに次々とロストしていく戦闘は初めてでした……」

「見てるこつちまで焦ったぞ……」

「言っちゃなんだが……真っ先にお前がロストするかと思つたぜ……」

「全く…素直じゃないな…カゲト……」

「うるさい！」

ワタルの話を聞いてバネツサとカゲトが返しそのカゲトをワーカーが弄っているときハエルとムラク、トオルが

「でも……怯まずに反撃していた…大したもんだ…」

「トオルはソワソワして煩かったからな…」

「ムラク！言わない約束だろ！」

励まそうとするがワタルは落ち込んだままで返事をする…それを見てムラクとトオルは

「それでいい……」

「え？」

ムラクの突然の言葉にワタルは疑問の声を挙げるがトオルが続きを言う。

「己の力を知れたんだ…これからは余り過信するなよ…」

「はい！トオル先輩！ムラク先輩！、ありがとうございます！」

二人の励ましを得てワタルは再び元気を取り戻すのだった…。

—————

そして次の日、ロシウス司令部ではトオル、ムラク、グレゴリーを含むロシウスの精鋭が集められロシウス首都であるローズシテイの防衛任務を与えられその中には剣菱ワタルの小隊も含まれていたのである。

ローズシテイ防衛任務は文字通りロシウスの最高戦力が集まり、ライディングアーマー付きのガウンタ、トールギス、ガウンタイゼルファア一中々見られない面子が揃っていた。

「首都防衛任務か…こんな所にどこの国が攻めてくるんだ？」

「分からんからやってる…集中しろよ…バネツサ…」

「了く解」

バネツサの無駄話にトオルは軽く注意しているとコントロールポットの画面にノイズが走ると司令官のクロスキーが

「全機に通達！バンデットが現れた！警戒せよ！」

「うわあ！」

その警告と同じくワタルのガウンタが持っていたライフルが狙撃によつて破壊させられる。

すると周囲の森からバンデットが次々と姿を現す。

「この数…今までとは違う…」

トオルの眩きにムラクたちは汗を流していると今までに見たこと無いバンデットのナイトフレームとブロウラーフレームと思われるLBXが2種類いた。

「各機…起動……」

一ノ谷ユイがそう眩くとその二種類の機体は顔を上げ戦闘体制に入る。

ロシウスの地獄が今、始まろうとしていた。

第二十六戦 「ロシウスの誇り」

ローズシティにバンデットが現れた知らせは一瞬の内に広がりその知らせを受けた小隊は戦闘を中止しクラフトキャリアに移動、ローズシティへと急行した…その知らせはハーネスにも届いていた。

「なんやて！カゲトラ！それはホンマかいな！」

「ああ……ローズシティにバンデットの大軍が攻めてきたらしい…俺たちも急ぐぞ！タケル！」

「発信準備はオーケーだよ……早く行こう！」

（トオル…ウチが倒すまでくたばるんやないで……）

—————

そしてローズシティ

「撃て……」

バンデットの一ノ谷ユイが攻撃命令を出すと新型の2種類の機体は一斉に動き始める……尖った頭を持った新型の”トーラス”は変形し空に飛び立つと空から迎撃するロシウス勢を攻撃し強力なビーム砲を持った”ビルゴ”はそのビーム砲で一斉射撃を開始する。

そしてロシウス勢

「各機伏せろ！」

トーラスを迎撃していた部隊にトオルは急に全員に命令すると自身も伏せる……その瞬間強力なビームが機体のギリギリ上を通過し壁に着弾、派手な爆発が起こる…しかし少数の機体が伏せられずに機体を焼け溶かされロストする。

「クソッ！」

「トオル……どうする……」

物陰に隠れながらビームを凌いでいるとムラクがトオルに話しかける。

「バンデットの本隊もこちらに来ている…俺がああ新型を殺る……」

「ダメだ！それじゃトオルが！」

「誰かが殺らなければいけない……」

トオルの提案にバネツサが反対するもトオルの言葉に黙り混むと

トオルは一気に加速しよう構えると三個小隊のガウンタとグレイリオが前に立ち塞がる。

「俺たちにもやらせてください…」

「お前たちは？」

「タンデムの港では助けてもらいました…」

「あの時の…」

それはトオルがタンデムの港で助けた小隊だった。

「しかし……」

「数が多い方が成功率と生存率は上がります！」

「……すまん……」

「いえ……行くぞ！てめえら！」

「「「おう!!」」」」

トオルが謝るとその隊長は嬉しそうに部下に指示を出しその部下も元気に返事をする。

「いいか……俺が上空に出て注意を引き付ける…」

「わかりました……その隙に突撃します…」

「よし……行くぞ！」

そしてトオルはトールギスを一気に加速させ上空に躍りかかると上空にいたトールラスを二機撃墜する……それに反応したビルゴはトオルに向けて集中砲火をする。

「よし！行くぞ！」

その隙に三個小隊は突撃を開始……それに気づいたビルゴはビーム砲で迎撃するが三個小隊は盾を全面に出しビームを防ぎながら突撃する。

「隊長！盾が溶けます！」

「盾が溶けたら後は運試しだ……ロシウスの誇りと意地を山賊どもに見せつけてやる……」

隊長がそう呟くと盾が完全に形も残さずに溶けると一斉に加速しビルゴの群れにそれぞれ武器を構えて突っ込む……しかしその間にも一機のグレイリオが火の玉に変わるが全員は気にせず雄叫びを挙げながらビームをくぐり抜け目の前に迫るが何かのバリアの様な

ものに動きを止められる。

「ば…バリアだど!?しかし!」

ガウンタはそのバリアを無理矢理突破しカメラを潰す。

「よし!」

突撃した隊長は喜びの声を挙げるがカメラを潰されたビルゴはガウンタの頭を掴み持ち上げるとビーム砲を向ける。

「バカな!カメラを潰されても…」

驚く隊長にビーム砲が発射される直前にそのビルゴが爆発した。

「すまないな…遅くなった…」

爆発したビルゴの後ろに居たのはトールギス…よく見ると周囲のビルゴたちも同じようにロストしていた。

「またアウンタに助けられた…」

「ああ…しかし…」

トオルが口を濁し周りを見ると他のガウンタやグレイリオの残骸が転がっていた。

「私だけか…」

「ああ…」

攻撃隊…ビルゴ総数15機殲滅完了……

そしてローズシテイの要塞は完全に劣勢になっていた。

バンデット本隊とトーラスの地上と空からの挟み撃ちで次々とロストされていく。

「ウオオオオオオオ!」

グレゴリーはライディングアーマーを巧みに扱い次々とバンデットを撃破していく

「トオルが帰ってくるまで…殺らせはせんぞ!殺らせはせんぞ!」

しかしグレゴリーの奮戦むなしく後ろからトーラスの攻撃に激しく損傷する。

「クソッ!これ程とは!」

止めを刺そうと追撃するトーラスが横からのビームに飲まれロストする。

「グレゴリー先輩!」

「トオルか！」

その頃、ノインたちはワタルを囲むように布陣し戦っていたが集中攻撃され三人は焦っていた。

「コイツらワタルを狙っているぞ！」

「どうして！」

「クソツ……このままではジリ貧だ……」

ミハエルとバネツサの叫びを聞きながらノインは冷や汗をかきながら呟くとバンデットのゴールドーが三機突っ込んでくると三人は迎撃するがミハエルは足を、バネツサとノインは腕を切断され機体も著しい損傷を受ける。

「ミハエルさん、バネツサさん、ノインさん！」

「行け！お前の敵う相手ではない！」

「でも……」

「行けと言っているんだ！」

「すいません！」

ミハエルの言葉にワタルは渋るがノインの怒鳴り声に押されその場から逃げ出す。

それを見たトオルはワタルを援護しようとツールギスを向かわせるが

「行かせない……」

「ッ！退け！」

トオルは怒鳴るとドーバーガンを発射しゼロを退かせるとそのままスピードを維持しながら通過しようとするが直ぐにゼロが追いかけてきて地面に叩きつけられる。

「クソツ！」

トオルがゼロと戦っている間にもワタルは損傷し追い詰められていく

「……………退けと……………退けと言っている！」

トオルがゼロに叫ぶとトオルの目が赤く光だしツールギスは驚異的なスピードで加速しゼロを吹き飛ばし滅多切りにするとワタルの元に向かうがとの途中で突然横から青いLBX、ファントムが現れ

トールギスを吹き飛ばす。

「ツ……邪魔だああ!!」

トオルの怒りに反応するように目が赤く、赤くなっていくそれと同時にトールギスの限界を遥かに超えた行動を取りファントムと戦闘を繰り広げる。

「トオル……」

その様子をキョウジと戦闘していたムラクは心配そうにトオルの名を呟く。

「うおおおー!」

トオルはファントムとの戦闘を繰り広げているとトオルがファントムに叩き下ろされ地面ギリギリで体勢を立て直すと更に加速しようとしてスパーバーニアを吹かすとコントロールドポット内に鳴り響く警告音、するとスパーバーニアが爆発し今度こそ地面に叩きつけられる。

「動けトールギス! まだ! まだ! ……」

トオルは必死にレバーを動かすがトールギスは力尽きたかの様に動かない: トールギスは既に限界を遥かに超え今まで持ったのはワーカーの必死の改良とトールギス自身の意地であった。

その様子を見たファントムはゆっくりとその場を離れワタルのガウンタの元に降り立つと右腕をゆっくりとコアボックスに添える。

「止める……止めてくれええええ!」

トオルの叫びも虚しくファントムはワタルのガウンタのコアボックスを貫きロストする。

ウウー……

(拠点制圧完了……ローズシティの所有権はロシウスよりエゼルダムに移ります……ロシウスの登録機体はローズシティの敷地内より退去してください……)

「なんや……この状況は………」

「バカな……ロシウスが……こんな………」

拠点制圧完了を示すサイレンが鳴り響く頃、各国家の小隊がローズシティに集結したが、余りの出来事に何も話せなくなっていたのだっ

た
…。

第二十七戦 「新生、第5小隊」

(拠点制圧完了……ローズシテイの所有権はロシウスよりエゼルダムに移ります……ロシウスの登録機体はローズシテイの敷地内より退去してください……)

「く……くう………」

拠点制圧を告げるサイレンが鳴り響く中、トオルはワタルを守れずにただ……コントロールポットの中に歯を食い縛り泣いていた。

首都防衛戦より生き残った機体はグレゴリー小隊、ムラク小隊、トオル小隊の三小隊だけだった……その他は例外なくロストに追い込まれロシウスは事実上壊滅した。

スワン荘ではリリーナ寮長による食事が用意され通夜のような静けさがスワン荘を支配していた。

「トオルは？」

「分らん……まだ帰ってこない……」

ノインの問いにムラクは静かに答える……その頃、トオルは一人で海を眺めていた。

「また……守れなかった……」

トオルも知らなかったがムラクの直前の本拠地移動の提案のお陰で何とかロシウス消滅は間逃れたが大幅な領地縮小により生徒数が見出でしまい一部の希望する小隊は仮想国の移動が可能になっていた……当然トオルは移動する気なんでさらさら無かったが。

「笑ってくれていいよ………」

トオルは後ろに気配を感じてその人物に話し掛けた。

「トオル……」

「なんだ……バネツサか……」

トオルは声の主を当てるとバネツサの心配そうな顔を見て言葉を続ける。

「どうした？こんな所に……」

「トオルは何をしているんだ……」

「今後のロシウスを考えていた…」

トオルは自分でも何を言っているか分からなかった…ただここで弱音を吐いてはダメだ…そう思つて気丈に振る舞う。

「精銳が壊滅した今、我々はもはや小国同然だ…その為には今後の戦力きよ……………」

バキッ!

しかしトオルの強がりも強制的に終わらせられる…バネツサがグーでトオルの頬を殴つたのだ…。

「バネツサ……………」

トオルは殴られた頬の痛みを感じながらバネツサを見ると…………泣いていた…。

「何だよ…」

「……………」

「何で!!」

バネツサはそう言うのとトオルの胸ぐらを掴むと泣きながらトオルに怒鳴る。

「何で!お前は頼つてくれないんだ!」

「……………」

「あの時のみたいに!何で一人で抱え込もうとするんだよ!…………この前!お前言ったよな!私たちのお陰で安心して戦えるつて!嘘だつたのか!」

「違う!嘘なんかじゃ!」

「私は戦場だけじゃない!お前に……………」

そう言うのとバネツサはトオルの胸ぐらを離しトオルの胸を叩きながら泣き崩れるのを見てトオルはバネツサを抱き締める。

「バネツサ…………すまない…俺はただ…………心配させたくないだけだったんだ…」

「うっ……………」

泣き止まないバネツサを見てトオルも自然と涙が溢れてくる…。

(泣かないって決めたのにな…)

トオルはバネツサを抱き締めながらそう思っていた。

バネツサが泣き止むのを見たトオルは彼女をゆつくりと砂浜に座らせると自分も座り海を眺める。

「俺は…」

静かに話し始めたトオルに少し不思議に思いつつもバネツサはトオルの話しに耳を傾ける。

「俺は…この学校に…神威大門統合学園にLBXをするために…楽しんで…強くなるためにここに来た…」

「ああ……私もその為にこの学校を目指してここにいる…」

「だが……憧れ続けた学園は醜かった…」

「……………」

バネツサはトオルの呟きに何も返せなかった…自分もその通りだと思ったからだ。

「ロストしたら退学……生き残れたら明日もいられる…常にピリピリして互いに潰し合い、牽制して、いがみ合う…直ぐにロストして退学しようと思った」

「それは……………」

「だけどき…オットーとかグレゴリー先輩が居たから俺はもう少し続けてみようと思った…」

トオルの呟きは近くに隠れていたムラクたちにも聞こえており一人も話さず耳を傾ける。

「国の代理戦争……それが絡んでいたのはショックだったな……純粹にLBXバトルが上手くなりたいたい…楽しみたい…そんな思いすら……ここは気づかないうちに捨てさせて…国の道具として扱われ…LBXを動かす事を作業にしてしまう。」

「ああ……俺もそうだった…お前と出会うまでは…」

「ムラク……………」

トオルが話しているといきなりムラクが後ろに立っていた、それにトオルが驚いているとバネツサとトオルの後ろから次々と皆が集ま

る。

「フツ…当時の私が恥ずかしいよ…」

「まあ……正直自分もです…隊長」

「でも君は強かった…心もLBXもね」

「でも一人で抱えるのはいけないっすよ……トオルさん…」

「みんな……聞いてたのか？」

トオルの問いに全員が少し微笑むとトオルも笑う。

「すまんな…背中を…預けるぞ…」

「」「任せる！（っす）」「」

次の日

トオルたちは朝早くロシウスの生徒が立ち去るのを見送っていた。

「これ程と多くの同士が…この島を立ち去ることになるとは……」

同じく見送りに来ていたグレゴリーは悲しそうに呟いているとト

オルとムラクの後ろからワタルが来て二人に話しかける。

「ムラク先輩……トオル先輩……」

「ワタル…」

「すいません…ムラク先輩の大切なベリアルエッジが……」

「気にするな…」

「でも……あれがあればムラク先輩があそこまで追い詰められる事は

…」

ワタルの悲しい声にムラクも思わず顔を歪めてしまう。

「トオル先輩…ありがとうございます…あそこまで助けてくれよう

として……」

「ああ……すまなかった…助けられなくて……」

「いえ……ムラク先輩、トオル先輩……ありがとうございます……」

ワタルの鳴き声にムラクとトオルは顔を歪め、バネッサはきつく目を閉じ、ノインは顔を見せずにただ背を向けて静かにしていた。

ワタルが去り本島行きのフェリーが出発するのを全員が静かに見ていた。

ハーネス教室

「ハア〜どうなるんやろうなくトオルたちは……」

「さあな……一応消滅は間逃れた……向こうは向こうで何とかするだろう……」

スズネが机に寝そべりながら呟いているとカゲトラが読んでいた本を机に置くと答える。

「二人とも……そろそろHR（ホームルーム）だよ……」

思考の海に行きそうだった二人をタケルは元に戻すと教室にドルドキンスこと海道ジンと日暮マヒロが教室に入ってくるとジンが全員に聞こえるように話し始める。

「今日から新しく三人が配属される事になった……」

ジンの言葉にクラス全員が口々に話し始める。

「三人もかいな……」

「確かに席は一個小隊分空いていたからな……来ても不思議じゃない……」

「だけど、この時期に転校生なんて……」

スズネたちが話しているとジンに促されハーネスの制服を纏った三人の生徒が教卓の横に並ぶといきなりスズネが立ち上がり叫ぶ。

「何で！トオルがおんねん！」

「……ええ……」

ライトニング・カウントの神風トオルの名前は知っていたが顔を知らないハーネスメンバーは一斉に声を揃えて叫ぶのだった。

第二十八戦 「歓迎会」

「なんで！トオルがおるんや！」

「「「ええー」」」」

スズネの言葉で一気に騒がしくなるハーネスの教室でトオルは笑いながら昨日の出来事を思い出すのだった。

「神風トオル君だね…」

「……誰だ…」

夜中に名指しで呼ばれるなど無いトオルは厳しい目付きで睨みながら声のする方を見ると影から一人の青年が姿を現す、それを見てワーカーは激しく狼狽しながらその人物の名前を叫ぶ。

「か、海道ジン!!」

ワーカーの言葉に全員が驚く中トオルは冷静に用件を聞き出す。

「あのレジエンドプレイヤーの一人である海道ジンさんがただの学生に一体何の用ですか？」

トオルの冷静な対処を見てジンは微かに微笑むと話始める。

「単刀直入に言おう…ハーネスに加わる気は無いか？」

「本当に単刀直入ですね…理由を聞かせて頂けませんか？」

トオルは普通、スカウトは速攻に断るのだが何となく理由が気になったのだ。

「オーバードロード……だがそれだけでは僕はスカウトはしない…君はロシウスの兵士だ…少なからずロシウスに愛着もあるだろうし仲間もいる」

「ならなぜ……」

「君たちは……知っているからだ…このセカンドワールドの真実を…そして変えたいと思っっている僕たちと同じで…」

ジンの言葉を聞いて目を僅かにピクリと動かす…それを横から見たノインは（動揺しているな…）と心で思っていた。

ノインの思った通り、トオルは少し動揺していた…セカンドワール

ドの真実は教師全てが知っていることだ……問題は無い……しかしジンから発された言葉は“変えたい”だった。

「面白い事を言いますね……変えたいだなんて……この神威大門の教師が言うなんて……」

「僕はその為に……この教師になった……僕は知っている……LBXを心から楽しみたいと願う……命すら掛けた人々を……LBXはオモチャとして開発された……決して戦争の道具何かじゃない……」

「……」

ジンの言葉を聞いてトオルは静かに目を閉じ考えていると横からノインがトオルに話しかける。

「トオル……私たちはトオルの居るところが国だ……」

その言葉を聞いてトオルは横を見るとノインは笑い、ワーカーも

「隊長についていきます……側に居られるまで……」

「……分かった……すまないな……二人とも」

トオルは二人にそう言うと言とジンに手を伸ばす。

「よろしく願います……司令官殿……」

「ありがとう……」

ジンはそう言うと言とトオルの手を握り握手を交わすのだった。

その後トオルはロシウスの司令官のイワン・クロスキーにこの事を報告した……トオルは当然反対されると思ったがイワンは黙って話を聞き終わると静かに話始める。

「ロシウスとしては精鋭は壊滅しムラクもジェノツクの転属を希望している……ここで貴様に抜けられるのは避けたい……が……私は貴様がこれが最善だと判断した結果だろうと思っている……」

イワンの言葉をトオルは直立不動で静かに聞いていると言とイワンはトオルから背を向ける。

「一度しか言わん……」

「はい……」

「良くロシウスに尽くしてくれた……簡単にロストするなよ……貴様のよきな裏切り者は我々ロシウスがロストさせる……」

「はっ！」

トオルは敬礼すると静かに指令室を後にし少しトオルの中のイワンの評価が変わったのだった。

ちよつと自分の世界に入っていたトオルの目の前に灰色の髪をした男子生徒と白髪の女子生徒がトオルの前に立つと手を出す。

「クラス委員長をしている乾カゲトラだ……よろしく……」

「同じく副委員長をしている白姫路オトヒメですわ!」

「ああ……神風トオルだ……よろしく頼む……」

トオルは二人と握手を交わすと同時に他の生徒からも一斉に自己紹介を受けたのだった。

「よっしや!今日は歓迎会やで!」

「「おお……」」

スズネの言葉で更に盛り上がるハーネス一同、今日の夜は遅くなりそうであった。

そして放課後、同じくジエノックに転属したムラクたちの歓迎会と一緒にトオルたちの歓迎会を行うことになった。

しかし机の上には食事ではなくそれが持ち寄ったお菓子が乗せられておりそれを見たバネツサが小さく呟く。

「お菓子ばかり……」

「ごめんね……歓迎会の事寮長のトメさんに言うの忘れちゃって……」

バネツサの呟きに少し申し訳なさそうにジエノックの副委員長である鹿島ユノが言う。

「それでも皆のシルバークレジットを出し合ったんだぜ!」

アラタの言葉にトオルたちは驚く。

「俺たちの為に……シルバークレジットを……」

「仲間だもん……」

「うん……」

トオルの呟きにリンコとサクヤが当然のように話すとキャサリンがトオルたちに向けて

「こんだけご馳走してあげるんだから……ウォータイムでもちゃんと働

「いてよね♪」

「うわあ……うまそうやな……」

「こらスズネ……まだ食べるな……」

ジエノックとハーネスの歓迎にトオルたちは頬を緩ませ自然と笑みがこぼれる。

「それじゃあ……法条ムラク、バネツサ・ガラ、ミハエル・ローク、木場カゲトのジエノック配属と」

「神風トオル、九条ノイン、ワーカー・シクトのハーネス配属を祝って乾杯や！」

ユノとスズネの号令で歓迎会が賑やかに始まったのであった。

「ジエノック第一小隊隊長の出雲ハルキだ……」

「ろ……ハーネス第五小隊の神風トオルだ……」

「まさかムラクだけじゃなく……ハーネスにもあのライトニング・カウントがな……」

「止めてくれ……その名前は少し恥ずかしい……」

歓迎会でトオルはハーネス、ジエノック関わらずその隊長たちと話し詳しく現在の国の状況などを聞いて話し合っていた。

メカニックはメカニックで集まりその中にいたバネツサがカゲトの相談をするとカゲトが

「余計なお世話だ！俺が作ったLBXに勝ったぐらいでいい気になりやがって……」

「おい！カゲト！」

「ワーカー！いいのか？これで!?ムラクさんの機体を作れるのは俺しかないんだ！」

怒ったカゲトを止めようとワーカーが声をかけるがカゲトの怒りは収まらずにそのまま食堂から出て行ってしまった。

「ごめん！カゲトはいい奴なんだ！」

「いいよ……僕たちも悪いこと言っちゃったみたいだし」

カゲトが去ったあとワーカーはサクヤたちに謝るとサクヤも申し訳なさそうに答える。

「そう言えばワーカー君はトオルの新LBXは出来たのか？」

「まあね……途中で書き直したから時間がかかったけど出来た……あとは形にするだけだ……」

「良かったら見せてくれない?」

ワーカーが自慢げに話すと横からタケルが話しかけて来るとワーカーは

「いいよ……有名な天才メカニックを驚かす作品だ!」

ワーカーがCCMを取り出すと”それ”を見せる。

「ツ……これは……凄いね……」

「ああ……これこそ隊長の新たな相棒の」

—————

ワーカーが高らかに宣言している時、トオルはスズネとパラサイトキーなどの知っていることを全て聞いていた。

「なるほど……パラサイトキーか」

「ああ……そやでウチなんか最初は分からなかったけどな……」

「ありがとうスズネ……」

「なあ……トオル……一つ聞いてええか?」

「ん?」

話を聞き終わり食堂に戻ろうとするとスズネが質問をする。

「ウチ、聞いたんやけど……なんでツールギスにこだわってるん?」

スズネが聞いていることは一見何を言っているか分からないがトオルにとってはこの言葉だけで十分だった。

スズネが何故それを聞いたか……それはタケルがツールギスを見せて貰った時に呟いた言葉だった。

” 限界を遥かに越えてる……”

タケルからするとツールギスは最初こそ良かったが今まではトオルの操縦技術についてこれずに様々な改良をほどこしてあるがそれすら限界を越えて逆に性能が落ちているらしい……少し見ただけでそこまで分かるタケルも凄いが。

「性能が落ちているか……確かにそうだったかもしれない……前にワーカーに言われたよ……これ以上弄ったらどうなるか分からないって……」

トオルは静かに遠くの星空を見ながら話し始めた。

第二十九戦「過去」

アラタたちが神威大門を訪れる少し前…ロシウスの二強としてその名を轟かした神風トオルは大切な部下と後輩をなくした。

トオルは戦場で指揮を取りながら最前線で戦う兵士だった。

”ライトニング・カウントの戦場に敗北は無い…”

味方にとつては希望の光であり、敵にとつては恐怖の光だったのである…しかしいくら強いと言つても”この世に絶対の文字は無い”

「いや、今回も完勝でしたね隊長！」

「そうだな…」

「まあ…当然の結果だろうな…」

「トールギスのデータも沢山集まりました！」

オットー、トオル、ノイン、ワーカーはウオータイムが終わり下校中にトオルの的確な指示とその圧倒的な戦闘力に三人は心から尊敬していた。

「トオル様！今日も一段とお美しいですわ！そのトールギスも！トオル様の戦いも！」

四人が話しているといつの間にか居たドロシーがトオルの腕を抱き締めてキヤアキヤア叫ぶ。

「相変わらずモテモテだな…」

「そう見えるか？」

ノインのからかいにトオルは少し困った顔で返事をしていると遠くから叫び声が上がりどんどん近づいてくる。

「トオルから離れろおお！」

もちろんバネツサだがくっついていているドロシーにドロップキック…ドロシーは吹き飛ぶが直ぐに立ち上がりバネツサの背後を掴みそのまま後方に海老反りになりながら投げるとそのままプロのプロレスの人ビツクリの格闘戦を開始する。

「また始まったよ…」

「よく怪我しないよな…お互い…」

オットーとワーカーの言葉通り普通なら骨の二、三本は持ってい

れるえげつない技ばかりである。

「おい……止めろ……」

「はい♪」

トオルな止めると二人は直ぐに止めてトオルに向き直る、それを見てノインは少々呆れ顔で肩をすくめる。

「やれやれ……」

「これが無意識……」

「隊長も人が悪い……」

オットーとワーカーもトオルの鈍さにさすがに驚きを隠せなかった。

—————

次の日

トオルたちはアラビスタとロシウスの絶対国境線を押し上げるために少数部隊の精鋭で作戦を行うことになった：当然大変なリスクを背負う作戦だがトオルたちはこれに馴れていたし特段緊張する物ではなかった……今回はトオルの小隊を含む五小隊で作戦は行なわれその中には最近戦火を上げ続けるドロシーの小隊もいた。

「ついにトオル様の元で働かせてもらいますわ！」

「ああ……よろしく頼む……」

「ええ！」

「トオル……」

ドロシーはトオルにそう言うとは早速自分の小隊に向かうとバネツサがトオルに話しかける。

「バネツサか……どうした？」

「いや……気を付けろよ……」

「ん？分かった……」

バネツサの言葉に少し疑問に思いつつもトオルは作戦を行う為に指令室を後にした、その後ろでバネツサが心配そうにトオルが立ち去ったドアを見つめていた。

—————

そしてウォータイムが開始された。

トオルたちはクラフトキャリアで作戦区域に進入し戦闘を開始……トオルの指示の元、アラビスタの大量戦術の前にもロシウス五個小隊は怯まずにフラッグへと確実に進んでいた。

「よっしーこのままフラッグに！」

小隊の人間がフラッグに近づくと何かに吹き飛ばされブレイクオーバーする。

「狙撃だ！」

ノインの言葉に全員が物陰に隠れる。

「チツ…面倒な…ワーカー！数は？」

「ちよつと待ってください！……狙撃手と思われる機体は推定六機です！」

「よし！俺が狙撃手を片付ける…ノイン！指揮は任せた！」

「了解……」

「トオル様！御武運を……」

「分かった……」

トオルは返事をする。トールギスのスーパーバーニアで一気に空に飛び立つと狙撃手の目の前に移動する、突然視界に現れたトールギスを倒そうと再度狙撃銃を向けるが後の祭り…ブレイクオーバーされる。

「甘いな……」

トールギスは次々と狙撃手を駆逐し最後の機もブレイクオーバーさせる。

「よし……これで……」

「こちらノインだ……フラッグに侵入した…これより拠点占領行動に移る」

「了解した……こちらも狙撃手の掃除を終わった所だ……」

トオルが通信でノインと話していると後ろからジランドがマシンガンを乱射しながら近づいて来たのをトオルは素早くブレイクオーバーさせる……その際にトールギスのスーパーバーニアにかすっていたのはトオルは気づかなかった。

するとレーダーに20機ほどのLBXの大軍が写し出される。

「増援か…」

「どうする？トオル？」

「フラッグの確保が最優先だ…俺が向かう…」

そう言うのとトオルはトールギスを向かわせるとそこには当然アラビスタの大部隊がおりトールギスを確認すると迎撃行動に移るがトールギスの圧倒的な機動力の前には手も足も出ずに次々とやられていく。

「よしっ……」

トオルが勝利を確信した時、コントロールポッドに鳴り響く警告音、それと同時にトールギスのスーパーバーニアが突如止まり推力を失ったトールギスは敵のど真ん中で墜落するのだった…それを好機と捉えたアラビスタ勢はトールギスに集中攻撃を浴びせる。

「クソッ！何でこんな事に！」

トオルは攻撃を浴びながらもドーバーガンで反撃するが数が多く減った気がしない…ジリジリと攻撃をくらい続けるトールギスはいくら強固な装甲を持っているとはいえダメージを蓄積していく。

ロスト……その文字がトオルの頭にその言葉がよぎったその時……ランチャーが飛び込みジランドが吹き飛ぶ。

「隊長！」

「トオル様！」

トオルを助けに来たのはオットーとドロシーの小隊だった。

「オットー、ドロシーすまない…」

「いえ……ノインたちも別動隊の迎撃で来れませんでした」

「その機体では戦闘は無理です！トオル様！早く撤退を！」

トオルはドロシーに従い自身も迎撃しながらトールギスを撤退させる……何とか敵を振り切ったトオルたちはノインたちと合流するために急いでいた。

「もうすぐ合流ポイントです…」

「分かった…ッ！」

ドロシーの小隊の隊員がトオルに報告するとそのグレイリオが狙撃されロストする。

「そ……狙撃！」

オットーが驚くといつの間にかアラビスタの部隊に囲まれていた。

「合流ポイントまで後少しですのに……」

「とにかく強行突破だ……乱戦なら狙撃は出来ない！」

「了解！」

それを聞いた全員がトオルの指示で一斉に動き出す。

トオルはスーパードライバーを使えなくとも軽やかにトールギスを操りアラビスタ勢を圧倒するが数が多く苦戦しているその頃……ノインたちもフラッグから追い出されとても救援に行けない状態だった。

「このままだとトオルが……」

冷静なノインがこれ程焦っていたのは珍しかった。

「やむ得ない……撤退だ！トオルが殺られてはなんの意味もない！」

ノインが素早く判断を下すとその他の小隊もクラフトキャリアが待機しているポイントまで下がり始めトオルたちもクラフトキャリアのポイントに着いていた。

「トオル！無事だったか！」

「ノインか……すまない……」

「今はいい！」

謝るトオルにノインはクラフトキャリアにさっさと乗せ撤退させる。

「行きますよー！」

ワーカーの言葉を合図に次々と他のクラフトキャリアも飛び立ち戦線を離脱するがドロシーの小隊のクラフトキャリアのエンジンが敵の攻撃で被弾し黒煙を上げながら墜落していく。

「くっ……」

ドロシーは素早くクラフトキャリアのハッチを開くと降下するがもう一機のドロシーの部下は脱出が間に合わずにメカニックの乗るクラフトキャリアと共にロストする。

「ドロシーー！」

「うわっ！」

トオルが叫ぶとワーカーの悲鳴が通信越しに聞こえてくるとクラフトキャリアから変な音が聞こえ始める。

「このままだと殺られる……」

「おい！オットー！」

オットーはそう呟くと自身も機体を降下させドロシーと共にアラビスタの追撃部隊と戦い始める。

「何をしている！すぐに引き返せ！オットー！ドロシー！」

「クラフトキャリアが損傷しています！少しでも軽い方が！それにこのままではクラフトキャリアごとロストしてしまいます！」

「そうですわ！トオル様！私も既に覚悟は出来ております！」

「しかし二人とも！」

叫ぶトオルに二人はロストの恐怖と何とも言えない高揚感を感じながら答える。

「隊長の為なら！」

「トオル様の為なら！」

二人はアラビスタを次々と倒しながら派手に動き回り敵の注意を引き付けているが損傷しロストへのカウントダウンが近づいていく。

「隊長！私はあなたと言う人に心から尊敬しています！ロシウスの一小隊員としてではなく……あなたの為に働きたいのです！」

「トオル様！……私もです……その美しいトールギスでセカンドワールドを壊して下さい……トオル様の夢に私たちも協力させてください！」

「お前たちは……バカだ……」（俺がトールギスをもつと扱えていれば……）

泣きながらトオルが呟くと二人は笑い通信を切る……

「戦域からの離脱完了……」

その間にワーカーは戦域から離脱し泣きながら報告した。

—————

「うおおおお！」

「てやあああ！」

二人のLBXは片腕や装甲は吹き飛び動けるのが不思議なくらい

だった……それでも剣を振るい続けるが最後の腕も吹き飛び二人は示し合わせたように敵の密集している所に突っ込んでいく。

「トオル隊長！」

「トオル様！」

「ばんざあああああい!!!」

オットーとドロシーが突っ込みその爆発で大量のアラビスタ勢がロスト、損傷した……その引き換えに二人は跡形もなく消えたのだ……。

—————

ロストした二人はその次の日何も言わずにトオルに礼をして笑顔でこの島を去っていった……二人の顔にはなんの後悔も無く、ただ……誇り高い笑顔だけがあったのだ……。

「トオル……」

その時、バネツサはトオルに何も話し掛けられなかった……壊れそうで……崩れそうな背中をただ……後ろで見ているしかなかった。

第三十戦 「蘇りし閃光の騎士」

「そうなんや…なんか…いらん事聞いてもうたな……」

トオルの話を聞いて少し落ち込むスズネを見てトオルは少し笑うと

「ぼくか……本当に言いたくなかったら言わないさ…お前だから言っただよ……」

「なっ！」

トオルのいきなりの不意打ち（無意識）に思わずスズネは顔を赤くするとトオルが不思議そうに覗き込みスズネは慌てて

「せや！歓迎会の主役ははよ行かんと！」

スズネはトオルを会場の食堂に連れていくのだった。

そして食堂の入り口で第三小队と会々と隊長である東郷リクヤは

「あなたを仲間だとは認めませんよ…ウツプ……」

少し吐きそうな顔で認めん宣言をして寮に戻る。

「なんなんや！いきなり来て！」

「なんなんだ？」

スズネはリクヤの言葉に怒るがトオルはリクヤを含める小队のメンバーが吐きそうな顔をしていたのが気になっていた。

「おう！トオル！スズネ！待ってたぜ！」

そして食堂に戻ると食堂には純喫茶スワローの店長がおりギンジロウが大声で二人を呼び二人の目の前に上に未知なる物が乗ったココアを差し出される。

「俺が用意したギンジロウスペシャルココアだ！遠慮無く飲め！」

トオルが返答に困り周りを見渡すとコップを片手に持って屍の皆さんが見える……その中には当然ノインもムラクも混ざっており机の上でピクピクしている。

ーその後トオルとスズネも屍に加わった事は言うまでも無いだろ

う……

「……」
歓迎会から数日がたちカゲトは何かジエノツクのメンバーとうまくやっているようでワーカーもカゲトも自分の敬愛する隊長の為に新たな機体を作り上げていた。

そしてジエノツク、ハーネスの指令室にて美都先生が今まで沈黙を守っていたエゼルダム（バンデット）がハーネスを襲うと言う知らせを受けていた。

「敵、エゼルダムの拠点ジークギガンテスの攻略はジエノツクの第一、第四、第六小隊が行います」

「待ってください……」

美都先生の命令にトオルは反論をする。

「自分は第三小隊長機にパラサイトキーが搭載されていると聞きました……それを拠点に差し向けるのは危険なのでは？」

「そうね……しかし主力部隊がハーネスに向かう以上危険な所に置けないわ……それに拠点に差し向けた機体にパラサイトキーがあるなんて思い付かないでしょう……」

「リスクが高すぎます！」

「その為の第一、第六小隊の護衛です……作戦内容は以上よ……各自戦闘に備えなさい……」

なおも反論を続けるトオルを無視して美都先生は話を進めるのだった。

「……」

「珍しいな……トオルがあんなに口出しするなんて……」

「ノイン……俺たちはもつと慎重に動くべきなんだ……」

「分かっているさ……」

ノインもトオルの言い分に賛成だが納得せざる得なかった……何故ならそれがこのルールなのだから……

「……」

そしてウオータイム

トオルたちはハーネスの防衛のためにハーネスの本拠地にて守備

をしている最中トオルはコントロールポッドで待機しワーカーは新機体をハーネスのラボで最終調整に入っていた。

「来たで！」

スズネの言葉と同時に目視でエゼルダームのクラフトキャリアが数機確認できた……そして降下してきたのはグルゼオンやキャリアではなくビルゴとトールラスだった。

「全機避けろ！」

カゲトラの指示で一斉に動き出すジェノック、ハーネス混成軍そして先程までいた所にはビームの雨が降り注ぐ。

「タケル！何機おるんや！」

「ビルゴが三十機とトールラスが四十機……大部隊だ！」

「撃てッ！」

誰かの掛け声でジェノック、ハーネス混成軍は攻撃を開始するがビルゴの前に張られたバリアのような物で攻撃が防がれその代わりに大量のビームが返ってくる。

「……」

その頃、トオルは現在の状況を見てワーカーを急かす。

「ワーカー！急いでくれ！」

「後少しです！……出来た！隊長！」

「了解……神風トオル……出るぞ！」

「……」

「くう……このままやと全滅するで！」

スズネが思わず弱音を吐いた時……ビルゴのバリアごとビルゴを消滅させるような強力なビームがビルゴ、トールラスに襲いかかる。

「なっ！何なんや！」

スズネの叫び声と共に全員が後ろを見る。

「あれは……トールギス……」

カゲトラの眩きの通り後ろに居たのはトールギスだった……しかしその姿は大きく変わりきれに洗礼された姿になっていた。

右手にはドーバーガンより大きなビーム砲が上下に開き再び強力なビームを吐き出す。

「やっぱり凄いな…ワーカー君のLBXは…あれが…トールギスIIIか…」

歓迎会で聞いていたタケルを含むメカニックたちはその完成度の高さに心からの称賛を送った。

「全機…こちらは神風トオル…俺が先陣を開く！続け！」

「おおおおお!!」

神風トオル…彼はただLBXの操作が上手いだけではない…初めての戦友おも無条件で従わせる絶対的な求心力が彼の最大の力だった。

「行くぞ！」

トオルはトールギスIIIを加速させシールドからビームサーベルを抜刀…ビルゴの群れに突っ込んでいく。

「よっしゃー！ウチらは空の奴や！」

スズネはそう言うのとドットブラスライザーを浮かせるとトールラスに切りかかって行くのを見た奴らはその援護とカゲトラもバルダイバーを駆り次々とトールラスを落としていく。

「人形は味気ない物だな…」

トオルがそう呟くとシールドからヒートロッドを伸ばしてビルゴを切り刻む。

―その後、トールギスIIIの登場で形勢は一気に逆転し敵の殲滅に成功…攻撃隊もリクヤ機の秘密がばれたものの何とか帰還に成功したのだった。―

—————

そしてウオータイム終了後

「凄い！凄いでトオル！」

「本当に感激いたしましたわ！」

「本当に凄い奴だな！お前は！」

ハーネスのメンバーから感謝の言葉を言われている頃、ワーカーも称賛の声をかけられていた。

「凄いね！ワーカー君」

「でもなんで皿何ですか？」

「ああ……それは元々あったⅡの案とプロトEのプランを組み合わせて作ったからⅢなんだ……ちなみにⅡは現在のトールギスを改良して作ってノインに渡す予定だよ」

「へえ〜」

そんな話をしているワーカーたちを見てトオルは馴染めて良かったと思っていたのだった。

第三十一戦「裏切り者」

エゼルダームの攻撃を撃退したジエノック、ハーネス混成軍の全員がトオルを褒め称えその絶対的な統率力とその戦いぶりに感嘆した。

その夜、全員が寝静まった時間帯…ダック荘の外で一人の燕尾服を着た人物が電話で話していた。

「はい……東郷リクヤ機ですか…」

『うん……あとそれともう一つ持ってきて欲しい物がある…』

「もう一つでございますか?」

『うん…それは………』

—————

そしてそれからしばらく時間が経った頃、トオルはアラタの大声で目を冷まし同室のカゲトラを起こした。

「おい……カゲトラ…」

「ん……なんだ?こんな時間に?」

「何かあったみたいだ…」

「なに?」

二人は声のする方に行くとそこには既に人が集まりその中心には倒れているリクヤとそれに話しかけるアラタの姿があった。

「どうした?」

「あつ!トオル君……リクヤ君のDCオフエンサーが盗られたらしいんだ…」

「パラサイトキーがか……」

「つまりエゼルダームに……」

トオルが驚くとカゲトラが思い当たる勢力の名を呟く。

—————

そしてハーネス、ジエノックの全員が起きそれぞれリクヤの手当てと犯人と思われる綾部の捜索に出た…トオルたちは外をカイトたちは寮内を捜索することになった。

「居たか?」

「いや……こつちには居ないな……」

トオルはバネツサと共に外を搜索していたが綾部の姿どころか影も見当たらずにいると二人の後ろから声をかけられる。

「待っていたよ……神風トオル……」

「セレデュー……」

トオルはとつきに声のする方からバネツサを庇うように前に出る。

「君が来ると思っていたよ……君はもう少し有効に使うべきだ……そのオーバードロードを……」

「なに……」

「その力がどれだけ素晴らしい力か……分かっていないようだね……オーバードロードには人類の未来を変える劇的に変える事ができる……だからこそ……」

「断る……あんたに従う気は無い……」

トオルはセレデューの言葉を遮り睨み付けながら返事をする
とセレデューの気配は消えていた……。

「……」

そしてトオルとバネツサは寮に戻る。

「すまない……居なかった……」

「寮にもおらへんで……」

トオルが帰ってくる時寮のドアからスズネが報告をする……後ろのタダシたちを見るにこちらも良い報告は無いようだ。

「訳わかんないな……どうして綾部さんが……」

「エゼルダームの仲間だったとか……」

アラタの呟きにキヨカが予想を言うと言いつつジェノツクのメンバーが激しく驚き磯谷ゲンドウが悲しそうに綾部の名を呟いたのだった。

「……ワールドセイバー」

アラタが小さく呟いた単語をトオルは聞き逃さなかった。

「アラタ……なぜその名を……」

「知ってるのか？ワールドセイバーを……」

アラタの世の中の知らなさを聞き頭痛がするがトオルはアラタの質問に答える。

「簡単に言えば…世界規模のテロリスト集団…それがワールドセイバー…正義の名の元に爆破テロや誘拐を行う殺戮者だ…」

「で？アラタ…それは？」

「セレデイーが言っていたんだ…自分がワールドセイバーだって…」
アラタの言葉に全員が絶句する中ムラクとトオルは落ち着いていた…。

「これで説明がついたな…」

「ああ…ずっと疑問に思ってた…この学園は世界の国々が参加するERPその物だ…その中にいながらにしてセレデイーの正体に気づけなかった理由が…」

「セカンドワールドの運営側にも…ワールドセイバーの賛同者が入り込んでいる…」

部屋に緊張感が漂う中…居なかったワーカーが階段を大声でかけ降りて来た。

「大変だああ!!カゲトおお!!」

「うるせえ!何があったんだ…」

「プロトEの凶面が無くなって!今日寝る前にはあったんだ!」

「ツ!バカか!何でよりによってプロトEなんだ!」

ワーカーとカゲトの焦り具合にノインが聞く。

「一体何なんだ…プロトEというのは…」

ノインの質問に二人は顔を真っ青にして答える。

「プロトEは最初俺たちが共同開発していたLBXだけどスペックを追求しすぎて開発すらままならない状況になったお蔵入りの機体だ…」

「トールギスⅢの武装と高機動力、マグナオルタスの高い近接格闘能力はそのプロトEの恩恵があればこそ出来た機体なんだ…正式名は…」
「エピオン」…カタログスペックではドットプラスライザーの特殊モード以上の性能を持っている…

カゲトとワーカーの答えに黙り混む一同…正に状況は最悪の一言だった。

「とにかく…それも含めて…美都先生に報告しよう…」

「そうだな…ジンさんにも言っておかないと…」
ハルキとカゲトラはこの場を収め問題は明日の朝に持ち込む事になった。

第三十二戦 「真実と心からの叫び」

リクヤのDCオフエンサーとプロトE（エピオン）の設計図が盗まれた次の日、トオルたちハーネスはジンに昨日の事を報告した。

「以上が昨日に起きた全ての出来事です…」

ハーネス委員長の乾カゲトラの話を聞き終わるとジンは顎に手を添えてしばらく考えると

「分かった…取り合えずパラサイトキーの事は学園長に報告しよう…」

ジンはそう言うとう学校の学園長室向かいトオルたちは学園長室の前に待機しているとアラタを含むジエノック勢がやって来た。

「よおー」

「ああ……どうした？」

トオルがやって来たアラタに質問するがアラタは自然な動作で学園長室に入ろうとしてドアの前に立っていたメタ沢に止められるのを見てハーネス勢はため息を密かにつくとドアごと部屋に入ってしまった。

「はあくまったく……」

「スズネもしそうで怖いよ……」

「ああ!?!何でウチに話が変わるんや!?!」

ノインが目尻を押さえると横いたカゲトラも同じだったようでそのとばっちりを受けたスズネはぎやあぎやあ騒いでいた。

————

そしてはからずも学園長室に入れたジエノック、ハーネス勢が集まりジョセフィーヌと話していた。

「分かっているだろうけど…今セカンドワールドは最大の危機を迎えているわ…エゼルダム、いやワールドセイバーはロストエリアに入り込み…セカンドワールドを操り…現実世界を戦火にさらそうとしている……とにかくセカンドワールドを守らなければ…戦争の無い

世界の為に…」

「いつまで生徒たちを騙し続けるつもりですか？学園長…」

ジョセフィーヌの話聞いていたかのように学園の放送からセレデーが話しかける。

「ミーたちの話が聞こえているの？あなた？」

「世界平和の為と偽り…生徒たちに代理戦争をやらせる…そんなまやかしはもう止めましょう…あなたが守りたいのは平和ではない…アンダーバランスに入っている情報だ！」

セレデーの言葉にジョセフィーヌは驚きアラタたちは疑問の声を上げる。

「教えてあげよう…神威大門の生徒諸君…セカンドワールドの中核…：ロストエリアにはシステム管理のコンピューター”グランドマスター”がある…そこに収められたアンダーバランスと言うチップにはERP各国の軍事力、開発力、生産力のその他全てのデータが記録されている…つまり…：アンダーバランスを手に入れば加盟国全ての機密情報を知ることが出来るんだ…」

「なるほど…」

この話でトオルやノイン、ムラクはなぜ代理戦争をしているとはいえ戦争がキレイさっぱり消えたかが分かった気がした。

「ここでハッキリさせておく…セカンドワールドの目的は世界平和等ではない…世界の矛盾を温存する事だ…：それも一部の支配者の為に…そんなまやかしを消し去るのは我々…ワールドセイバーの目的である！」

「テロリストがいい加減な事を…」

「己の利益の為に人々を偽り弾圧する…あなたたちのような人と戦っているだけです…」

「お黙りなさい！あなたたちこそ！世界を混乱させようとしているだけじゃないの！」

ジョセフィーヌが必死に言い返すがセレデーはそれを嘲笑うように話を続ける。

「あくまでも自分は正しいと言い張るつもりですね…学園長…：美都

先生：聞いていますか？あなたは父上の美都英輔博士の行方を探している：博士がこのセカンドワールドを管理するコンピューター”グランドマスター”の開発者であることは当然ご存じですよね：その博士が三年前：この神威島に赴いたまま：行方を絶った……」

「三年前：神威大門が出来た時と同じだ……」

トオルはそう呟くと一つの可能性にたどり着く……

(いや……まさかな……)

が流石にあり得ないと思ひ言葉にしなかったがするとトオルの耳に最悪の答えが聞こえてくる。

「美都博士は管理コンピューター”グランドマスター”に閉じ込められているのです：部品としてね：セカンドワールドはそのシステムを運用するために人間を必要するのです！つまり……博士はセカンドワールドの生け贄にされたのです！世界平和を名目にして……」

「お父さん……」

そう言つて倒れる美都先生を近くにいたハルキたちが支える。

「分かったでしょう……セカンドワールドがどれだけ非人間的なものをそんな物が世界平和の為の存在であるわけがない……」

セレディーの話を聞いてアラタとムラクはジョセフィーヌを問いただす。

「アイツの言ってる事は本当なんですか？」

「学園長……」

「はよ答えつて言ってるやろ！」

「学園長！」

黙りこくるジョセフィーヌにスズネとトオルがさらに問いたただすとジョセフィーヌは吐き出すように答える。

「仕方なかったのよ……世界から戦争を無くすためには……こうするしか……これしか無かった……」

「宣言する！……これからセカンドワールドとそれを支配する者から人々を解放する戦いを始める！……すでに我々は三つのパラサイトキー全てを所持している……」

「ちい……リクヤ機のが最期だったのか……」

「まもなくロストエリアの扉が開かれるだろう…それは新しい時代の始まりを意味するのだ…では戦場で……」

その後は当然、授業所の話では無くなりハーネスの教室ではいつも通りの騒ぎは無くなり全員が黙り考えていた。

「で？…どうするんや？」

「どうとは？」

「ほら……」応ウオータイムやで……」

「ああ……」

スズネの言葉に頭がいつぱいでうまく返事が出来ないカゲトラは放送後の出来事を思いだす。

――

「セカンドワールドを守り抜くこと…それがこの学園の生徒の務めです！アンダーバランスのデータがワールドセイバーの手に渡ったら…世界は彼らの思うがままにされてしまう…そんなことをさせてはならない…今こそ……」

真実を突きつけられどうするか迷う生徒たちにジョセフィーヌは必死に話しかけているとトオルが突然ジョセフィーヌの胸ぐらを掴み壁にぶつける。

「トオル！」

「なにやってるんや！」

思いがけない行動を取ったトオルをバネツサとスズネが止めようとする。

「アンタは…アンタたちは！散々利用しておいて…いいか！今まで俺たちに何をさせてたのか分かってるのか!?俺たちは何も知らない間に！自分の祖国に銃を向けて！引き金を引かせてたのを分かっているのか！アンタたちは！」

「トオル……」

「隊長……」

トオルの叫びに思わずノインとワーカーは苦しくなる…このトオルの叫びはトオルに近くでついていた二人にとってはトオルの気持

ちは痛いほど良く分かった。

「何が世界平和だ！こんな戦争を子供にやらせてる時点で！平和なんかじゃ無いだろうが!!」

「……」

それを思い出してスズネはトオルを見るが今は落ち着いたようで自身の関で目を瞑って座っている。

「どうするんや……トオル……」

スズネが静かにトオルに語りかけると全員の視線がトオルに集中する……。

「俺はセカンドワールドを憎み…壊したいと願っていた…その為にかげがえのない者も失ってきた…だが…今はセカンドワールドを守るべきだ！」

そう言つてトオルは目を開き立ち上がる。

「もちろんセカンドワールドの秩序は壊す…だがセレディーの思い通りにさせては俺たちのように関係の無い人々が巻き込まれる事になる…それは許さない！やるぞ！俺たちで！」

「ああ……流石は我らの隊長だ……」

「俺は隊長に従います！」

「そやな！ウチらもやるで！」

「「オオoooooooooooo!!!」」

トオルの言葉に全員が賛同しいつもの活気が戻ったようにハーネスのメンバーが雄叫びを上げる。

するとトオルは数人を連れて放送室に向かうと先客が待っていた。

「やつぱりな…考えることは同じか…ムラク……」

「ああ…トオルなら来ると思っていた……」

「フツ……」

「フツ……」

放送室でトオルとムラクは笑いあうのだった。

第三十三戦 「世界連合結成」

「既に皆知っている通り……セレディー・クライスラーは世界的テロ組織“ワールドセイバー”のメンバーだった……奴等の狙いはデスフォレストの地下、ロストエリアに収められたアンダーバランスと言うチップだ……各国の軍事力、開発力、生産力これら全てのデータが保存されたアンダーバランスが奪われれば世界その物がワールドセイバーに支配されてしまうだろう……」

ジェノツクの出雲ハルキがジェノツク、ハーネスを代表して放送室でその他の仮想国に語りかけていた。

「そしてついに……セレディー・クライスラー率いるエゼルダムは今日の日ウオータイム終了間際、密かに建造していた空中空母を浮上させデスフォレストに進行を開始した！」

するとアラタがハルキが話していたマイクを取り必死に叫ぶ。

「頼むみんな！力を貸してくれ！今セレディーを止められるのは……セカンドワールドで戦える俺たちだけなんだ！サクヤの計算だと……空中空母は明日のウオータイム中にデスフォレストに到達する……でもジェノツクとハーネスだけじゃ……全く戦力が足りない……頼むみんな！世界を守るために……力を貸してくれ！」

「このセカンドワールドに思う所があるだろうが……今はセレディーを止めよう……俺たちで世界を守るんだ！」

アラタが続いてトオルも放送で語りかけるとそれを聞いていた各国の生徒たち顔を会わせ頷きあう。

「これより作戦会議を行いたい……賛同してくれる小隊長は視聴覚室に集まってくれ……」

ハルキが言い終わると放送室の扉が開きクロスキーを筆頭に先生が現れ下校の指示を出すとムラクは

「無駄です……皆真実を知ってしまった……アナタたちの目的も、セカンドワールドの正体も、そして……この学園が存在する理由も……あなた方にはもう従えません！」

ムラクの決別の言葉にクロスキーは動揺しているとトオルが

「先生……私たちは自分で判断し……行動します……己が正しいと思つた道を進みます……」

トオルもの言葉にクロスキーは黙りこみただ静かに放送室の出口を開けるのだった。

「ありがとうございます……」

そう言つてトオルは放送室を後にした。

――

そして視聴覚室には全ての小隊長が集まり席がなくて立っている人もいる状態だった……そしてハルキが前に立ち作戦を伝える。

「皆さん……ここに来て頂いて感謝します……」

「礼などいらん……当然の事だ……それよりもどのような戦略を考えたら教えてくれ……」

ハルキの礼にグレゴリーは答えるとハルキは黒板に張つてあつた図と磁石を使って説明を始める。

「分かりました……これが俺たちが建てた作戦です……エゼルダムは空中母でデスフォレストに向かっています……ですが……彼らとてデスフォレストに入るためにはLBXで降下するしかありません……そこで地上部隊をあらかじめ配備させておき降下する敵の迎撃にあてます……この方法で敵部隊の戦力を分散させ、機を見て高高度に待機させていたクラフトキャリアから空母への奇襲攻撃をかけます……そして残存戦力を殲滅し空母の動力部を破壊し可能であれば……パラサイトキーを奪還します……以上です……」

ハルキの説明を聞き終わると小隊長同士が話始める。

「なお……この奇襲作戦はジェノック、ハーネス軍のみで行います……」「たった2か国でエゼルダムの空母に？」

アラビスタの白牙ムサシの質問にハルキはあらかじめ用意していた答えで答える。

「敵はオーバーロード使いも存在します……それに対抗できるのは同じくオーバーロードを持った……ジェノックの瀬名アラタとハーネスの神風トオルだけです……」

「なるほど…つまり他の仮想国は敵を引き付けるための大掛かりな作戦と言う訳か…面白い！気に入ったぞ！これぐらいおもいきった作戦ではないとやつらには勝てん！」

「その作戦に従おう…司令官…」

「司令官!？」

グレゴリーの言葉に内心ホツとしたハルキはムサシの言葉で驚く。

「なんだ…違うのか？」

「これだけ大規模な作戦だ…司令官は必要だぞ…」

「う……」

ムサシとグレゴリーの言葉に思わず身が引けるハルキ…指揮と言う点ではムサシやグレゴリーの方が経験が豊富で学年も上だ…しかも同学年にも指揮経験豊富のムラクやトオルが居るためどうしても気が引けるのだった。

「いいんじゃない？ハルキで」

ハルキが迷う中、キャサリン・ルースがハルキに司令官を薦めると他のジェノックメンバーからも賛同の声が挙がる。

「しかし……」

「俺たちがバックアップする…従うよ…司令官殿」

トオルの言葉でハルキは決心が着いたように声を張り上げる。

「分かりました…世界の為に…司令官として全力を尽くします……では！明日のウォータム開始と同時に作戦を実行する…ロシウス、アラビスタ、ポルトン、 Rondニア、グレンシユティムの各小隊は地上に展開して敵を迎撃せよ…地上部隊の指揮はアナタにお願いします…グレゴリー先輩！」

グレゴリーは突然の指名に驚くがハルキは話を続ける。

「多数の機体が入り乱れる戦場を仕切れるのはアナタしか居ません…」

「長きに渡ってエンジェルピースを守ってきた防衛隊長…グレイビースト、その実力を疑うものは居ないでしょう…」

「それにリーブラとの掛け持ち防衛してましたしね…」

ムラクとトオルの言葉に周りからも賛同の声が挙がり始める。

「よし！心得た…」

「明日のウォータイムまで後二十一時間足らずだ…総員！作戦準備にかかれ！」

「「「おぉー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！！」」」

視聴覚室に世界を守るために集まった小隊長たちが雄叫びを上げる

「世界を守るために仮想国が一つになった…」

「世界連合の結成ね…」

ヒカルとユノの言葉を聞き雄叫びを上げる人々を見てトオルは静かに笑うのだった。

「ー！ー！ー！」

そして体育館では学園全てのLBXとメカニックが集まっていた…そして並べられた机の上にはアラビスタのジランド、ヴァルネル…ロシウスのガウンタ、グレイリオ…ロンドニアのウォルダム、パレスガーター…グレンシユタイムのG・ユークフラオ、G・レーヴェ…ポルトンのロノ、カラノア等の普段では決して見れない面子が横で並んでいた。

「これが…世界連合の全LBX……」

「すごいね…」

「これから夜通しの作業になるよ…全てカスタマイズしなくちゃいけないからね…」

「となれば…こいつが必要だろ？」

全員が感嘆の声をあげるとタケルが全員の気を引き締めさせるとブンタとワーカーが山盛りのおにぎりとおポットを持ってきた。

「トメさんに夜食のおにぎりを作ってもらったぜ…」

「同じく…リリーナ寮長からコーヒーとお茶だ！」

「ブンタ！ワーカー！」

「気が利く！」

「それじゃあ…手分けして取りかかろう…僕とサクヤ君は例の物を…皆にはLBXのカスタマイズを頼む…」

「「「了解！」」」

タケルの言葉で全員が一斉に動き出す。

「……」

そして時間は深夜に差し掛かる時トオルは寝ずに一人で海を眺めていた。

「トオル……」

「バネツサか……」

海風に吹かれていたトオルの横にバネツサが来て話しかける……海風に吹かれながら月の光りに照らされたトオルの姿は幻想的でカッコよくバネツサは思わず顔を赤くするがそれはトオルも同様でいつもより綺麗に見えるバネツサを見て僅かだが顔を赤くする。

「寝なくていいのか？」

「ああ……少し考え事をな……」

「考え事？」

「ああ……この戦いの後の事だ……美都博士を助けたらこの学園は消えるかもしれない……」

トオルの悩みにバネツサはさも簡単に答える。

「そんなこといいんじゃないか？」

「え？」

「終わってから考えようぜ……LBXは無くならない……それに私たちはいつでも会える……」

「……フツ、全く……お前と居ると真面目に考えるのがバカらしく思えてくる……」

「ム……バカにしてるのか？」

少しむくれるバネツサを見てトオルは笑う

「褒めてるんだよ……ありがとう……バネツサ……」

「え？どういたしまして？……てっ！ちよつと待って！」

トオルの言葉の意味が分からないように頭ん？を量産するバネツサの頭を撫でると静かに学校に戻っていくのだった。

第三十四戦 「ドルガルータ攻防戦」

「世界連合軍司令官、出雲ハルキです……もうすぐ……作戦開始となります……セカンドワールドと現実世界の未来は今日、ここで決まります……これが最後のウォータイムだ……世界を守るためにエゼルダムを倒そう！」

「……おお……」

体育館に集まりハルキの演説を聞いていた全員が勝利に向けての雄叫びを挙げる。

……

(定刻となりました……これよりセカンドワールドを起動します……各システム稼働チェック完了……ウォータイム開始まであと180秒……)

神威大門の生徒がそれぞれのコントロールポットに乗り込み自信のLBXを準備する。

「トールギス……行くぞ……」

「全機、通信チャンネル三番をオープン……以後このチャンネルを世界連合軍の統一回線とする……エゼルダムの機体は強力だ……複数で当たる事を忘れるな……」

(5……4……3……2……1……ウォータイム開始)

「世界連合軍、全機出撃！」

……

そしてデスフォレスト跡地(ロストエリア入口)にエゼルダムの空中空母ドルガルータが到着すると多数のミサイルがドルガルータに着弾する。

「降伏せよ……エゼルダム……抵抗を続ける場合……我々世界連合は異分子である貴様らを全力で排除する！」

地上部隊の指揮官をしているグレゴリーの言葉が開戦の狼煙となり次々とエゼルダムのLBXが降下し地上部隊と戦闘を始める。

「始まったか……」

「よし！奇襲部隊突入！」

ハルキの言葉でジエノック、ハーネス混成軍は一斉にドルガルータに向けての降下し始め敵の迎撃を避けながら上陸する。

「上陸成功！」

トオルのトールギスⅢとノインのトールギスⅡが降下した所にはビルゴの群れが集まり一斉に攻撃を仕掛ける。

「チッ！」

「クソッ！トールギス…なんて機体なんだ!？」

ノインはトールギスの圧倒的性能に驚きつつもビルゴを潰しているが横にいたトオルはもつと凄かった。

「うおおおお!!」

トオルはビームの壁と言ってもいい弾幕の中をかいくぐりシールドからヒートロッドを伸ばしビルゴ三機を一気に三機溶断すると後ろからビーム砲を撃とうとしていたビルゴを背中越しのままビームサーベルで溶断する…その爆煙からサーベルを持ったトールラス四機が斬りかかるがトールギスⅢのヒートロッドがトールラスを葬る。

「甘いんだよ…」

「……………」

「でやあああ!!」

スズネも負けじと自身の機体、ドットブラ斯拉イザーを駆りバリアを張ったビルゴものともせず潰していくと後ろからサーベルを持ったトールラスがライフルを構えるが撃つ前にトールラスの体は綺麗に別れていた。

「ウチを倒せると思ったらあかんで！」

「……………」

その頃、地上ではエゼルダームの部隊相手に劣勢だった。

「こちら地上部隊…：現在…エゼルダームに押されている…」

「だがここで退く事はできん！」

「こいつめ！」

地上部隊は必殺ファンクションで状況の巻き返しを狙う。

(アタックファンクション！サイドワインダー8！)

(アタックファンクション！ハンドレットバスター！)

G・ユークフラオの放ったミサイルがエゼルダムを襲い、パレス
ガーターの放った銃弾がエゼルダムのライディングソーサ部隊を
叩き落とす。

「……」

「これでラスト!!」

ノインが最後のビルゴをサーベルで溶断する。

「よし！ノイン動力部に行くぞ…ッ！」

トオルがトールギスⅢを動力部に向けようとした時ビルゴのビー
ム砲とは比べ物にならないビームがトオルとノインを襲う……その
発射元は当然ウイングゼロだ……それをトオルはメガキャノンで相
殺しエネルギー波がトオルたちを包む。

「クッ！」

「……」

衝撃波をなんとか耐えたトオルは再びメガキャノンをウイングゼ
ロに向ける。

「ノイン！先に行け！」

「すまない……」

トオルはノインが先に行ったのを確認するとゼロに向き合いビー
ムサーベルを構える。

「今度は…負けない……」

一ノ谷ユイはそう呟くとあるシステムを起動させる。

(ゼロモード)

するとウイングゼロから異常なほどの殺気を感じたトオルは冷や
汗を感じる…ゼロが黄色いオーラを纏うとサーベルを構えトオルに
斬りかかる。

「ッ…」

トオルは防ごうとサーベルを構えたがまるで”分かってた”よ
うにサーベルの軌道を変更しトールギスⅢを斬りつける。

「なにっ!」

トオルは距離を置こうと後退するがそれも”分かってた”よう

に一気に距離をつめて蹴り飛ばすとトオルはすぐに体勢を立て直す
がいつの間にか後ろにいたゼロがツインバスターを構えて発射：ト
オルはシールドで何とか防ぐがこのままではジリ貧だ……。

「先読みされてる……」

トオルが呟く間も防戦一方……トオルは“あの時”の感覚を思い
出すように目を瞑り再び開けるとトオルの目は赤く光りオーバー
ロードを発動させる、トールギスⅢの機動力を最大限に発揮させる。
「先読みされるなら……その先に行く……」

トオルのトールギスⅢとユイのウイングゼロが激しくサーベルで
斬り合う：普通ならトールギスが悲鳴を挙げているがワーカーの技
術力の結晶であるトールギスⅢのスーパーバーニアは悲鳴どころか
更に加速する。

「クウ……」

すると突然の痛みにとオルはうめき声を出してしまう異常なほど
の痛みには腹を押さえる：腹痛なんかではない……すると突然の嘔吐感、
口の中には鉄の味が広がる……トオルは思わず機体を止めてしまい
殺られるとも思われたがゼロも何か異常が起きたのか急に動きが鈍
くなりヨロヨロとした感じで撤退していく。

「助かったか……」

追撃したかったがトオルもそんな余力がなく突然の体の異常に顔
を歪めるだけだった。

「やはり私が……出るしかないか……」

突然のオープン回線のセレディーの声にとオルは空を見ると光学
迷彩を解除したフアントムの姿が現れる……。

「あれは……ワタルの……」

セレディーはグルゼオンを始末するとアラタとトオルに向き直り
問いかける。

「二人とも……改めて聞くけど……私と共に歩む気はないかい？」

「断る！誰がテロリストなんかと！」

「俺の意見は変わらない……」

トオルはそう言いトールギスⅢを立たせるとスーパーバーニアを

吹かしサーベルを構えてファントムに斬りかかる。

「セレディイイイ!!」

トオルのサーベルはファントムの槍に阻まれ蹴り飛ばされる。

「トオル!」

アラタがトオルをカバーするために前に出るがセレディイのファントムはアラタを圧倒し支援機のドットフェニクスも援護のためにミサイルを放つが避けられドットブラ斯拉イザーの眼前に槍を突きつける。

「愚か者め……君も不用品だ……」

止めを刺そうとしたセレディイのファントムに砲弾が着弾し爆発すると素早くその場から離れる……。

「大丈夫か?トオル?」

「ああ……すまない……」

アラタにはハルキとヒカルが……トオルにはスズネたちが駆けつけるとアラタのドットブラ斯拉イザーとドットフェニクスが合体した。

「あれは……」

トオルが驚く中その圧倒的な火力に怯んだセレディイに

「うおおおおお!!」

バル・ダイバーを持つヒカルとカゲトラが交差するようにファントムを斬りつけドルガルータに叩き落とす。

「人は暴力では動かん!」

「我々は我々の道を行く!」

待ち構えていたムラクとノインが加速し斬りつけ空中に飛んだファントムをライディングアーマーに乗ったバネツサがその巨大な槍で更に空中に飛ばす。

「トオル!」

バネツサの掛け声にトオルは返事の代わりにメガキャノンの最大出力でファントムを狙い撃ち大破寸前のファントムを見てアラタが叫ぶ。

「今だ!必殺ファンクション!」

(アタックファンクション!真刀・カムイ)

巨大なエネルギーがセレデイーのファントムを包み込み破壊するがそれだけで勢いは収まらず空母の船体を切り裂き派手にエンジンを破壊する。

「こんなに威力が…」

「作戦中止！全部隊退避！」

トオルが驚いているとハルキが素早く撤退命令を出しドルガルータを脱出する……ドルガルータが沈むと同時にウォータイム終了を告げるサイレンが鳴り響く。

第三十五戦 「小さな出会い」

「皆の協力のおかげでエゼルダームのロストエリア進行を食い止められ……アンダーバランスも守る事が出来た……ありがとう……」

「武人として当たり前前の事をしたまで……礼には及ばん……」

「司令官としてのハルキも立派なものだったぞ！」

「御苦労様……ハルキ……」

体育館に集まった世界連合軍はハルキの礼を聞いて全員が喜びの声を挙げる……その中にはトオルの姿は見えずバネツサやスズネを含む数人が笑いながらもトオルの身を案じていた。

その原因は少し前にさかのぼる。

—————

エゼルダームの空中空母であるドルガルータを沈め喜びの声を挙げながらコントロールポットから降りる人々をよそ目にトオルは沈黙を守り辛そうに顔をしかめて腹部を押さえていた……そんな様子を不思議に思ったバネツサ達がトオルに駆け寄る。

「トオル？ どうした？」

「バネツサか……大丈夫だ……オーバーロードを使って疲れただけだ……」

「無茶するな……オーバーロードは諸刃の剣なのだからな……」

「ああ……」

バネツサとノインの前でトオルは笑いながら返事をするが顔は真っ青で大量の汗が顔を伝う。

「トオル……なんか変やで……」

「気にするな……このぐら……ングッ！」

スズネの問いに返事をしていたトオルはいきなり黙り出しその後……口を押さえていた手の隙間から血が飛び出しトオルは苦しそうにその場に倒れる。

「トオル……」

それを見て思わず叫ぶ三人は必死に倒れたトオルを呼び掛けるの

だった。

その後、トオルは日暮真尋の指示で町の診療所に連れられて行った……そして夕暮れの頃、町の診療所のベットでトオルは目を覚ました。

「気がついたか……」

「日暮先生……」

「驚いたぞ……血を吐いて倒れたとワーカーが泣きながら飛び込んで来た時はな……」

「ワーカーが……」

「他にもバネツサやあのノインですら酷く狼狽しててな……幸せ者だなお前は……」

「あいつらが……」

日暮の言葉を聞いてトオルは申し訳なきような顔をする。

「もうすぐ検査結果が出る筈だ……」

「日暮先生……」

「少し待っている……」

日暮がトオルと話していると診療所の人々が部屋のドアから呼びかけ日暮を呼ぶと話をしばらくするとトオルの元に帰って来て検査結果を伝える。

「まあ……なんだ……胃潰瘍だな……」

「胃潰瘍ですか……」

「ああ……お前……苦勞してきたんだな……とにかく様子見だな……明日から退院してもらおうが処方された薬は飲むように……」

「はい……」

「じゃあ……私は用事があるのでな……安静にしているんだぞ……」

「はい……」

日暮はトオルにそう言い残し部屋から出て診療所から出るとムラクやスズネたちが待っていた。

「先生……トオルは大丈夫でしょうか？」

ムラクは日暮が診療所から出てくるとすぐに質問をすると日暮は

あくまで冷静に現在のトオルの状況を伝えた。

「トオルは胃潰瘍だった…今までストレスが溜まった結果だがそれまで症状が出ていなかった事を考えるとおそらく…」

「オーバーロードですか…」

日暮はノインの言葉に静かに頷く。

「おそろくな…オーバーロードは使用者に過剰な程の負担を強いる…適度な疲労はストレスを発散させるが過度な疲労はストレス以外の何物でもない…おそらくそれがトオルの体に止めを刺したのだろう…正直いつ胃に穴が開いてもおかしくない…言っておくが胃潰瘍は軽い病気じゃない…それは覚えておけ…」

そう言っただけで日暮は学校の方へ向かい黙りこくるムラクたちを置いてその場を去ると診療所の前でスズネはため息をつきながら呟く。

「トオル…そんなに無理してたんやな…」

「隊長をこんな目にあわせて…俺はオットーに顔を合わせられない…」

「トオル……」

ワーカーも悲しい顔をして呟くとバネツサは泣きそうな顔でトオルの名を呟くとノインがバネツサの頭を小突く。

「バカ…今までトオルは私たちを守ってくれてた証拠だ…これからは私たちの番だろう？」

「そうだよな…ごめん…ノイン……」

励ましたノインの顔にも不安の顔が伺えそれを見たバネツサは思わずノインに謝ってしまうがノインはそれを見て少し笑いダツク荘への道を歩き始め皆もそれに続いて行くのだった…。

—————

そして夜、トオルはなぜか眠れずにベットから起き上がると近くにあったCCMを持って飲み物を探しに廊下に出ると隣の病室の扉が半開きになっており中には自分と同じくらいか下ぐらいの年の少女が苦しそうに眠っていた…トオルは自販機で水を二本買うと少女のベットの隣にあったテーブルに水を置いて出ていこうとすると突然声をかけられる。

「誰？」

「すまない…起こしたか？」

「いや…いい……」

そう言うとき少女はトオルと隣のテーブルの水を見るとトオルは笑いながら頷き少女は水を手に取り飲む。

「ありがとう…」

「どういたしまして…俺は神風トオル…君は…」

「一ノ谷ユイ…ウイングゼロのプレイヤー……」

「ゼロ……あの機体……」

ユイの言葉にトオルは驚くも質問をする。

「なぜ教えたんだ？俺がツールギスのプレイヤーだと知っていただろう……」

「もう終わった…何もかも……」

ユイが落ち込むように下を見るとなんとなくほっとけないトオルは近くの椅子に座るとユイに質問をする。

「どうしてエゼルダーム…いやワールドセイバーに参加したんだ？」

「それ以外の道はなかった…生きていくためには……」

ベットの上で寂しそうにしているユイを見てトオルは頭を優しく撫でる。

「まあ…なんだ…俺にはお前の苦労は分からないが聞くことは出来る……なんてかは知らないが解決しなくても他人に話すだけで楽になるのはよくあることだ……」

トオルは自分で言いながら何故かバネッサの姿が思い浮かぶ…。

（俺もアイツにだいぶ支えられてたんだな……）

トオルの言葉を聞いたユイはベットの布団を頭から被ってトオルに背を向けると小さく

「ありがとう……」

と呟くと話さなくなった…それを見たトオルは少し微笑みながら自分の分の水を持って自身の部屋に戻ったのだった。

第三十六戦 「赤き傀儡の騎士」

診療所で一夜を過ごし朝早くにバネツサ達がトオルを迎えに来た。

「トオル！」

「バネツサ…心配をかけた…」

皆とは一足早くトオルの元に駆け寄ったバネツサがトオルに抱きつくがトオルはあまり驚かずに受け止めるとすまなそうに返事をす
る…いつもと違うトオルに少し不思議に思ったが現在の状況を考え
て思わず顔を赤くする。

「ツ…すまない…」

「あ……」

トオルはバネツサの様子に気づくとすぐにバネツサから離れる…
サツと身を引くトオルを見て若干バネツサは残念そうにするがトオ
ルは自分で自分の体温が上がっているのが分かった…この現象はト
オルには未知のもので正直戸惑っていた。

「隊長おおお!!！」

「落ち着けワーカー……」

少しきこちない二人の間に後から来たワーカーが走って来て嬉し
そうにトオルの周りで叫ぶとノインが少々飽きれ顔でワーカーをた
しなめる。

「トオル……エゼルダームの移送をするから学園長が立ち会って欲し
いと言っていたぞ…」

「そうか…ありがとうムラク……じゃあ行こうか…」

「ああ……」

ムラクは用件を伝えるとトオルはその用件通りに神威島の港に向
かった。

エゼルダーム、もといワールドセイバーの賛同者がフェリーに乗せ
られて行くのをトオルは眺めているとその中には昨日出会った一ノ
谷ユイの姿もありユイとトオルは一瞬目が合うとユイはトオルに目

伏せをしトオルは静かに頷くのだった……そんな様子をバネツサは気づき面白くなさそうにむくれていた……そして列の最後にはセレディー・クライスラーの姿がありセレディーの前に猿田学が立ち塞がると

「送還の後……お前は叱るべき方法で裁かれる……罪を償うんだ……セレディー・クライスラー……」

「フフフツ……ハハハツ!!」

猿田の言葉を聞くや否やセレディーは狂ったように笑う……それをトオルが不思議に見ていると突然フェリーが停泊している違う栈橋の海が動き始める。

「なんだ……」

トオルが呟くと海から巨大な潜水艦が浮上し姿を現す。

「戦いとは……常に先を読み手を打っておくもの……そうですよ？猿田教官？」

セレディーは勝ち誇った声で猿田に言うのと両手を伸ばし空を見上げる。

「さあ！これから始まるんだ！……本当の戦争が……」

セレディーの言葉と共に潜水艦から武装した兵士が出てきてトオル達を囲み銃を向ける……トオルはバネツサを庇うように立つとその様子をセレディーは面白そうに見ながら話を進める。

「よく聞け……これよりこの神威島はワールドセイバーの支配下に置かれる……」

「貴様ら生徒には手を出すな！」

猿田教官が叫ぶとその足下に牽制の銃弾が撃ち込まれる。

「余計な口はたたくな！怪我をしたくなければね……」

—————

その後トオル達は教室に軟禁されていると突然の爆発音に教室がざわめくがスズネが廊下の窓を見て

「本土からの偵察ヘリやと思うわ……気づいてくれてたみたいやで……」

「だとしても……状況はしばらく変わらないだろうな……」

「せやな…」

スズネはトオルの言葉を聞いて少し残念そうにすると席に座る……そして突然放送が始まりセレディーの声が聞こえる。

「神威大門統合学園の生徒諸君……セレディー・クライスラーだ……今日よりこの新しい学園長なや就任する……よろしく……君たちは……我々ワールドセイバーが何をするのか気になっているだろう……我々の目的は世界中の人々にセカンドワールドの実態を知らしめる為にある……偽善に満ちた東郷義一首相を始めとするエクスペリメント・リアリズムプロジェクトの賛同者たち……その過ちを正すのだ！……その方法だが……本日午後三時よりセカンドワールドの二十四時間完全稼働を実施……ウォータイムは定時の開始と終了を撤廃……全て私の意思で決定する……」

セレディーの言葉にワーカーが思わず立ち上がり叫ぶ。

「これじゃー！まともにLBXのメンテなんて出来ない！」

「これでは一日中臨戦体制か……」

「オチオチ寝てられへんやん……」

「せっかく理想の学校が作れると思ったのに……」

ワーカーの叫びにノインやスズネ達も愚痴を溢す。

「ウォータイムを楽しみにしておいてくれ……それから君たちの中にエゼルダムへの転入を希望する者がいれば……申告して欲しい……同じ志を持つものは……我々は受け入れる用意がある……明日の正午まで考える時間をあげよう……そうだ……瀬名アラタ、神風トオル君たちに話がある……ただちにジェノツクの司令室に来るように……」

セレディーの放送が終わるとトオルは静かに立ち上がりドアに向かってかうとノインが引き止める。

「行くのか？トオル？」

「ああ……」

「やめとき……セレディーの事やなんか仕掛けてくるに決まってるで」「だが行くしかない……大丈夫だ……ちゃんと帰って来るさ……俺に何か会ったら頼む……」

トオルはそう言うのとノインにすれ違いざまに小声で言うのとノイン

の返事を聞かずにそのまま司令室に向かった。

――

それと同時にアラタも教室から出るとその後ろを追うようにヒカル、ムラク、ハルキ達が向かういしばらくするとジェノツクの教室に兵士が入って来て

「バネツサ・ガラはいるか？」

「私だ…」

兵士の突然の指名にジェノツクメンバー全員が驚くがバネツサは堂々と兵士の前に出る。

「クライスラー閣下がお呼びだ…」

「私にか…」

「バネツサ…行つては駄目だよ…」

兵士とバネツサの会話を聞いてミハエルがバネツサを呼び止めるがバネツサは

「いいんだ…ミハエル…：トオルも呼ばれたし大丈夫さ…」

「しかし！」

ミハエルの言葉も虚しくバネツサは兵士に連れられて行く…：そして後々全員が後悔する事になる…：この時全員が必死に止めていれ
ばと…。

――

トオルとアラタはセレディイの指定された司令室に来ていた。

「どこに居るー！セレディイー！」

「瀬名アラタ…神風トオル…」

アラタが司令室で叫ぶと司令室のモニターにセレディイが映る。

「来たと言う事は私たちの仲間になってくれると言うことかな？」

「そんな訳ないだろ…」

「右に同じく…」

「私の授業を覚えているかい？」

「もう忘れたよ！」

アラタの言葉にセレディイは笑いながら話を続ける。

「では復習しよう…私は世界を一つにして国と国との間にある戦争を

無くしたいと思っっている……その為には人々を分断し操っている支配者を倒さなければならぬ……貧困や差別も……彼らが居るが故だ……では？ どうしたら支配者を倒せるか？ 単純な事だよ……我々が彼らを越えた存在になればいい……」

「はあ？」

「……」

セレディイの言葉にアラタは思わず疑問の声を挙げるがトオルは黙ってセレディイの言葉を聞いていた。

「彼らを越えた存在……選ばれし者になるんだ……」

「セレディイ……お前の言っている事は偽善の押し付けだ……」

「なに？」

「世界は変わらないだろうな……支配者がお前に変わるだけだ……」

トオルの言葉に興味を持ったのかセレディイは面白そうに笑う。

「へえ……なら言うけど……変える気すら持たない者たちより変革を求める者が支配者になれば世界は少しずつ良くなると思うよ……」

「それは否定しない……だが……仲間を切り捨て、行く宛の無い者すら計画に使おうとする奴が世界を変えれると思えないがな……もつとも力で全てを屈服させようとしている時点でお前の言葉は信用できないな……」

「フツ……まあいいだろう……神風トオル……やはり君は素晴らしい人材だ……だけどね……君はどうしても仲間になりたいと私に言うことになるだろう……」 仲間なら聞ける頼み事があるだろう？」

「なに？」

「私は今からロストエリアに向かう……」

セレディイの言葉にアラタは驚く。

「なんで!? パラサイトキーはもうないんじや……」

「キーならある……無くなつてない……」

セレディイの言葉を残してモニターは切られた。

「そんな……とにかく止めなきゃ……」

「まったく……」

トオルとアラタは急いでコントローラポットに向かうが廊下には

警備の兵がいる…どうするかとトオルが思案していると司令室のドアの横に紙が張り付けてあった…トオルが入った時には無かった物だ…。

「これは……」

その紙には警備の無い抜け穴が記してあった…。

「一ノ谷ユイか……アラタ！着いてこい！」

「ああ!!」

「……」

急いでコントロールポットに向かう二人を一ノ谷ユイは後ろの影で見ている。

「……………」

トオルとアラタはコントロールポットに乗り込みドットブラスライザーとツールギスⅢがロストエリアに急行しなんとかセレディーが入る前に追い付く。

「までー！」

「なんの用だい?」

「聞かせて貰おうか…パラサイトキーがあるとはどう言うことだ?」

「フツ…」

トオルの質問にセレディーは笑いながら手を差し出すとその上に光学迷彩を解除したファントムが姿を現す。

「それは!?倒した筈じゃ!」

「あの程度で殺られはしない…そして三つのパラサイトキーが入ったパーフェクトマスターキーはこのファントムの中にある…」

「その中に!」

「……」

「フフツ……どうする?二人とも…ファントムをロストさせてみるかい?」

セレディーの言葉と共にファントムが飛翔しアラタのドットブラスライザーとトオルのツールギスⅢを吹き飛ばす。

「チツ…」

「クソツ!」

二人は追撃しようとするがその二人に突然別方向からの攻撃を避けるとそこにはライディンググソーサに乗ったゴルドー、キャリパー……そして改修されたカーキ色のビルゴⅡの大軍がいた。

「トオル！」

「分かつてる！」

二人は機体を加速させるとそれぞれの敵を迎撃する。

「クソッ！どけ！」

トオルはトールギスⅢのスーパーニアを最大まで吹かしビームと弾丸が入り乱れる中を縦横無人に飛び回りすれ違いざまにビルゴのプラネイトディフェンサーを突破しビームサーベルで両断するとすぐに振り返りメガキャノンの最大出力でビルゴⅡ、ゴルドーたちを葬る。

「数が多い…アラタは無事なのか？」

トオルが戦闘をしながら周りを見渡すとアラタのドットブラスライザーがラグナロクフェイズになっており脅威的なスピードで戦場を駆けていた。

「オーバーロードか…アイツも使いこなせるようになったのか…」

トオルはトールギスⅢのメガキャノンで敵の陣形に大穴を開けるとアラタに向かって叫ぶ。

「先に行け！ここは俺が押さえる！」

「すまない！」

トオルの声にアラタは礼を言うと言いつつセレディの元へ急行しトオルはトールギスⅢをワールドセイバーの軍勢に向ける。

「さあ…宴の始まりだ…舞踏会はお好きかな？」

トオルはメガキャノンを派手に撃ち込むとエネルギー切れのメガキャノンを投棄しビームサーベルを抜刀…キャリパーたちを派手に切り刻んでいると突然横から鋭い斬撃を受け咄嗟にシールドで受け流すがかささず二撃目を紙一重で避けるトオル。

「なんだ!？」

その頃、アラタもオーバーロードを何度も使用しセレディのファントムと戦闘を行い後一步の所で突然の介入を受け吹き飛ばされた。

「カ…カイト……」

「フツ…セレディー先生の邪魔はさせないよ…」

セレディーのファントムを守りアラタに攻撃したのはアラタのクラスメイトである風陣カイトであった…。

そしてトオルの目の前に立ち塞がったのは全身は赤く塗装されトールギスと同じく中世の騎士を連想させるような見たため…そしてなにより目につくのは巨大なビームサーベルとトールギスⅢと同じヒートロッド持った左腕…”エピオン”である。

「これは…ワーカーが言っていたエピオンか……」

「これより任務を遂行する…」

「ッ！」

突然聞こえてきたエピオンからの通信でトオルは今までに無いほど動揺した…なぜならエピオンのプレイヤーの声が。

「私はガーディアン…ワールドセイバーの敵を排除する…」

「バネツサ!!」

バネツサ・ガラの声だったのだから。

第三十七戦 「壊れゆく騎士」

「バネツサー…なんでそんな機体を使っているんだ!!」

トオルはバネツサに向かって必死に叫ぶがバネツサはまるで聞こえていないように黙りまったく無反応だった…。その原因は少し前にさかのぼる。

—————

トオルとアラタが司令室に向かった少し後にバネツサは兵士に連れられてコントロールポットルームに来た。

「司令室じゃ無いのか?」

バネツサはてっきり人質に使われるかと思ったが予想がハズレ少し驚くがバネツサが連れてこられた先に一ノ谷ユイが立っていた。

「お…お前は……」

「ご苦労様です……」

ユイの言葉で兵士が引き上げる。

「バネツサ・ガラさん…あなたが神風トオルのかげがえのない人らしいですね……」

「なっ!」

バネツサはユイの言葉に顔を赤くする。

「あの方はとてもいい人ですね…私も少し心を救われました…」

「お前……トオルにいつ会って……」

「今、自分が任務に疑問を持ったのは初めてです…が……すいません」

「なに……を……」

バネツサが疑問の声を挙げるが突然目の前に現れたウイングゼロをが手に持っていたガスボンベから睡眠ガスを噴射させバネツサを眠らせるとポケットから機械のチャージャーを取り出しそれをバネツサの首に着けたのだった。

「しばらく眠っていてくださいね……」

—————

トオルが戸惑っているとオープンチャンネルからセレディーの声が聞こえてくる。

「やあ…神風トオル……」

「セレデイiiiiiiii!何をしたああああ!!」

「君は数年前に起きたディテクター事件を知っているかね…」

「あのテロ事件か…」

「ああ……その時に大量のLBXがテロの道具として使われた…それを可能としたのは司令コンピューターの恩恵を受けてこそだった…その際に司令コンピューターを守るために催眠状態のプレイヤーを護衛として配置したそうだ…」

セレデイーの質問にトオルはハッ!としその様子を見たかのように笑うとセレデイーは話を続ける。

「そうだーその時の物を一つ回収したのだよ…中々手に入れるのに手間取ったが…お陰でバネッサ君は忠実な下部になったわけだ…君に彼女を撃てるのかい?」

「卑怯な!」

「戦場では例え友であろうとも恋人であろうとも殺し会うものだよ…ちなみに……このエピオンが破壊されたら彼女は……死ぬ…」

セレデイーの言葉を聞いたトオルは経験した事がないほど頭が沸騰しているのが自分でも分かった。

「貴様ああああ!!」

トオルの目はこれ以上ないほど赤く光りトールギスⅢを中心に衝撃波が発生し周囲にいたビルゴⅡやキャリパー達が吹き飛ぶ。

「これほどのオーバーロードを体得したのかやはり素晴らしいぞ!神風トオル!!」

セレデイーが嬉々と叫ぶとトールギスⅢのバイザーが激しく光だし身体中の排気口から異常なまでの量を出し続ける。

「赦さん…」

トオルはそう呟くと文字通りトールギスⅢが消えた…周囲にいたビルゴⅡたちが消えたトールギスを探そうとしているとロストした…トールギスがいた場所とセレデイーのファントムがいた場所の間のビルゴが次々とロストしていく……ビルゴはトールギスの姿すら見られぬまま破壊されついにファントムを吹き飛ばす。

「なに!?!」

セレディーが驚いたのもつかの間また吹き飛ばされファントムの体からスパークが吹き出る。

「てめえだけわああああ!!!」

トオルが叫びながらファントムに迫るがトールギスⅢは横にいつの間にか追い付いていたエピオンに吹き飛ばされる。

「クソッ………ッ!」

トオルは舌打ちすると反撃しようと操縦幹を握りしめると突然の激しい痛みにもトオルはコントロールドポットの中でもがく。

「うぐううう……がああああ!」

頭が割れてそこを抉られるような尋常じゃない痛みに加え目の前はかすみ何を見ているのか分からない……手足は痺れまるで言うことを聞かない……トオルの体は限界を超えていた……オーバーロードの異常と言われるほどの覚醒スピードがトオルの体を蝕んでいた、アラタと違いオーバーロードを体得し数度に渡って使用している……そのダメージは計り知れない。

倒れたトールギスⅢを囲むようにビルゴⅡがビーム砲を向けるのをエピオンは黙って見ていた……すると突然横からビームがビルゴを襲い破壊する。

「トオル!」

「隊長!!」

「アラタ!」

その発射元はトールギスⅡ……ノインたちは兵士の目をかいくぐりトオルとアラタを救出に来たのだ。

「無事か!」

「うう……うわあ……」

ノインはトオルのうめき声を聞くと一緒に来ていたハルキに向かって叫ぶ。

「ハルキ!……このままではトオルもアラタも身が持たないぞ!」

「分かっている……しかしこの包囲網をどうやって……」

ハルキの言う通り救出に来たノインたちが通ったルートは既に塞

がれ完全に囲まれていた。

「自分がなんとかします！ハルキ！必殺フアンクションを！」

ワーカーがそう叫ぶとグレイリオがライディンググソーサから四連ミサイルランチャーを取り出す。

「……分かった……必殺フアンクション！」

(アタックフアンクション！トライキャノン！)

ハルキはワーカーの言葉の意図が分からずに迷うが他に方法も無く必殺フアンクションを撃つと包囲網に穴が空きノインを先頭にその中に突っ込む。

「来るぞ！」

ヒカルが叫び皆が見ると後ろから脅威的なスピードで追い付こうとするエピオンが迫っていた。

「来た！」

ワーカーは四連ミサイルランチャーを構えありったけエピオン向かって撃ちまくると当然エピオンは避けるがそのミサイルは爆発せず目眩むような閃光を出す……閃光弾である。

あいてが閃光で足止めされているうちに全員はなんとか逃げ出すことに成功したのだった。

—————

その後、トオルとアラタは保健室に運ばれたがアラタが目覚めてもトオルの意識は戻らずアラタから聞いた出来事に全員が言葉を失っていた。

「そんな……バネツサが……」

「クソッ！あの時必死に止めていれば……」

「スレイブプレイヤーか……」

みんなが悲しむ中ジンがボソリと呟くとムラクが聞く。

「スレイブプレイヤーってなんですか？」

「ああ……プレイヤーを強制的に催眠状態に陥らせて操られているプレイヤーの事だ……恐らくディテクター事件の奴が……」

「あつ！ディテクター事件ってセレディーも言っていました」

ジンの説明にアラタも反応し全員が話始めると後ろから日暮先生

がジンを呼びつけ部屋を出ると小声で話始める。

「トオルは危険だ…ただでさえ精神が不安定なのにこの追い討ち…このままでは精神崩壊の恐れもあるぞ…」

「日暮先生…実はオーバードの実験データにも精神崩壊を起こした事例があります…」

「それじゃ…」

「ええ…このまま行けば確実にトオルは…二度と普通の生活には戻れないかもしれません…」

第三十八戦「誓い」

「トオルが……」

ジンと日暮の話を密かに聞いている影があった……ノインである。

「なんと言う事だ……」

ノインは思わず頭を抱える……バネツサは操られトオルのこれ以上の戦闘は好ましくない……いや……させてはいけない……しかし状況は常に最悪を示し進む所か退くことすら許されない状況。

「トオル……どうすればいい……」

頼つてはいけない……そう思っても頼りたくなる自分にノインは嫌悪感を覚えたのだった。

――

その頃、一ノ谷ユイと綾部連次郎はコントロールポットルームではセレディーが言うにお楽しみみの仕掛けをしていた。

「まさか……ユイさん……貴方が手伝ってくれるとは……」

「いえ……自分でもよく分かりません……ただ……聞いてくれる人が出来たので……」

「は……」

ユイの言葉に綾部が疑問に思うがユイは気にせずに作業を続ける。
(自分で考える……それを決めたから……)

ユイとトオルの出会いにはユイの一步を背中から後押ししたのだった。

――

目を覚ましたアラタも帰った頃……トオルはやつと目を覚ました。

「ここは……」

「トオル！」

トオルが目を覚ました時ドアが開きトオルを呼ぶ声が聞こえトオルはきしむ体を無視してそこを見るとノインとワーカーがいた。

「……」

トオルは一瞬…バネツサが呼んだと期待した自分を嫌悪した…：そんな様子を薄々気づけながらもノインとワーカーはトオルに話しかける。

「大丈夫か？」

「ああ…：すまない…：バネツサは？」

「…：隊長…：バネツサは…：」

「やっぱり夢じゃないか…：」

トオルは分かっていた筈の答えに落ち込んでしまうのを見てノインは悲しそうな顔をする。

「トオル…：すまない…：助けられなくて…：」

「気にするな…：ノイン…：…：過ぎた事だ…：それにまだ救出のチャンスはまだある…：」

トオルは心の中でため息を着いたのかその顔はとても疲れているようにノインとワーカーの二人には見えた…：言ってみればジェノック、ハーネスの快進撃から怒濤の日々を送っていた三人はいつの間にか剣を交えたハーネスに居る…：今考えてみれば凄い事してきたと言えるだろう…：。

「トオル…：」

「ん？」

トオルはノインに話しかけられノインの方を見るとノインは真剣な表情で話す。

「私とワーカーはお前に着いていくと決めている…：お前以外の下に着く気もない…：例えそれがムラクであろうともな…：だから私はお前に無理をするなど言うべきなのだろうが…：どうせ聞かないからこう言っておく…：…：どんな事があったても私たち二人は必ずお前の元に戻ってくる…：だからお前も…：必ず戻ってくる…：と誓え…：」

ノインは真剣な表情でトオルを見つめるそれは隣に居たワーカーも同様でその二人を見たトオルは深呼吸すると不敵に笑いながら答える。

「ああ…：誓おう…：…：第5小隊は俺の小隊だ…：」

「フツ…：」

「隊長…」

トオルの答えにノインとワーカーは「トオルが隊長であつて良かった」と心から思ったのだった。

「……………」

その後無事にトオルたちは下校し次の日……登校したトオルたちを待っていたのは校内至るところにえる監視カメラだった。

「あれは…」

トオルがハーネスの教室に来て聞くとスズネが答える。

「全く…なに考えてるんやろな…校内至るところにあるで…」

「これじゃ完全に身動きが取れないな…」

カゲトラもスズネに賛同したため息を着くと突然放送が入りセレディーが話始めた。

「おはよう…神威大門統合学園の生徒諸君……もう気づいていると思うが…校内にカメラを設置した…既にこの様子も…全世界に放送されている…」

「なんのつもりだ…」

「これで世界中の人々がこの学園の秘密を知ることになる…では……さっそくウォータイムだ……まさか忘れてないよね…開始と終了は私が決めると言ったこと…スタートだ」

（ウォータイム15分前となりました…全プレイヤーは戦闘の開始に備えてください…）

ウォータイムの放送が入りそれぞれプレイヤーは自身の仮想国の司令室に集まりセレディーの放送を聞いていた。

「場所はロストエリア…そこでワールドセイバーと世界連合との戦いを行う…あと…君たちの為に面白い仕掛けを用意した…楽しんでくれ…」

セレディーの嘲笑うかのような口調にトオルは顔を険しくしていた時、とジンが美都博士の事をはなしていた。

（各システム…稼働チェック完了…ウォータイム開始まで………180秒）

プレイヤーが自身のコントロールポットに走る中トオルの横に

ワーカーの姿があった。

「ワーカーも行くのか…」

「はい…今は少しでも戦力が欲しいですから」

「誓いを忘れるなよ…」

「お前もな…」

「ああ…」

トオルがワーカーと話しているとノインもトオルに釘を差し笑い会う…そしてコントロールポットに乗り込むとトオルはトールギスⅢをセットするとスズネ達のクラフトキャリアに乗せてもらい出撃する。

(5…4…3…2…1…ウオータイム開始)

「ロストエリアに到着したよ…」

「ありがとう…」

「ほな…行くで!」

報告してくれたタケルに礼を言うときスズネが叫び勢いよく投下される…トオル、ノイン、カゲトラは背部のスラスターでゆっくり降下しスズネとワーカーも背中に着いた降下用スラスターで降下すると床に降り立ち周りを見渡すと暗闇からゴルドー、キャリパー、ビルゴI、II、トーラス、ライディンググアーマーを着けたバル・スパロス…そして…エピオンの姿も確認できた。

「バネッサ…」

トオルはエピオンを視認すると悔しそうに唇を噛み締める。

「トオル…」

「分かってる…」

トオルがノインの声に答えるとワールドセイバー側からライフル等による攻撃が開始され世界連合側も攻撃を開始する。

「行くぞ!!」

するとワーカーの重装型グレイリオの火器が一斉に火を吹く…両腕に装備されたダブルガトリングガンと腰から足元まであるミサイルポッドから一斉にミサイルを吐き出すとワールドセイバー側を火の海の変えるが爆煙からトーラスが飛び出しサーベルでワーカー

を襲うがカゲトラのバル・ダイバーが一刀両断にする。

「無事か？」

「ありがとう…カゲトラ……」

「俺が護衛する……お前は撃ちまくれ！」

「了解！」

そう言うときカゲトラはワーカーの弾幕の中、ワールドセイバーに斬りかかる。

「アタックファンクション！」

（アタックファンクション！月下乱舞！）

バル・ダイバーの放った桜を纏った斬撃はワールドセイバーのLBXを斬り刻む。

「はああ！」

との時トオルはエピオンと激しい戦闘を行っていた。

「バネッサ！目を覚ましてくれ！」

「……………」

トオルの悲痛な叫びにもエピオンは耳を貸さずにサーベルでトルギスIIIを斬り着けるがトオルは反撃が出来なかった。

「クソッ！」

エピオンを倒せばバネッサが助かるならトオルは迷わず攻撃するだろうがバネッサの命がかかっている為に迂闊に攻撃出来ないのだ。

トオルがエピオンと戦っていると上から巨大なものが降り立つ。

「なんや!!」

ゴルドーを斬ったスズネが叫びながら見るとそこには「三体いた」……赤い装甲に通常のLBXの1・5倍程の大きさを誇るビルゴタイプ…要塞防衛用LBXスコープオ二体とデスフォレストを壊滅まで追い込んだラージドロイド、ドラガンゼイドの進化型サイロンガーターが世界連合に襲いかかる。

「ラージドロイドはジェノックに任せろ！」

「わかった！ハーネスはあの赤い奴だ！」

「……了解！……」

ハルキがカゲトラに言うときカゲトラはハーネス全員にスコープオ

を攻撃するように指示を出す。

「行きますわよ！スイ！シエリー！」

「了解！」

白姫路オトヒメはスズネから譲り受けたドットフェイサーを駆りスコープオに迫り斬りかかるが見えないバリアのような物に攻撃が阻まれる。

「これは…あのビルゴと同じ物……」

オトヒメが驚くが周りこんだスイとシエリーがバズーカとガトリングガンの攻撃でスコープオを怯ませる。

「やった！」

「まだまだです……来ます！」

シエリーは喜ぶがスイは素早く警告を発しスコープオのビームベイトネットの攻撃をかわすがスコープオはその後の三人の攻撃を受けても怯むが目立ったダメージが与えられない。

「グツ……固いですわね……」

「援護する……」

すると別方向からスコープオに砲撃が当たる。

「スイ……今回は礼を言いますわ……」

「フツ……行くぞ……」

第三、第四小隊がスコープオと戦っている頃、もう一機のスコープオは第二、第一小隊が当たっていた。

「必殺ファンクション！」

(アタックファンクション！トライキャノン！)

ギンジロウが放ったトライキャノンはスコープオのA・Sプラネットデイフェンサーが防ぐと肩と胸からミサイルを吐き出しギンジロウたちに襲いかかる。

「クソッ！」

「あらあら……」

ギンジロウが必死に迎撃する中、巴シズカはバル・スパロスを駆りミサイルの中を潜り抜けると足首を攻撃しスコープオはバランスを崩す。

「行くで！必殺！」

(アタックファンクション！ビッグバンスラッシュ！)

スズネのドットブラスライザーが空中から巨大なエネルギー刃がスコープを襲うがスコープはA・Sプラネットデیفエンサーで防ぐが少しの拮抗の後バリアが力負けしスコープを包み込む。

「やったか？」

カゲトラが爆煙の中伺うと巨大な腕が煙から出てきて第二小隊のテツペイが捕まる。

「マジかよ！」

「テツペイ！」

ギンジロウたちが攻撃するが固い装甲にびくともしない……そうしている内に両腕に掴まれたテツペイのDCエアリアルから軋む音が鳴り始める。

「はよ離さんかい！」

「クソッ！」

軋み始めるDCエアリアルを見てスズネとカゲトラが焦っていると上空から雄叫びを挙げながらトールギスⅡのノインがサーベルをかかげながら突っ込む。

「うおおおおお!!」

ノインはサーベルで腕を斬り着けるが少し溶断するだけで止まるとノインは警告を無視してサーベルの出力を最大にする最大出力のビームは柄を溶かしながらスコープの腕を溶断するとスコープは煙を上げながら爆発する。

「ありがとうな……ノイン」

「気にするな……」

ノインは使えなくなったビームサーベルを捨てるとドーバーガンを構えなおしているとオトヒメから通信が入る。

「こちら第三小隊……敵の新型を撃破しましたわ……」

「そちらの被害は？」

「正直酷いですわ……まともに動けるのは半分ぐらいです……」

「了解した……すぐにクラフトキャリアを呼ぼう」

ノインは冷静に対処していく中、トオルが戦っているであろう方向を見ているとカゲトラが

「行った方がいい…スズネも行ってやれ……」

「……すまない」

「分かった…行くで！」

カゲトラに従いスズネとノインはここを任せてトオルの元へ向かうのだった。

その頃、トオルは諦めずにバネツサに話しかけていた。

「バネツサ！気づいてくれ！」

トオルの声を聞いてもエピオンは攻撃の手を緩めないエピオンはトールギスⅢを吹き飛ばすとヒートロッドで襲いかかるがトオルもヒートロッドを出し迎撃するとすかさずエピオンはサーベルで斬りかかりサーベルで受け止めるが反撃が出来ずに防戦一方のトオルは集中力が少しずつ削がれていった。

「クソッ！」

トオルはこのままではヤバイと本能的に思い始めた頃……サイロングーター付近で爆発が起こりセレディーの声が響き渡る。

「その通り…あれは毒ガスです…ロストするとコントロールドポット内の生徒はガスを浴びて死ぬことになるのです…」

「なっ……人の命をもてあそんで……」

余りの事に唾然とするトオルが怒ると同時に目が赤く点滅し始める…そして何かに呼ばれたのかエピオンは突然踵を返し飛び去っていく。

「なっ！待て！」

トオルがエピオンを追いかけようとするやと突然トールギスⅢの周りに光が発生しトオルの視界を奪うとエピオンは居なくなっていた。

「くそがあああー！」

トオルの悲痛な叫びが響き渡る時、セレディーは怪しく笑うのだった。

第三十九戦 「散りゆく者たちの咆哮」

「もしオーバーロードに目覚めた理由があるとしたら…それはお前達のような奴から…皆を守るためだ！」

ドットフェニックスと合体したアラタのドットブラスライザー・ジーエクストが空中に現れたらフロントムを破壊したかに思われたがその爆煙から現れたのはまるでエイリアンのような外見をしたLBXだった。

「あれは外装だったのか…なら…あれが本体…」
「……フツ……」

セレディーが笑うとセレディーのLBXの周囲に滞空していた六つのビットが強力なビームを放たれると地上に展開していた世界連合軍のLBXに襲いかかる。

「う……うわああ！」
「止めてくれええええ!!」

逃げ切れなかったジランドやガウンタたちが次々とロストされコントロールポット内の生徒は迫り来る毒ガスに悲鳴を挙げる、そのビットはまるでその反応を楽しむかのようにソード形態に変型しハーネスにも襲いかける。

「クツ……捉えられませんか！」

オトヒメはゼットシユーターで迎撃するが気配すらない…オトヒメが目の前のビットに気を取られる間に後ろのスイとシエリーにも襲いかかる。

「きやあああ！スイ！隊長！助けて！」

シエリーの悲鳴でオトヒメとスイが後ろを向くとソードビットで空中に撥ね飛ばされたシエリーのセイレーンはそのまま空中でビットのビームを浴びて爆散する。

「シエリーいいいいい！」

「そんな……」

呆然とするスイのセイレーンにソードビットが襲いかかるが当然スイは反応できない…スイ自身も死を悟った時、アラビスタのヴァルネルが盾となり爆発する。

「スイー！フウー！あなた達は生きなさい！」

「ハッ！お姉ちゃん！イヤアアア！！」

スイはさっきのヴァルネルが自身の姉である二宮リンの物であると分かる泣きながら叫ぶ。

「クッ！」

その頃、トオルもビットを迎撃しようとメガキャノン撃つが小さく素早いビットには中々当たらない…トオルが苦戦している時、通信の悲鳴の中からワーカーの悲鳴が鮮明にトオルには聞こえた。

「わあああああ！」

ワーカーはトオルとノインと少し離れた所でダブルガトリングガンを撃ちながら後退するも前も後ろもロストの嵐…ついにその矛先がワーカーに向かう。

「隊長にこれ以上迷惑はかけられないんだよ!!」

ワーカーの悲鳴も虚しくワーカーのグレイリオはソードビットにジワジワと追い詰められ武装も弾け飛び機体からも火花が散るがワーカーは近くにあったライフルを拾い撃ちまくる。

「うおおおおお!!!」

「ワーカー!!」

トオルはスラスターを限界まで吹かし助けに向かう。

「間に合え…間に合え…間に合ってくれええええええ！」

トオルの叫びも虚しくワーカーのグレイリオにソードビットが刺さろうと言う時に何かに突き飛ばされ何とか無事にすんだワーカー…だが元居た場所を見たワーカーの顔は絶望に染まった。

「クッ…クッ…クッ…」

そこに居たのはソードビットが無惨に三つも刺さり立っていたトールギスⅡだった…。

「ノイン！」

「トールギスはトオルと同じで…繊細な機体だ…お前は生きろ！」

ワーカー！……世界を！いや……トオルを！頼むぞ！」

ノインの叫びと共にトールギスⅡは爆発しノインからの通信も遮断され画面からはノイズだけが残った……。

「嘘だ……」

「ノイン……バカな……」

ワーカーとトオルが呆然としている時……ビットの攻撃は止みせレディイの聲が響き渡る。

「これで分かっただろう……君たちに勝ち目は無い……」

「セレディイー！貴様あああ！」

セレディイの声を聞いた途端……トオルは叫びながらセレディイのLBX”デイ・エゼルデイ”に向かいサーベルで斬りかかるがビットに邪魔され吹き飛ばされる……一緒に攻撃を仕掛けたアラタのジーエクスとごとビットのビームが二人に襲いかかるがそれから守るようにマグナオルタスとドットブラスライザーが立ち塞がる。

「ムラク！」

「スズネ！」

爆煙の中、ムラクのマグナオルタスとスズネのドットブラスライザーがラグナロクフェイズ形態に成り出て来た二人は別方向からデイ・エゼルデイに攻撃を仕掛ける。

「必殺ファンクション！」

「行くで！必殺！」

（アタックファンクション！カタストロフィー・ドライブ！）

（アタックファンクション！雷神拳！）

二人の強烈な必殺ファンクションがデイ・エゼルデイを襲うがビットでシールドを展開し防ぐ。

「なに！」

「なんやて！」

驚く二人にソード形態になったビットが襲いかかり吹き飛ばす。

「ムラク！」

「スズネ！」

アラタとトオルが叫ぶとウォータイム終了のサイレンが鳴り響く。

(終了時間となりました……本日のウォータイム……終了します……)

「生存者諸君……直ちにLBXを回収せよ……各自メンテナンスを行い……次のウォータイムの準備をせよ……」

「クツ……セレディー……」

「全世界の人々よ……ご覧の通りだ……これまでの戦いでは……LBXの破壊と操る者の生死は関係なかった……しかし……戦争に置いて死は避けて通れない……LBXがロストすれば本当に死ぬのだ……私はウォータイム等と言う戦争行為で世界を守れると信じている者たちを……断罪したかった……この者達はその尊い犠牲と言う訳だ……全世界の人々よ……あなた方は私を残酷と言うだろう……その批判は甘んじて受けよう……何故なら……あなたたちに目覚めて貰う事こそが……私の願いだからだ……」

全世界に鳴り響くセレディーの声をテレビの前で聞いている者たちが居た。

「トオル様……」

「隊長……」

「トオル先輩……ムラク先輩……」

かつての部下は隊長を想い……後輩たちは先輩を想った。

「生徒たちの死で試されているのは……安穩とあなた方自信だ……これが今日の犠牲者達だ……称えてあげて欲しい……」

セレディーの言葉が終ると同時に画面が切り替わり生徒たちの写真が並んだ物が画面に映る。

「ノイン……」

かつて同僚だったオットーはノインの思いもよらない出来事に哀しむ。

「アイツの事だ……仲間を守って逝ったんだらうな……」

「ノインさんが……そんな……」

そしてドロシーもその事実には呆然とする。

「ノイン先輩……僕はまだ色々教わりたかったです……」

ワタルはクールだが気さくなノインの事を思い出し涙するのだっ

た。

第四十戦 「理解できない」

「おい！返事をしろ！」

「返事してくれ！」

コントロールポットルームに響く悲鳴の中……トオルは一つのコントロールポットの前に座っていた……それを横でワーカーが黙って見守る。

「隊長……」

「なあ……ワーカー……」

「はい……」

「なんの為の力だったんだ……」

トオルの呟きにワーカーは歯をくいしばって泣きながら聞く。

「オットーとドロシーを失ってもう後悔しないと決めたのに……」私は
”バネツサやノインまで失ってしまった……”

「え……隊長？」

「どうした？」

「あ……いえ……」

ワーカーは一瞬トオルに違和感を感じたが感じたワーカー自身もよく分からずに黙ってしまう。

（今……隊長が私って言ってたような……）

ワーカーが感じた事は現在のトオルの状況を正確に表していた……元々胃潰瘍になるまでにトオルの精神は削られ更にオーバーロードとノイン……そしてバネツサの喪失はトオルの精神をすり減らしポロボロになっていた……つまりトオルのこの自身の名称が俺から私に無意識に変わっているのは精神崩壊の一步……いや半歩手前なのであった。

「……くそが……ノインの為にもバネツサは必ず俺が助ける……」

「そうですね……隊長……」

静かに壊れていくトオルの姿を見てワーカーは自身の無力さに手

を握りしめるのだった。

そしてトオル達は兵士たちの誘導で自分達の教室に戻ったがいつものとは違いピリピリとした空気が漂っていた。

「くそっ……テツペイ……」

「隊長……」

「タイチヨウ……」

壁を叩いて哀しむギンジロウをシズカとジヨニーは静かに見ていた……先のデイ・エゼルデイのハーネスの被害は相当な物で第二小隊はテツペイを第三小隊はシェリー、第四小隊はオオジとムネモリ……そして第五小隊はノインを失い人数はプレイヤーだけで言えば半分が居なくなっていた。

「トオル……あんた大丈夫なんか？」

「大丈夫だ……」

トオルの青ざめた顔にスズネは心配するがトオルはあくまでも大丈夫だと言い切る……しかしトオルの顔は誰がどう見ても酷い有り様だった。

「シェリー……」

「グスツ……ごめんなさいフウ……私のせいでお姉ちゃんが……」

「スイ……いいよ……お姉ちゃんらしいじゃん……」

「オオジ……ムネモリ……すまない……」

「皆……やっぱり酷いね……」

「ああ……俺も正直……逃げ出したいよ……」

皆の様子を見てタケルとカゲトラは呟くとスズネがやって来た。

「なあ……カゲトラ、タケル……トオルをやっぱ保健室に連れてった方がええと思うんやわ……」

スズネの言葉を聞いてカゲトラとタケルはトオルの様子を見ると同意する。

「そうだな……」

「保健室に運ぼうか……そうだ……ジエノックも様子を見ていこうよ……」

「そやな……向こうも大変やからな……」

タケルの提案に賛同するカゲトラとスズネ……しかし正直二人もこの空気の教室から出ていきたいと言う思いがあったのは間違いないだろう……。

—————

日本本島、ワールドセイバー対策本部

「八神さんか……」

「神風部長……」

八神英二は日本の東京に置かれたワールドセイバー対策本部を取り仕切っている神風サトシの元へ訪れていた。

「八神さん……まさか神威大門が狙われるとは……」

「神風部長の息子さんも……神威大門に？」

「ああ……あいつは強い子だ……だが……溜め込む所があるから……無理しなければいいんだが……」

—————

その頃、トオルは半強制的に保健室に連れられベットに横になっていた。

「最近……ベットに寝てばかりだ……」

トオルが呟くと日暮が

「それだけお前は無理をしていると言う事だ……全く……しかしオーバードを使わなかったのは誉めてやる……アラタが使った時にお前も使うかと思っただが……」

「いえ……俺は確かに発動しました……しかし発動しませんでした……」

トオルの言葉を聞いて黙っていたジンはトオルに諭すように言う。

「トオル……それは君の体が発動を阻止しているからだ……」

「体が……」

「ああ……恐らく君の体と心はもうもたない……だからこそトオルの体がそれを阻止するために無意識的に止めたのだろう……だからもう使うな……本当に死ぬぞ……」

ジンの真剣な気配にトオルは思わず冷や汗を掻く……”死”その言葉がトオルに重くのしかかる……。

「それでも……俺はバネツサを救いたいんです……」

「トオル…」

「俺は！ノインの為に…いや自分自身の為に！バネツサを救いたい！……あいつは俺の光なんです…落ち込んだ時は太陽のように励まして…傷ついた時には月のように癒してくれる…自分にもよく分かりませんが…他の人とは違う何かを持つてるんです…」

ジンはトオルの独白に思わず黙ってしまふ。

「理解できないですよ…死ぬのは恐いです…死にたくない…でも…それで諦めたら…一生後悔する気がしてしまうんです…それにここで止まったらノインにぶん殴られそうで…」

トオルは自身で言った言葉に自分で笑う。

「全く…だったら寝てろ…少しでも回復するんだな…」

「了解……」

トオルは日暮に言われ目を瞑ると直ぐに寝息が聞こえる。

「日暮先生……」

「アイツの意思は固い…私たちには見守る事しか出来ないさ…」

ジンは日暮の言葉を聞き直ぐに寝たトオルを見る…酷い顔だ…トオルの顔を見たジンはより一層事態の早期解決を胸に誓うのだった。

—————

そしてトオルが眠った少し後…神威大門の地下…セカンドワールドの出入り口に潜入した伊丹キョウジと美都玲奈の前に銃を構えた一ノ谷ユイが対峙していた。

「ほう……俺の邪魔をすんのか……ユイ？」

「……何をするつもりです…」

「ちよつとセレディーの困らせたいだけさ…」

「なら……行かせる訳にはいきません…」

「ほう…わざわざ毒ガスを入れ替えてたのにか？」

「!？」

キョウジの以外な言葉にユイは体を震わせる……それを見たキョウジは更に言葉を続ける。

「知ってるんだぜ…お前は今回が初めての作戦なんだろ…」

「それが…」

「人を救うために入ったって聞いたけどな…迷ってんだろ？」

「……」

「こんな事までして人が救えるのか…ってな」

ユイはセレデューにジェノツクの司令室にトオルとアラタか呼ばれてその時…盗み聞きしている時…中でトオルが話していた内容が頭によぎる。

(世界は変わらないだろうな…支配者が変わるだけだ…)

(人をいく宛も無い人を利用して…奴を俺は信用できない…)

「……」

黙りこくるユイを見てもう一押しと思ったキョウジはニタリとしながら止めを刺す。

「わざわざこの警備を下げたのもセレデューに反対だからだろう？」

キョウジの言葉を聞いたユイはゆっくりと銃を下げるとさっさと行けとジェスチャーをする…それを見てキョウジは満足そうにユイ横を通りその後ろにいた美都玲奈がユイに話しかける。

「ねえ…教えて…伊丹キョウジが言ってた毒ガスを入れ替えてたってどういう事？」

「さあ…なんの事でしょう……」

ユイはそう言って美都玲奈を無視してキョウジとは逆方向を歩き出し出口に向かうのだった。

第四十一戦「救出」

(ウォータイム起動15分前です…全プレイヤーは戦闘の開始に備えてください…)

学校中に無機質なアナウンスが響き渡るとトオルは保健室のベツトで目を覚ました…。

「来たか…」

トオルは体を起こすと制服の上着を着て保健室から出ようとする
と後ろから日暮に呼び掛けられる。

「おい…ちゃんと戻ってこいよ…」

「了解です…」

トオルは返事をする
と保健室の前にワーカーが立っていた。

「ワーカー…すまないが今回は…」

「了解です…ご無事で…」

そう言う
とワーカーはトオルにツールギスIIIを差し出しトオルは
それを受けとる。

「じゃあ…サポートを頼む…」

「了解!!」

—————

美都先生がセカンドワールドに侵入しそれをセレディは攻撃する
ように世界連合に命令を下すが当然全員従うはずも無くワールド
セイバー討伐のためにロストエリア入り口に向かっている時…戦況
観覧室では先生が兵士監視の元…世界連合の行動を見ている中向
かったロシウスの司令官であるイワン・クロフスキーは兵士に気づか
れぬように目線だけ横に座っていたアラビスタ司令官のキース・
ジョーダンと目を合わせるとキースはイワンの姿がギリギリ兵士き
ら見えないように体を僅かに動かす。

「すまん…行け……」

イワンは小さな声で礼を言うとカウンターを出撃させ兵士にばれ

ないようにダクトの中に入るのだった。

「……………」

ロストエリア入り口にワールドセイバー軍は上空より接近していた美都先生を目視するとカイトの指示で攻撃を始めようとしていた時、突然の攻撃でワールドセイバー側のLBXが数機ロストする。

「お前は！伊丹キョウジ！」

「これ以上切り刻まれたくなかったらセレデイーをよべえ……フッフツ……ハツハツハツ！」

キョウジの狂気的な発言に思わずワールドセイバー側は腰が引けてしまうがそれでも横合いからグルゼオンを攻撃しようとしたLBXが”消滅した”。

「なに！」

「ハッ！テメエも来たのかあ！」

「……」

爆煙の中に煌めくツインアイその爆煙から姿を現したのはワールドセイバー側は”だった”筈のウイングゼロだった。

「なにい！」

ワールドセイバーの指揮官であるカイトは驚愕するが対するユイはただ黙ってツインバスターを構える……ビルゴIIがプラネイトデیفエンサーを展開するが全くの無意味で他の機体を巻き込んで爆発する。

「一ノ谷ユイ！貴様は私たちの味方ではないのか!？」

「ワールドセイバーに忠誠を誓った覚えはない……生きるために居た……ただそれだけ……でもそれも終わり……私は私の道をゆく!!」

「ワールドセイバーに逆らったら命は無いぞ！」

「命など安いもの……特に私のは……」

そう言つてユイはもう一度ツインバスターの引き金を引くのだった。

「……………」

「トオル……一ノ谷ユイがワールドセイバーから離反そして伊丹キョウジが現在ワールドセイバーと戦闘中だそうだ……」

「一ノ谷…なぜ彼女が…」

トオルは突然のジンからの通信で疑問に思ったが内容を聞いて驚いたが目的地点まで目の前だったので意識を戦闘に切り換える。

「神風トオル……トールギスⅢ出るぞー！」

「隊長！御武運をー！」

トオルが叫ぶとクラフトキャリアを操作していたワーカーも叫びトールギスⅢを降下させる。

伊丹キョウジ、一ノ谷ユイと戦闘を行っていたワールドセイバー軍は突然の攻撃で混乱するがすぐに立て直し迎撃に入った。

空中のビルゴやトールラス達を落としていくトオルを援護するように巨大なビームがビルゴたちを消滅させる。

「どうも……」

「どうもって…おい……」

余りにも呑気なユイの挨拶にトオルは拍子抜けするが周りの敵がそれを許してくれずに攻撃を仕掛けてくるために自然とトオルのトールギスⅢとユイのウイングゼロが背中合わせでビーム砲を撃ちながらゆつくりと同じタイミング、スピードで回りながら話す。

「一ノ谷…お前は……」

「ユイでいい……」

「……ユイ…お前はなぜワールドセイバーを裏切った？」

「あなたのせい……」

「ハッ!？」

ユイの予想外の返事にトオルは思わず変な声が出てしまう。

「元々…私は世界を変えたいなんて思ってた…ただ生きるために居ただけ……少しはワールドセイバーの理念には共感してたけど……」

「じゃあ……なぜ……」

「セレデイーのやり方に疑問に思っただけ……ワールドセイバーが守るべき人を殺して人を救う…意味が分からない……」

「だから…でもなんで俺のせいなんだ?」

「あなたは言った…」 支配者が変わるだけ”だと…私もそう思う…だからあなたに協力する…あなたは世界をよく見ている…だから…あ

あなたに賭けてみる…」

「ユイ……俺はそんなに出来た人間じゃない……だが……今はセレデーを倒そう……それからだ……」

トオルの言葉にユイはコクリと頷くとデータをトオルに送る。

「これは……」

「渡しておく……使って……」

そう言っユイはウイングゼロを地上の前線に向かわせるのだった。

「……なんだこれは……」

ユイから渡されたデータにはエピオンの設計図とメッセージが添えてあった。

「胸の宝石のような装甲の裏に自爆装置か……つまりそいつを破壊してロストを避けて倒さなければいかんのか……種が分かれば……こつちのもんだ！」

トオルはエピオンの設計図を見てホッと安心する……ロストではなく機能不全にさせてバネツサを救おうと思ったがセレデーの事だ……何か仕込んであると思っ手が出せていなかったがエピオンの設計図のお陰でバネツサ救出の手立ても見えてきたトオルはエピオンを探すのだった。

—————

そしてセカンドワールドの外でも状況が動き始める……セレデーにやられていなかったメタ沢達が兵士たちをなぎ倒していたのを兵士が騒ぎ始めたのを確認すると戦況観覧室の電気が落ち突如、暗闇に包まれる。

「な、なんだ！ぐわあ!!」

「おい！ぐほっ！」

すると兵士の悲鳴が聞こえた後予備回路で電気が通ったのか戦況観覧室に電気が灯ると兵士二人をボコボコにしたクロフスキーとキースが立っていた。

「あなた達……」

「学園長……行きましょう！我々も生徒に負けておれません！」

「そうね…」

クロフスキーの言葉にジョセフィーヌは頷くと外からメタ沢達が突撃するがもう終わっていた状況を見て。

「アレ？終わってるモ……」

「……………」

「スズネ撃ちまくれ！」

「あんたは斬つとけ！」

「お前ら何かに！」

「やられてたまるか！」

セカンドワールドでは連合軍の”生きたい”と言う意思が強く性能で圧倒するワールドセイバー軍を追い詰めていった。

「バネツサ！」

「……」

トオルもとうとう現れたエピオンと戦闘を開始していた。

「バネツサ……今助けてやるからな……」

トオルのトールギスⅢのサーベルとエピオンのサーベルが激しくつばぜり合いを繰り返し互角かと思われた勝負はエピオンのただならぬ気配にトオルは汗をかく……

「この気配……あの時ユイが使っていた……確かゼロシステム……」

トオルが呟くとエピオンはサーベルを構えて攻撃を仕掛ける……前回同様攻撃は全て避けられ一方的に攻撃を受けるトールギスⅢ……トオルはオーバードを使うおうと意識を集中させようとした時……ジンの言葉が頭によぎる……”死”トオルは生物としての自身の本能がやめろと叫ぶ。

「クツ……救えるんだ……バネツサを……」

トオルの呟きは自身に言い聞かせているようだった……そしてトオルは腹をくくった。

「トールギスⅢ！俺の命をくれてやる！！だから俺に力を貸せええええ！！」

トオルの叫びと共にトオルの目は赤く光り驚異的なスピードでトールギスⅢはエピオンに迫る……その様子を見てワーカーは泣き

そんな顔で黙って見ていた。

「あああああ!!」

トオルは迫るオーバーロードの痛みを隠すように雄叫びを上げるとエピオンと激しく戦う……先読みをして迫るエピオンとスピードで対抗するトールギスⅢ……またもや拮抗するかと思われた勝負は常に動く。

(アタックファンクション!バルジ一刀両断!)

エピオンの突然の必殺ファンクションにトオルは反応できずにシールドで受ける…膨大な熱量を纏ったエピオンのサーベルによりトールギスⅢのシールドが徐々に溶け始めトオルはやむ得ずシールドを放棄してエピオンの必殺ファンクションから退避する。

「クソッ……だがしかし!」

トオルは必殺ファンクション終了の僅かな瞬間を見逃さず空いた左手で自爆装置を破壊しようとするがそれも分かっていたように避けられる。

「クソッ!」

「……………」

トオルは集中しオーバーロードの精度を上げる…しかしそれと共にトオルに襲いかかる激痛を無視してであるが…更に加速したトールギスⅢはエピオンに迫るとサーベルを振るい胸部の装甲を切り裂き中から自爆装置のような物が見える。

「あれか……グッ!」

一瞬、自爆装置に気をとられたトオルはエピオンの迫り来るヒートロッドに気づかず直撃してしまい地面に叩きこまれるが直前で体勢を立て直し着地するが脇腹からはトールギスⅢの火花が散る。

「…グッ……グハッ!」

地面に着地した時…トオルは嘔吐感に襲われ思わず血を吐き出し胃の痛みとオーバーロードによる頭の痛みに苦しむがトオルはその痛みを紛らわすように叫ぶとエピオンに突っ込む。

「でやあああああ!」

強化されたトールギスⅢのスーパーバーニアが悲鳴を上げる程加

速させるトオルを見てエピオンが再びヒートロッドを振るうとトオルは左手でそのヒートロッドを掴む……驚いたように退避しようとするエピオンだがヒートロッドを掴まれて動けない。

「覚悟おぉー！」

溶けるトールギスⅢの左手を無視してエピオンを引き寄せると右手のビームサーベルをナイフのような形状にさせるとエピオンの自爆装置に突き立てる……激しいスパークの後エピオンのコアブロック寸前で止めたサーベルを抜くとエピオンがトールギスⅢにもたれ掛かるように機能を停止させたのだった。

最終戦 「静かな海に騎士は佇む」

「……、……………」

「……………」

「……………」

トオルは何かが自分を呼んでいる気がした。

「あ……ああ……………」

予想以上の荒れた声にトオルは驚くが体中が痛くそんな驚きはすぐに消えた…するとトオルの周りに居たスズネ達が驚き喜ぶ。

「良かったで！トオル！死んだかと思ったで！」

「隊長おとおお」

号泣するワーカーを見たトオルは笑うがその行為ですら全身に痛みが走り顔を歪めていると

「大丈夫か？隊長殿……………」

懐かしく思える声がトオルの耳に届く。

「ノイン……………」

「全く……お前は無茶しすぎなんだ……」

「なんで……………」

「人を勝手に殺すな……毒ガスが”手違い”で睡眠ガスになっていたのさ……それに言ったらろう？必ず帰るとな……」

「……………」

ノインが笑いながら後ろを見ると人影に隠れるようにいた一ノ谷ユイがいた。

「ユイ……ありがとう……」

「何も特別な事はしていない……」

「フツ……そうか……」

トオルは弱々しく笑うとユイは黙って部屋のドアを手にかけて

”また……”

そう言っ出ていった……恐らくユイはもう会わないだろうがユイ

の”また”を信じて会う機会を楽しみにしておこうと思ったトオルであった。

その後トオルが聞いたのはエピオンを倒しバネツサを救出し自身が気を失った後の事だった。

セレデューはスズネ、アラタを筆頭にジェノック、ハーネスの新型部隊によって討伐された。

トオルは自身がその場に立ち会えなかった事に酷く悔しがったがバネツサが無事だと分かり取り合えずそれで良しとした。(トオルは会いたがっていたが皆が動く危険だからと止めた)

――

次の日

トオルは港で痛む体を黙らせてセレデューを待っていた。

「あれが…」

「ああ…そうらしい…」

トオルが見たのは若々しいセレデューとは正反対の疲れきった様子のセレデューだった。

セレデューはトオルを見ると運んで来たジンに止めるように頼びトオルに話しかける。

「神風トオル……」

「……」

しゃがれたセレデューの声にトオルは黙って耳を傾ける。

「お前には力がある……冷静に物事を見て判断できる力が……出来れば私の元で使いたかった……」

「確かに……お前の言っていた事は何一つ間違っていないかった……だが方法が間違っていたんだよ……お前は焦りすぎた……」

「フツ……私は見たかっただけだ……穏やかに佇む海を……ただそれだけだ……」

そう言ってセレデューは警備兵に囲まれ本島から来たヘリに運ばれて行ったセレデューを見てトオルは呟く。

「セレデューは……世界を本当に変えたかったのだろうか……」

「なに？どう言う事だ？」

トオルの眩きにノインは思わず聞き返す。

「いや…ただ…荒れ果てた自分の海を静めてくれる死に場所を求めたのかもしれないなと…」

「死に場所か…私たちには分からんな…」

ノインの言葉に聞いていたワーカーも頷くのをトオルは見ているとフツと求めていた人がトオルの視線に映る。

それはセレデイーによって洗脳され、トオルが命がけで助けたバネツサだった。

トオルは足を引きずりなからバネツサの元に駆け寄り優しく名前を呼ぶ。

「バネツサ……」

「トオル……」

静かになった港で二人はお互いの名前を呼び合うとバネツサが泣きながらトオルの胸に飛び込む。

「バネツサ……」

「ごめんなさい…ごめんなさい……」

泣きながら謝るバネツサをトオルは抱き締めると泣きじやくるバネツサを静かに見ると話しかける。

「いいよ…でも良かった…無事で…」

「トオル……」

何かしらの絶対領域を作り出す二人に周りの人は思わず注目する。

「バネツサ……俺は…皆を…お前を守りたかった」

「トオル…」

「だが…何も守れなかった…でも変なんだ…」

「トオル？」

何か要領の得ないトオルにバネツサは不思議に思う。

「バネツサが…居なくなってしまった時…オットーやドロシーを失った時とは違うんだ…」

「違う？」

「分からないが…悲しかった…心から何かがスッポリ抜けたような…寂しかったんだ…だからずっと居て欲しい…側に居てくれ…」

「「わあ……」」

周囲にいた者男女問わずに顔を真っ赤にする。

「私も！トオルが好き！大好きだよ！」

バネツサが勇気を振り絞って言った言葉にトオルは

「え？それって告白なのか？」

「「いや！お前はしてないつもりかよ!!」」

神威島に居た全員が心を合わせ見事にトオルにツッコミを入れる
と全員が笑い合うのであった。

その中にはやつと緊張が解けて腰が抜けたのか座り込む人もいる。

そんな和やかな空気が流れ始めた時、トオルは一気に視界が揺らぎ
バネツサに倒れ込んだ。

バネツサは驚くがそれを支えるように抱き締める。

そして気を失ったトオルはまるで小さい子供が親に甘えるような
穏やかな表情だった。

―戦士たちのつかの間の休息。傷つきし魂に祈りを、また再び騎士
が戦場に佇む、その日まで―

番外編

番外編 「聖なる夜の安らかな一時」

12月20日……神威大門統合学園は冬休みを迎えていた……家に帰って家族と過ごす者、神威島に残って友達と過ごす者……やはり前者の方が多く定期便のフェリーが特別運航でかなりの人数を本島に送り届けた。

そしてジエノックやハーネス等が主に使用しているダック荘の一室で静かに本を読んでいる人物がいた……トオルだ……彼は神威島に残り傷ついた体と心を静かに自分の世界で癒していた……同室のカゲトラは何やら用があると数分前に部屋を出ていきトオルが本をめくる微かな音が部屋に響く。

「ん？」

トオルはフツと窓を見ると小さな白い物が落ちて来るのが見えた。

「雪か……この調子だと明日には積もるな……」

—————

トオルが部屋で本を読みながら窓の雪に気づいた頃、バネツサを含むジエノック、ハーネスの女子ズは小物屋に来ていた。

「いや〜雪やで！なあ雪やで！」

女子ズが商品を見て話している中、スズネが降ってきた雪を見て興奮し他の女子に伝える。

「やった！今年は寒かったからね！」

「あらあら〜冬ですわね〜」

スズネの声にユノとシズカが反応し喜ぶ。

「今年はホワイトクリスマスなんてしたいものだな……なあ！バネツサ」

「ああ……しかにしても寒いよ」

ノインがバネツサに話しかけるとバネツサは喜びよりも批難の声が上がると……それもその筈、高度成長期をモデルにした神威島には工

アコン等と言う便利な物は存在せずあるのはせいぜい電気ストーブくらいである。(そもそも高度成長期に電気ストーブがあるかは分からないが…)

「で？決まったのか？トオルへのプレゼントは？」

「ングッ……」

ノインの言葉に思わず変な声が出るバネツサ、その様子を見てノインはやれやれとジェスチャーする。

「あと四日だぞ……パーティーの準備もあるから早くしろよ……」

「分かってるさ……」

ノインとの会話で分かる通り12月24日に神威島の居残り達で神威大門の体育館を借りて盛大なパーティーが行われる事になっている……各自で料理を持ち寄り仮想国関係なく楽しく集まるパーティーだ……材料は全て学園長のジョセフィーヌが負担し毎年豪華な料理が並ぶのだ。

「あっ……これいいかも！」

しばらく考える中でバネツサが見つけたのはクリスタルをあしらった騎士が持つていそうな剣を模したネックレスだった。

「剣か……トオルにぴったりだな……」

「ああ！そうだろ！それにこれは……」

「ん？」

喜んでいたバネツサの声が小さくなって聞こえなくなったのでノインが聞き返すとバネツサは少し恥ずかしそうにボソリと呟く。

「ペアネックレスなんだ……」

「ほほう……」

モジモジしながら言うバネツサを見て思わずニヤニヤしてしまうノインだったがネックレスを見て気がつく。

「それで？もう一つはどうした？」

「ああ……それが見当たらないんだ……」

「まあ……取り合えず買っとけ……そのついでに店員に聞けばいいさ……」

「ああ……」

取り合えずノインの提案で買うことにしたバネッサはレジに向かいペアの片方の事を店員に聞く。

「え？この商品のペアは…ごめんなさい…売れちゃったみたいで…」

「ええ!?じゃあ…ペアで貰えますか?」

「ごめんなさい…それは一点物なのよ…」

「ええ!そんなああ!」

—————

ダック荘への帰り道…買い物が残っているスズネ達より一足先に帰路についた二人は先程のネックレスの事で話していた。

「まさかペアなのに片方だけ買う奴が居たとはな…」

「全く…せつかくのペアネックレスがあゝ」

バネッサはそう言うのとノインに涙声で抱きつく…それを必死に離そうと剥がすノインはバネッサを励ます。

「歩けないから離れろ!…全く…トオルへのプレゼントを買えたんだからいいじゃないか…」

「ペアゝ」

「ああ…めんどくさ…」

ノインは心底めんどくさそうな顔をするがフツと笑顔になる…ついこの前の事だったワールドセイバー事件の事がまるで夢だったかのような平和な時間にノインは幸せを実感したのだった。

—————

「ただいまゝ」

「ああ…おかえり…何をしてたんだ?」

「ああ…クリスマス会の机運び…頼まれちゃってさ…」

「それなら俺も行ったのに…」

「まあまあ…トオルはゆっくりしてろよ…」

「全く…」

トオルは帰ってきたカゲトラに内容を聞くと予想以上に心配されている事に気づかされ何とも言えない気持ちになるのだった。

本来トオルは即、本島の病院送りだったのだがトオルは精神的な面なのでキツイ病院より仲間と交流をしていた方が良くと判断され

た結果、トオルはこうして神威島にいる。

ワールドセイバー事件の結果、人々の目は逸らされていた現実を目を向けさせた、そう言う意味ではセレディの目的は果たされたと言っても過言では無いだろう…世界は緩やかであるが本当の平和な世界へと変わり始めたのだ。

「バネッサは何をしているだろうか…」

ちなみにトオルとバネッサの关系的には恋人だ。(まあワールドセイバー事件の後もバネッサの涙ぐましい努力の結果なのだがそれはまた今度の話)

心理的にはバネッサはトオルの盾となりトオルはバネッサの矛になる…二人はそんな関係を築きつつも日に日に近づいて行くのは目に見えているのだが…まあ…外から見れば充分お腹一杯な関係である。

「なあ…トオル……」

「ん？なんだ？カゲトラ」

「少し宿題で分からない所があるんだが…」

「ん？見せてみる…」

トオルはカゲトラの宿題を見ながら平和だなあ…と思いつつトオルはずつと考えていた悩みをカゲトラに言うのだった。

「カゲトラ……」

「なんだ？」

「少し聞きたい事があるんだが…」

—————

そして迎えたクリスマス…

商店街には色鮮やかなイルミネーションが施されて(絶対建物の設定無視してる)神威大門統合学園の体育館では生徒たちが集まりパーティーを開いていた。

「上手いなくこれ！」

その中…バネッサはノインと一緒に料理を楽しんでいた…二人は鳥をそのまま焼いた奴を食べながら話していた。

「トオルはまだ来ていないのか？」

「ああ…まだなんだ…何してるんだろ…」

問いに対しバネツサは少しシユンとして答えるとノインは全く：と言った感じで入り口に目を向けるとドアが開きトオルがマフラーとコートを着て雪を被りながら入ってきた。

「おい…来たぞ…ああ…」

ノインがバネツサに伝えようと後ろを向くと居ない：そう思って視線を戻すと既にトオルのすぐ側にバネツサがいた。

ヤレヤレと言う感じでノインは苦いブラックコーヒーを求めてドリンクコーナーに足を運ぶのだった。

「トオル！」

「バネツサ…」

嬉しそうに近寄るバネツサを見て子動物の様だと思いながらバネツサの手を掴んで外に連れていく。

「え？どうしたんだ？トオル…寒！」

「……………」

バネツサの問いにトオルは答えずに黙ってバネツサを連れていくが流石に寒い外に連れていく時は黙って自身が着ていたコートをバネツサの肩に掛ける。

目的地に向かって歩いていく、バネツサも最初は戸惑いを覚えていたがトオルの温もりと匂いが残っているコートを静かに握りしめる。

「ここだ…」

「わあ…」

トオルは目的地に着いたのかやつと話したと思うと学園の横の森を少し抜けた所に開けた場所があり月の光が積もった雪を輝かせまるで違う世界にきたような感覚にバネツサは陥る。

「少し前に見つけた所だ…まさかここまで綺麗になっているとは思わなかったが…」

「綺麗…」

その光景にウツトリするバネツサを見てトオルはカゲトラのアドバイスに感謝した。

(誰も居ない…綺麗な場所で…カゲトラ…感謝する)

数日前の事…トオルがカゲトラに聞いたのはプレゼントを渡すには何処が良いか…だったのだ。

「バネツサ……」

「はいー」

トオルの呼び掛けにバネツサは裏声が出てしまい顔を真っ赤にするがトオルは気づかずバネツサに近づき距離がゼロになる。

そのせいでバネツサはゆでダコのように顔を赤くするがトオルの目的はバネツサに渡したコートポケットだった、トオルはポケットから小さな箱を取り出すとバネツサに渡す。

「ほえ……ああー」

もう既に夢心地のバネツサはその箱をトオルの了承を得て開けるとそこにはクリスタルをあしらった盾のネックレス。それを見てバネツサは驚く…これは数日前にバネツサが買い損ねたペアネックレスの片割れだった。

「バネツサ…守ってくれて…ありがとう…」

トオルはそう呟くと黙ってしまう…表情はマフラーのせいで分からないがたぶん照れているのだろう。バネツサは笑うと自身のポケットから箱を取り出すとトオルに渡す。

「開けてみてくれ…」

トオルはバネツサの言う通り開けてみるとそこには同じくクリスタルであしらった剣のネックレスがあった。

「これは…」

「もう、トオルはこれはペアネックレスって言うんだよ。二つで一つのネックレス…私が買った時にはもう盾の方が無かったから…焦ったんだぜ」

「あ…すまない…」

「良かった…同じ物買ってたんだな…」

バネツサは笑うとトオルも笑いお互いクスクスと小さく笑う。

すると自然と二人は目が合う…月明かりに照らされたトオルはバネツサにとって本当のナイトだった…トオルにとってバネツサは優しく包む月明かりのような存在だった…。

「こういう時…どうすれば良いか…分からないが…」
「ん？」

トオルが呟くとバネツサが聞こえずに聞き返すがトオルはバネツサを引き寄せると顔に掛かるマフラーを下げ静かにバネツサにキスをした…。

「ッ！」

「……」

初めての感覚にバネツサは驚くが吸い込まれそうな藍色の瞳と目が合いその感覚に身を委ねるのだった……。

アフターエピソード編

第1戦「感情を殺した少女の物語り」

「では…被告人の判決を言い渡す…被告は…無罪」

日本の主都にある最高裁判所ではワールドセイバー構成員の裁判が行われておりその中で唯一の無罪を言い渡されたのは一ノ谷ユイだった…ユイは無罪の判決を聞いても無表情で裁判官の言葉を聞き続ける。

「被告はワールドセイバーのテロに加担しつつも罪のない神威大門の生徒を救いなおかつ最後ではワールドセイバーから離反し討伐に参加している点を見て無罪放免とする…」

傍聴していたマスコミ等はざわめくがユイの無罪が覆る事は無かった…。

—————

数日後…彼女は釈放されたが彼女が持っていると言えば僅かなお金と身に付けている服のみ…親が居ない事が知られているので国からの支援金も貰えるがそう多くは無かった…ユイは国からの支援金を使ってとある場所に向かった。

「…ハア…」

彼女が向かったのは故郷”だった所”…人が住んでるのか怪しいくらい山奥の山奥に一ノ谷ユイの故郷があった、かつて故郷だった場所は今はダムの水の底…彼女がワールドセイバーに身を投じる事になったのは数年前のある出来事のせいだった。

—————

数年前

一ノ谷ユイは田舎の田舎で住んでいる事意外特に何も無い普通の少女だった…村にはユイしか子供は居らず村の皆に愛されている幸せな少女だった…当時ユイは知らなかったがこの村は前々からダム化の計画があり村の人々は当然反対した…正式な交渉で何とか村の存続を繋いだ村人たちは喜び安心して皆が農業に専念しユイとの時

間が癒しの一時だった……しかし当然それを良く思わない連中がいた……。

「たく……田舎者の癖に……あんな辺境の地の何処が良いんだ……」

「本当ですね……地図にすら載らない村の癖に……」

「おい……今何て言った?」

「はい?……地図にすら載らない村の癖に……と言いましたけれども……あつー!」

「そうか……地図にすら載らないのは可哀想だな……おい」

「了解です!すぐに必要な書類を偽造しておきます……」

「おい……正式な書類だろ?」

「おっと……すいません……間違えました……」

—————

その日もユイは村の人達に遊ばれたり勉強をしたりといつも通りの日だった……しかしユイは何かしらの違和感を覚えていた……それは静かすぎると言う物だった。

「お母さん……」

「何?ユイ」

「何か……静か……」

「静か?」

ユイの母である一ノ谷サクラは娘の突然の言葉に耳を澄ませる。

「本当ね……動物が居ない……」

サクラはユイの言葉にいつも近くまで堂々という動物たちが全然姿を見せない事に気がついた……。

「おお!ユイちゃん!」

「オジサン……どうだったの?」

サクラが異変に気づいた時……ユイの隣に住んでいて狩猟をしているオジサンがやって来る。

「カズトさん……どうでした?」

「今日は全然ダメだった……獲物が影も形もありもしない……こんな事無かったのにな……とうとう俺の恐ろしさが分かったのかな」

そう言いながら大声で笑う中、村に大きな地響きが起こる。

「なんだ？地震か？」

カズトが不思議に思い眩いているとサクラの耳には地響きの音と共に聞こえてくる大きな水の音を捉えていた…。

「ユイ…木に捕まって！」

「え？」

ユイは母に言われるがままにかま焚き用のまだ割っていない大きな木に捕まると何かに吹き飛ばされたような衝撃を味わった。

「!?」

すると飛ばされたかと思われたが水中に居た自分に気が動転しながらも必死に木に捕まっていると水からでて水面で流されていく。

「ガホッ！ゴボッ！」

ユイは水面に出ると肺に溜まった水を一気に吐き出すと何かにぶつかり地面に転がる。

「ゴボッ！ゴホッ！ゴホッ！」

一気に咳をすると肺が痛くなるのを我慢して周囲を見渡すと大きな川の横の森に居た…しかしユイは先程まで村に居たと言うのに…：それにこんな大きな川はユイの記憶上無い…それで状況が分からない程、ユイは子供ではなかった…。

「え？お母さん？…オジサン？」

時間が経つごとに頭がスッキリして頭が勝手に状況を整理してユイに最悪の答えを導き出す。

「沈んだ…村が…何で!？」

とにかく助けを呼ばなければ…ユイは急いで近くに人が居る所まで走り始める…さほど遠くない所に町がある、しかし車で一時間掛かる道のりを子供の足では倍以上掛かってしまう…しかしユイは必死に走る…：当然道など存在せず草木をかき分けて進む…途中で木の枝で身体中に傷を作りながら走っていると道路に出るがユイが出た所は崖になっており数メートル落ちるとやっと道路に転がる。

「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…」

全身泥だらけ、傷だらけの少女が出てくるのを見た通行車は車を止めてユイに駆け寄る。

「どうした?」

「村が!村が!」

ユイが車から降りてきた男性に必死にしがみつき村の事を言おうとするが…車の助手席にいた男性が叫ぶ。

「おい!コイツ村の娘だぞ!」

「なっ!」

明らかに態度がおかしい二人の男性をユイがちゃんと見ると少し前に何度も村に来て追い出されていた奴だった…。

「ああ…」

ユイは確信した…「コイツらだ」と…するとユイが身の危険を感じて急いで逃げようとするところからか出てきたスコップで頭を殴られ気絶する…それを見た男二人は

「死んだか?」

「たぶんな…ほつとけば勝手に死ぬさ…行くぞ…」

「あ…ああ…」

そう言うと二人はこの場所から離れたのだった…。

――

「うっ…くっ…くっ…」

ユイは何とか生きていた…鉛のような体を何とか動かし周囲を見渡すと森は深い闇に覆われておりかなりの時間が経ったのがわかる…もう沈んだ村は助からないだろう…ユイの頭にその事が横切るとユイは狂ったように叫ぶのだった。

「くううう…ああああ!!」

――

その後の事はユイにも良く分からなかった…ただ…あそこで助けたのはワールドセイバーだったと言う事と…そのワールドセイバーに彼女は死ぬために生きると言う矛盾を孕んだ理由で参加したと言う事は分かっている事だ…。

「やよなら…」

ユイは泣きそうな声でそう呟くとその場から姿を消したのだった。

――

……その後のユイの足取りは不明となっている……日本政府の監視を振り切り逃走したのか……それともそのダムで自殺したのか……真相は分からないが……その一年ほどたった頃から……世界各地で羽根を生やしたLBXを操り人々を助ける謎の少女の噂が立つようになったと言う。

第2戦 「新しき日の出」

「おい！どこに行った！」

「全く…探すぞ！」

とある日本の港の創庫街に黒服の人達が走り回りある人物を探していた。

「……………」

慌てて探し回る黒服をユイは黙って創庫の影から見ていると手頃なコンテナの中に入ると…。

「なに…これ…?」

コンテナの暗闇の中…ユイは何か固い物を蹴ってしまいユイが覗き込むとその物体が突然叫ぶ。

「痛！何すんのよ！」

「!?…………ごめん」

「たく…………人がゆっくり寝てるって言うのに…」

長髪を編み込んだ茶髪の少女が愚痴りながら頭を払うとユイを見る。

「で?…………なんでここに居るの?」

「え…あなたは?」

「密入国に決まってるじゃない…」

サラツと答える少女を見てユイは（コイツ変なやつ）と思いつい突っ込む。

「いや…堂々と言うなよ…」

「ハッ！まさかお前は国の人間か!？」

少女は突然起き上がり叫ぶと意味の分からない事を次々と言ってくる…それを見てユイは（うるさい奴）と思っていると。

「悪いわね…国の人間さん…少し行きたい所があるから…………少し黙ってもらおうわよ！」

（いや…あなたが黙れば済む話何だけど…）

ユイが冷静に突っ込んでいると少女はポケットからLBXとDエッグを取り出し展開されユイはDエッグのバリアに捕らわれ逃げられなくなる。

「何のつもり…」

「ちよつと依頼があるから…コツソリ行かなくちやならないのよ…だから私が勝ったら私を見逃す、お前が勝ったから私を捕まえる…どうよ…」

「一方的な…」

ユイはこの状況は逃れきれないと判断しウイングゼロを取り出す。

「さあ…行くわよ！相棒！デスサイズヘル！出撃！」

「ウイングゼロ…」

廃工場のジオラマにユイはゼロを降り立たせると前方に死神のような大きな鎌を持ったLBXが現れる。

「死んじゃうわよ…私を見たものは…みんな！死んじゃうわよ！」

少女が叫ぶと死神のLBXが大鎌でゼロに襲いかかるがユイはシールドで受けツインバスターを向けるが鎌の柄を上手く使いバスターの射線をずらすとツインバスターは明後日の方向に発射され工場の一角が消滅する…ツインバスターのビームの威力を見て少女は冷や汗を流し眩く。

「なんて威力…なるほどね…機動力で相手を攪乱して強力なビームで敵を一掃する…そんな感じかしら！」

「ッ！」

その少女の言葉にユイは驚く、確かにツインバスターの威力は見られたがウイングゼロはまだ一步も動いていないと言うのにその機動力を読まれた事にユイはその少女の評価を変えざる得なかった。

「さあ…行くわよ…」

少女はデスサイズヘルを大きく一步下がらせるとツインビームサイズで地面を切り裂き粉塵を上げると機体を隠す。

「何を…ッ！」

ユイは粉塵の意味が分からずにツインバスターを構えて見ていると粉塵が晴れた頃にはそこには影も形も無かった。

「どっ！どっ！」

「(っ)っよー」

少女が叫ぶとウイングゼロの後ろから影が現れツインビームサイズを振るうとユイは驚くべき速さでビームサーベルを抜刀して受け止める。

「へえ、これを受けるなんて…貴方が四人目よ！」

「…………どうも」

「…………愛想無いわね…笑いなさいよ」

少女は軽口を叩きながらも姿を消したり死角から現したりの一種のヒットアンドアウェイを繰り返しウイングゼロを着実にダメージを与える。

「オラオラー…このままじゃ殺られるわよ」

「……………」

少女に追い詰められるがユイは焦る所か冷静に攻撃を対処する。

「頑張ったけど…(っ)っまでよー」

少女のデスサイズヘルが姿を消したままツインビームサイズを構えるとウイングゼロと目が合う。

「へ？」

「…………」

少女が変な声を上げるとデスサイズヘルは蹴り飛ばされ攻撃のオイルタンクにぶつかる。

「なんで!？」

「…………」

少女が驚くがユイは考える暇も与えずバルカンを撃ちデスサイズヘルは避けるがオイルタンクに引火し大爆発を起こす！

「バカな！ハイパージャマーが！」

「マジックはもう終わり?…なら引導を渡す…」

ユイはビームサーベルを構えデスサイズヘルに突っ込み切り裂く。(オイルタンクに吹き飛ばしたのも計算の内だったなんて…やっぱり…………私の目に狂いは無かった…………)

少女はそう思い細く微笑みデスサイズヘルはブレイクオーバーす

るのだった。

「いや〜参ったわ〜」

「貴方……強かった……」

「ありがとう〜流石一ノ谷ユイ、素晴らしい冷静さと操作技術ね！」

少女の言葉にユイは警戒を強める。

「何故名前を……」

「騙して悪かったわね……私の名前はスウエル……スウエル・マックよ！」

「スウエル・マック？男？」

「う……ちゃんと女よ……」

ユイの呟きにスウエルはやっぱりか……と言う風にガツクリとするのを無視してユイは話を続ける。

「で……なんで私を知ってる……」

「ああ！そうそう！これ見たら早い！」

デュオが名刺を取り出しユイが見て読み上げる。

「国連課報部特務00課”プリペンダー”所属、スウエル・マック……」

「そう！私はプリペンダーに所属している立派な公務員よ！日本政府の目を眩ましたらまず外に出たいと思って張ってたらたまたまた来たから一芝居打った訳よ！」

「……で……国連がテロリストに何の用……」

無言の圧力を掛けるユイを受け流しデュオは話を続ける。

「簡単に言えばスカウトよ」

「スカウト？」

「そう！私たちプリペンダーは元々裏の人間が殆ど……一部例外を含むけどね……」

「……」

考え込むユイを見てスウエルが更に語り掛ける。

「私たちの主な任務は裁けない者を裁く……主にまだ法律が細かい所まで整備されていないLBX関連が最近は任務ね！」

「……分かった……でも一つ条件がある……」

「ん？」

「私は一つ成し遂げたい事がある…私がワールドセイバーに入らざる得なかった出来事が…」

「それに決着を着けるためなら何でも利用する訳ね…分かった！我々プリペンダーは協力するわ！こちらも全力で答えるように言われているしね！」

スウエルは手を差し伸べユイは静かに答えるのだった。

第3戦「プリペンダー」

「A国首都、Nシティ空港」

「くわあああ〜着いた〜」

「……」

空港に着いた飛行機から出てきたスウエルとユイ、スウエルは大きくあくびをしながら通常の客とは違いタラップで飛行機から降りると飛行機の近くにサイドカー付きのb i k eに乗った金髪の少年がスウエルに向けて手を振っていた。

「スウエル〜こつちですよ〜」

「おお！久しぶり！」

手荷物を持ったままスウエルは嬉しそうにその少年に近寄ると話始める。

「お疲れ様でした…どうでしたか？」

「無事に任務完了したわよ！ほら！」

「……」

スウエルが後ろを向くと軽い手荷物を持ったユイが調度追い付いた所だった。

「誰……」

「ああ！紹介するわよ！彼はカトル…カトル・ラバーバ・ウイナー…私達プリペンダーを取まとめる課長よ！」

「どうも…カトル・ラバーバ・ウイナーです…長いのでカトルと呼んでください」

「……よろしく」

カトルはユイに手を差し伸べるとユイもそれに答える。

「ではスウエル…ユイさんは預かります」

「え！本部まで私が…」

「このバイクはサイドカーを着けて余裕で乗れるのは二人です…それにスウエルにはおつかいに行つて貰います…歓迎会で”本来君が買

いに行かなければならない”おつかいです…みんなも任務があるので”しつかり”買いに行つて下さいね…」

「……はっ」

カトルのオーラに押されて反論すら出来ないスウエルを見てカトルは頷くとユイにサイドカーの乗るように言つて乗せる。

「では…ちゃんとして行つて下さいね…あ！それとタクシー代は自腹でお願いします…」

「ちよータクシー代くらい経費で！」

「さあ！行きましよう！」

流石にこれは不味いとスウエルが騒ぐとカトルはそれを無視してゴーグルをはめるとバイクを発進させる。

「ちよつと……」

「はい？何でしょう？」

ユイはカトルのバイクの運転が落ち着いたのを見計らつて声を掛ける。

「プリペンダーについてまだ何も聞いていない…」

「ああ…そうですか…では軽く説明しますね」

ユイの質問にカトルはバイクを運転しながら説明を始める。

「我々プリペンダーは国連の非公開組織です…当時大統領であつたクラウディオ・レネトン大統領がミゼル事件の数年後に設立しました…一部の関係者しか知らないイノベーター事件や世界規模のテロを実行したデテクター事件、それに続くように起きたミゼル事件等の世界を混乱させるような事件を未然に防ぐ為の邪魔者…それがプリペンダーです…もつともワールドセイバーの動きを未然に防げなかつたのは痛手でしたが…」

「そう…スウエルから聞いたのと少し違う…」

「え？聞いているんじゃないですか？」

カトルは笑いながらもユイの能力に冷や汗をかく…彼女は色々な人物から話を聞きそれを統合して正式な情報として…あるいは補充しながら情報を得る…それを知つたカトルはやられたと思つたのだつた。

「あ！着きましたよ…」

「……ここが…」

「彼女は新人です」

カトルが言うところにはしつかりとした国連の本部でカトルは警備員にパスと素顔を見せユイの説明をすると駐車場にバイクを停め降りたユイはカトルの後ろを黙って着いていく。

「これからはユイさんも使いますから覚えて下さいね…」

カトルはそう言うのとIDカードで人気のない奥のエレベーターを開けるとボタンが一階から九階までありそのボタンをカトルは任意の番号を順番に押すとエレベーターが下に下がる。

「地下のボタン何て無かったのに…」

「このエレベーターのボタンは普通に押せばその階に行けますが先程のように任意の番号を押すと地下に行けるようになっていきます…まあそれは我々プリペンダーしか知りませんがね…」

「嚴重なセキュリティ……」

「フフツ……世の中に心配しすぎなんて言葉は無いんですよ…」

カトルは微笑みながら答えると目的地に着いたのかエレベーターの扉が開くとそこには広々とした空間が広がっておりカトルの到着に気づいた三十代くらいのサングラスを掛けた男性が叫ぶ。

「カトル様！お帰りになったんですか！」

その男の言葉を筆頭に次々と部屋にいた人達がカトルに挨拶をする中、代表のような人物がカトルに駆け寄り紅茶を渡す。

「お帰りなさいませ…カトル様」

「ああ…ラシードどうだった？特に何も無い？」

「いえ…何も…彼女はスカウトしたと言う一ノ谷ユイですか？」

「うん…ユイさん……こちらはラシード・クラマプリペンダーの一員です」

「紹介に預かったラシードだ…よろしく…」

「一ノ谷ユイ…よろしく……それとカトル…ユイでいい」

ユイはラシードと握手するとカトルに呼び捨てで良いと告げる。

「そうですね…ではユイ…紹介しますね、こちらが……」

カトルはユイの言葉を了承すると次々と人物の紹介を始めるのだった。そして大方の紹介が終わる。

「それと後少し居るのですがまた帰って来たらと言うことで…それとこれを渡しておきます」

カトルは紹介を終えるとユイに緑と紺を基調にしたプリペンダーの制服とIDカードを渡す。

「ありがとうございます」

ユイはそれを受け取るとカトルの話聞く。

「これで晴れて正式なプリペンダーの一員です…机はあそこです…パソコンにはこの世の事で書いてない事はありません…貴方の目的の為に使ってください…」

「感謝する…でも見張りも着けないの？」

「スウェルから聞いているかも知れませんが元々我々は裏の人間ですからまずはこちらが信用しないといけないことは分かっています」

「…分かった」

ユイは別に裏切る気は毛頭にも無いのでカトルの配慮に感謝するのだった。

「明日には全員がここに集まると思います…招集をかけましたから…いきなりで申し訳ありませんが明日から本格的に始まる作戦に参加して貰います」

「いきなり…」

「ええ…鉄は熱いうちに叩かなければなりません…」

「まさか…ワールドセイバー」

カトルの言葉にユイが感づくるとカトルは微笑みながら頷く。

「ええ…セレディィーはワールドセイバーの派閥の一つに過ぎません…せっかく見えた尻尾…逃すほど我々プリペンダーは寝ぼけていません…」

「…分かった…協力する…」

「頼みます！」

ユイは僅かに変わったカトルの気配に冷や汗をかくも返事をするとかトルは嬉しそうに微笑むのだった。

第4戦 「同居人」

「フウ……」

プリペンダーの一員になった一ノ谷ユイは自身に割り当てられた家にたどり着き部屋にあったソファアで疲れたように座る。

「……」

裏側の世界を生きてきたユイにとっては差別など当たり前でワールドセイバーに下った当初は食べ物すらろくに与えられていなかったがプリペンダーに割り当てられた部屋は豪華で一人で住むには広すぎる…それとなく辺りを見渡すユイの目に黒いコートと帽子が掛けられたハンガーを見つけた。

「誰かが住んでる……」

ユイはそう呟くとそのコートを見て何となくスウエルを連想しまさか…と思っていると…

「くわあああ…疲れた……」

まさに予想通りの声が玄関から聞こえてきた。

「……」

「あ！ユイじゃないの！まさか…一緒に住むの！良かったああ、ここ一人には広すぎたのよ！」

スウエルはユイがソファアに座っているのを確認すると予想通り騒ぎ出すスウエルをユイは黙って聞き流す。

「まあ！歓迎会は任務が重なって後になると思うけどここでやつちやいましょうか！」

「……」

スウエルはユイの話の聞こえずに台所に向かい冷蔵庫を開くと中には惣菜が詰められており適当な物を選び温める物は温めて別に温めない物はサララップを取り二人が使うには大きなテーブルに並べる。

「まあまあ！座りなさいな！」

「……」

スウエルの言う通りにユイは近場な椅子に座るとスウエルが温めた物を置き終わりビール瓶のような物を置きユイの隣に座る。

「これ…ビール…」

「大丈夫！大丈夫！これ子供のビールだから！」

「え？……」

「簡単に言えばリンゴ味の炭酸よ！見た目はビールその物だけどね！」

（実際に有ります）

「はあ…」

ユイは不思議な物を見るように汲まれたビール（ジュース）観察すると一口飲む…本当にただの炭酸のようでアルコール独特の臭いも味もしなかった。

「こんな物が…」

「便利よね～大人の気分になれるしね！流石に公務員が法律を破る訳にはいかないからね！」

「それで…この家には貴方と二人だけなの？」

「ん？まあね…寂しかったのよ！こんな広い家で一人つて～」

ユイはスウエルの言葉を聞いて確かに…と思った、A国だからだろうか日本にしては豪邸でありしかも二階建てだ…これが税金で買われていると思うと一般市民の金銭感覚のユイは大丈夫だろうかと切実に思うのだった。

「……………」

「では新メンバーを紹介しますね」

次の日プリペンダー本部では作戦会議の前にカトルからプリペンダーのメンバー全員にユイの紹介をしていた。

「彼女は前から言っていた、元ワールドセイバーのセレディー派に属していましたが協力を扇いだ所…二つ返事で来てくれました」

「ほう…」ノ谷ユイか…プリペンダーへの協力を感謝する」

カトルの話聞きユイの前に立った茶色の髪を肩まで伸ばした人物が握手を求めユイはそれに答える。

「紹介しますね…この人は国連諜報部の統合責任者であるレディ・ア
ン統括官です」

「よろしく……」

「ああ…よろしく……」

二人の挨拶が終わるのを確認するとカトルは話を進める。

「では詳細をお伝えします…現在プリペンダーはセレディーの行動予
測からワールドセイバーに関係すると思われる施設を確認しその
制圧に向かいます…当然敵も反抗してくると思われるのでLBXを
使った制圧を行います…ユイ」

「はい…」

「現在ワールドセイバーが使用しているLBXの情報を教えて欲しい
のだけど…」

「了解…」

ユイはカトルに言われてパソコンを開き神威大門のセカンドワー
ルドの監視カメラの映像を出しLBXの画像を拡大させ説明する。

「この機体はゴルドー、ワールドセイバーの前主力機です…ベースは
マスターコマンド」

ユイが説明する中映像が二三変わり全員が説明を求めていた機体
が画面に映る。

「この機体はビルゴ…肩のジェネレーターに接続された強力なビーム砲
と実弾からエネルギー弾まで射撃武器を無力化するプラネイト・デイ
フエンサー（PD）を装備しています…しかしPDは接近戦に置い
てはロシウスの量産機であるガウンタに素手で突破され頭部を破壊
される等、元々集団による集中砲撃用に設計されたLBXなので近距
離戦闘には向いていません…しかし…ビルゴIIではビームサーベ
ルが標準搭載されPDが二倍に増設されるなど改良点がされており
ます…そしてスコープオ、これは拠点防衛用に作られた巨大LBXで
す基本はビルゴIIと変わりません…以上です」

「なるほど…つまりビルゴって奴には接近戦が一番有効って事ね」

ユイの説明を聞き終わるとスウエルは簡単にまとめるとそれを聴
いたユイは黙って頷く。

「ありがとうございます……こちらとしてはビルゴが一番脅威ですから助かりました……そして現在の状況ですがトロワは潜入中なのと五林が監視に当たっています……本日の1500に現地に向かいますので各員準備をお願いします……」

「了解！」

第5戦 「初任務」

中国のとある国の空港に私服姿のユイとスウエル、カトルが降り立ったのだった。

「いや〜中国かあ〜」

「久しぶりですね〜」

「……」

スウエルが背伸びをしながら飛行機を降りるとカトルもいつもの調子で同意すると取り合えずホテルに向かう。

「取り合えず荷物をホテルに預けて仕事を始めましょう」

「了解〜」

「了解……」

そこで案内されたのはホテルの最上階のスイートルームなるものであった。

「スウエル……」

「ん？なに？」

「金銭感覚が理解できない……」

「まあ……そのうち慣れるわよ……私も最初は啞然としたけどね……」

スウエルも所属したての頃を思い出したようで変な顔をしていると部屋の内線が入りロビーに来るように指示が入った。

「さあ……行きましよう……」

「了解……」

スウエルとユイがロビーに行くと中国人の少女とカトルが話しているのを見つけスウエルは思い当たる人物の名を叫ぶ。

「ウーリンー！」

スウエルがその名を叫ぶと少女はスウエルを見ると

「なんだ……お前か……」

「え？いつもの如く扱い酷くない？」

「それで……こいつが……」

「ああ！一ノ谷ユイ……プリペンダーの新メンバーよ！」

スウエルの説明を聞きながら少女はユイの目の前に立つと不機嫌そうな口調で紹介する。

「張五林（チョウ・ウーリン）だ……私は女だろうが男だろうが弱いやつが嫌いだ……」

「……そう……私は弱くても気にしない……」

五林の主張に元々弱い立場であったユイは思わず反論すると五林は眉毛をピクリと動かすが無表情を貫く。

「まあ……いい……貴様が強ければその言葉も正しいのだろう……」

五林はそう言い放つと付いてこいとジェスチャーをするとホテルを出るとスウエルがユイに話しかける。

「ユイ……貴女……凄いわね……」

「なにが……」

「五林にあんな風に言い返すなんて……」

「……私は私が正しいと思うことを成すだけ……」

「かつこいいわね……」

「……」

ユイはプイツと顔をそらすと五林に着いていくのだった……。

—————

そして中国のとある場所……そこには自立稼働LBXトラスとビルゴ、ビルゴIIが目立たないように……だが死角が無いように警備していた……それを見渡せる位置に赤色の右腕にダブルガトリングガンを装備したLBXがその位置を細かく確認していた。

「なるほど……死角がない理にかなった布陣だ……しかし………凄いな……」

布陣を確認していたトロワは神威大門の事件で開発されたビルゴ、ビルゴII等が既に補給場のような末端まで行き届いているのを見てセレディーの有能さに感心せざる得なかった。

「しかしそろそろカトル達が仕掛ける筈だか……」

—————

潜入していたトロワが情報を送っている頃、カトル達も各自所定の位置に着いていた。

「では各人……予定通りをお願いします……目標はここにあるワールドセイバーに関する情報です……」

「了解！」

作戦は単純……カトル直属のマグアナック隊とカトルで正面に配置されたLBXを破壊し潜入していたトロワを含む四部隊で攻撃を仕掛けたら後は速い者の勝ちで中央に入る……潜入したトロワ以外は現地のLBX隊の協力を得てユイ、スウェル、五林をリーダーにして分割している。

アメリカはウォーリアの改造機であるバスターを使っているが各国の軍隊はそれぞれ市販のLBXの改造機を使用している……中国は中国の会社で開発されているカンウ、チョウヒ、ヨウキヒなど使用している。

「よし……行きましょう……」

「了解です……カトル様……野郎共！やれ！」

「「おお!!」」

正面に伏せていたマグアナック隊のマグアナックが突然現れるとビームライフルを一斉に撃ち警備していたLBXに襲いかかる。

「ピピピッ……敵性LBX確認……排除開始……」

不意を突かれトラスやビルゴもプラナイト・ディフェンサーを展開できずに爆散するがすぐに態勢を立て直し反撃に移る。

その頃、ワールドセイバーの中央部では

「おい！国連が攻めてきたぞ！」

「何だと！LBXで反撃しろ！脱出までの時間を稼げ！データを出すぞ！」

ワールドセイバーの構成員は素早く対応させるのだった。

—————

「チツ！自立稼働のLBXが多いのよ！」

スウェルはデスサイズを操りながらぼやく……ビルゴの強力なバリアと強力なビーム砲は現地軍の戦力を削っていく。

「ほらほらほらー！」

スウエルは大鎌を振りかぶるとビルゴのプラネイト・デイフェンサーを突き破り三機を一斉に葬ると奥からキャリパーやゴルドーまですべて出てきて応戦を始める。

「チツ！また！……でもね……」

スウエルはそう呟くとキャリパー、ゴルドー、ビルゴを含め周囲にいたLBXを一気に十機近く切り刻んだ。

「数だけじゃあ……死神からは逃れられないわよ」

—————

「……」

その頃ユイは一足先に第二警戒戦を突破していた……すると物陰からトーラスがライフルを撃ちながら迫るがウイングゼロのツインバスターによって消滅する……すると後ろからビルゴがビーム砲を構えるがいつの間にか分離していたツインバスターの餌食になったのだ。

「す……凄いな……」

「これが国連直属……」

それを見ていた兵士はただ驚くしかなかった。

—————

そして中央部では

「西地区のLBX全滅！」

「東地区も残り残数七機！」

「正面もやられた！」

「クソッ！この計画を知られる訳にはいかない！脱出だ！これだけ隠せばそれで良い！」

「ほう……それを見せて欲しい物だ……」

司令官が脱出の指示をだしている時……部屋の扉が警備していた兵士と共に中に飛んできた。

「誰だ！貴様！！」

「私は張五林……逃げも隠れもしない……データを諦めて棄てきれなかったのが貴様の甘さだ……」

「貴様！」

司令官が拳銃を取り出そうとすると五林の蹴りが飛び拳銃を蹴り飛ばす。

「な！」

「弱い奴が…私の前をウロウロするな！」

司令官は折れた手首を見て座り込むのだった。

――

「ハア…ハア…ハア…」

「クソツ！政府の犬どもめ！」

司令官が押さええられたと知り兵士たちは地下の通路を懸命に走り逃げていた。

「まだまだ…逃げればどうって事…」

先頭を走っていた兵士が立ち止まり呆然とする。

「なぜ道が塞がっているんだ！」

「負けると分かって逃げるのは正しい判断だ…だが逃げ道ぐらい確認しておくのだったな…」

「なっ！」

兵士が突然声がした後ろを向くとそこにはトロワが立っていた。

「クソが！」

追い詰められた兵士は自身のLBXを出しトロワに襲いかかるが全機が一瞬にしてミサイルの餌食になった。

「なに！」

「バカな…七機のLBXを一瞬で…」

「止めておけ…相手の力量を量るのも兵士として必要な能力だ…」

「くっ…」

トロワは自身の相棒であるヘビーアームズ改のダブルガトリングガンに向けながら兵士に向かって言い放つのがあった。

――

「よし…全員捕獲つと…」

カトルは構成員のリストを確認して笑顔で任務完了を告げるのがあった。

「データは五林から受け取ったので本部でレディさんが今ごろ見てい

るでしょう…お疲れさまでした」

「全く…つまらん」

「まっ…ビルゴだろうが何だろうが私のデスサイズには敵わなかったわね」

五林とスウエルが呟いているとユイも帰還しトロワを見てカトルに説明を求める。

「ああ！彼はトロワ・バートンですよ！プリペンダーの一員で主に潜入工作をしています」

「トロワだ…カトルの言っていた一ノ谷ユイか…よろしく…」

「一ノ谷ユイ…よろしく…」

トロワとユイは握手を交わすのだった。

第6戦「胎動」

「ふむ…ずいぶん堅いプロテクトだ…」

国連の諜報部の長であるレディ・アンはワールドセイバーを制圧したカトルから送られて来たデータを見て眩くと諜報部の解析課に素早くデータ解析を依頼するとカトルから連絡が入る。

「どうも…レディさん」

「カトルか…ご苦労だった…ユイはどうだった？」

「はい…良くやってくれました…」

「しかし…こちらは昼頃だがこちらは深夜だろ？」

「そちらの方がゆっくり話せます」

カトルの発言にレディは軽く周りを確認し声の音量を少し抑えて話始める。

「ユイの過去が割れた…」

「そうですね…やはりそれが僕たちに協力している理由ですかね？」

「だろうな…なかなか酷いものだ…」

「そうですね…それと補給ルートをいくつか調べてみました…」

「何だ？」

黙り混むカトルをレディは不審に思うともう一度質問する。

「はい…ワールドセイバーの神威大門の解決直後に一気に四千機近くのLBXパーツと大量の銃器等が一般の配送業や裏の運びやを通じて何処かに運び込まれているそうです…その計画と関係があるかもしれません…」

「そんなに大量のLBXと銃器が…分かった…こちらでも捜査させよう」

「どうも…それじゃもう寝ます…眠くて眠くて」

「分かった…夜遅くすまないな」

「いえ…」

眠そうにあくびをしながら通信を切ったカトルを見てレディは表の諜報部に捜査を依頼するのだった。

「クワアア……良く寝た……」

「……」

そして朝、スウエルは毎度お馴染みのあくびの横でユイはゆっくりとカトルのいれた紅茶を飲んでいた。

「どうですか？」

「いい薰り……」

ユイの反応に満足したのか笑顔になると自身も紅茶の薰りを楽しみながら飲むのだった。

「カトル様！お待たせしました！」

「ありがとうございます……ラシード……」

「すみません……皆さん聞いてください」

「何だ？朝から早々に」

カトルが全員に聞こえるように声を出すと五林が拳法の練習を止めて聞く。

「実は神威大門の事件解決と同時に大量の銃器とLBXの部品が何処かに運び込まれている事が判明しました……」

「……なるほど……当面はその捜査か……」

「その通りだよトロワ……それで僕たちは日本に向かいます……」

「……何故日本に？」

ユイの言葉に待つてましたと言わんばかりにカトルは説明を続ける。

「実は今説明した輸送ルートは全て日本を経由しているんです……」

カトルはパソコンを立ち上げると世界地図が画面に出ると中国の制圧した所からわざわざインドに戻って海路を使ってから日本に……そして直接日本に等色々なルートを使って日本にたどり着いている。

「なるほどね……つまり今度は日本の拠点を載ってあげればその先が分かるって訳ね……」

「なるほど……ここで見ついているのは私の性に合わんからな……」

スウエルと五林が楽しそうに言うとかトルは

「ちよつと待つてくださいね…行くは行くのですが…お二人には少しやってもらいたい事があります…」

「え？ 私たちが？」

「何だ？」

スウエルと五林の質問にかトルは笑いながら答えるのだった。

—————

「また俺に働けっか？」

「そう言う事だ…私はセレディイとは違うぞ…」

「ハッ！俺は傭兵だ…金を払ってくれば良いんだよ…新しいLBXも貰ったしな…」

「では頼むぞ…」伊丹キョウジ」

「ハハッ！」

伊丹キョウジは新しいLBX、ガンダムグリップを見て不敵に笑うのだった。

第7戦 「傭兵の帰還」

「全く…カトルも扱いが悪いわよね」

「全くだ…だが…現役高校生最強のLBXプレイヤーと呼ばれる”神風トオル”と会えるのは幸運と言うものだ…」

スウエルと五林の言葉で分かる通り二人は神威大門統合学園に来ていた。

「悪いな…誰だか聞いていいか？」

すると二人の後ろからハーネスの制服を着た黒髪の少年が話しかけてきた。

「さあ…誰でしょう？」

「……………」

「なに……………」

二人の反応に黒髪の少年は怪しみながらも自己紹介をする。

「神威大門生徒会、風紀委員長の神風トオルだ…」

「あら…あの有名なトオルさん…私はスウエル、スウエル・マツク

…国連の裏諜報部に所属してるわ！」

「同じく…張五林だ…」

「国連が何の用だ…」

「ちょうど良かったらあなたに会いに来たのよ」

「なに？」

「まさか…神威大門に行かせるなんて…」

「確かに…彼らは平和に暮らすべき人たちです…しかし彼らの力と技術力は強大です…また狙われる可能性もあります」

「その守りの為に？」

「ええ……………」

ユイの質問でカトルは答えながらパソコンを操作しているとトロワがヘビーアームズの整備をしながら話を続ける。

「あの二人は実力も能力もある…今回もワールドセイバーとはいえ小さな経由基地だ…三人で十分だろう…」

「そう…」

(トオル……)

ユイはそう呟くと静かに目を瞑るとあの事件の事を思い出しもう一度会いたいな…と思っていた。

—————

「と言う事らしい…」

トオルはダック荘に二人を案内しハーネス、ジエノツクのメンバーに二人の事を説明した。

「成る程…つまりまたあのような事が無いように…か……」

「成る程な！すまないな！スウエル！」

「気にしないで！いきなり来たこつちも悪かったし！」

ノインとバネツサが納得するとバネツサはスウエルに素早く謝罪をいれる。

「全く…隊長がまた新しい女の人連れてくるから…」

「まあ…それが隊長らしい所でもある」

ワーカーと神威大門事件の後、復帰したオットーが少しボロボロの状態で笑いあう。

「本当にトオル様は！私は驚きましたわ…私を捨てて他の女を連れてくるなんて…」

「おい！トオルは私のだ！」

「まだ勝負は付きませんわ！」

オットーと同じく復帰したドロシーはバネツサと臨戦状態になり近くに居たワーカーとオットーが慌てて止める。

実はトオルがスウエルと五林を連れてきた時にバネツサとドロシーが勘違いしてひと悶着あったのだ…。

「でも今現在ほどのような感じになってるの？この神威島は？」

スウエルの質問にそこに居たムラクが答える。

「この島一帯には簡易的なレーダーを設置している……」

「フン……甘すぎるな…レーダーは敵の接近を知らせるだけだ…」

五林がそう呟くとムラクの横に居たカゲトがしかめた顔をして五林に反論する。

「人の話を最後まで聞くツス…それと連動して自動制御のLBXを配置してあるし…それはこの前のワールドセイバーのビルゴを修理して改良したタイプで中々倒せないツス」

「成る程…腑抜けでは無いようだな…」

「いちいち言葉がムカつくツスね！」

「止めるカゲト……」

「ムラクさん…分かりました…」

カゲトは五林に食って掛かるとムラクが止めカゲトは渋々引き下がるのだった。

「スウエル…俺が聞きたいのは一つだ…また世界で何かが起きようとしている……と言う事だな…」

「そうね…大きな事が……」

「なら何故ここに居る？警告は聞いた…なら二人も行くべきだろう？」

「さあ…私にはカトルの考えてる事は分からないわ…でも一つだけ分かっているのは…カトルが何らかの目的の為に私達二人をここに寄せたと言う事ね」

「そうか…」

トオルはそれから何かを考えるように黙り混んでしまうのだった。

日本の山奥にフェンスの前にユイ、カトル、が居た。

「ここは？」

「元イノベーター研究所です…ここは日本政府によって接收されていてその高い技術力施設は有効に活用されていますが…」

ユイはカトルが説明を止めると横からトロワが来た。

「どうでした？」

「ビルゴタイプが確認出来た…」

「やはり…」

「どういう事？」

ユイの質問にトロワが声を潜めて答える。

「日本に輸送経路が集中しているのが気になって調べると日本政府の中にワールドセイバーの内通者が多く居た…」

「……ッ！」

トロワの話を聞いたユイは改めてワールドセイバーの恐ろしさを実感していると後ろから殺気が……

「クッ！」

殺気を感じたカトルが素早く自身の機体であるサンドロック改を出し後ろから襲いかかるLBXの攻撃を受け止める。

「何者です！」

「ハッ！流石、裏の国連様だなあ〜」

「伊丹キョウジ……」

カトルが叫ぶと森の中から出てきたのはユイと同様ワールドセイバーを抜けた筈の伊丹キョウジだった。

「あなたはまた……」

「ハッ！久しぶりだな！一ノ谷ユイ……まさか国連に属してるなんてな！」

「……」

キョウジの言葉をユイは無視してウイングゼロをキョウジの新たなLBX、グリープの前に降ろす。

「無視か……まあいい……このグリープの手慣らしに付き合っただけで貰うぜ！」

キョウジはグリープをサンドロック改、ウイングゼロ、ヘビーアームズ改に突っ込む。

「来ます！トロワ！ユイ！」

「了解……」

「分かった……」

グリープはビームランスでサンドロック改を狙うがカトルはヒートショートを巧みに扱い受け流すとサンドロック改の影に隠れていたヘビーアームズ改がマイクロミサイルを撃つがグリープは驚く

べき機動性で上空に逃げるがそこにはビームサーベルを構えたゼロが居た……グリップとゼロはつばぜり合いになる。

「何故ワールドセイバーに戻ったの!？」

「俺は傭兵だ! 戦いがあればいいんだよ!」

「そんな理由で!! ……グッ!」

キョウジの理由を聞いてユイは怒るがキョウジはそれを嘲笑うように蹴り飛ばす。

「貰った!」

「決める…」

「ハッ! バカめ!」

カトルとトロワはユイが吹き飛ばされたのを見計らってグリップにサンドロック改のヒートショーターとヘビーアームズ改のアーミーナイフが迫るがキョウジは笑うとグリップの周囲にバリアのような物が展開される。

「なんだった!?」

「ッ!」

カトルとトロワが驚くとキョウジはビームランスで吹き飛ばす。

「ハッ! 情けねえ…まあいい…また会おうぜ!」

「待て!」

キョウジが退く気配を見せたのでユイが止めようと駆け寄るがキョウジの周りに煙が立ち上り気配が消えた…。

「逃げられてしまいました…」

それを見てカトルは悔しそうにするのだった。

第8戦「幕上げ」

「諸君……ここまで耐えがたきを耐え忍びがたきを忍んで来てくれた……我等ワールドセイバーの決起の時である……虐げられし者達を救済し真の解放を勝ち取るのだ！」

「……おおおおおおお!!」

ワールドセイバー全てを統括するデギム・バートンの言葉にワールドセイバーの隊員が雄叫びを上げるのだった。

……

A国国防本部

「そこだ！逃すな！」

「行け！」

「今だ！投げろ！」

A国の国防施設内でA国のLBX特殊部隊ファイヤースウィーツ隊が訓練をしていると突然施設内に警報が鳴り響く。

「何だ！いったい何事だ！」

ファイヤースウィーツ隊の隊長であるジャック・ジェラート中尉が叫ぶと隊員が部屋に飛び込んできた。

「国防本部を囲むように大量のLBXが！」

「何だと!？」

「行きましようか……第2小隊！行くわよ！」

ジェラートが驚いていると横に居たジェシカが素早く指示を飛ばし出撃するのだった。

……

A国首都、Nシテイ

「何だ？LBX？」

「何よ……」

Nシテイの大通りに二つのガトリングを持ったLBXが降り立ちそれを見た通行人が不思議に思い疑問の声を上げると突然ガトリングを発射する。

「きゃあああ！」

「な！何だ!？」

通行人が恐怖に逃げ惑い町中に現れ暴れるLBX達にパニックになるのだった。

—————

「何だ！何が起きている！」

A国中の警備システムが異常警報が鳴り響くのを見てレディ・アンが叫ぶ。

「分かりません！A国中で所属不明のLBXが暴れだしています！」

「国防隊は何をしている！」

「国防本部にも大量のLBXが！……これは…ビルゴタイプ！」

「何だと！ワールドセイバーだとも言うのか!？」

レディが叫ぶと諜報部員が悲鳴のような声で報告をする。

「レディ・アン統括官！」

「今度は何だ！」

「世界中の首都でも同じような報告が！全てビルゴ及びトラスタイプが確認！」

「Nシテイのホワイトハウスが！」

「ロンドンの主要機関が制圧されました！」

「エジプトのカイルまでも制圧！」

「各国からの救援要請が殺到してます！」

雪崩のように来る報告にレディが目眩を起こしそうになると部屋に飛び込んできた諜報員が慌てながら叫ぶ。

「統括官！お逃げください！」

「なっ！」

諜報員の入ってきた扉からキャリパーとゴールドーが侵入し部屋を無差別に攻撃するが一瞬にして真つ二つにされた。

「ワールドセイバーめ！ここまで来るとは！」

レディがそう呟くとそこには飛行ユニットを着けたリーオーがビームサーベルを構えて立ち塞がったのだった。

日本某所

「……………」

「どうした？カトル？」

「大変な事になりましたね…」

カトルがインカムで無線を傍受すると黙り混むのを見てトロワが聞くとカトルがこれ以上ない程真剣な顔になるとカトルがトロワに指示を出す。

「トロワ…プリベンダーの秘匿回線を使って！マグアナック隊とスウェル、五林と連絡を取って！我々は我々独自の行動を取ります！見張っているユイもすぐに合流！」

「分かった…」

カトルの指示にトロワはすぐに行動を開始するのだった…。

—————

「ええ…了解…こつちでも緊急コールは鳴っているわよ…分かったわ」

「トロワか？」

「ええ…かなりヤバイ状況ね…」

「そうか…」

スウェルの緊張した声に五林は顔を引き締める。

「大変そうだな…」

「トオル…ちようど良かったわ！いきなりだけど仕事が出来ちやって帰らなきや」

「そうか…だがこちらを手伝ってからにしてもらおうか…」
「なに？」

トオルの言葉に五林は聞き返すとトオルは真剣な表情で言う。

「神威島のレーダーに機影が映った…自立型の防衛隊が迎撃に出ているが数が多く止められない…今迎撃部隊を組んでいる…」

「成る程…こつちにも来たのね…」

「……………」

トオルの言葉にスウェルと五林が納得の表情を浮かべる。

「やはり…他にも何かあったのか…まあいい後で聞かせてもらう…」

「手伝うわよ…カトルはこの事も予測してたのかしらね…」

「フンツ…来るならやるしかないだろう…」

「助かる…二人は海で迎撃をしてくれ…俺も行く…」

「分かったわ!」

「貴様に言われずともやる…」

二人の返事を聞いたトオルは二人を海岸まで案内するのだった。

「……………」

「トオル…来たか…」

「すまないバネツサ、状況は?」

「ああ…自立型の防衛隊のお陰で結構減ったが…海、空合わせてざつと2000位だな…」

「そうか…」

トオルはバネツサに渡された端末を操作すると確認する。

「隊長!ハルキに水際の指揮を頼みました!」

「助かるオットー…よし…出るぞ!」

「…了解!」

「……………」

神威島海上

そこでは神威大門の迎撃部隊とワールドセイバーと思われる進行部隊が戦闘を行っていた。

「ハアアアア!」

五林はライディングソーサーに乗ったアルトロンのドラゴンハングで海上に居たエアリーズを粉碎すると別方向の海中に居たキャンサーがミサイルを撃とうと浮上した所をスウエルのデスサイズヘルが切り裂く。

「クッ…数だけごちやごちやと!」

「仕方ないでしょ!行くわよ!」

その頃、トオルもトールギスⅢでメガランチャーで海中を砲撃すると海中のキャンサーが次々とやられていく…するとトオルの後ろからナズーが飛び出しアイアンクロードトールギスⅢを襲うがその前

にバネツサの操るエピオンが切り裂く。

「すまない…バネツサ」

「気にするな…私はお前の横で戦えて嬉しいよ…」

「バネツサ…」

二人の世界に入りかけているのを見てノインがトールギスⅡを操りながら愚痴をこぼすのを見てオットーがトールギスで迎撃し笑いながら答える。

「他でやれと言いたいな…」

「仕方ないよノイン…」

「クウウウ！トオル様あああ!!」

それを見てドロシーは嘆きながら自身の機体であるヴァルクリウスで無双するのだった。

—————

その様子を双眼鏡で見ている人影があった…。

「バネツサ・ガラ…」

その人影は海上で戦闘をするエピオンを見て憎々しげに呟くのだった。

第9戦 「再会」

「フウ……疲れたわ……」

「……」

夜も深く深夜に差し掛かろうとした時間帯、海岸では国連所属のスウエルや五林、神威大門のトオルたちが座り込んでいた。

「海岸まで侵入されたが……大事に至らなくて何よりだ……」

「確かに……」

ムラクの呟きにトオルは同意しトオルは寝転びたい衝動を抑えて座り込んでいたスウエルに近づき質問をする。

「さあ……聞かせて貰おうか……世界で何が起きている……」

「ウツ……」

いつも通り惚けようとしたスウエルはトオルの表情に気圧されてしまい思わず黙り混む。

「世界各地で大規模なLBXテロだ……恐らく主犯はワールドセイバー」

「五林！」

「どうせ言っておく必要がある……協力」してもらおうにな」

「五林!!」

五林の言葉にスウエルは思わず大声を上げる。

「何を怒っている……いつものお前らしくない……」

「五林……貴女言っている事が分かってるの!? 私たちの存在はこの島にいるような普通の人達の安全を守るために戦っているのよ! それを巻き込もうと言うの!!」

「軍が使い物にならない以上、我々が早期に解決する必要がある! それが一番被害を少なくする方法だ!」

「だからって!」

「いい……スウエル……」

「トオル…」

五林の言い分に更に言い返そうとするスウエルをトオルが止め静かに話始める。

「俺たちは知ってしまったている…強大な力による恐怖を…それに対する我々の無力さを…だがやれることはいくらでももある…」

「そうだぜ！このまま黙って見てるのは私の性に合わないしな！」

「それに世界がやられてはこちらも困るのでな…」

トオルの言葉に続いてバネツサとノインも続き周りに居た生徒達も頷き会う。

「ハア…神風トオル…貴方は予想以上に凄い人ね…惚れちゃうわ」

「そうか…」

「何だと！」

「ヤバイ止めなきや！」

バネツサとドロシーがスウエルの冗談に激しく反応し襲いかかろうとするがオットーとワーカーに止められる。

「何て呑気なんだ…」

「それがウチらの強さやで！」

その光景を見ていた五林が呟くと近くに居たスズネが答える。

「強さか…」

「あんたの言う強さは知らんけど…トオルは力が強いんちゃうんや…心が誰よりも強いんやで！」

「そうか…」

スズネの言葉に五林は素直に聞くと黙ってその光景を見つめるのだった。

—————

「そうですか……」

「スウエルたちは神威大門の生徒数名と共にA国奪還に合流するらしい…」

「神威大門…」

カトルはトロワからスウエルの通信内容を聞くと少し悔しそうにしユイは何だかよく分からない心境になっていた。

「……実力があるとはいえ……民間人まで巻き込んでしまうなんて……」
「仕方ないだろう……状況が状況だ……一刻も早くA国を取り返さなければ……」

「とりあえず……行こう……それから」

「ええ……そうですね……」

トロワとユイの言葉にカトルは何とか気持ちを入れ換えると港に向かうのだった。

—————

次の日、カトルたちが港についた頃には神威島からのフェリーが着きそこからスウェルと五林が降りてきた。

「カトル」

「スウェル！五林！無事で何よりです！」

カトルが二人を呼ぶと二人はカトルを見ると少し驚く。

「どうしたの？カトル？」

「いや」

カトルの顔はやつれその端正な顔には熊まで出来ていた。

「昨日は情報収集で忙しかった……カトルはまだ寝ていないんだ……」

「言わないでよトロワ……」

「全く……無茶すぎよ！」

「本当だな……」

プリペンダーのメンバーが話す中ユイは黙り混みフェリーの出入り口を凝視する、そこには神風トオルの姿がありトオルも港にいたユイを見ていた。

「トオル……」

「ユイか……」

「また……会った……」

「以外と早かったな……よろしく頼む」

「私こそ……」

神風トオルと一ノ谷ユイは改めて握手を交わすのだった。

第10戦「強化」

「では状況の再確認をします…」

カトルはトロワ補助の元空中に映像を浮かばせて説明を始める。

「現在、ワールドセイバーと思われるLBXと兵士の部隊が国連加盟国の中でも発言力と力を持っている国の主要機関を制圧しています…特にA国は首都を含む主な州が制圧されていますが国防本部と国連本部は依然抵抗を続けています…」

「つまりレディ・アン統括官は無事なわけだ…凄いな」

スウエルは感嘆の声を上げるとトオルが挙手し質問をする。

「国連加盟国で発言力を持っているなら何故日本は無事なんだ？」

「恐らく神威島に来たのが制圧の先発隊だったのでしようが…撃退されたのでA国に向かったと思われる…」

「ほな、ウチらがやってしもたから諦めた？」

スズネの言葉にカトルは頷き話を続ける。

「恐らくそう思われます…そして我々の目標は国連本部です…我々がA国侵入後敵部隊を撃破しつつ国連本部のレディ・アン統括官と合流し国連の戦力を加えた上でホワイトハウスを奪還します…」

「だけど…A国を占領している部隊が一番多い…少なくとも4000機はいる…」

「よ…4000機…」

ユイの言葉にバネツサは言葉を失い他の皆も流石に顔をひきつらせていた。

「200機でも重労働だったのにその20倍ですか…」

「フンツ！弱い奴はすぐに群がる…」

「作戦の要は時間です！他の占領地点から増援が来る前に第一目標の国連本部まで一気に行きます…それに戦うのは僕たちだけでは…」

「カトル様あああ！」

カトルが説明を終えると後ろからカトルの名を叫ぶ中年の男性の

集団が走ってきた。

「カトル様！マグアナック隊、全40人…それと協力者が…」

「ん？協力者？」

カトルはマグアナック隊の隊長であるラシードの言葉を聞いてマグアナック隊の後ろを見ると眼鏡を掛け白衣を着た中年の男性が立っていた。

「あ…貴方は……」

「ああ！山野淳一郎博士!!」

「「ええ!!」」

カトルが驚き言葉を失った代わりに叫んだのはワーカーだった、その言葉を聞いて全員が驚きの声を上げたのだった。

「話は聞いている…各国の占領部隊は私の知り合いが何とかしてくれる…悪いが君たちにA国を頼みたい…」

「あ…ありがとうございます…山野淳一郎博士……」

「言っておくが私がここに要るのは秘密だ…だからそうだな…ドクターJとでも読んでくれ」

マグアナックの顔長のアウダがカトルに耳打ちをする。

「どうやらLBXの改造を引き受けてくれるそうで…」

「そうなんですか!?!…是非ともお願いします!」

カトルは深々と頭を下げると山野博士もといドクターJははにかみながら返事をするのだった。

—————

タイニーオービット社

カトルたちは山……ドクターJの案内で社内に通されそこで各機のLBXの強化が行われた。

「凄いな…」

黙り混む全員の意思を代弁するかのようにはやくトオルは生まれ変わるLBXたちを見ていた。

サンドロックカスタム、ヘビーアームズカスタム、デスサイズヘルカスタム、ナタク、ウイングゼロカスタム、トールギスⅢF（フリーユール）、完全完成型エピオン、ドットブラスライザークリームゾン等生ま

れ変わったL B X達に全員感動を隠せない。

「残念ながら私が出るのはここまでだ…」

「いえ…ありがとうございます！…ここまでしていただけるなんて…」

「サインください！」

カトルとドクターJが話している時に神威大門のメカニック二人はサインを求めて駆け寄るのだった。

機体詳細紹介

サンドロックカスタム（決戦仕様）

サンドロック改を改良したものの、背部に担架できる数が増えヒートショーテルが四つになっている。

更に対ビームコーティングされたマントを付けられ防御力も向上されている。

ヘビーアームズカスタム（決戦仕様）

ヘビーアームズ改の改良機で片腕だけだったダブルガトリングガンを両腕に増設し腰には二つの実刃ナイフが装備されている。

ダブルガトリングガンは長期戦に備えるために背部に予備弾倉が増設されダブルガトリングガンに繋がっている。

ガンダムナタク

アルトロンの改良機、ドラゴンハングはシールドとして使えるように大型化し強度も上がっておりビームトライデントはビームの出力と持続時間も上がっている。

デスサイズヘルカスタム

ビームサイズは二枚刃から一枚刃に減ったが威力は変わらずデスサイズ特有のハイパージャマーが強化され自立型LBXぐらいなら障害が出るほど強力なものになっている。

ウイングゼロカスタム

スラスターが羽のような物に変えられ天使のような姿に変貌している、ツインバスターの附属パーツが追加され分離出来ない代わりに威力は二倍以上と言う更に化け物染みた威力になっている。

更に発動時に機体性能が全般的に向上するゼロモードが実装された。

トールギスⅢF（フリーユージェル）

トールギスⅢのスラストをウイングゼロカスタムのスラストと同じものに換装したもので見た目が一層美しくなっている、装備が何かと大型のトールギスⅢに合うように羽は若干大きくなっている。

エピオン（完全版）

ワールドセイバーの技術を持つとしても実現できなかった完全版かそれ以上の性能を獲得した姿、ビームサーベルは予備で一本増設され二刀流が出来るようになった。

ウイングゼロカスタムと同様ゼロモードを実装した。

ヴァルクリウスカスタム

ビーム砲が二つになっておりある程度の連射が可能、二つの砲を合体することでツインバスターに匹敵するほどの威力を誇る。

プラネイト・ディフェンサーは腰から大型化した肩に二つずつで減っているが四つで機体を囲める程強化されている。

ドットブラ斯拉イザークリムゾン

機体性能が格段的に向上されたドットブラ斯拉イザーの姿、性能向上のためか起動時は常に赤くなっている。

ジル・ダイバー

バル・ダイバーの改良機で得物である鬼刀丸より切れ味をました菊一文字を二刀装備し背部のスラストは大型のエンジン二つから大型のエンジン二つと小型のエンジン二つの四つのエンジンを搭載し機動力はバル・ダイバーとは比較にならない位強力なものになっている。

第11戦「上陸」

「クツ……」

「…大丈夫？」

「何とかな…」

「全く…流石テロリストだな…ここまでやって来るとは思わなかったぜ！」

A国の地下鉄路線でトオルは痛めた左腕を押さえるとユイは心配しながら応急処置を施しバネツサがエピオンを操りながら見張っていた。

「完全にはぐれたか…」

「皆は無事だといいいんだがな…」

「今は取り合えず落ち着ける場所に行った方がいい……」

「そうだな…行くぞ…」

「ああ…」

「うん…」

ユイの提案にトオルは同意し痛む左腕を押さえて路線を歩き始めるのだった…何故こうなったかと言うと…それは少し前に遡る。

「何とか…着きましたね…」

カトルを初めとするプリペンダーたちは密かにA国に侵入し使われなくなったか途中で建設が止まった地下路線を使って何とか首都であるNシティに到着したがそこに待っていたのがLBXの大群だった。

「クツ…やはり読まれてましたか…」

「今はやるしかない！」

悔しそうに呟くカトルにトオルは叫びながらトールギスⅢFを戦闘態勢にさせるのを見て全員が自身のLBXを出す。

「行くわよ！相棒！」

「フツ…行くぞ！」

「悪いが…見られたからにはやるしかない…」

「行きます！」

「ウイングゼロカスタム…」

「ほないくで！ドットブラスライザー！」

「出撃だ！ジル・ダイバー！」

「行きますわよ！ヴァルクリウスカスタム！」

「トールギスⅡ！」

「トールギス！」

「マグアナック！」

「行くぞ！」

「「おお！」」

トオルの号令の元全員がLBXにかかる。

「ほらほら！行くわよ！」

スウエルがトールラスを切り刻むと派手に爆発するとそれを目眩ましに奥から別のトールラスがサーベルを構えて襲い掛かってきた。

「ッ！」

今までに無かった連携にスウエルは驚き反応が少し遅れるが横からのヘビーアームズの銃撃にトールラスは四散する。

「大丈夫か？」

「あ、ありがとう…コイツら連携を…」

「気を付けて下さい！今までとは違います！」

カトルは注意を促しながらサンドロックカスタムに手を前方に降らせると後ろに居たマグアナック隊が一斉に射撃を開始する。

「行け！野郎共！」

「「おう！」」

隊長であるラシードの言葉に最前列に居たトールラスを落としていくがすぐにビルゴタイプが前に出てプラネイト・ディフェンサーで防ぐ。

「コイツら！柔軟に戦術を変更している！」

「なら私が行くさ！スズネ！カゲトラ！」

「合点承知！」

「了解！」

バネツサはスズネ、カゲトラと共にビルゴに斬りかかるがビルゴの前にビルゴⅡが庇うように現れビームサーベルで三人の斬激を受け止める。

「何だつて！（やねん！）」

「バネツサ！スズネ！カゲトラ！」

斬激を防がれ至近距離でビーム砲を受けた三人を援護しようとするトオルにミサイルと銃弾の雨が降り注ぐ。

「何だ！」

トオルが驚きながら見るたのは新型と思われるLBXが肩からミサイルとガトリングガンの銃弾をトールギスⅢFに浴びせる姿だった。

「クツ…これでは…」

「トオル！…ウワツ！」

「隊長！…グワツ！」

トオルと同じくノインとオットーも新型の銃撃に曝される。

「コイツら本当に無人機なのか!？」

「見つけました！」

バネツサが叫ぶとその後ろに居たワーカーが叫びタケルが説明する。

「全部無人機なのは確かだよ！でも全てのLBXが個々の判断で動かずに何かに統括されてそこからの指示を受信しているんだ！」

「つまり何だ！」

「つまり全機が高度なシステムで動いていてその中で誰かが柔軟に戦術を変更しているです！」

タケルの説明に五林が簡単にするように求めワーカーが簡潔に話す。

「クツ…きせん！」

五林は襲い掛かってきたトールラスをビームトライデントで串刺しにする爆発寸前のトールラスを新型のLBXに投げトールラスはぶつかる新型のLBXを巻き込んで爆発を起こす。

「カトル…このままではきりが無いぞ…」

「分かっています…：…久しぶりに使いましうか…」

カトルはそう呟くとカトルの目がうつすらと青白く光始める。

「ッ…：…全員！退避！」

「なに？…：…グワッ！」

カトルの突然の言葉に全員が驚いていると敵のLBXが一斉に退き始めると地下鉄の天井が爆発し瓦礫が全員を襲う。

「キヤ！」

「バネツサー…：…ッ！」

「トオル！」

その中で少し大きめの瓦礫がバネツサを襲うがトオルが左腕で防ぎ痛みに顔をしかめる。

「こつち！」

トオルは腕が痛むのを無視して声のした方にバネツサを連れて向かうとすぐ居た場所に向かうとトラックが落ちる、地下鉄の天井が崩れたのでその上にあつた物だつたのだ。

こうして現在に至るのだつた。

—————

そして他のメンバーは

「やられました…：…完全に見通されたなんて…」

「しやあないに…：…爆弾なんて誰も考えやんて！」

「とにかく今は先の事を考えよう…」

「そうですね…」

三人は先程の地下鉄の連絡通路のような所でカトルが落ち込んでいるとスズネとカゲトラが励まし三人は取り合えず目的地である国連本部に向かうのだつた。

—————

「すまないな…：…カトルではなくて…」

「いえいえ…：…我々もプリペンダーの一員ですから…：…どうしますか？」

「そうだな…：…取り合えず目標を変えずに国連本部に行こう…：…全員そこに集まる筈だ…」

「確かに…カトル様もそう言うな！」

「そうですね…」

トロワの提案にマグアナツクのアフメドが同意するとラシードもマグアナツクに命令を出し出発するのだった。

――

「トオルとはぐれたか…」

「トオル様…」

「とにかく！今は皆と合流しなきゃ！」

疲れたように言うノインと落ち込むドロシーを見てタケルは二人を奮い立たせる。

「困ったな…」

「どうしたんだ？」

「国連本部ってどこ？」

「「あ……」」

ワーカーの呟きにオットーたちは思わず声を揃えるのだった。

――

「ほら！さっさと行くぞ！」

「ハイハイ…」

そして残った五林とスウエルは五林がさっさと行ってしまおうのでスウエルは心の中で愚痴りながら追いかけるのだった。

(何で私がまたコイツとなんだあああああ！)

第12戦 「過去の因縁」

「ハア……疲れた……」

「ああ……そうだな……」

「……」

バネツサ、トオル、ユイの三人はひとまず一目の無い地下鉄の出入口付近で休憩をしていた……三人とも服が少し汚れかなりの距離を歩いたのが一目で分かった。

「ユイ……今どこにいるんだ？」

「待つて……え？」

バネツサの問いにユイは端末で調べようとするがウンともスンとも言わずにただ沈黙を守っていた。

「どうした？」

行動が怪しいユイにトオルは声を掛けると申し訳なさそうに

「壊れてた……」

「……」

謝るユイはを見て二人は黙り混みユイは更に申し訳なさそうにする。

「いや……攻めている訳じゃない……」

「そ、そうだよ！仕方ないじゃん！あれだけ瓦礫が降ってきたら機械の一つや二つ壊れるって！」

「……ごめんなさい」

申し訳なさそうにするユイを二人が慰めていると突然、出入口から足音がし声が響き渡る。

「随分と楽しそうね……ブラウンマスターングス……」

「お前は……ルーダ・ファーキル」

その声の主は長い紅髪をたなびかせている少女だった、その少女を見たバネツサはその名を呟くのだった。

「フツ……覚えていたのね……」

「ああ…」

「バネツサ…誰だ？」

そのただならぬ様子を見たトオルはバネツサに質問しバネツサは静かに答える。

「そうか…トオルは知らなかったのか…ちようどトオルが入学する前に学園を退学したんだ…ロシウスの女帝、ルーダ・ファークル」

「そいつとは何の関係なんだ？」

「私の小隊の元隊長…まさかワールドセイバーに居るなんて…」

バネツサがばつが悪そうに言うトルーダが叫ぶ。

「そう！コイツは元私の小隊の隊員だった…でもバネツサ・ガラ！貴方が居なければ私はもう少しマシな人生を送れたわ！」

「アンタが勝手に辞めたんだろ！」

「ハッ！笑わせないで！隊長殺しのバネツサ…今仕留めてあげるわ…ハイドラ！」

ルーダが叫び飛び出したLBX、ハイドラはバスターカノンを予告もなくバネツサに向けて発射しビームはバネツサを襲うがそこにトールギスⅢFが割り込みシールドで受け止める。

「なに!？」

「どんな理由かは知らないが…バネツサを傷つける奴は許さない…」

「トオル……」

「フツ…流石はライトニング・カウントの名を持つ男…良いわ…まとめて殺してあげるわ…」

「行くぞー！」

トオルはトールギスⅢFを加速させて斬りかかるがハイドラは素早くビームサーベルを抜刀し受け止める。

「……………」

「フム、強い…でもね…」

トオルはルーダの殺気に気づきトールギスⅢFの翼を機体に包む様に展開すると強力なビームがトールギスⅢFを襲うが翼で受け止め間合いを置く。

「へえ…私のショルダークローのビームを初見で防ぐなんて…やる

「じゃない…」

「よくもトオルを！エピオン！」

「ウイングゼロカスタム…」

「バネツサとユイも自身の機体を出し戦闘状態にさせる。」

「これ以上邪魔するんだつたら！」

「力づくで排除する…」

「バネツサとユイの言葉にルーダは面白そうに笑いながら宣言する。」

「ここは通さないわ！貴方たちの死に場所はここよ！」

「押し通る！」

トオルの声を合図に三人は三方向から攻めるがハイドラのシヨル
ダークローとビームサーベル二刀流で捌く。

「どうしたの？その程度なの？」

「まだ！」

バネツサがそう叫ぶとエピオンで斬りかかるがルーダは避けるが
エピオンのすぐ後ろにいたトオルのトルギスⅢFがヒートロッド
で襲いルーダは何とかビームサーベルで受け流すがトルギスⅢF
の後ろを見たルーダは戦慄した。

「ターゲットロックオン…発射」

「威力強化パーツ”ドライツバーク”を付けたツインバスターライ
フルがハイドラに向けて放たれた。

「なに?！」

ルーダは驚きながらもバスターカノンで相殺するがツインバス
ターライフルの威力を二倍にするドライツバークの力でハイドラの
バスターカノンが押されもう無理だと判断したルーダはサーベル二
本を最大出力にしビームを受け止めるとビームサーベルによって弾
かれたビームが壁や天井を破壊する。

「なんて威力だ！」

「LBXに持たせる火力じゃないだろ！」

トオルとバネツサはその威力に驚くとビームが止んだ先には少し
ばかり損傷したハイドラが佇んでいた。

「クツ…まあ良いわ…どうせ貴方たちにはワールドセイバーは止めら

れない…セレディーとは違うしね…」

「ッ…待て！」

立ち去ろうとするルーダを止めようとバネツサが駆け寄るが突然ルーダからまばゆい光が発せられ居なくなってしまうた。

「逃げられたか…」

「……」

トオルがそう呟くと落ち込んでいるバネツサの頭を優しく撫でる。

「何が会ったかは知らない…人間話したくない過去の一つや二つは有るものだ…だが…辛くなったら…遠慮なく言え…解決は出来ないかもしれないが重荷と一緒に背負う事は出来るつもりだ…」

「ありがとう…」

「フツ…気にするな…」

(居心地が悪すぎる…)

トオルとバネツサの様子を見てユイはただこの場から一刻も早く立ち去りたい衝動に駆られたのだった。

第14戦 「決戦の予感」

コツ：コツ：コツ：コツ……

A国の地下道に響き渡る多数の足音：その正体は国連本部で籠城していた筈のレディ・アン統括官を含む諜報部だった、諜報部は皆それぞれ服はボロボロで傷ついた者や足や腕を痛めていて他の人に支えられている者もいた。

「クツ：我々国連の諜報部が逃げ惑う事になるとは……」

「仕方ありません：統括官いくらなんでも数が多すぎます……」

レディ・アンの呟きに諜報部の隊員が答えるとレディは悔しそうに顔を歪めると前からLBX独特の駆動音と多数の足音が聞こえ始め諜報部が構えると姿を現したのは金髪の少年だった。

「レディさん！」

「カトルか!?よく来てくれた！」

「いや〜走ったで〜」

「疲れたな……」

かなりの距離を歩いたのかカトルと共に行動を共にしたスズネとカゲトラは疲れたように座り込み一息をついた、一方カトルは服装は少し乱れてはいるが徹夜明けにしては元気満点で通常運転の所を見ると裏の国連に所属していると改めて実感させられるのだった。

「しかし何故レディさんが……まさか……」

「ああ……そのまさかだ……敵が多くてなやむ無く脱出したのだ……」

レディが悔しそうな所を見てカトルは残念そうな顔を見ると現状を話す。

「こちらも皆で来たのですが……敵の策に引っ掛かってしまつて分断されてしまいました……」

「そうか……彼らは?」

「彼らは神威大門統合学園の生徒です……本当は巻き込みたくは無かつたのですが……」

「そうか…状況が状況だ…仕方がないさ…」

「はい…」

カトルたちが国連本部から脱出したレディと合流している時、ホワイトハウスでは…

「成る程…つまり貴様はネズミを見つけたと言うのに逃したと…」

「申し訳ありませんでした…」

ホワイトハウスの大統領室、本来はA国を納める大統領が座るべき椅子にワールドセイバーの長であるデキム・バートンが座っていた、彼は机の前に直立不動で立っているルーダの報告をワインを飲みながら聞きルーダに鋭い視線を送る。

「ッ！」

ルーダはその視線に恐怖しその場から思わず半歩下がってしまう…それを見たデキムはワインを机に置くと更にルーダを睨む。

この様子を見て分かるようにワールドセイバーの実態は恐怖体制による支配だった…末端の兵士は人民解放や様々な大義を抱えているがルーダのように使えるからと言ってワールドセイバーに参加したものは二度と逃げられないように恐怖で従わせる場合が多い…だがルーダはこのような事になってもワールドセイバーに身を投じた理由を果たすまでは抜けるつもりは毛頭に無かったが。

「ルーダ…」

「ハッ！」

「恐らく奴等は国連本部に向かっていていると思われるが…諜報部が姿を消した以上ここを指すだろう…国防本部からキョウジを呼び戻せ」「ハッ！直ちに！」

この部屋から出れる理由を得たルーダは直ぐに部屋から飛び出しキョウジを呼び戻すために通信室に急ぐがその必要を失った。

「キョウジ…何故ここにいる？」

「あ？俺が何処に居ようと関係ないだろ？」

「なに？」

ルーダはキョウジに言葉に額にシワを作る、歳的に言えばルーダは

高校一年生でキョウジは高校三年生に相当する年齢だがワールドセイバーにはそのような上下関係は有らず力を持つているか否か…それが重要だった。

「それで？何のようだ？」

「閣下が呼んでいる…」

「ヘイヘイ…」

そう言いながら大統領室に向かうキョウジの背中をルーダは面白く無さそうに見るとそのまま自身のLBXを調整するために部屋に向かうのだった。

――
A国大通り、そこには大量のLBXが武器を構え見張っていた…いつもなら人が絶えずに話し声が包んでいた大通りは今は静まり返り人気すら無い…街の住民は一ヶ所に集められその周りにはワールドセイバーの兵士とLBXが見張り極限状態が続いていた。

「駄目だ…外は敵だらけだ…」

「そうか…」

アフメドの報告を聞いたラシードは顎に手を添えて考え込むとトロワとアウダが帰って来た。

「どうだった？」

「住人は一ヶ所に集められていますますが精神的にかなり参っているようです…」

「早く助けなければ大変な事になる…」

「こちらも外を見てきましたが出れそうな所は何処にも…」

ラシードはアウダとトロワの話の話を聞くと難しい顔をする…それはトロワの言っていた大変な事になると言う事である。

人間は通常、冷静に考えて行動するがそれは通常についてである…極限状態に置かれた人間は後先考えずに行動する事を簡単に言えば”発狂する”である…もしその様な事が起きればそれが負の連鎖反応を起し収集のつげなくなったワールドセイバーは最悪…殲滅と言う選択を取らざるえなくなるかもしれない…これがトロワが一番心配している事である。

「他の皆と連絡が取ればいいんだが…場所が割れる可能性があるからな…」

「そうですね…我々は少数ですから…」

「ああ…」

ラシードの言葉にトロワは同意する…少数で多くの敵を倒すために一番手っ取り早い方法は奇襲だ…その為にはこちらは出来るだけ隠れなければならないのだが…身動きを取れない上に連絡もとれないのは何よりも痛かった。

—————

そしてノインを初めとする神威チームは…

「……………」

全員が驚きの余り絶句していた、何故かと言うと彼女らが当てずっぽうで移動し重いマンホールを開けるとすぐそこにはホワイトハウスが会った…幸いホワイトハウスの庭の森林部分に会ったために見つからなかったがいきなり出てきたのは敵の本部と言う真実は何とも言えなかったのだった。

—————

トオルチーム

「何をしてるんだ？」

「ハッキング…」

ユイが（拾った）パソコンを使い外の監視カメラをハッキングして状況を集めていた…それを後ろからトオルが見ると呟く。

「人質か…」

「うん…一ヶ所に集められてる…混乱が起きるまでに終わらせないと…」

「混乱？」

「極限状態による意味の無い暴動だよ…バネッサ…」

ユイの言葉にバネッサは疑問の声を上げるとトオルが答えバネッサは手のひらに拳を軽く叩いて成る程のジェスチャーをするのだった。

—————

そして戻ってカトル達

「それで？どうするのだ？逃げ惑っていた私が言うのもなんだが…このままでは罅が開かない…」

「僕たちは向こうに比べれば圧倒的に多い…なので我々が勝てる唯一の方法は奇襲です…しかし肝心の戦力は分断されて皆は何処にも居るかも分かりません…」

「確かに…」

カトルの言葉にレディは同意するとカトルは一つのプランを出す。

「なので僕たちは今から打って出ます…」

「なに？…成る程…」

カトルの案にレディは思わず聞き返すが少し考えると納得する、味方である自分達も仲間の居場所を知らない以上相手も全員の居場所を把握はしていない…だからこそカトル達が派手に動き出せばそれを見て動き始める全員が様々な地点からの奇襲として完成すると言う事だ…しかしこれはデメリットも大きく一種の賭けである。

「分かった…それしか無いのも事実だ…」

「ええ…早速、LBXの準備をしましょう…」

第15戦 「反撃の狼煙」

「ハアアアア!!」

「なんだ!?…グワツ!!」

突然の咆哮と共に現れたサンドロックカスタムのヒートショーツルが有人機であるゴルドーを切り裂き目にも止まらない速度でゴルドーの周囲に布陣していたトラス4機も切り裂くとサンドロックの後ろからレディ率いる諜報部のリーオー部隊がキャリパー、ビルゴ等に襲いかかりたちまち乱戦状態に陥った。

「奴だ！先に隊長機を殺れ!!」

ワールドセイバーの指揮官が叫ぶとサンドロックカスタムに攻撃が集中するがカトルはそれが見えている様に攻撃を紙一重でかわすと一気に七機のLBXを切り刻んだ。

「フツ…今回の僕は本気ですよ…」

不適に笑うカトルの目は蒼く光っていた…カトルの能力は「レギュラシオン」オーバードロードを超越した者である、オーバードロードは文字通り力の暴走、故に使用後に体が耐えきれず危険とされてきたがレギュラシオンは体がオーバードロードに適応しそのデメリットを打ち消した存在、美都博士や世界が求めた理想その物『制御する者、レギュラシオン』である。

「性能の差が勝利への絶対条件ではない！」

サーベルを構え突っ込んでくるビルゴIIをレディは迎え撃ち互いのサーベルがお互いを狙い振るわれる…その瞬間、ビルゴIIは爆散する。

「よし！このままホワイトハウスに向かうぞ！」

「おおおお!!」

レディの言葉に諜報部は雄叫びを上げるのだった。

—————

Nシテイ別地点

「何だど!?何処だ!」

そこに居た指揮官はカトルたちの行動を知り増援を送ろうとする
と通信に強烈なノイズが走る。

「通信が…」

「隊長!ビルゴとトールラスが!」

「なに?」

隊員の言葉で指揮官が周囲のビルゴとトールラスを見るとバイザー
が激しく点灯し動きが鈍くなっているのを見て疑問に思っていると
突然遠くから爆発音が聞こえた…。

「さあ!久々の登場よ!死神が舞い戻って来たわよ!」

「貴様らの正義を見せてもらおうぞ!」

爆炎から出てきたのはデスサイズヘルカスタムとガンダムナタク
:機能が戻ったビルゴやトールラスが迎撃を開始し二機に仕掛けると
ドラゴンハングがビルゴのプラネイト・ディフェンサーを突破し貫通
すると後ろに居たトールラスも頭部を破壊され爆発する。

「フツ…来たわね…」

スウエルがそう呟くと新型LBXであるビルゴ、ビルゴIIがデスサ
イズヘルカスタムを囲みビームの弾幕を作るがスウエルはそれを素
早く突破しビームサイズで切り刻んむ。

「どんなに性能が良くてもね…所詮はお人形さんなのよ…」

スウエルがそう呟くとデスサイズヘルカスタムの後ろで爆発が起
きるのだった。

「カトル達が動き出したか…」

「では我々は人質ですな…」

「ああ…そうだな…行くぞ」

トロワはそう言うのとヘビーアームズカスタムを起動させLBXを
破壊しマグアナック隊は銃を持つ兵士の攻撃を開始した。

「Sポイントの敵が止められないだど?」

「行くぞ!」

「おう！」

ワールドセイバー本拠地であるホワイトハウスでは暴れ始めたカトル達を潰そうとその防衛隊すら動員し言わばホワイトハウスは手薄な状態になっていた：それを見逃す訳もなく潜入したのは神威大門メンバーとトオル組だった：二つのグループはお互いの行動を知る訳もないがまるで示し合わせた様に行動していた。

「なんやて!？」

潜入し行動していた神威組の前に立ち塞がったのはトオル達が使っているセカンドワールドのラージドロイドより遥かに強力なキラードロイドのワイバーン二体とペガサスが立ち塞がった。

「突破するしかない！行くぞ！」

「やったるぞ！」

カゲトラの号令の下、全員が戦闘状態になり三体のキラードロイドがフィールドを形成する。

「……」

キラードロイドワイバーン（二体目）VSノイン、オットー、ドロシー

「行くぞ！オットー！ドロシー！」

「了解！」

「行きますわよ！」

ノインの掛け声と共に二機のツールギスとヴァルクリウスが攻撃を始める、キラードロイドワイバーン（以後ワイバーン）の腕部キヤノンが火を吹き三機を狙うがドロシーはプラネイト・ディフェンサーを展開して防ぐとビーム砲を連結して強力なビームを発射すると同時に左右二手に展開したノインとオットーはドーバーガンで左右からくまなくビームの雨を降らせる。

「やりましたわ！」

ビームの雨を降らされ爆煙に包まれたワイバーンを見てドロシーは歓喜の声を上げるが煙が晴れると出てきたのは無傷のワイバーンだった。

「なに!？」

「そんなバカな!？」

その様子を見てノインとオットーは思わず驚きの声を上げる、ラージドロイドなら相当な威力を誇る三機の攻撃にやられる筈だがキラードロイドは違う：レックスこと檜山レンの妹である檜山マミが作り上げた憎悪のマシーンはそう簡単にやられる程ヤワでは無かった。

キヤヤヤヤヤヤ！

「なにー！」

「グワツ！」

「そんなー！」

ワイバーンが咆哮すると羽のような大剣が二機のトールギスを叩き落とし腕部キャノンでヴァルクリウスを吹き飛ばす：遠距離に置いては最強の防御力を誇るプラネイト・デイフェンサーたが殴る等の力任せの近接戦では流石に分が悪くビルに叩き潰される。

「クソツ！ドロシー！」

ノインは叫びながらドーバーガンでワイバーンに向けるがそれを察知したのかトールギスIIを踏み潰そうとしてきた：ノインは咄嗟にシールドで受けるがキラードロイドの重さにトールギスIIの腕から火花が散り始めた。

「くううう……」

「ノインー！」

「ノインさんー！」

「……」

キラードロイドワイバーン（二体目）VSタケル、ワーカー

「なんで攻撃が効かないんだ！」

「これが：姉さんの言ってたキラードロイド……」

ワーカーは二連装バズーカを撃ちながら逃げるが全く効いている様子がない：ワーカーが火薬まで厳選して作った重装備型グレイリオのバズーカ弾すらワイバーンには効かずだった。

「クツ……このままじゃ……どうすれば……」

「こんなのありかよー！」

「ワーカー！」

タケルはバンパイヤキャットミリタスを操りながら考えているとワーカーの悲鳴が聞こえた。ビルを盾に回り込もうとしたワーカーがそのビルごと吹き飛ばされたのだ。

キラードロイドペガサスVSスズネ、カゲトラ

「来るぞ！」

「なんなんや！この化けもんが！」

スズネのクリムゾンは強化されたブラストマグナムで攻撃するがペガサスには攻撃痕すら残らない。すると羽のような大剣がカゲトラのジル・ダイバーに襲いかかりカゲトラは二刀の菊一文字で受ける。

「凄い…こんなにパワーが出るのか！」

「カゲトラ横や！」

カゲトラがジル・ダイバーに感心していると横から尻尾が襲いかかりジル・ダイバーを吹き飛ばし腕のキャノンで叩き落とされるとスズネがブラストマグナムをソードに切り替え突っ込むとペガサスが咆哮し上から雷のようなレーザーが落ちてくる。

「なんやこれ!?ウワツ！」

スズネは避けきれずに直撃すると地にひれ伏すのだった。

ーーーー

そしてトオル組の前にはキョウジとルーダが立ち塞がっていた。

「よお…久しぶりだな…ライトニング・カウント！」

「伊丹キョウジ…」

「トオル…先に行つて…」

「なに？」

「まだやつがいる…」

「ユイ…」

トオルがユイの言葉に戸惑うとバネツサもユイに賛成する。

「行け！この前はお前を邪魔してしまったが…今度はお前の背中を押してやる！」

「バネツサああああ！」

「ルーダ！」

ルーダのハイドラがバネツサに襲いかかりバネツサはエピオンで迎え撃ち激しく鏖ぜりをする。

「行け！トオル！」

「トオル！行つて…」

「すまん！」

トオルは二人の言葉で先に向かう事を決意し走り去る…それを見てキョウジは笑い叫ぶ。

「おいおい…仲間を置いて逃げるのか！」

「それは…違う…」

「なに？」

ユイの言葉にキョウジは聞き返すと今度はユイとバネツサの二人が立ち塞がる様に立つ。

「ここから先は一步も通さない!!」

「ハッ！上等だ！」

二人の言葉にキョウジとルーダが叫ぶと突っ込むのだった。

第16戦 「それぞれの覚悟」

「ハッ！」

「くううう!!」

ホワイトハウス内部でウイングゼロカスタムとグリープが激しい攻防を繰り広げていた。

「ワールドセイバーは何も考えていない！ただ人の心を弄んでいるだけ！」

「だからなんだよ？」

「なに？」

「俺には関係ないな！戦えばそれで良いんだよ！」

「なら…お前を倒す！」

「ハッ！」

ユイはキョウジの言葉に絶句するが直ぐに睨み付け叫ぶとビームサーベルを取りだし二刀流でグリープに迫るがキョウジは実に楽しそうに笑うとランスで器用に捌き蹴りを入れるがユイも負けておらずに腕で受けるともう片方の腕のサーベルで斬りかかる。

「ちい！」

キョウジは直ぐにグリープのシールドを展開し離れると機体を変形させバスターメガ粒子砲を撃ちユイもドラツバーグ付きのツインバスターライフルで迎え撃ち相殺する。

「おもしろえー！もつと俺をたぎらせろ！」

「誰が！」

二人はそう叫ぶとお互いの得物を出し激しくぶつかりあうのだった。

「あんたさえ居なければ！」

「ふざけるなルーダ！お前は何をしてるのか分かってるのか!？」

ルーダは怒り狂いながらバスターカノンを撃つがバネツサのエピ

オンは器用に避けながら接近しビームサーベルを振るうがハイドラのビームサーベルに阻まれる。

「私は知ったのよ！神威大門で！弱肉強食と言う言葉をね！…友達？仲間？ふざけないで！そんなもんは幻想よ！常に誰かを妬み蹴落とそうとする！それが真実よ！」

「人間はそんな愚かな動物じゃない！」

「違うわ！動物以下の存在よ！」

ハイドラのサーベル、シオルダークロー、バスターカノンを合わせた変幻自在の攻撃にエピオンはジワジワと被弾が多くなる。

「人は立派な生き物だ！光を！暖かさを与えてくれる！」

「私を蹴落としたのは貴方じゃない！」

「それは…ウツ…！」

エピオンはハイドラに蹴飛ばされ壁に激突するとバネツサはルーダを見る…そこには憎悪しかなかった…。

「私は…」

バネツサは改めて自分が犯した過去を悔やむのだった。

ルーダ・ファークイルはムラクとトオルが来る前のバネツサの隊長でロシウスの女帝とも言われた…当時の彼女は名声、権力、人望、全てを手にしていた…彼女はそれに酔っていた…それが気に入らなかったのはルーダの直属の部下であるバネツサ達だった、ルーダ態度は大きく、傲慢であまつさえ扱いが酷かった…当時のルーダは部下の事を自分を引き立てるスパイス位にしか思っていなかったのは事実だった…それに耐えきれなくなったバネツサは勝負に出た…それは単純でとても効果的な方法、それは一対一の決闘当時のルーダの機体はガウンタ、対するバネツサはグレイリオだった…性能的にも不利な戦いにバネツサは勝った…その際にルーダは手にしていた物を全て失った…天から地に一気に落ちたルーダは心がおかしくなり特別教練の成果も虚しく自ら学園を去っていったのだ…それからバネツサに付いたあだ名が”隊長殺し”や。ブラウンマスタングス（茶色い暴れ馬）だった。

「でも今は！トオルの為に！」

「ほぎけー」

決意を新たにしたバネツサとルーダは激突するのだった。

ギイイイ……

ホワイトハウス内部ではトオルが大統領室の時代を感じる古い木のドアを開けるとその中には本来、大統領が座るべき場所には一人の老人が座っていた。

「ほお…来るのはプリペンダーかと思ったが…まさか…神風トオル、貴様が来るとはな…」

「あんたは…」

「デギム・バートン…ワールドセイバーの指揮官だ…」

「あんたが…なら質問させて貰う…何故このような事を…」

「決まっているだろう…強いたげられし同…「違うな…」…」

トオルはデキムの言葉を遮るとデキムはトオルを睨み付ける。

「何故そう思う…」

「あんたからは何も感じない…」

「どういう事だ？」

「セレデューは狂っていないながらもそれを成そうと必死になっている感じがした…」

トオルの言葉を聞いたデキムはバカにしたように笑うと立ち上がり外を見る。

「流石と言うべきか…ガキながらよく見ている…そうだ…私はそんな事に興味は無い…私は棄民の王になるのだよ…」

「棄民だと…」

「そうだ…棄てられた民…それらを導く存在だ…」

デキムの言葉を聞いたトオルは怒りと同時に吐き気すら覚えた…セレデューは切実に平和を求めた故の行動だったのに対しデキムはただ自分の為だけに行動している…それがトオルにはとても許しがたい物だったのだ。

「貴様…」

トオルはそう呟くとトールギスⅢFを出し戦闘状態にするとデキムからも一機のLBXが飛び出しトールギスⅢFの前に立ち塞がる。「なんだ…コイツは……」

そのLBXは中世の騎士の様な機体で全身が黒く塗り潰され背中にはエネルギーのマントを着けた機体…武器は黒い盾と中心に水色の線が入った剣が一振りと言うシンプルなものだった。

「これぞ…私のLBXハーデスだ…」

「年よりのくせに頑張りやがって…」

「フツ…行くぞ…」

「ッ！」

デキムがそう呟くとハーデスが一気に加速しトールギスⅢFに近づくと剣を振るうがトールギスⅢFはシールドで受けメガランチャーを構えるが蹴飛ばされメガランチャーが飛ばされるとトオルは瞬時にサーベルを抜刀しハーデスに斬りかかるが完璧に避けられる。

「強い…」

「ふん…伊達に能筋どもをしつけている訳ではない…」

トオルの呟きにデキムは笑いながら答えるが攻め手を緩めずにトールギスⅢFは追い詰められて行くのだった。

(どうすれば…)

トオルはシールドのヒートロッドを出し振るうが敵の盾に阻まれた上にそのヒートロッドを掴みトールギスを引き寄せると殴り飛ばす、ぶっ飛んだトールギスは数回バウンドしながら体勢を整えると驚異的なスピードで後ろに回り込んだハーデスが今度は剣で斬り飛ばす。

「クツ……」

「どうした小僧…さっきの威勢はどうした？」

完全に遊ばれているのを自覚しながらも必死に反撃の糸口を探すトオルだがハーデスは無駄の無い動きでトールギスⅢFを攻撃して来るために体力ゲージが絶え間なく減っていくのを見ることしか出来ずについて追い詰められる。

「小僧…チャンスをやろう…」

「チャンスだと？」

「私の配下となれ…」

「……………」

デキムは黙って睨み付けるトオルを見て大統領室のモニターをつけるとそのモニターにはトオル以外のメンバー達が戦っている所が映っていた…そこにはキラードロイドによっていつロストするかわからない程損傷したLBX達…敵の圧倒的物量に押し切られジワジワと追い詰められていくプリペンダーのLBX達があつた。

「……………」

トオルが見つめる中、デキムは再度トオルに話しかける。

「コイツらはLBXが破壊された後、我々に逆らつた反逆者として処分するが…貴様がここで私の配下となるようなら考え直してもいい…」

デキムは神威大門での出来事を全て把握しておりセレディーと同じくトオルの力と能力を高く評価し是非とも手中に納めたいと思つていたのだ。

「……………」

トオルは思案する…恐らくデキムの言っている事は本当だろう…世界を相手に行っているテロリストだ…しかしトオルは彼らの底力を知っている…もしこの選択が間違이었다としたら…そんな思いがありながらもトオルは静かに答えた。

「答えは…断る…」

「ほう…良いのか…」

「いい…アイツらはそんなにヤワじゃないんだ…あんたも…嘗めるなよ…」

そう言つたトオルの目は赤く光り始める…オーバーロード発現の合図だ。

「なら…その仲間と共に死ね……………」

「死なないさ…皆な……………」

トオルはそう呟きながら皆の無事を祈るのだった。

そしてトオル達以外の戦いは終盤を迎えていた。

ワイバーンと戦っていた三人はドロシーのお陰で何とかノインを助け出し反撃に転じていた。

「目標は胸のコアの破壊だ！」

「おう！」

「了解ですわ！」

ノインが叫ぶと二機のトールギスが空を舞いワイバーンの迎撃を避けながら接近し足首のケーブルに攻撃を仕掛ける。

キヤヤヤヤ!!

「隙がありすぎますわ！」

ワイバーンは苦しそうにしているとドロシーのヴァルクリウスが突っ込むと胸のコアにビーム砲を当てて最大出力のゼロ距離射撃を行う：ビーム砲が爆発しヴァルクリウスが退避するがダメージを受けつつもまだ稼働するワイバーンの首筋の装甲の合間にノインが最大速度でビームサーベルを突き立てる。

ギヤヤヤヤヤヤ!!

「オットー！殺れ！」

「任せろ！」

オットーはトールギスを突撃させるとコアにビームサーベルを二本突き立てとどめとばかりにドーバーガンで弾倉が空になるまで撃ち続けて着地しノインもその横にトールギスIIを着地させるとワイバーンは雄叫びを上げながら爆発するのだった。

ーーーー

「させないよ！ワーカー！」

「了解！」

タケルの一言でワーカーは大量のミサイルを発射しコアやケーブルが剥き出しの所に着弾するとワイバーンが苦しむとタケルがバンパイアキャットミリタスを高々とジャンプさせ叫ぶ。

「喰らえ！姉さん直伝のトリプヘッドスパア！」

キヤヤヤヤ!!

タケルの攻撃は見事にワイバーンのコアを破壊しワイバーンは粉々に吹き飛ぶのだった。

—————

「ウチも本気やで！」

（クリムゾンフェイズ！）

するとスズネのクリムゾンが更に輝きを増し鉤爪は大きくなり展開装甲から黄金の粒子が飛び出し各部スラスタからは常にブースターが吹き出る。

「行つくでええええ!!」

スズネが叫ぶと攻撃力と速度が極限的に強化されたクリムゾンがレーザーの嵐の中ペガサスに突っ込むと迎撃しようと腕部キャノンを向けるとカゲトラのジル・ダイバーがその腕部の関節を狙い二刀の菊一文字を持って体を回転させ遠心力をも味方にした一撃でケーブルを切断する。

キエヤヤヤヤ!!

ペガサスは痛がる様に叫ぶと尻尾や羽の剣を使いジル・ダイバーを狙うがカゲトラは全て受け流す。

「今だ！スズネ！」

「分かつとる！ちゆうのおおお！」

クリムゾン渾身の一撃がコアに直撃しその攻撃箇所からひび割れていき碎け散ると爆発する。

キエヤヤヤヤ!!

「どや！見たかいな！」

「何とかな…」

スズネは元気に笑いカゲトラは少し疲れたように言うのだった。

—————

キョウジとユイは高速で次々と素早く、無駄の無い攻撃と防御の応酬を繰り返していた。

「テメエも復讐の為に生きてるだろうが！」

「目的もなく戦うよりマシ！」

「俺は楽しむ為に戦ってるんだよ！・テメエの正義を押し付けるんじゃないやねえええ！」

「倒す！倒してみせる！」

「ハッ！」

キョウジは笑うとビームランサーでウイングゼロカスタムの羽根を切り裂きゼロはバランスを崩し落ちていくがユイはグリップに取り付くとサーベルでグリップのバックパックを切断する。

「クッ……」

「くそが！」

両者は推進力を失い床に落ちると直ぐに立ち上がりユイはサーベルを構えて粉塵の中を突っ込むがそこに待ち受けていたのはバスターメガ粒子砲だった。

「ッ！」

「喰らいなああー！」

ユイが気づいた瞬間には既に発射されており強力なビームがウイングゼロカスタムを包み込む。

「全く…手間をかけさせやがって…」

「待て……」

キョウジがそう呟くきトオルの元に向かおうとするとユイが引き止めキョウジが爆炎が晴れ粉々に成った筈のウイングゼロカスタムを見ると驚く。

「バカな…あれでまだ原形が残ってるだど……」

そこには左腕を失い羽根や本体が粉々になりながらもまだ動き続けるウイングゼロカスタムの姿があった…ウイングゼロカスタムは強化パーツドライツバークと本体のエネルギーを使った渾身のツインバスターライフルを構えて発射する。

「私は…私は死なない!!」

「ッ！…しまった！」

キョウジは驚きで反応が出来ずに今度はグリップがビームに包まれ完全に消滅するのだった。

「……」

「これで！」

「クソッ！」

ハイドラのシオルダークローも使った三点射撃によりエピオンが追い詰められていく。

「どうしたの!? 私を負かした貴方はどこに要るのよ! ハハハッ！」

「LBXはお前の気持ちを晴らす道具じゃない! おもちやだ！」

「おもちゃなら私の勝手にするわ！」

「LBXは人を楽しませる為に生まれてきたんだ！」

バネツサはよくこの事をトオルが語っていたのを思い出して胸が苦しくなる。復讐や権力を手に入れるために使われていく悲しさが本来の意味で理解できた気がしたからだ。

(新たなテクノロジーに携わる者こそ人間の良心を忘れてはならない: 君たちはそれを覚えておいて欲しい:)

強化された機体を渡された時に山野博士が残した言葉: それが今になって: いや今だからこそ分かる: 沢山の思いを感じたバネツサは叫ぶ。

「エピオン! 私に力を! 平和への力を！」

(ゼロモード!)

ゼロモードを起動したエピオンは激しく光り始める: まるでバネツサの言葉を受け止めたように:。

「そんなこけおどし！」

ルーダは怯みながらもハイドラで三点射撃を再度かけるがそこにはエピオンが居らず機体が突然後ろに現れる。

「ルーダ: 私は: お前を倒す: 皆の為に:」

「うるさい! 黙れえええ！」

ルーダは叫びながら最大出力で再び三点射撃を行うとバネツサはビームサーベルを最大出力にしてビームを斬りながら進む。

「ウオオオオオ！」

「ウワアアア！」

バネツサの雄叫びとルーダの悲鳴と共にハイドラは爆発するのだった。

「ウオオオオ！」

「無駄だよ……」

トオルが叫びデキムが自身の勝利を確信している中、二機のLBXはお互いの得物を構え激しくつばぜり合いが起るとトオルはトルギスⅢFを加速させて力押しする：それを嫌がって盾でトルギスⅢFを払うハーデスだがトオルは払われると同時に蹴りを入れるも避けられ蹴り飛ばされる。

「無駄だと……ッ！」

デキムの言葉を最後まで言わせずにトオルをトルギスⅢFを更に加速させて斬りかかるがまたしても避けられるがハーデスの肩にはかすった様に溶けた傷跡が出来た。

「偉そうに言うわりには……たいした事ないな……」

「小僧が！」

トオルの挑発にデキムは怒りトルギスⅢFに斬りかかる：防戦一方ながらもジワジワと押し返すトオルは苦しそうに操作している左手で胃を押さえる。

(このままじゃ不味いな……)

時間が伸びれば自分が不利になるのを悟ったトオルは賭けに出る：ハーデスの一撃をシールドで受けると一瞬の拮抗状態になる：そこを突いてシールドを犠牲にしシールドごとハーデスにビームサーベルを突き立てる、まさかの攻撃に避けられなかったハーデスは左目の甲冑にサーベルが刺さり大きく後退する。

「クッ……」

「今だ！」

その隙をトオルは見逃さずに一気に攻勢に転じる、胸、腕、膝、小さくながら次々と被弾していくハーデスを見てデキムは焦り始める。

「この私が……」

「貴様のその傲慢が命取りだ！」

トオルは叫ぶとシールドを棄てて二刀流になると突っ込み斬りかかるとハーデスは盾で受け止めるがトオルはビームサーベルを最大

出力に盾を両断すると柄の部分が溶けて使えなくなったサーベルを棄ててもう一つのサーベルでハーデスを頭から股まで切り裂き通りすぎるとトールギスⅢFの後ろのハーデスがまだ抵抗するようにギチギチと音を上げ手をトールギスに伸ばすがその手は届くことなく爆発するのだった。

「チェックメイトだ…」

「…バカな…」

トオルはそう言い放つとデキムは膝を着き悔しがるのだった。

最終戦 「貴方に感謝を」

ホワイトハウスの決着が着いた頃、Nシティではプリペンダーメンバーが事後処理をしていた。

「いや〜参りました…まさかこんな事になるなんて〜」

「全くだ…」

カトルは入手したワールドセイバーの名簿と捕縛した人物を照会しながら苦笑いで呟くとその意見に同意だったようで隣に居たレデイも頷く。

「カトル〜こつちの照会終わったわよ…一人も漏れなし!」

「スウエル!お疲れさまです!Lシティの方も奪還したらしいのでこの照会もお願いします…」

「うへえ…今日は徹夜か…」

スウエルはそう呟きながら国連が用意したへりに乗り込み手を振りながら去って行った。

A国全土を乗っ取ったワールドセイバーの一斉蜂起はカトル達が動き始めてからたったの一時間で鎮圧された…何故そんなに早く終息したかと言うとそれは少し前に遡る。

「クソッ!」

Nシティで暴れ始めたカトル達だったが圧倒的物量に時間かかり他の地区からも増援が来て消耗戦に持ち込まれたカトル達にはもはや戦う術もなくカトルのサンドロックカスタムは全てのヒートショーテルが折れスウエルのデスサイズヘルカスタムはエネルギーが切れて絶体絶命だった。

「どうする?もう何も残ってないわ…」

「クッ…私達は…正しく無かったのか…」

「ここで諦めれば…この世界はワールドセイバーの物になってしまします…」

「しかし…もう我々には術がない…」

LBXと兵士に囲まれて絶体絶命のスウエル、五林、カトル、レディ達の周りには諦めの色が出始めた時に通信が入った。

「どうやら…まだ終わりでは無いようだな…」

「トロワ……」

突然のトロワからの通信にカトルが驚いていると囲んでいたLBXの集団の後ろ側から突然の爆発…それはどんどん大きくなりカトル達の目に映ったのは軍属でもない、なんの変鉄もない一般生産されているLBX達だった。

「「「おおおおお!!」」」

「なんだ!!」

「状況はどうなっている!?!」

突然の出来事に驚くワールドセイバー、その間にもトーラスが突然現れたデグーやウオーリア達に撃墜されていく…いち早く対応したのは無人のLBX達でビルゴがビーム砲を発射しLBX達を迎撃するが余りの数に目の前まで接近を許しムシャヤクノイチ、カプト等にボコボコにリンチされて爆発する。

「な…なんですか…これは…」

「分からないわよ……」

スウエル達が呆然と見ている間にもワールドセイバーがLBXの波に襲われ次々とロストしていく集団戦法を仕掛けていたワールドセイバーが今度はそれを越える集団に襲われている…それはA国全土で起き、各地のワールドセイバーが次々とやられていく。

「このやろう!」

「俺たちを散々やりやがって!」

LBXが来たらと思っただら次は一般人まで出てきてワールドセイバーの隊員をボコボコし始めるのを見ていたカトル達の元にトロワがやって来た。

「カトル…無事か?」

「はい…これは?」

「分からん…解放したらこうなったんだ…」

「なるほど…」

カトルはトロワのその言葉を聞いて全て納得した：LBXは世界共通単語にもなっているほどの人気今や二人に一人が持っているという時代でその全員がLBXを動かしたらどうなるか：性能も技術も下でもその圧倒的な数で力押しされたら誰でも敵わないだろう：ましてやこれがA国全土なら億単位にもなっている。

「全ての勝敗は戦いで決まるものではない：ですか……」
「だろうな……」

捕らえられていた人々の反乱のお陰で世界最大のテロは鎮圧されたのである。

「全く……本当に驚きましたよ……」

カトルはそう呟きながら辺りを見渡すとボランティアの住人達により次々とワールドセイバーの隊員が連行されてくる：もちろんお返し付きで：本来なら咎めるべきだろうがカトルは今回少し目をむる事にした。

「おい……来たぞ……」

カトルはトロワに呼ばれその方を振り向くとトオルを先頭に神威大門のメンバーとユイが帰ってきたのを見た：周りの住人からは拍手喝采を貰い皆はそれに答えていた：その後ろには五林がデキムを始めキョウジ、ルーダ等の他の隊員が手に縄をはめられて連れてこられていた。

「トオルさん……ありがとうございます……」

「気にするな……お前達が動かなければ出来なかった事だ……」

二人は握手を交わすとトオルはバネツサの肩を借りて念のために病院に向かうのだった。

報告書

世界各国の大規模なワールドセイバーによるテロ行為は軍、公務員

等を始め鎮圧を行ったがワールドセイバーによる周到な用意に苦戦を強いる事になった。

そして私、記者カトルは神風トオル、九条ノイン、オットー・ミタス、ワーカー・シクト、ドロシー・カタロニア、バネッサ・ガラ、乾カゲトラ、金箱スズネ、古城タケル等を始め神威大門統合学園の生徒全員と鎮圧に協力してくれた人達に感謝の言葉を送りたい…。

負傷者…計測不可

死者…無し

捕縛者…116750名

記者、プリペンダー所属、カトル・ラバーバ・ウイナー

一ヶ月後

「本当にありがとうございました…貴方達には感謝の念が絶えません」

神威大門にカトルを始めとするプリペンダーメンバーが来ていた…もちろんユイも。

「前も言ったが気にするな…」

「いえいえ…それと…国連本部長からの感謝状です」

「じゃあね！また会いましょう！」

「今度あったら私と張五林とバトルしろ…」

カトルは感謝状をトオルに手渡すと敬礼をしてへりに向かい皆がへりに向かう中、ユイだけが残った…。

「行かないのか？」

「私は…復讐を止める…」

「そうか…」

「過去を捨てるなんて出来ない…でも…私はこれ以上誰かが悲しむ顔を見たくない…」

ユイの独白にトオルを始め神威大門のメンバーは静かに聞く。

「トオル…貴方には本当に感謝してる…ありがとう…」

ユイはトオルにそう言うと…トオルにキスをした。

「ナツ…」

「ああ！ついにやりやがったなテムエエエエ！」

「許しませんわよオオオオ！」

((((天然って怖い…)))

トオルが驚きバネツサとドロシーが後ろで叫び全員の心がシンク
ロしている中、ユイは晴れ晴れとした笑顔でへりに乗り込むのだっ
た。

宣伝

神風トオル、バネツサ・ガラ達が活躍したワールドセイバー事件より数年前。

世界を揺るがす事件が幾度もなく発生していた。

イノベーター事件、ディテクター事件、ミゼル事件。

その事件解決の裏でトオル達と同じく当時の中学生達が働いていたことはそのほとんどが知られていない。

その基盤となったメンバー。

山野バン、川村アミ、青島カズヤともう1人、少年の姿があった。

1人の少女のために藻掻き、死力を尽くした少年を人々はこう呼んだ。

――幻の撃墜王――

その名で呼ばれた少年の名は、山茶花カイト。

純白の機体を駆りその名を世界に轟かせたLBXプレイヤーであり自らの相棒を作り出した少年の物語。

――

構想中の本編の一部をどうぞ！

場面はイノベーター編の最終章《サターンへの降下作戦》

「各LBX、所定の位置に着きました」

ステルス航空機《イクリプス》に備え付けられたLBXカタパルトには反イノベーター組織であるシーカーのLBXがセットされる。

「カイト…」

「アミか…」

「絶対サターンで会いましょうね。居なかつたら承知しないんだから！」

「それはこっちのセリフだ」

「もう！」

「フフツ…」

降下を控えた緊張の瞬間に話しかけてきたのは川村アミ。

一見、普段通りに見える彼女自身の顔にも僅かながら緊張の鱗片が

うかがえる。

「LBX隊、1番から3番準備完了」

「ハッチオープン」

「了解、ハッチオープン」

「降下開始！」

八神の声と共にカタパルトから射出されるLBXたち、その中にはカイトの機体ガンダム試作1号機フルバーニアンの姿があった。

シーカーのLBX降下を察知し攻撃を開始するサターン、分厚い弾幕が味方を次々と墜としていった。

「くそっ！これで何機降りれるんだ！」

横にいたジムカスタムが木っ端微塵に吹き飛ばされるのを横目で見つつカイトは悪態をつく。

「全機に次ぐ、これより敵のフェンス攻撃が始まる。シールドを展開せよ！」

「了解！」

対フェンスの為に用意された兵器《アンブレラ》を展開するLBXだがそれすら虚しく次々と撃墜されていく。

「アミー！無事か!？」

「何とかね、そっちも大丈夫？」

「当たり前だ」

フェンスの嵐をかくぐったカイト達はお互いの安否を心配する。画面に映るアミーの様子に少しだけ違和感を感じたカイト。

隣に居たはずのアミーのパンドラを見やる彼は彼女の機体の体勢が少し崩れているのに気付く。

「大丈夫じゃないだろ」

「カイト！私のことは良いから！」

パンドラを支えるように降下するカイト、フルバーニアンの有り余るスラスターだからこそ出来る芸当だ。

「こちらカイト、サターンに着地する！」

横でうるさいアミーを無視しながらサターンに着地するカイト。

フルバーニアンのビームライフルでダクトの入り口を破壊すると

アミと2人で中に入り込む。

「各機！制御室を制圧せよ！」

「了解」

八神の号令の元、次々とサターン内部へと突入するカイトを含む突入メンバー、そこに待ち受けていたのは大量のLBXだった。

「なんだよこの数……」

「行かせないつもりね！」

「やるしかないか……」

「うぎ……」

「この俺が止められると思ってるのか！」

その圧倒的物量にカズ、アミ、カイト、ダイキ、ハンゾウはそれぞれ感想を述べる。

「突破する！」

一拍の静寂の後、ジンの放った鋭い言葉で各機が攻撃を開始する。

デグー監視型の群れは固まりとなって襲ってくるが彼らの敵では無い、次々と撃墜されていく。

「フツ……。獅子奮迅とはこう言うものなのだろうな。雑魚ではお前たちは止められないようだ……」

「お前は！」

「貴方は！」

デグー監視型をなぎ倒していたカイトとアミの目の前に立ち塞がったのはガンダム試作2号機。

激しく煌めく光剣と堅牢な楯を持ったその機体はツインアイを光らせ二人を睨みつける。

「もはや言葉などいらぬ。ここは通さぬと言っておこうか」

「押し通る！」

2人の声が重なりフルバーニアンとパンドラの2機が2号機に向けて加速する。

2号機のプレイヤーは歓喜の表情を浮かべるとそれに応じる、両者はサターンで激突するのだった。